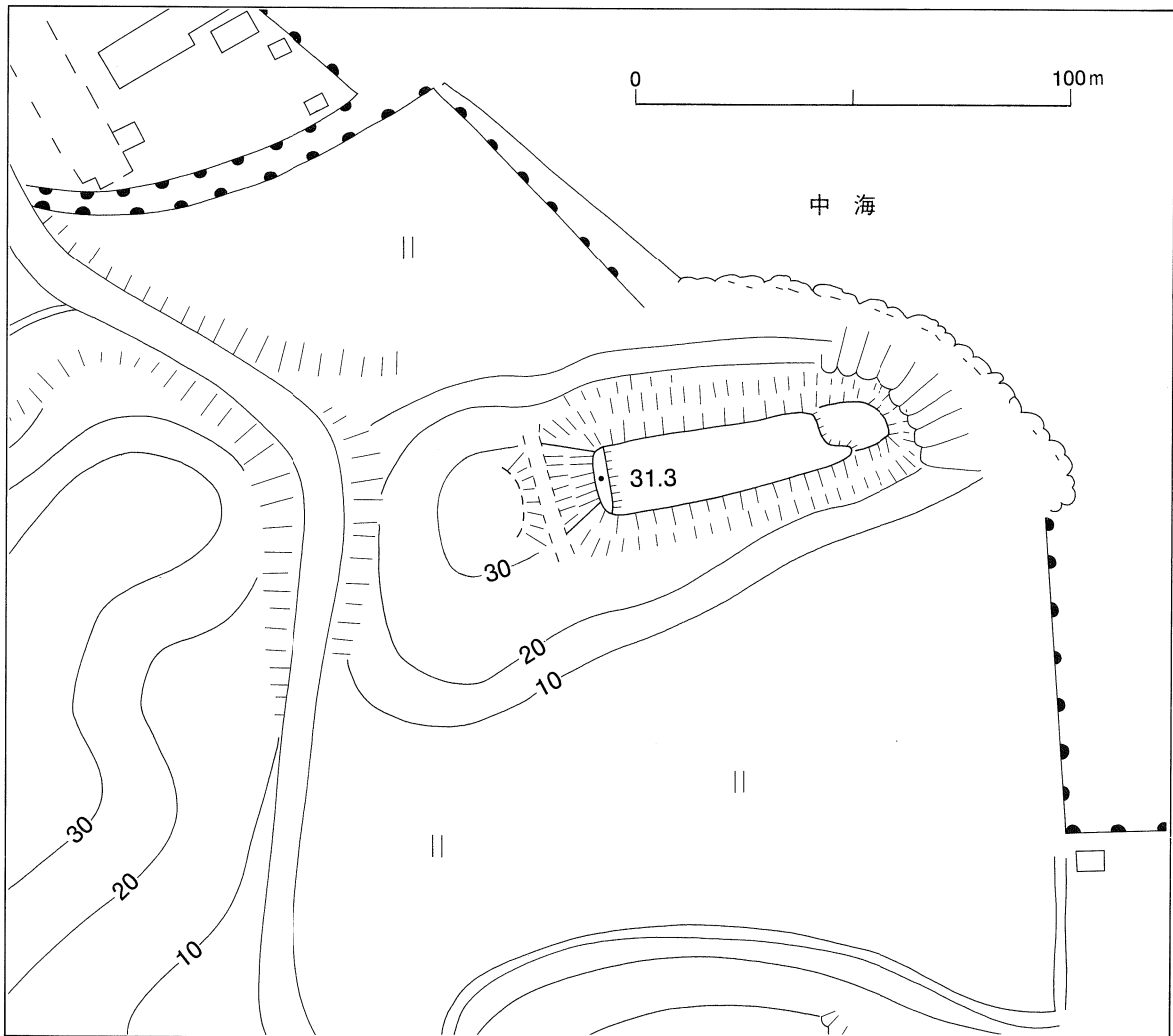


工3 新庄城山城跡 松江市新庄町 地図番号 6

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵先端 標高 31m 比高 30m

概要

中海に突出する尾根先端につくられている。デザインは単純で、背後の尾根に堀切を入れ、さらに堀切側に土塁を用意している。城の南側は老人福祉施設が建っているが、元は中海が湾入して船溜りになっていたかもしれない。



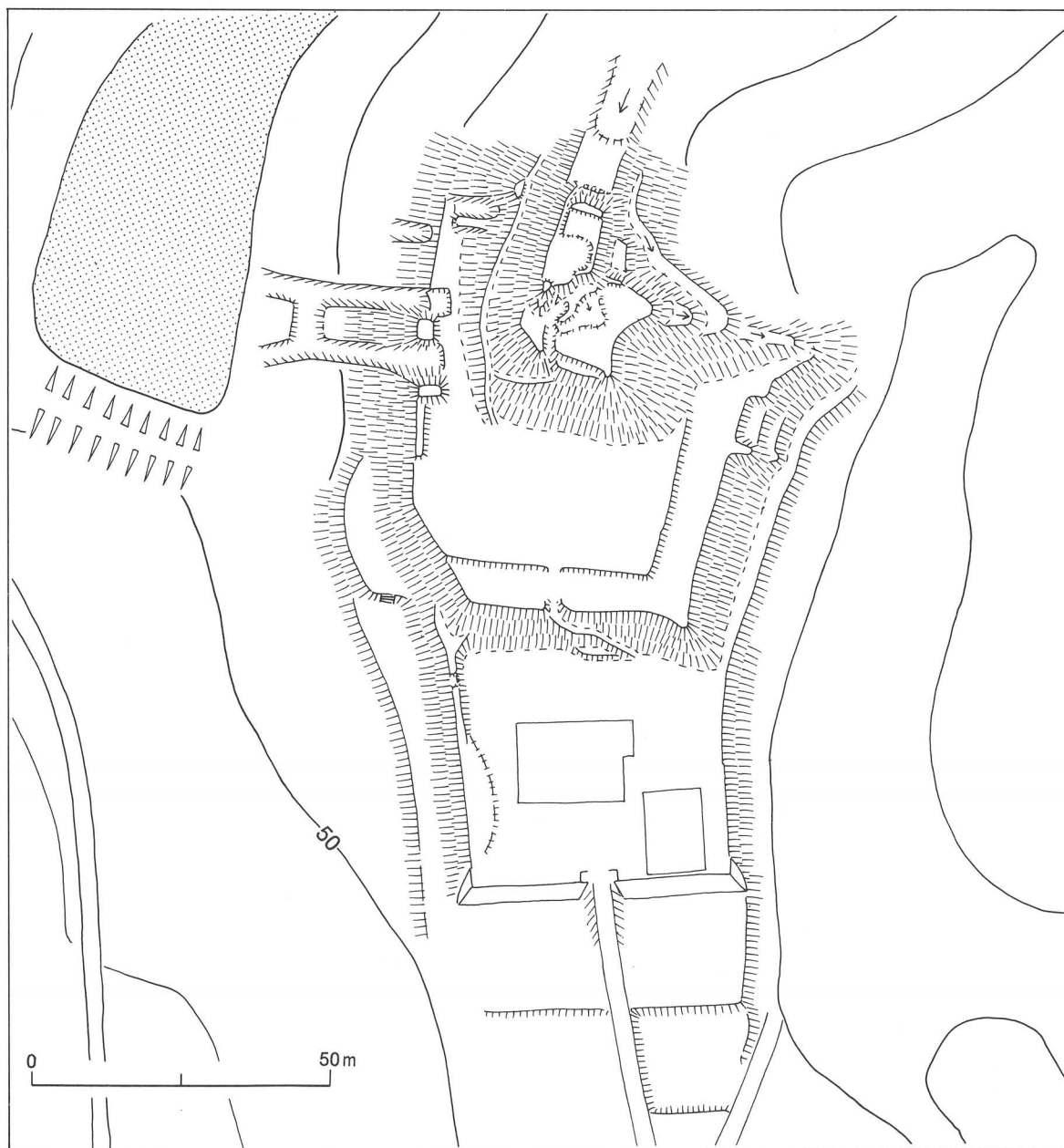
工3 新庄城山城跡略測図

工4 安土山城跡 松江市坂本町 地図番号 13

現状 山林、宅地 保存状況 良 立地 丘陵先端～麓部 標高 80m 比高 40m

概要

現、小草昭男氏宅部分も含めての城であろう。南側安養寺部分まで広げて考えるべきかもしれない。南側、城の前面・側面からの攻撃には豎堀もあって強固といえる。また、かなり広い面積の加工段もあるが、背後からの攻撃には、浅い堀切と低い土塁で貧弱に思われる。あるいは、背後の丘陵は自然地形ながら平坦地が続くので、ここにまとまった人員を収容する考えがあるのかもしれない。なお、堀切と土塁のセットは、上本庄町のあん山城、新庄城山城に同様のものが見られる。



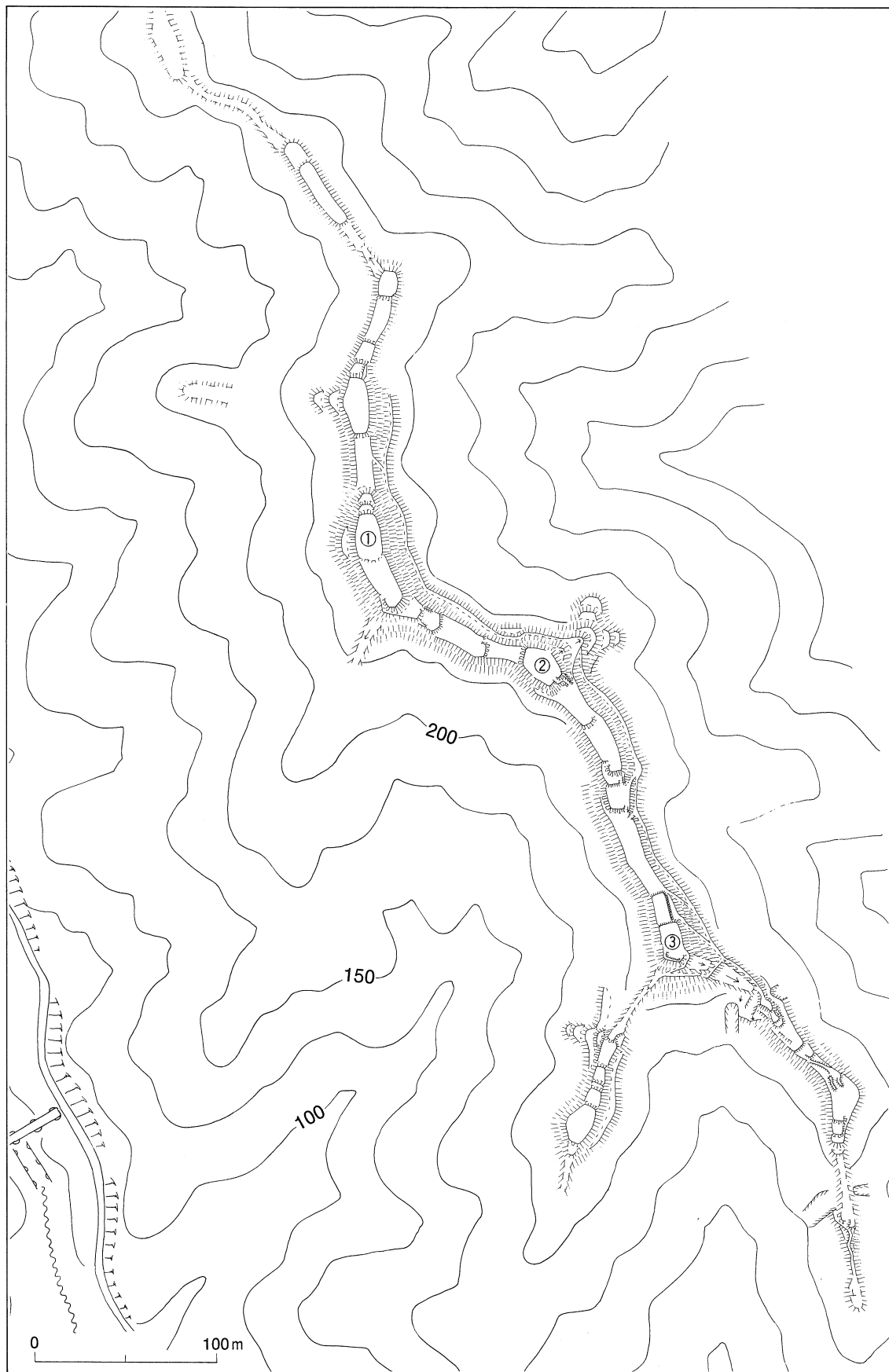
工4 安土山城跡略測図

**エ5 真山城跡** 松江市法吉町 地図番号 13

**現状** 山林、畑、宅地他 **保存状況** 良 **立地** 丘陵頂部 **標高** 256m **比高** 245m

**概要**

真山城は白鹿城の北隣に位置し、白鹿城とは尾根伝いに連絡ができる。また白鹿城を見下ろす位置にあるため、白鹿城を守る勢力にとって押さえておかなければならない場所である。したがって尼子氏によって城郭が構えられていたものと考えられる。永禄六年（1563）に毛利氏が白鹿城を攻めたとき吉川元春はこの地を占領し、向城として改修したとされている。尼子氏が降伏した後は真山城が重視され、多賀元信を入れ、白鹿城は廃された。ところが島根半島の忠山城に入城した尼子勝久、山中鹿介等の尼子再興軍に占領され、元亀二年（1571）に勝久が出雲撤去するまで尼子軍の本拠となった。縄張りは地形に応じて築かれており、堀切は確認できない。土塁は3郭に確認できる。石積みもわずかに確認できる。主郭は最高所の1郭と考えられるが、2郭の可能性もある。



工 5 真山城跡略測図

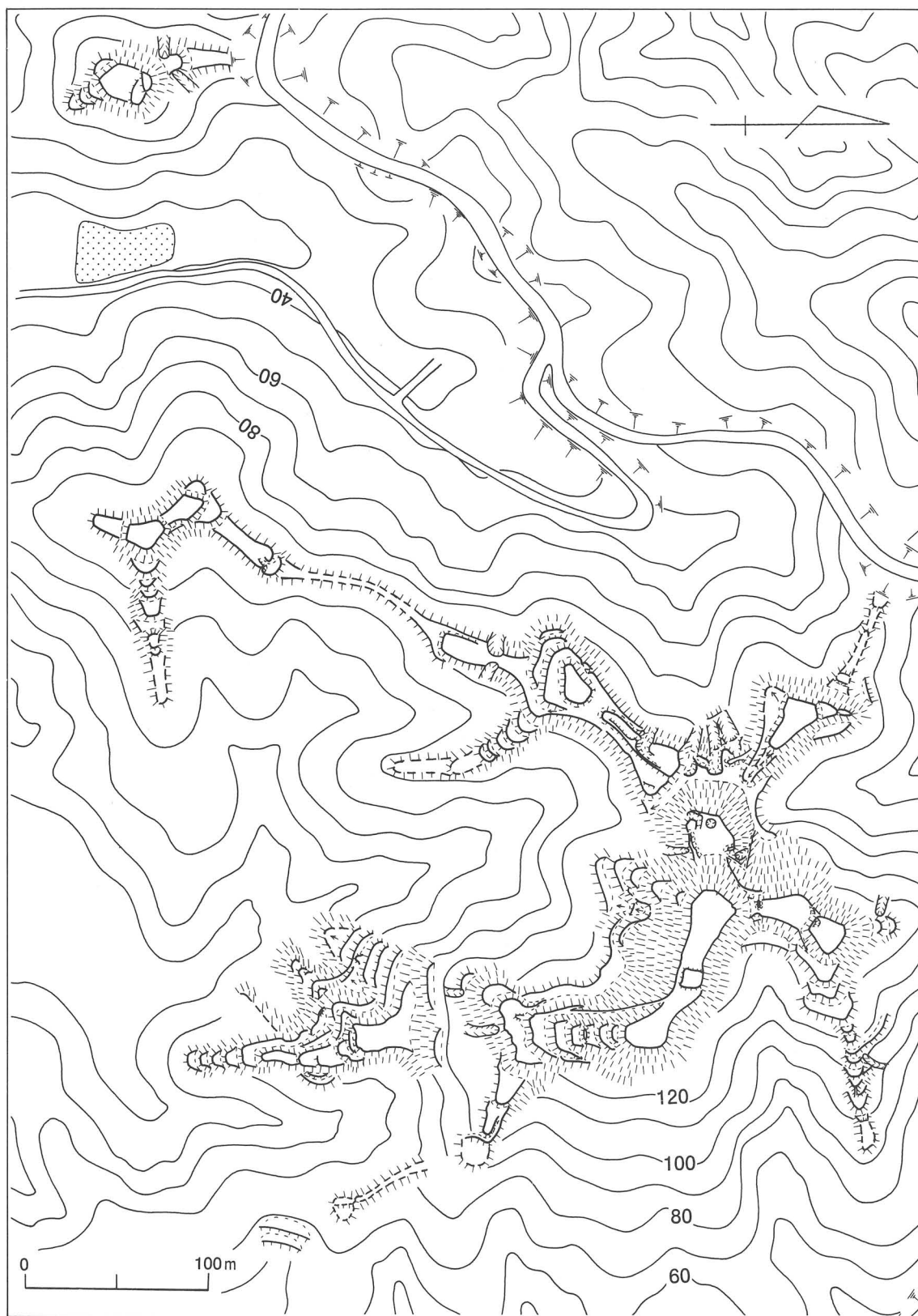


**エ6 白鹿（髪）山城砦跡群** 松江市法吉町 地図番号 13・14

**現状** 山林 **保存状況** 良 **立地** 丘陵頂部 **標高** 180m

**概要**

松江市街地の北方に位置し、宍道湖、大橋川、島根半島の水運を把握する拠点として尼子氏に重視されていた。主郭は白髪山の最高所と考えられ、急峻な地形を利用して防御施設がつけられている。土塁や堀切も認められるが規模は小さい。毛利氏は尼子氏に白髪山城を開城させた後、当初白髪城を攻めるための陣城とした真山城をこの方面の拠点とした。そのため、白髪山城は毛利軍の改修を受けていない可能性もある。周辺の山々には「大高丸」「小高丸」「小白鹿城」「高坪」等の地名が残り、それぞれに普請は不十分だが防御施設が認められる。城将は尼子晴久の姉婿ともいわれる松田誠保と伝えられる。



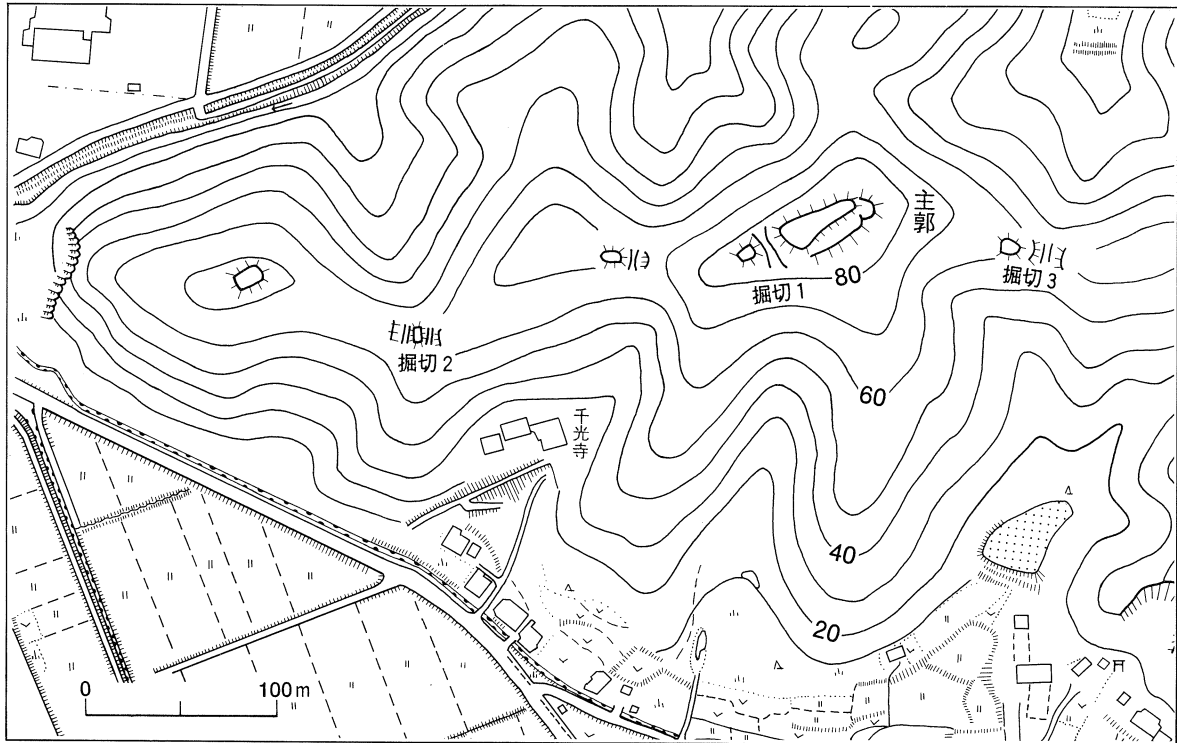
工 6 白鹿山城砦迹群(本城·小白鹿城·高坪付近)略测图

工 8 ・ サ 7 海老山城跡 松江市上佐陀町・八束郡鹿島町大字名分 地図番号 13

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 90m 比高 86m

### 概 要

松江市と鹿島町の境をなす東西方向に連なる丘陵に位置する。丘陵西側の狭い平地が南北の平野をつなぐ主要交通路となる。主郭と堀切 2 が特徴的である。主郭は長さ約40m、幅10~16mの平坦面を持ち、西側半分の北側縁辺に低い土塁状の部分がある。郭の南と東側には1~2段の平坦面がある。堀切 2 は、やや深い谷を利用し、幅約10mの谷底に約5m×9mの方形台状の遺構が存在する。



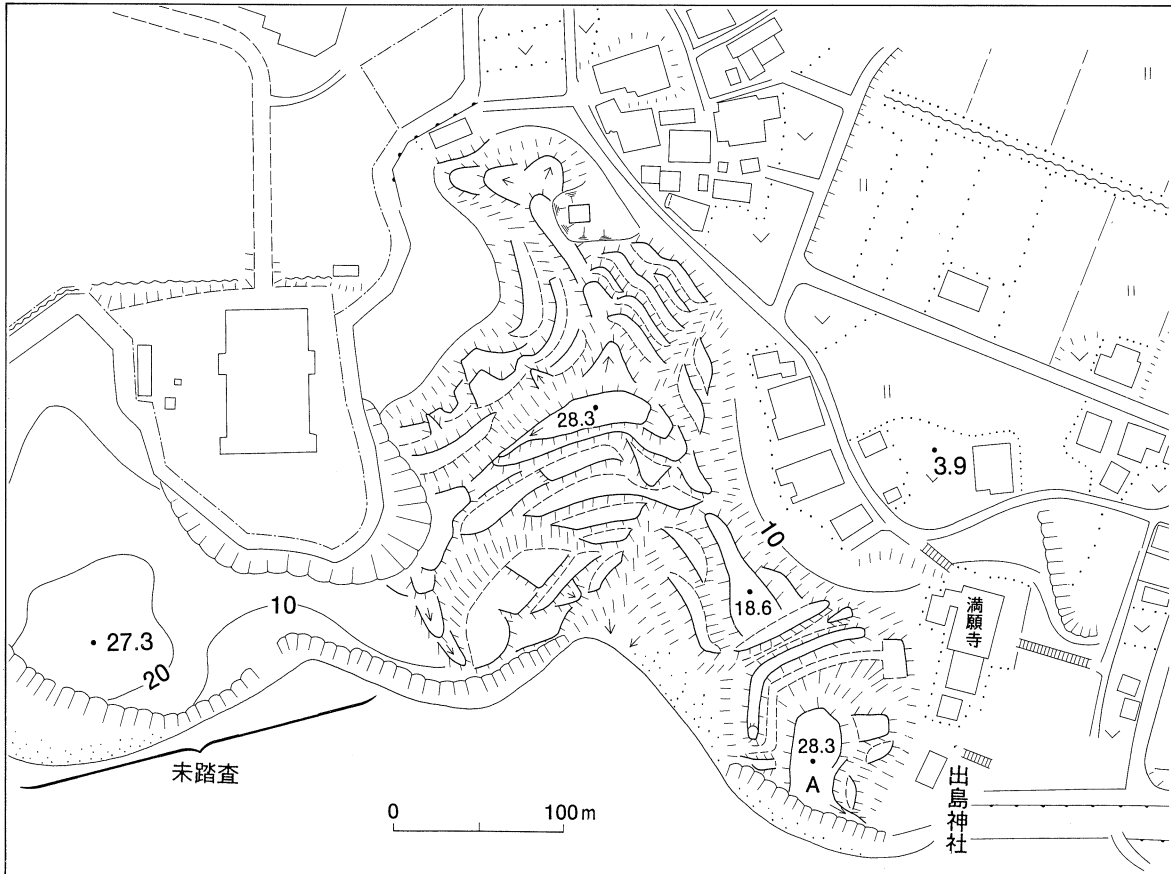
工 8 ・ サ 7 海老山城跡略測図

工13 満願寺城跡 松江市西浜佐陀町 地図番号 14

現状 山林、社寺境内 保存状況 やや良 立地 丘陵先端 標高 28m 比高 27m

概要

保存状況をやや良としたのは、満願寺と警察学校等周辺の施設建設で破壊された部分があるためである。今回、図示した部分は城として完結しているが、『城郭大系』が報告しているように、毛利氏が占拠し改造する以前の、もうひとまわり大きな満願寺城が存在した可能性がある。宍道湖がV字型に湾入する船着場を持っていることも注目され、水軍の城としての機能が想定される。湯原氏の居城とも伝えられる。主郭Aに横堀が認められる。



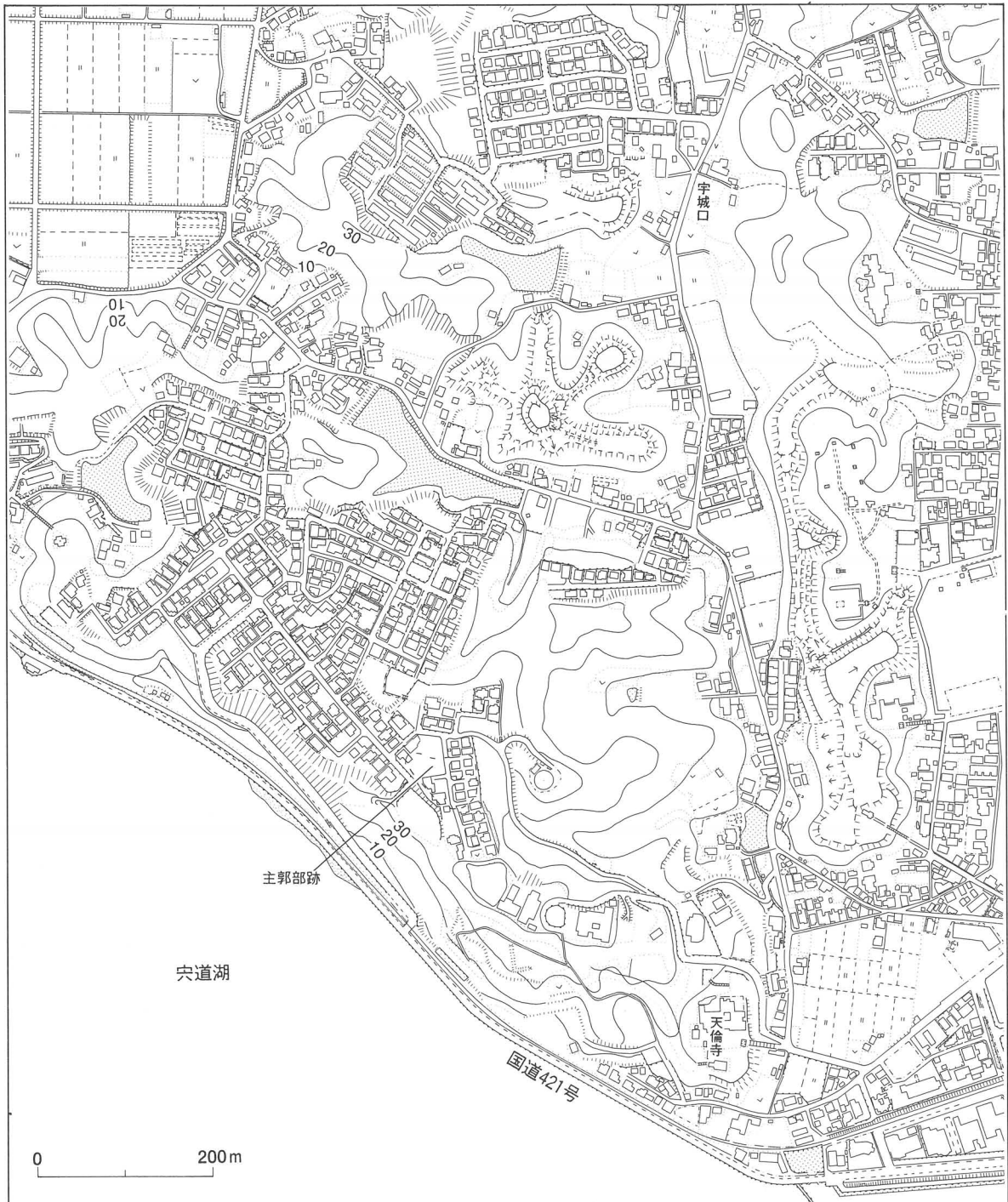
工13 満願寺城跡略測図

工15 荒隈城跡 松江市国屋町 地図番号 14

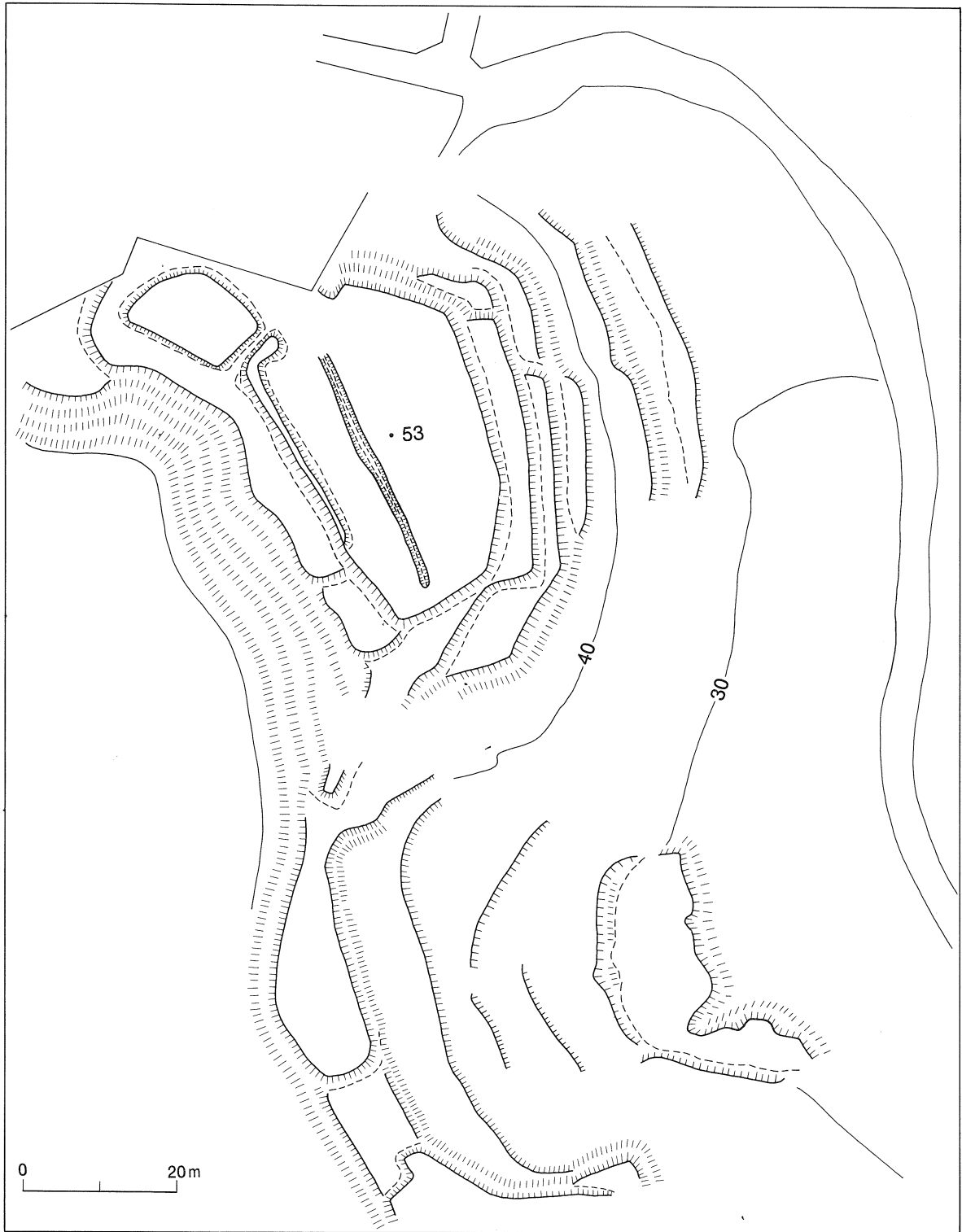
現状 山林、宅地 保存状況 不良 立地 丘陵頂部 標高 53m 比高 50m

概要

雲芸攻防戦において毛利元就は、宍道湖北岸を東進して鳶ヶ巣城から当城へ拠点を移して富田城包囲軍の指揮をとった。つまり当城は山陰に展開した毛利全軍の指揮中枢であり、将兵の慰安施設や、白濁・末次の港湾・流通機能をも取り込んだ兵站基地でもあった。ただ、東西約1.5キロ、南北約3.5キロに及ぶ、樹枝状の浅い谷を取り込んだ縁辺のなだらかな丘陵の、高所を選んで武将級の陣屋が逐次建てられたらしく、縄張りには求心性を欠いている。



工15 荒隈城跡略測図



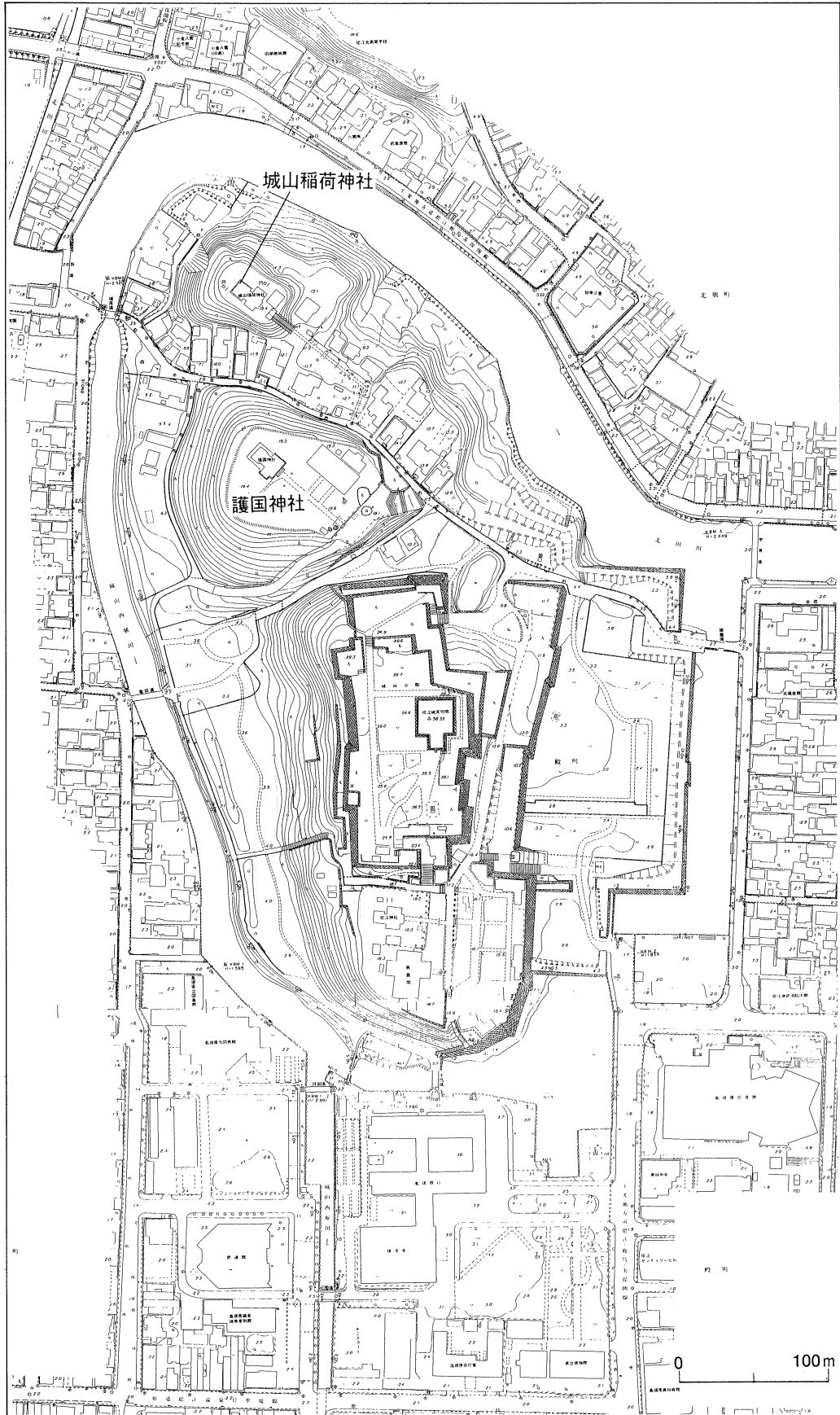
エ15 荒隈城跡（主郭部付近）略測図 ※宅地化により現存しない。

**E16 松江城跡** 松江市殿町 地図番号 14

**現状** 公園他 **保存状況** やや良 **立地** 丘陵頂部～麓部 **標高** 28m

**概要**

この城は、湿地帯に突出した丘陵に築かれた近世城郭である。堀尾吉晴が出雲・隠岐二十四万石の大守に封じられて広瀬町の富田城に入ったのち、この地に移り城を築いた。五層六階の天守閣がほぼ創建当時の状態で残る。個々の銃眼の向きが固定されている等、実戦的な構えである。縄張りは、南から東にかけて高石垣がめぐり、鉄砲隊を幾重にも配置できる構造となっている。一方、北から西にかけては石垣がほとんど築かれていない。通説ではこのことから未完成とされるが、詳細にみると通称「本丸部」の北側に、二つの防御拠点が認められる。一つは、城の北端に位置する現城山稻荷神社付近である。もう一つは、現護国神社のある地点である。この地は、通称「本丸部」と大堀切を隔てて立地し、通称「本丸部」の西側を側面から射撃する拠点として評価できるのである。全体の縄張りに関してさらにいえば、西側は東側から南側のように高石垣を巡らすなど、派手さはないが、きわめて実戦的な縄張りといえる。また、近世に築かれた浜田城、米子城と同様に、城の中核部に船が着くことから、水運を強く意識した縄張りとも考えられる。



工16 松江城跡地形測量図(松江市教育委員会提供)

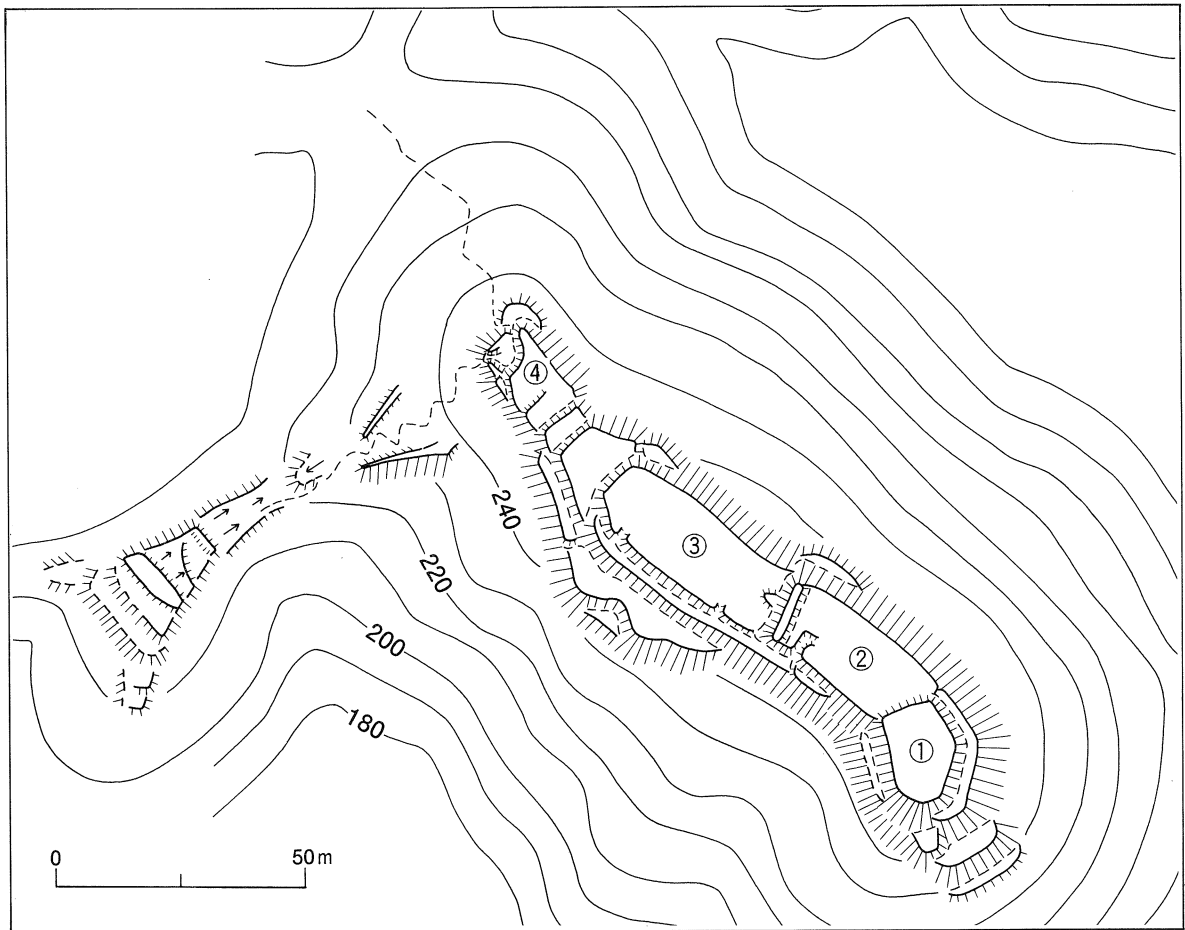


工22 和久羅城跡 松江市朝酌町 地図番号 14

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 261m 比高 240m

概要

松江市街地の東方に位置し、中海、大橋川、宍道湖を一望することが出来る。主郭は最高所の1郭と考えられ、東側に腰郭が取り巻く。2郭北西端には土塁が築かれており、その脇に虎口がある。この虎口を出ると腰郭が築かれており、3郭北西端まで続く。3郭にもこの腰郭に対して虎口が築かれているため、この腰郭は連絡通路として利用されたものと考えられる。4郭北西端には櫓形虎口が築かれている。南方の大橋川沿いには多くの城郭が築かれており、当城はその中核として機能していたと考えられる。城将に原田氏、羽倉氏が伝わる。



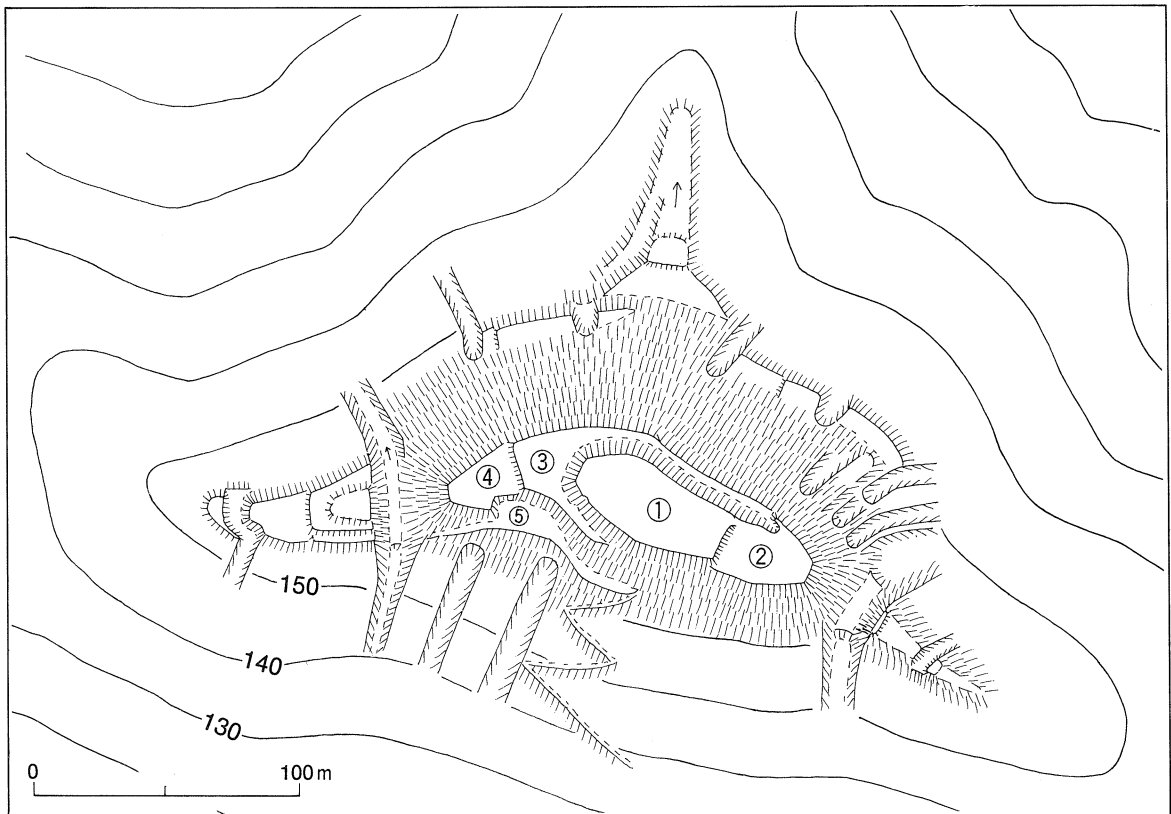
工22 和久羅城跡略測図

工25 茶臼山城跡 松江市山代町 地図番号 14

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 171m 比高 160m

概 要

茶臼山城の築かれている山は出雲風土記に見える神名樋野に比定されている。最高所からは、宍道湖と中海が見渡せる。主郭1は最高所に築かれている。東側に僅かな段差で2郭が続くが、この北側に虎口が築かれている。連絡通路はここから主郭の北側に回り込み、主郭西側の3郭、4郭を経由して5郭に至る。3郭と4郭に囲まれた5郭は西側尾根筋からのルートと南側麓からのルートが合流する要地であるため、櫛形虎口と考えられる。4郭の西側には大規模な堀切が築かれているが、堀切の対岸に5郭からのルートとほぼ同じ高さにルートの痕跡が確認できるため、ここに橋が架かっていた可能性がある。この堀切の西側に小規模な堀切が確認できる。2郭の東側にも大規模な堀切を築き、東側尾根筋からの侵入を遮断している。東側に小規模な堀切が確認できるが、普請は不十分である。1郭北側に延びる尾根にも堀切が築かれている。2郭東側の堀切北側に接して連続堅堀群が築かれている。連続堅堀は北側に6本、南側に2本確認できる。南側の方が規模が大きいが、北側の堅堀は堀切に接し、また帯郭を破壊して築かれている。帯郭による兵員の収容よりも堅堀による地形の破壊を優先したと考えられる。東側の尾根筋から侵入した勢力が、比較的緩やかな北側に回り込むことを警戒していたことが窺える縄張りである。



工25 茶臼山城跡略測図

**工31 亀畑山城跡** 松江市大垣町 地図番号 21

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 225m

**概要**

本宮山城山頂近くの尾根に築かれている。主郭は1と考えられ、本宮山山頂に対しては鞍部を利用した堀切を築いている。堀切の普請は不十分だが、主郭側の切岸や郭の普請は十分である。大野氏の支族大垣氏の居城と伝わる。

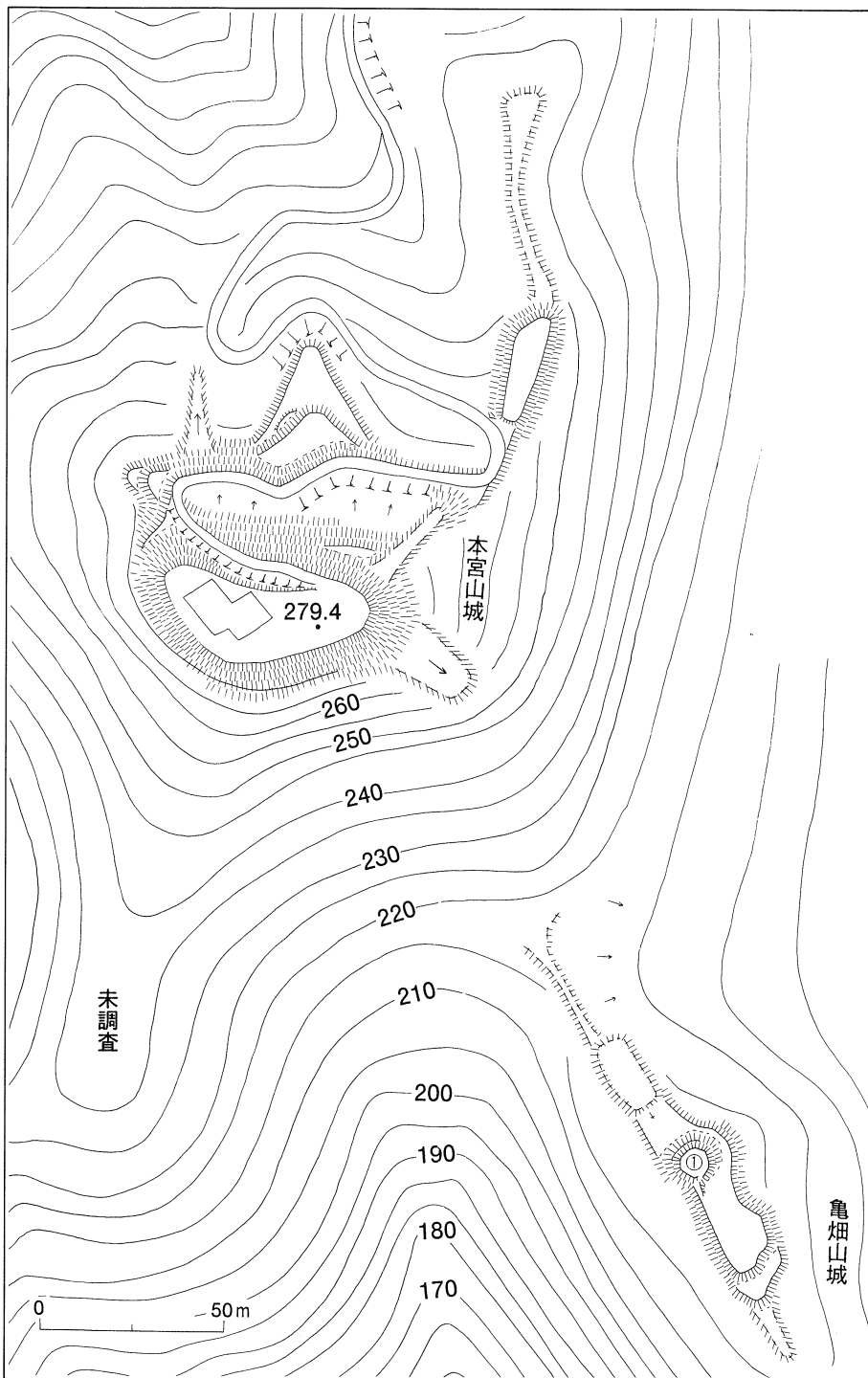
**工34 本宮山城跡**

松江市上大野町 地図番号 21

現状 山林他 保存状況 不良 立地 丘陵頂部 標高 279m

**概要**

宍道湖の北岸に所在し、宍道湖、松江市街地、日本海を眺望する高山に築かれている。主郭は最高所と考えられるが、無線中継所とその管理道によって遺構は破壊されている。懐の大きな山で、現在でも中腹に集落が存在する。大野氏の居城として知られている。



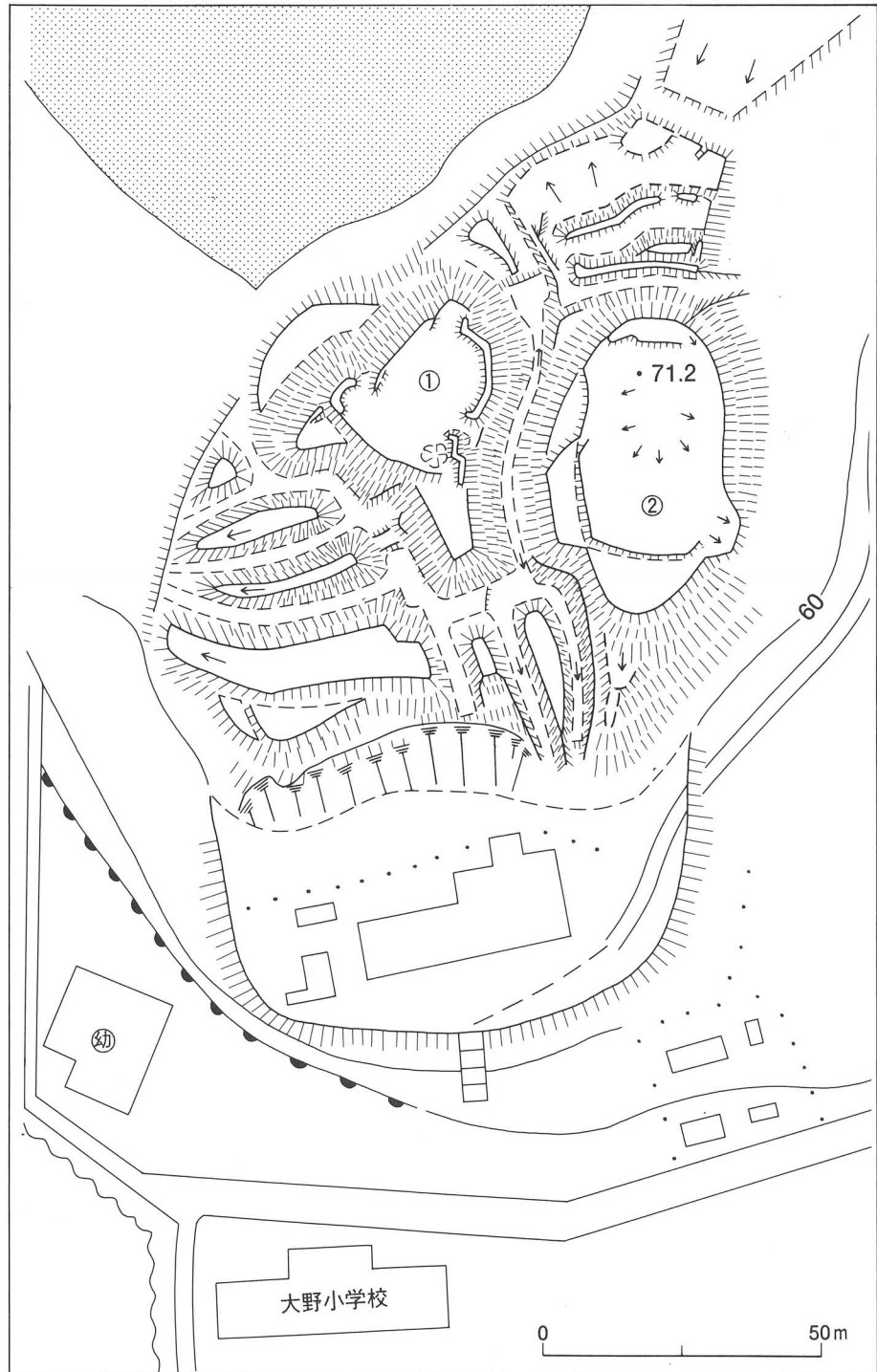
工31 亀畑山城跡・工34 本宮山城跡略測図

工32 土居城跡 松江市上大野町 地図番号 21

現状 山林、社寺境内 保存状況 良 立地 丘陵先端～麓部 標高 71m 比高 30m

概要

本宮山城の西麓に所在する。主郭は最高所1郭と考えられ、東西に虎口を築いている。虎口は土塁によって巧妙に築かれており、県下でもトップレベルの技法である。主郭の西側には連続して塹堀が築かれている。これらの塹堀は規模が大きく、深いところで2.5～3mを測る。主郭の東側には深い堀切を隔てて城内最大の面積を持つ2郭が築かれている。主郭よりも低く、北側尾根筋に櫓台と堀切を築いている。堀切の北側の郭にも土塁が築かれおり、防御を固めている。この土塁には一部にクランクが認められ、北側に続く緩斜面は駐屯空間と考えられる。尾根筋には堀切を築いているが、普請が不十分である。当城は大野氏の居館と伝えられているが、主郭の虎口の技法、堀底道の活用、塹堀、土塁の多用等から、他勢力による改修強化であろう。



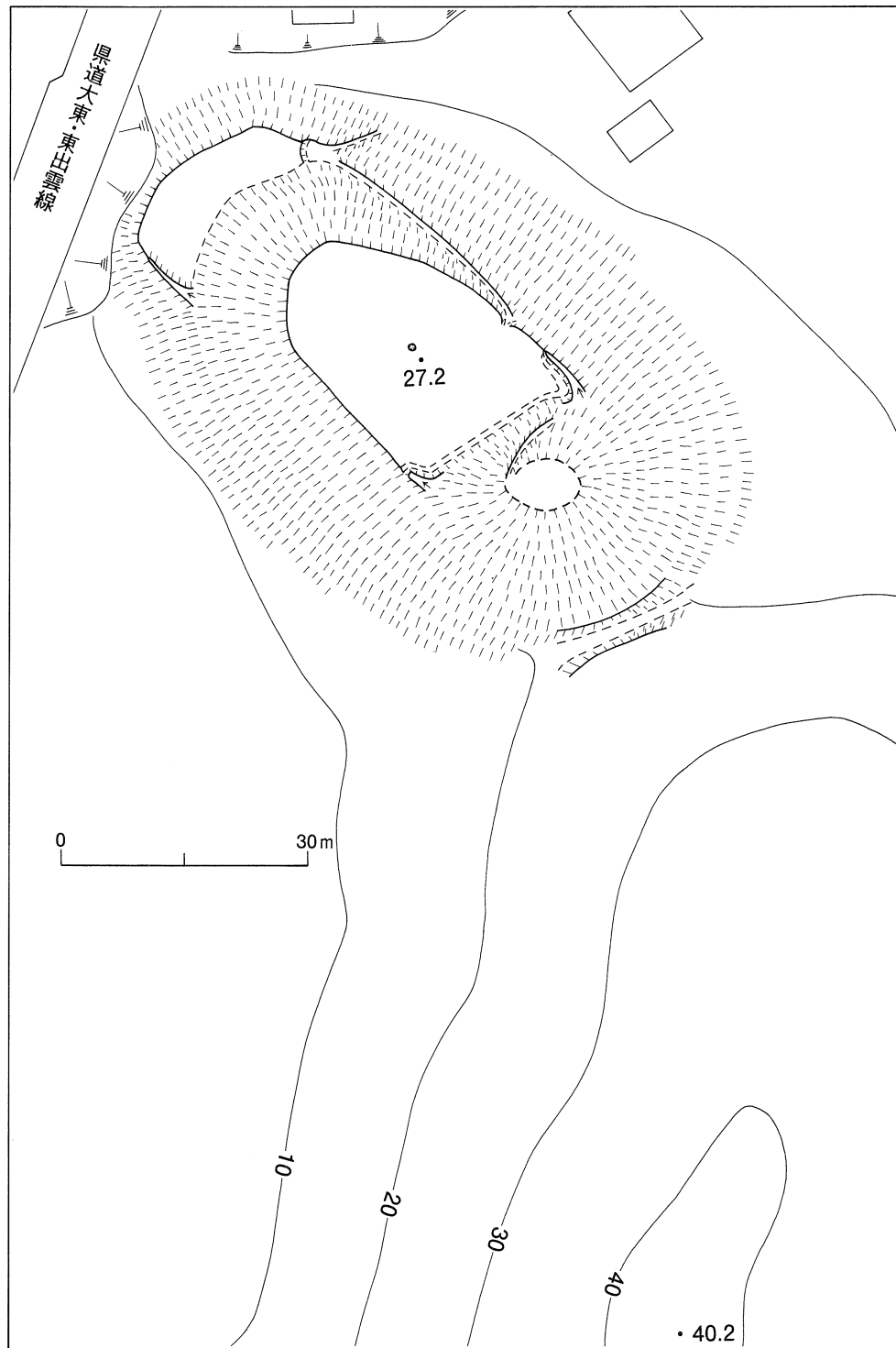
工32 土居城跡略測図

オ1 古城山城跡 八束郡東出雲町大字出雲郷 地図番号 6

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵先端 標高 27m 比高 20m

概要

比高がわずか20メートルという低位丘陵の突端に地取りしているにもかかわらず、郭上面の削平はていねいで、土塁や切岸もきちんとした普請が施されている。主郭中央部には井戸も掘られている。また主郭の南側には櫓台らしい高所があり、その南に深い堀切が掘られて、南部の丘陵と切断されている。この丘陵は切岸が不明瞭ながら削平された痕跡があり、駐屯空間として利用された可能性が高い。



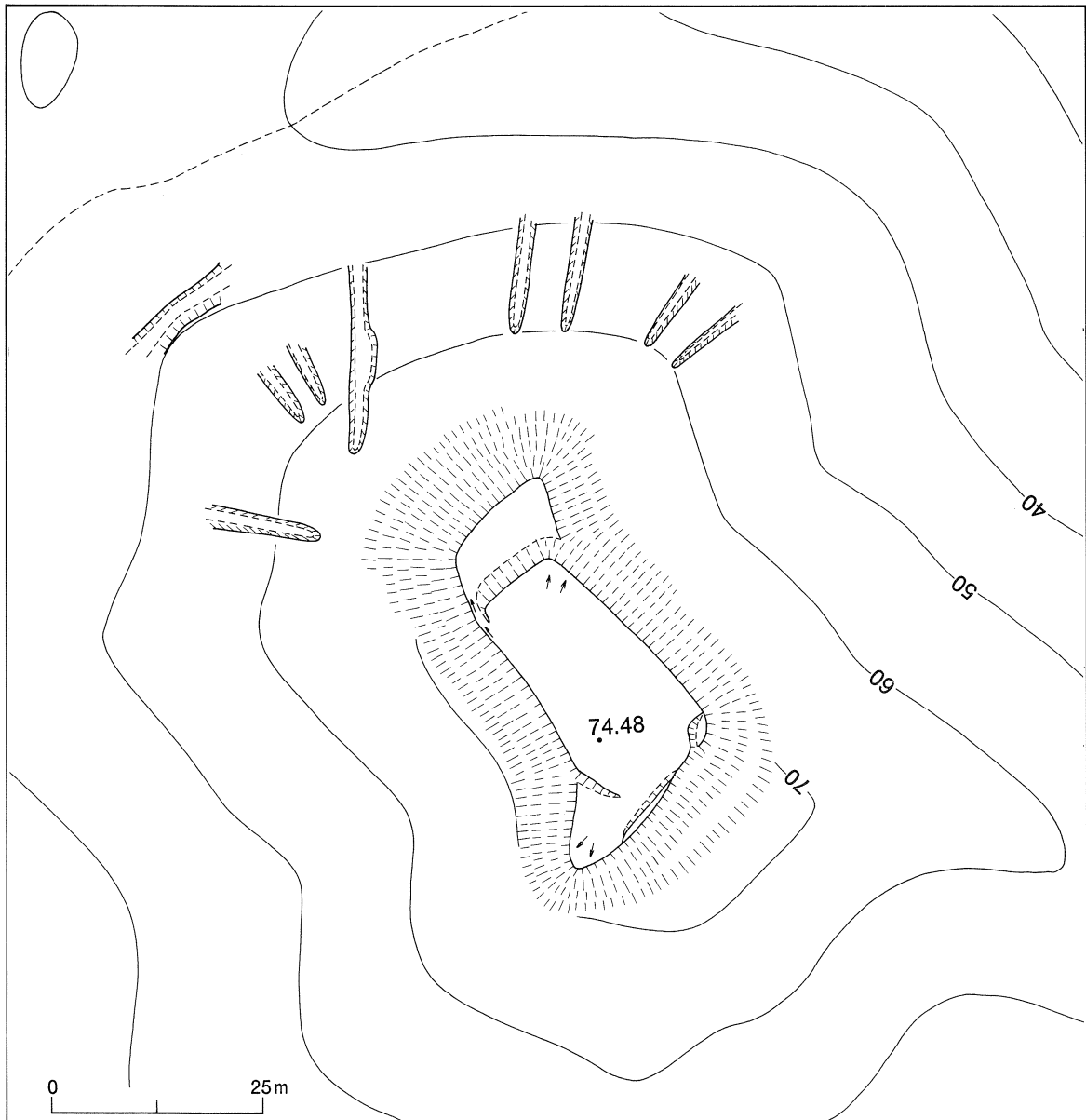
オ1 古城山城跡略測図

オ3 春日城跡 八東郡東出雲町大字春日 地図番号 14

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 74m 比高 60m

概要

当城にたてこもった下河原宗左衛門尉は、応仁二年（1468）に尼子清貞に攻められて当城は落城した。年季の判明する史料で実在を確認できる、数少ない遺構である。郭の普請は全体に雑であるが、ほぼ同高度に頭を持つ、2本ずつ3セットの竪堀群と単独の竪堀2本とからなる竪堀群が認められる。ただこの竪堀群は応仁期のものでなく、戦国期に陣城として再利用されたおりのものであろう。



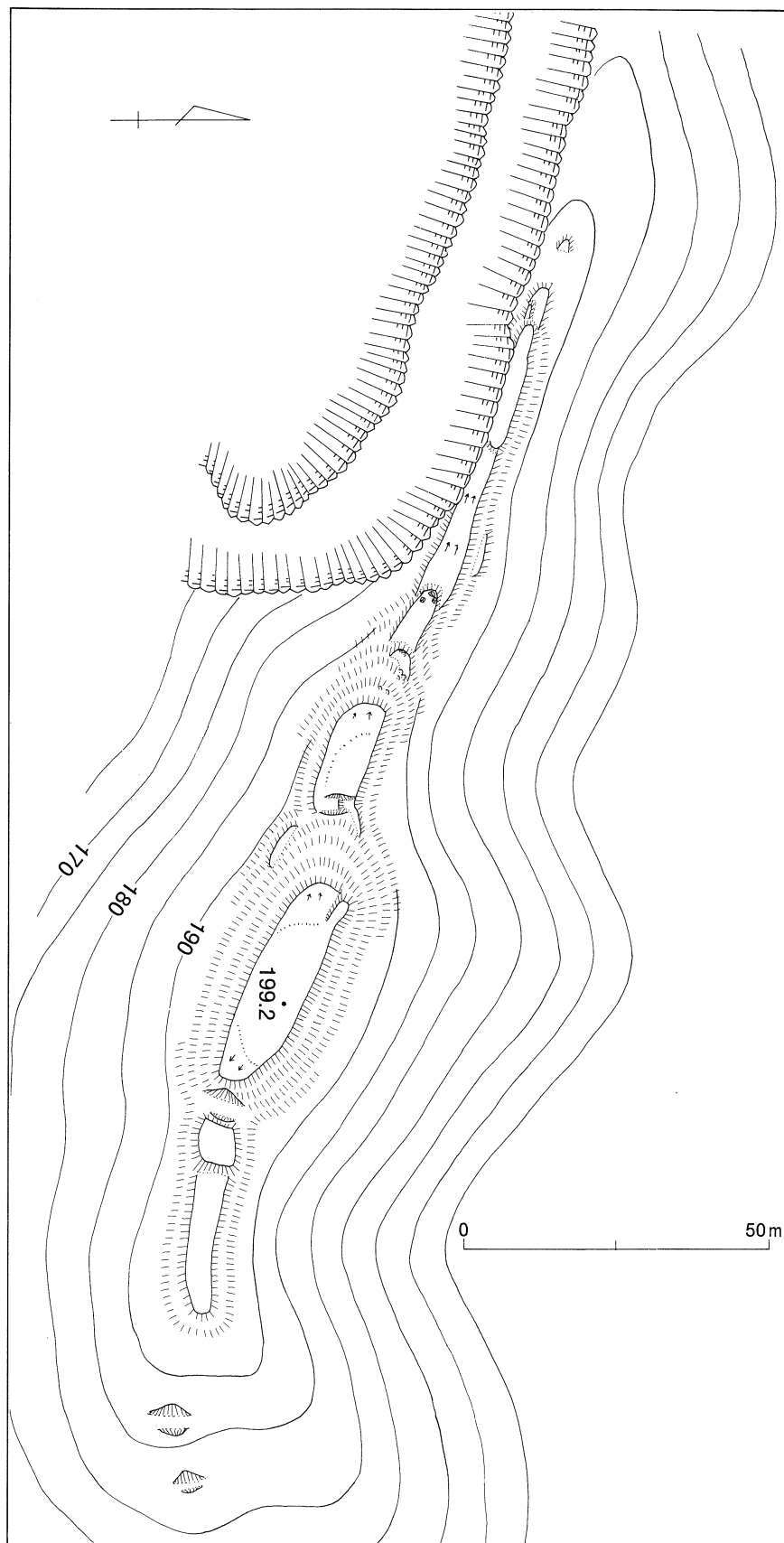
オ3 春日城跡略測図

オ8 福良城跡 八束郡東出雲町大字上意東 地図番号 7

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 190m 比高 150m

概要

京羅木山城や、荒田越えを経て富田城へ通ずる通路を扼するやせ尾根の上を地取りしているため、尼子氏と毛利氏との間で争奪戦が繰り返された。主郭の北西隅は櫓台と思われる、主郭の東西を堀切で切断している。採石場となったため南西側斜面が破壊されているが、通路に面する斜面の裾にも郭が設けられていた可能性が高い。

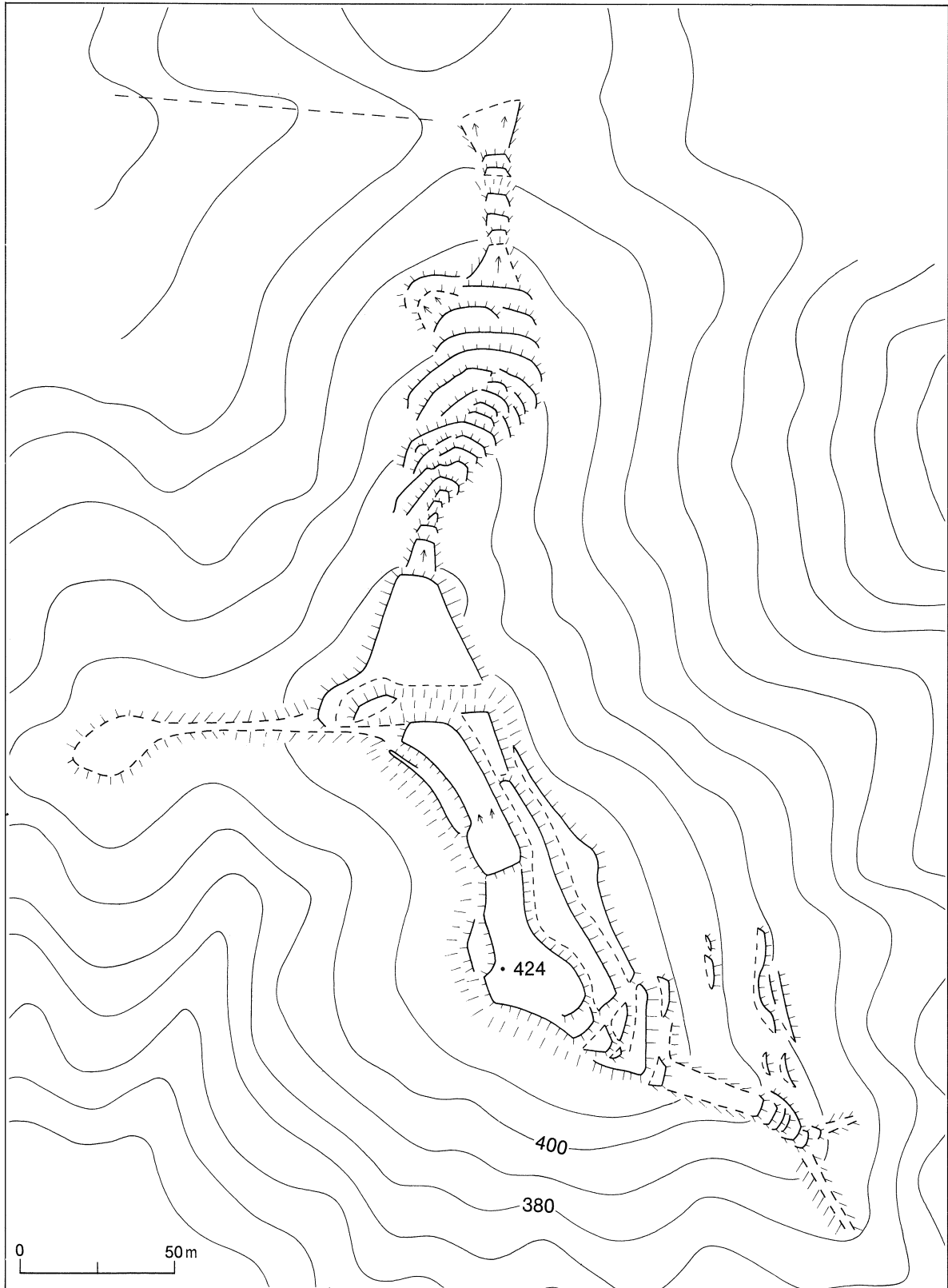


オ8 福良城跡略測図

カ1・ソ1 高津場番城跡 八束郡八雲村大字熊野・大原郡大東町大字須賀 地図番号 15

現状 山林、公園 保存状況 不良 立地 丘陵頂部 標高 424m

概要 現在の八雲山に所在し、牛尾氏の三笠城と熊野氏の熊野城の連絡を遮断するために毛利軍によって築かれた陣城である。三笠城・熊野城を威圧するような縄張りは見られず、北側に防御施設が集中しており、この方面からの攻撃を特に警戒していたものと考えられる。山頂部は公園化されている。



カ1・ソ1 高津場番城跡略測図



カ2 熊野城跡 八束郡八雲村大字熊野 地図番号 15

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 280m 比高 180m

概要

尼子方の有力武将熊野久忠の居城で、雲芸攻防戦の時も尼子家復興戦のおりにも、毛利方を引き付けて戦った。東麓に「土居成」という地名の屋敷地があり、熊野氏の居館跡と推定される。この「土居成」から主郭に至る緩斜面には、雛壇状に帯郭が築かれている。また主郭を取り巻く郭間の連絡通路を設けるなど緊密な縄張りであるが、土塁を築いていないところは、出雲国人の普請技術の特徴と考えられる。



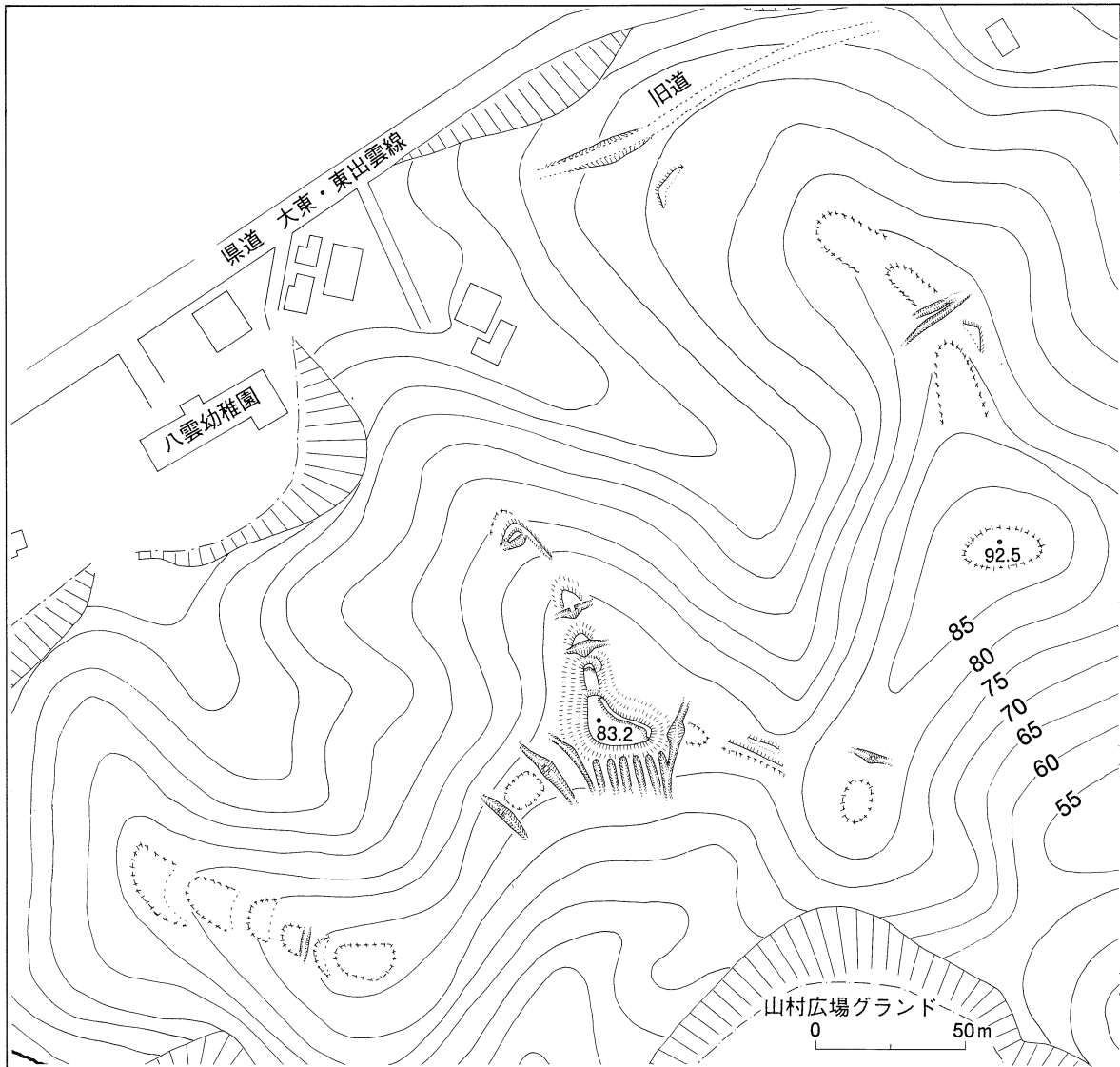
カ2 熊野城跡略測図

**カ6 禅定寺城跡** 八束郡八雲村大字西岩坂 地図番号 15

**現状** 山林 **保存状況** やや良 **立地** 丘陵頂部 **標高** 83m **比高** 50m

**概要**

西岩坂から東岩坂に通ずる通路を見下ろす、低位丘陵の頂部に地取りしている。付近には「土居屋敷」という地名が残っており、もともこの地の領主によって築かれた山城を、戦国期に繋ぎの城として改修したものであろう。なだらかな丘陵の稜線を堀切で切断して侵入を困難にしているが、切岸の加工の不十分な郭も残されており、途中で普請が放棄されたものかと推定される。



カ6 禅定寺城跡略測図

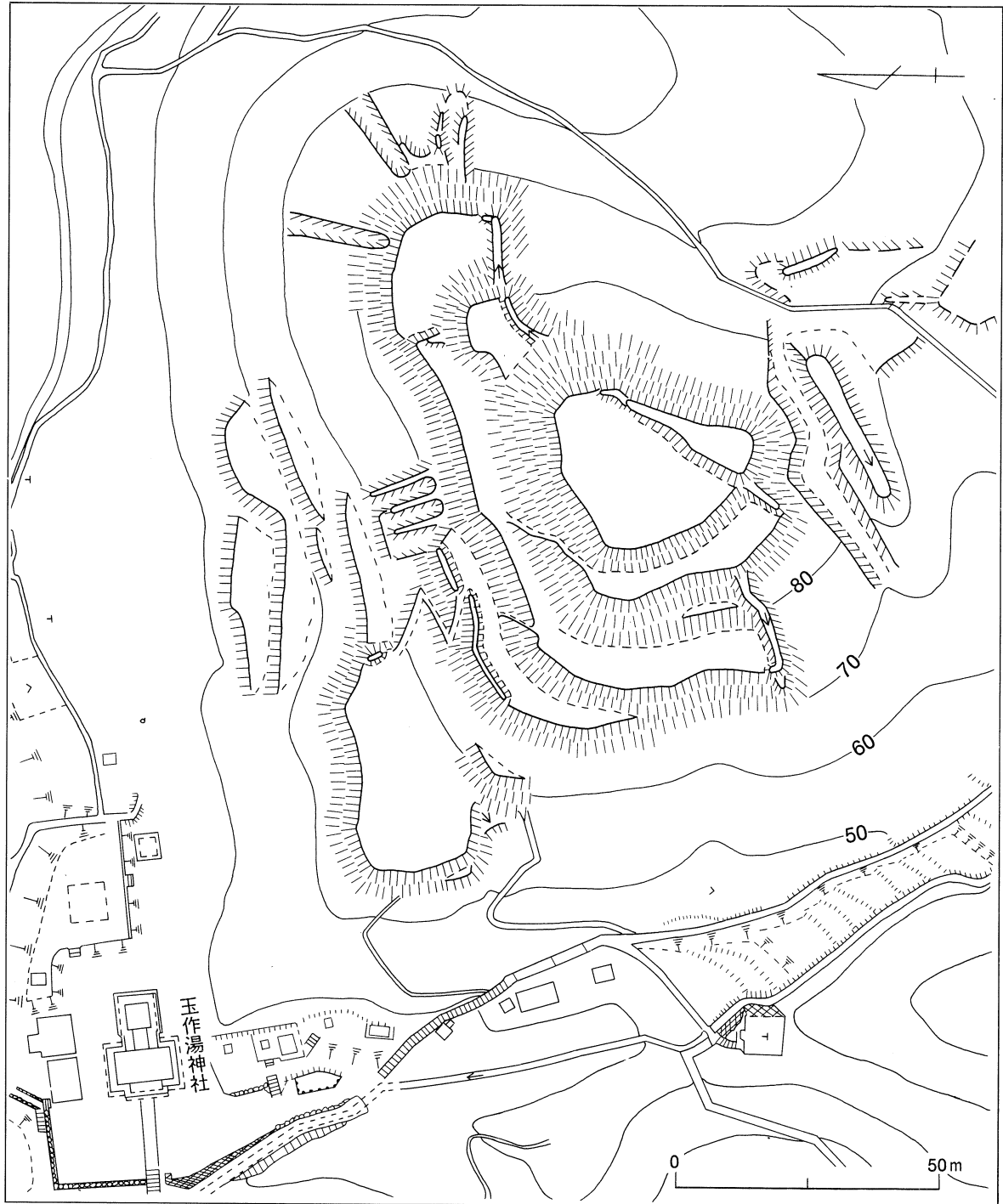
**キ3 玉造要害山城跡** 八束郡玉湯町大字玉造 地図番号 15

**現状** 山林、畑他 **保存状況** 良 **立地** 丘陵頂部～麓部 **標高** 86m **比高** 35m

**概要**

玉造温泉街を見下ろす丘陵頂部に所在する。主郭は最高所と考えられ、尾根筋に対して櫓台と土塁を築いて防御を固めている。主郭の南側に続く郭には井戸が確認され、尾根筋に対しては櫓台の南側に接して土塁を築いている。さらに主郭の西側を取り巻いている郭の南端にも尾根筋に対して土塁が

築かれており、主郭の櫓台を核とした土塁による防御ラインの存在が読みとれる。また、主郭南側に築かれている堀切は本来存在した堀切の主郭側壁面に新たに築かれたものである。尾根筋に対する櫓台と土塁による防御ラインの設立と同時期に築かれたものと考えられる。土塁を食い違わせた虎口の存在等から考えると毛利軍による改修強化も考えられる。城郭の北側に連続竪堀群が確認できるが、尾根筋の方面には確認できなかった。湯氏の居城として知られる。



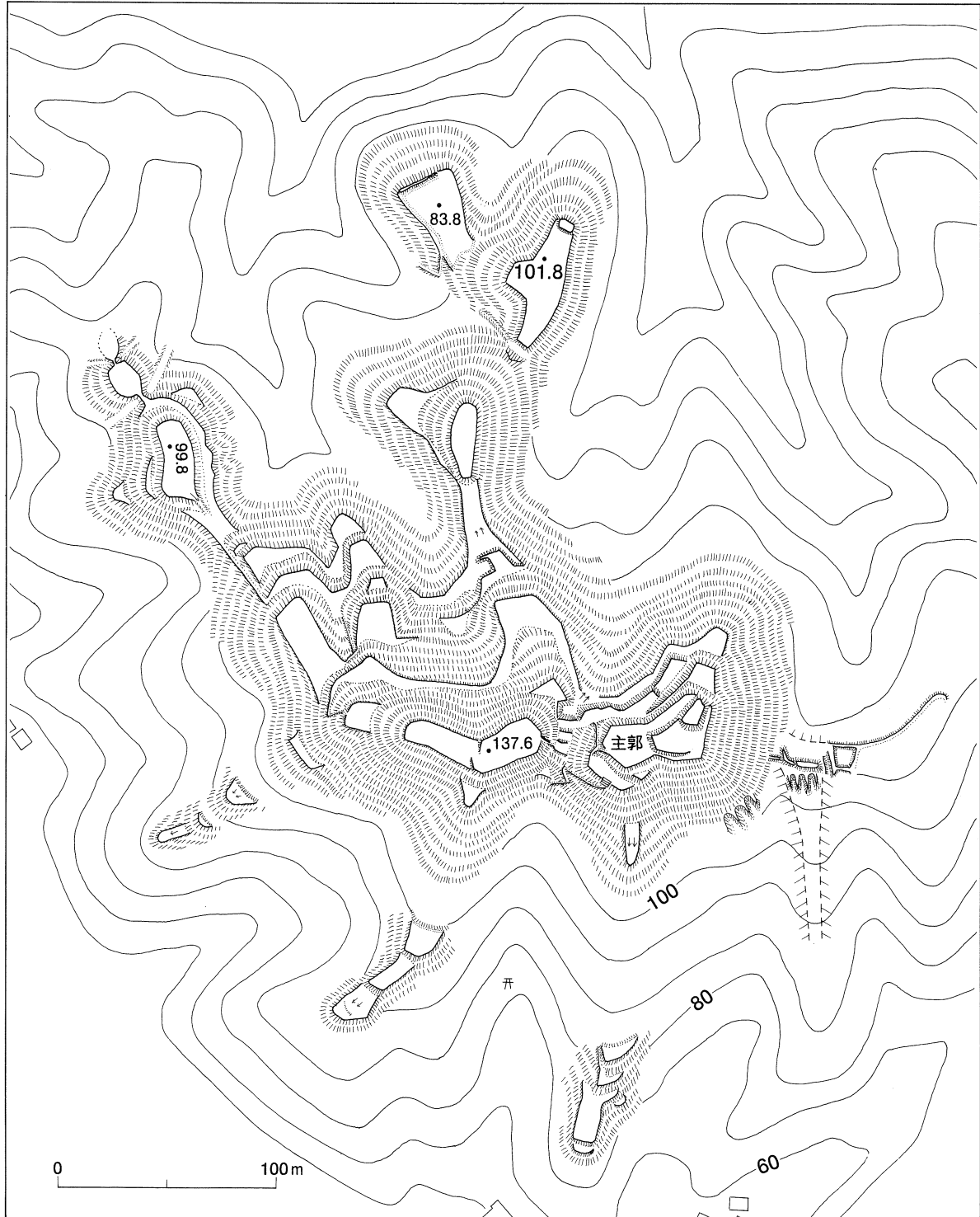
キ3 玉造要害山城跡略測図

ク2 金山要害山城跡 八東郡宍道町大字白石 地図番号 22

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 150m 比高 130m

概要

有力国人宍道氏の本城にふさわしく、雄大な山塊に、地元で四十八成と呼ぶほど多数の郭を配置している。宍道氏は、出雲侵攻戦に敗北した大内義隆に従って出雲を離れ、毛利元就に属して当城に復帰した。したがって普請のほとんどは永禄五年（1562）以降のこと推定され、在来の出雲国人の縄張り観や普請技術を知る上での好例といえる。また坂口谷の奥から、約2.7キロメートルの山肌を伝って、主郭東下方の馬洗い池まで水路を造って導水していることにも注目される。



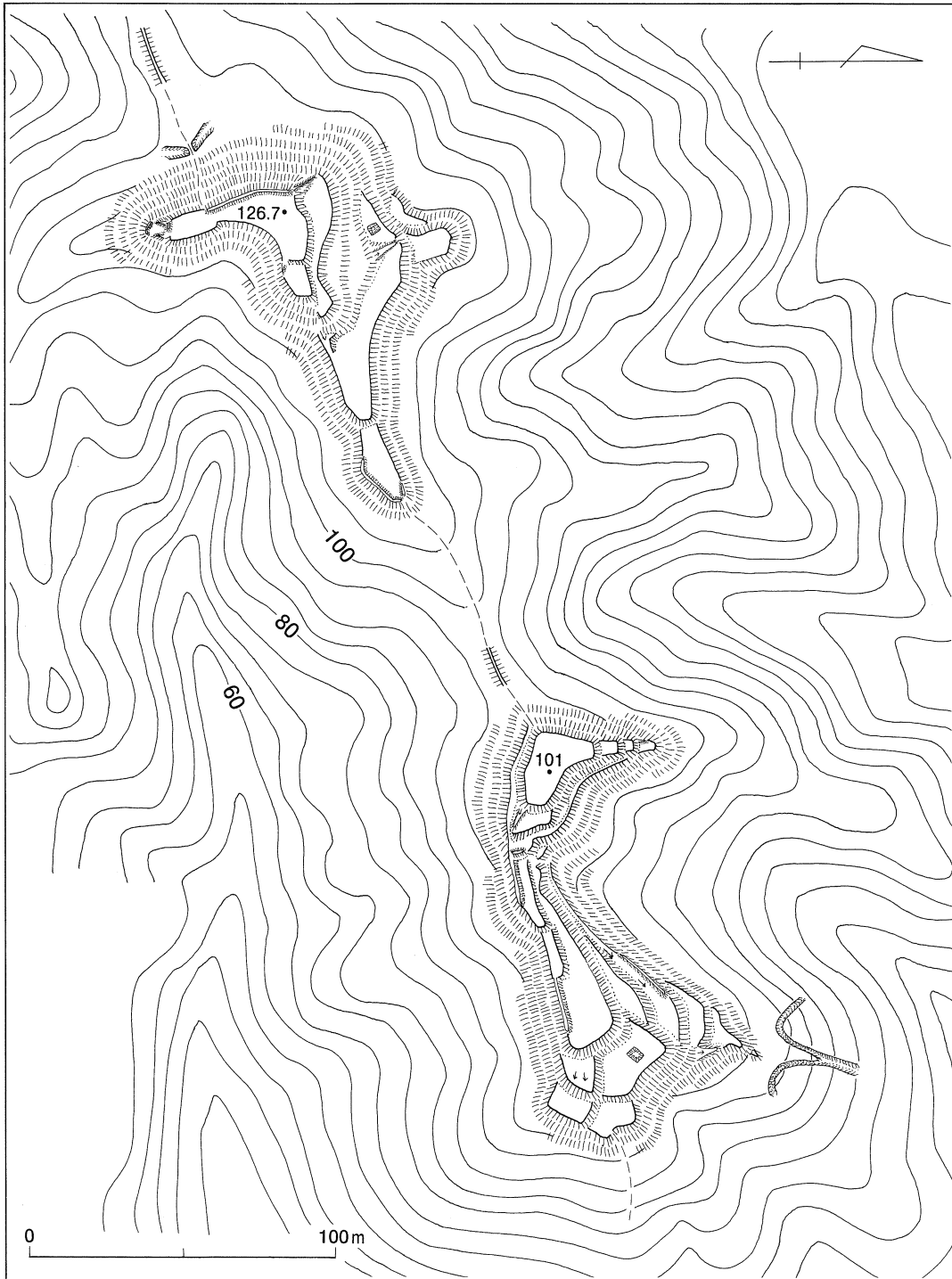
ク2 金山要害山城跡略測図

ク3 佐々布要害山城跡 八東郡宍道町大字佐々布 地図番号 22

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 126m 比高 90m

概要

佐々布川を見下ろす位置に造られた東郭群と、この西方70メートルの位置に造られた西郭群からなる一城別郭の城。東郭群の北東山腹には、ウイング状の堀切が認められ、邑智郡瑞穂町の二ツ山城などとの技術的連続性がうかがえる。西郭群は、南側の榊形虎口から北へ向けて土塁のラインで結ばれており、緊密な縄張りだったことが認められる。



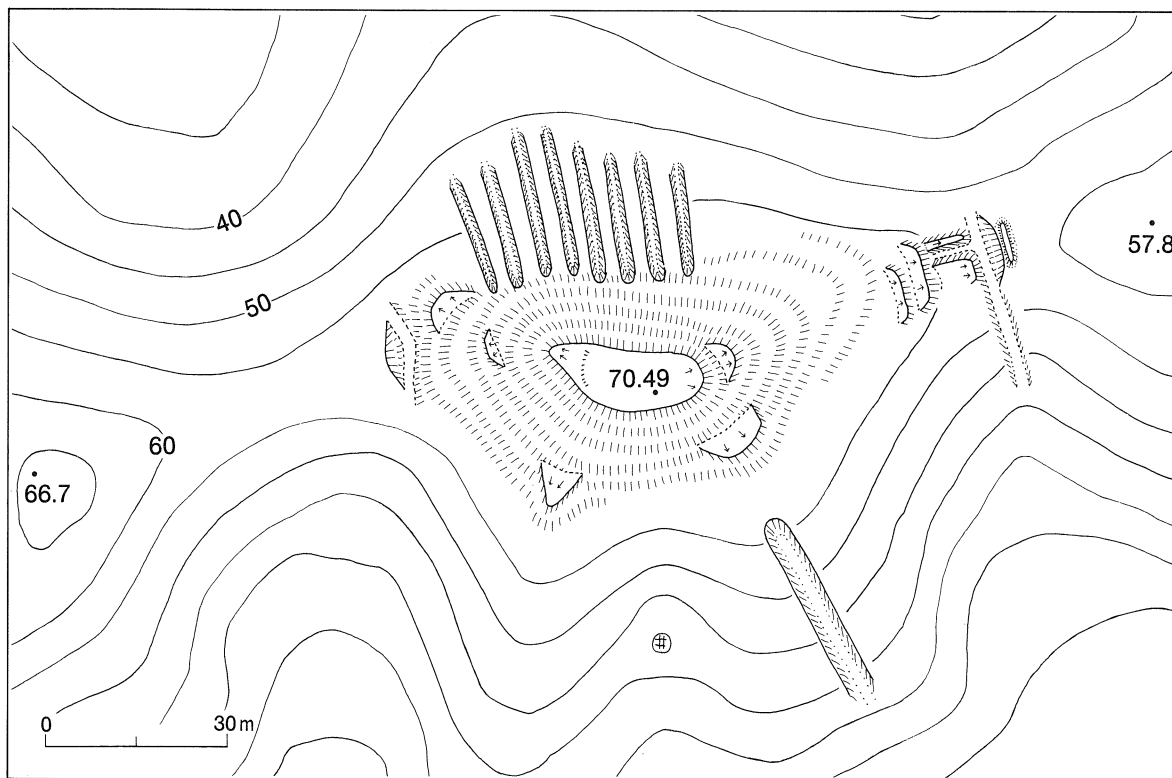
ク3 佐々布要害山城跡略測図

ク4 城山城跡 八東郡宍道町大字佐々布 地図番号 22

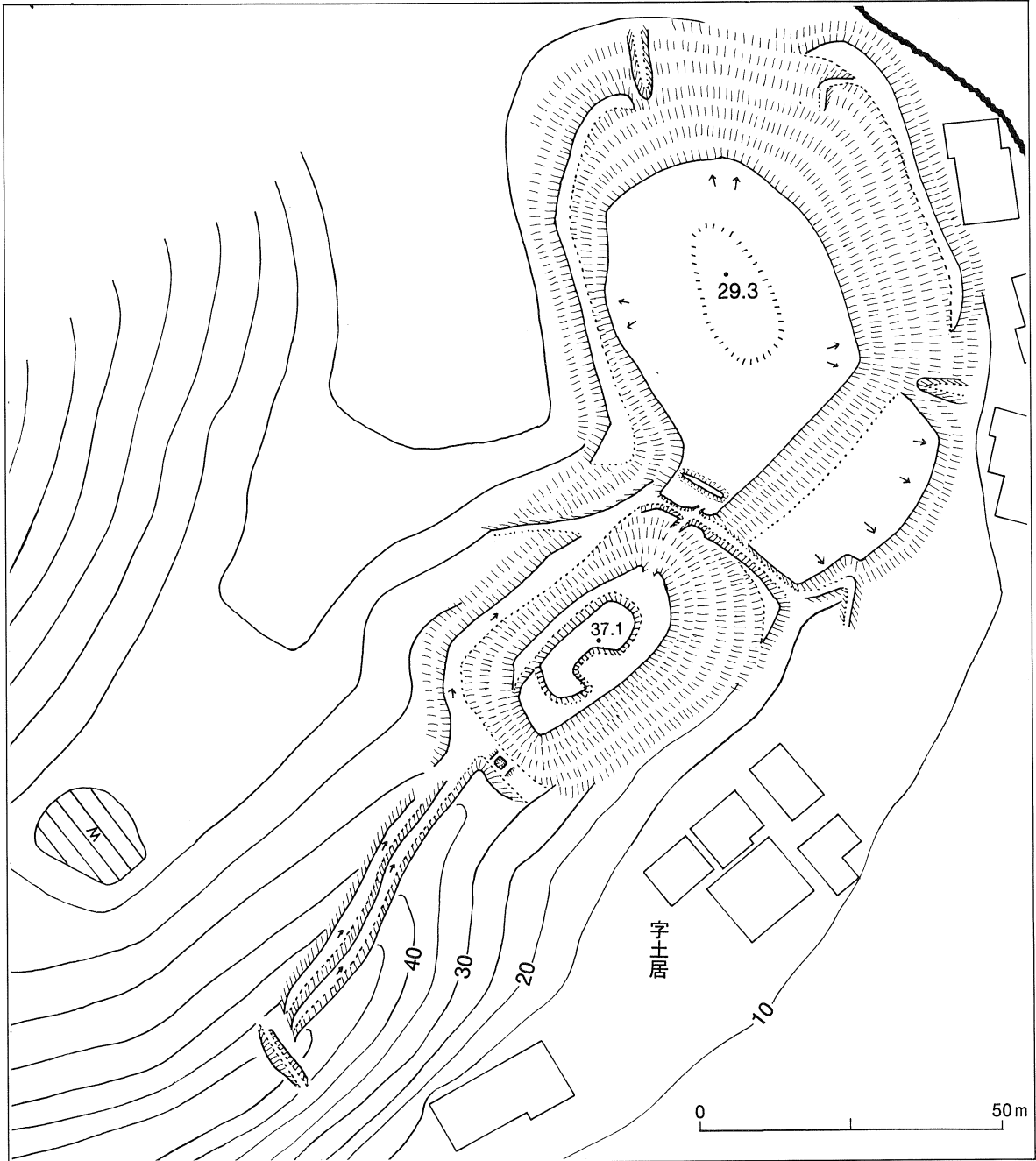
現状 山林他 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 70m 比高 50m

概要

城山城は、北方の緩斜面に向かって8本の連続縦堀を配しているが、主郭上面も周囲の腰郭も削平はともに雑である。東方15メートル下方の鞍部に堀切を掘り、その内側に虎口を設けようとしたものと推定される。当城から東方の尾根伝いの、佐々布川に面した丘陵突端に土居郭群があるが、これはていねいな普請がなされていて対照的である。



ク4 城山城跡（山頂部）略測図



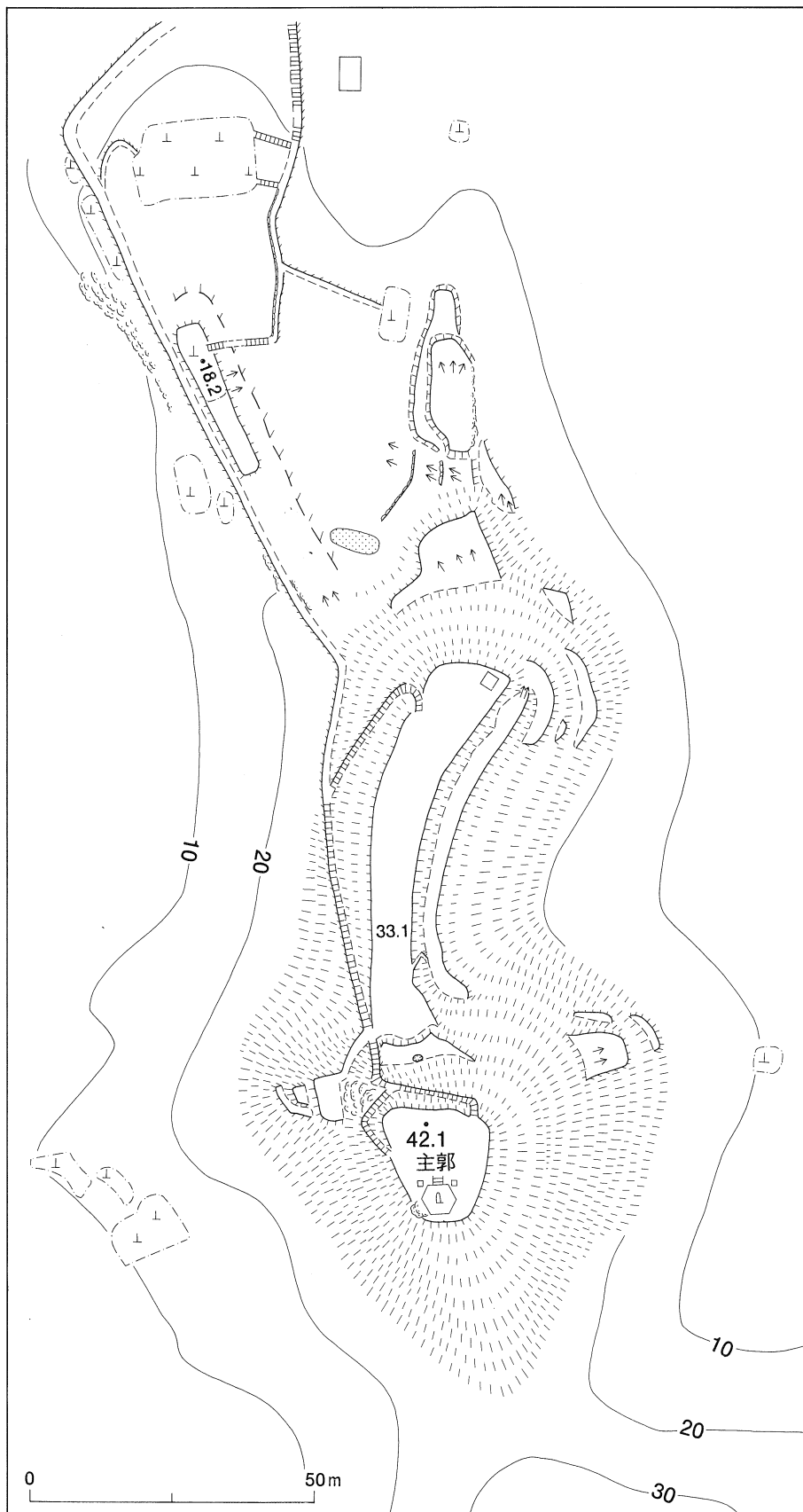
ク4 城山城跡 (土居郭群) 略測図

ク5 宍道要害山城跡 八束郡宍道町大字宍道 地図番号 22

現状 畑、公園 保存状況 不良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 42m 比高 40m

概要

金山要害山城の北方約3.5キロメートルの、宍道湖岸に突き出した丘陵先端に地取りしており、金山要害山城の支城であるとともに、宍道氏にとっての海城的な機能を果たしていたと推定される。主郭の背後の鞍部には堀切が掘られておらず、本城への撤退路を残している。



ク5 宍道要害山城跡略測図

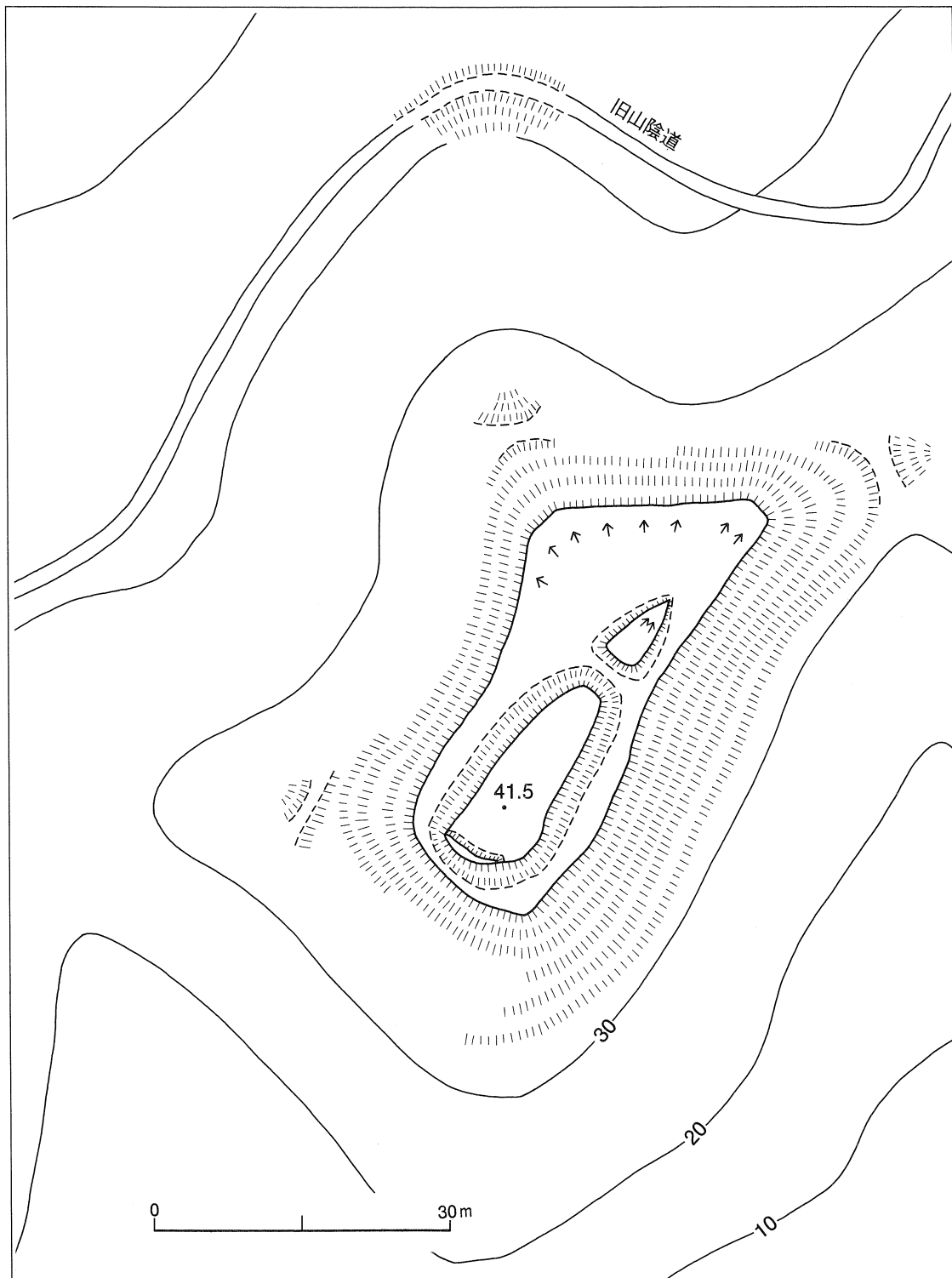


ク6 掛屋山城跡 八束郡宍道町大字佐々布 地図番号 22

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵先端 標高 41m 比高 30m

概要

旧山陰道を見下ろす位置を占め、また佐々布川をはさんで東岸には宍道要害山城があり、河口を扼する機能も果たしていたと推定される。主郭の東・北・西の三方に堀切を配しているが、いずれも浅くて切断効果は薄いようである。郭の上面の削平も十分でなく丸みを残している。



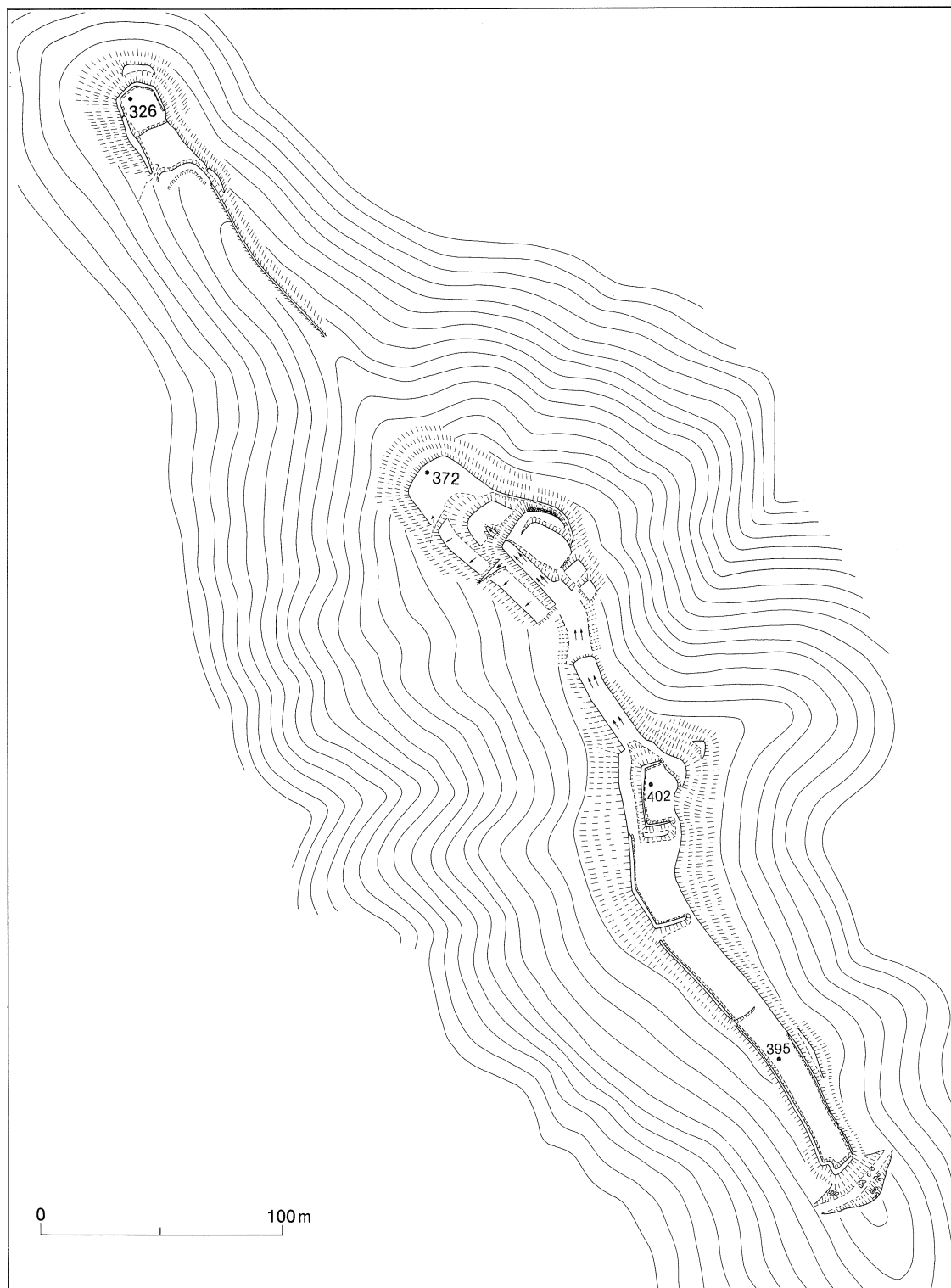
ク6 掛屋山城跡略測図

ク8 大平山城跡 八束郡宍道町大字上来待 地図番号 22

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 402m 比高 280m

概要

南北約500mにもおよぶ尾根筋を城域とする長大な山城である。南東端は堀切で切断し、北西端の郭は土塁で固めている。郭上面の削平は丁寧で、周囲も概ね直線的に造られている。土塁が多用され、しかも直線的にきちんと築かれている。主郭の南西部や堀切に面した土塁などには横矢がかりを意識した普請が認められる。



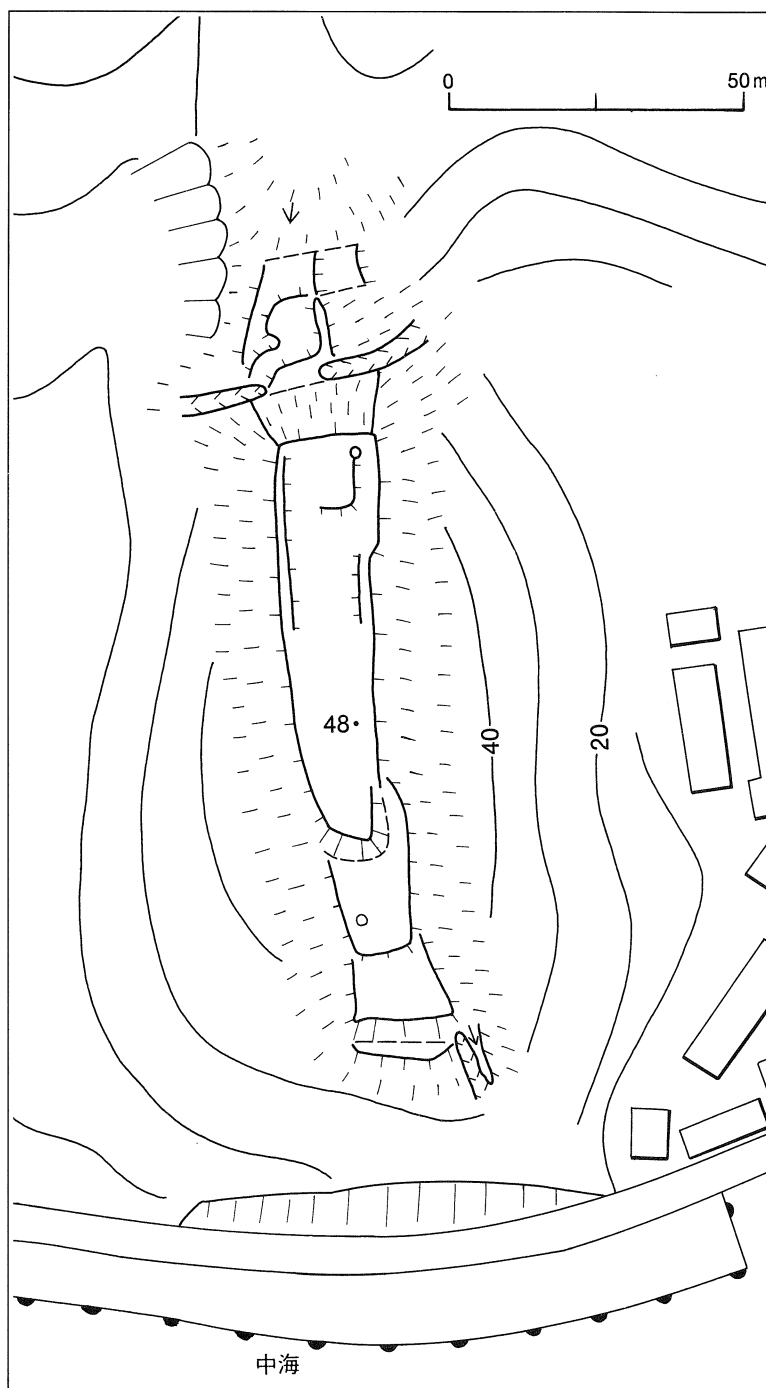
ク8 大平山城跡略測図

ケ2 鈴垂城跡 八東郡美保関町大字森山 地図番号 5

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵先端 標高 48m 比高 48m

概要

境水道に突出した尾根の先端に所在し、対岸は鳥取県境港市である。城郭は自然の鞍部を利用して堀切を築いて尾根筋を遮断している。主郭は最高所と考えられ、尾根筋に対して櫓台を築いている。主郭の北側には土塁が築かれているが、南側では確認できない。南端に虎口が築かれている。主郭南側の郭には井戸と伝えられる窪みが残る。南端は複雑な構造になっており、境水道方向からの攻撃を意識したものと考えられる。東側に航空自衛隊高尾山分屯基地が設営されているが、この地に館や舟どまりが設けられていたのであろう。尼子氏の重臣亀井安綱の居城と伝わる。尼子氏再興を図った尼子勝久は真山城を撤収した後、鈴垂城に暫く滞在し、八東郡島根町加賀の桂島から出雲を後にしたとされている。



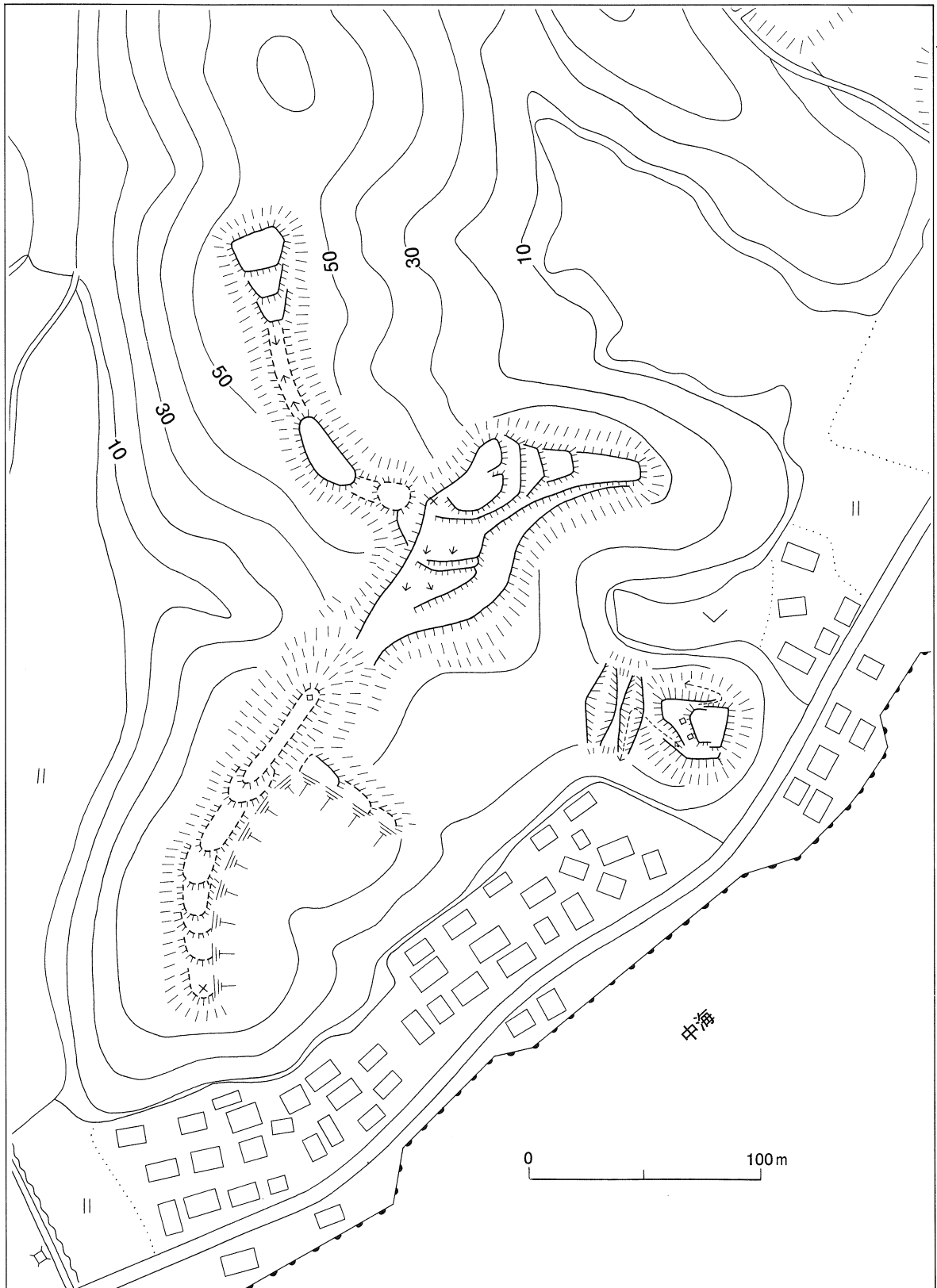
ケ2 鈴垂城跡略測図

**ヶ3 権現山城跡** 八束郡美保関町大字森山 地図番号 5

**現状** 山林、畑 **保存状況** やや良 **立地** 丘陵先端 **標高** 60m **比高** 60m

**概要**

保存状況をやや良としたのは、元の主郭部が果樹園・畑などに開墾されているのと、南側が工事で大きく削られているため。縄文時代の、中海に面した洞窟遺跡として著名な権現山洞窟遺跡と同所。寺床の地名と、以前は寺が建っていたという伝えが残る。戦国末期には、南東部の郭が二重の堀切で守られて監視哨として使用されたものだろう。主郭部に14世紀代の宝篋印塔が、南西部の郭南端に五輪塔が散在し、同じ郭の北端には古墳の石棺石材のようなものが確認された。



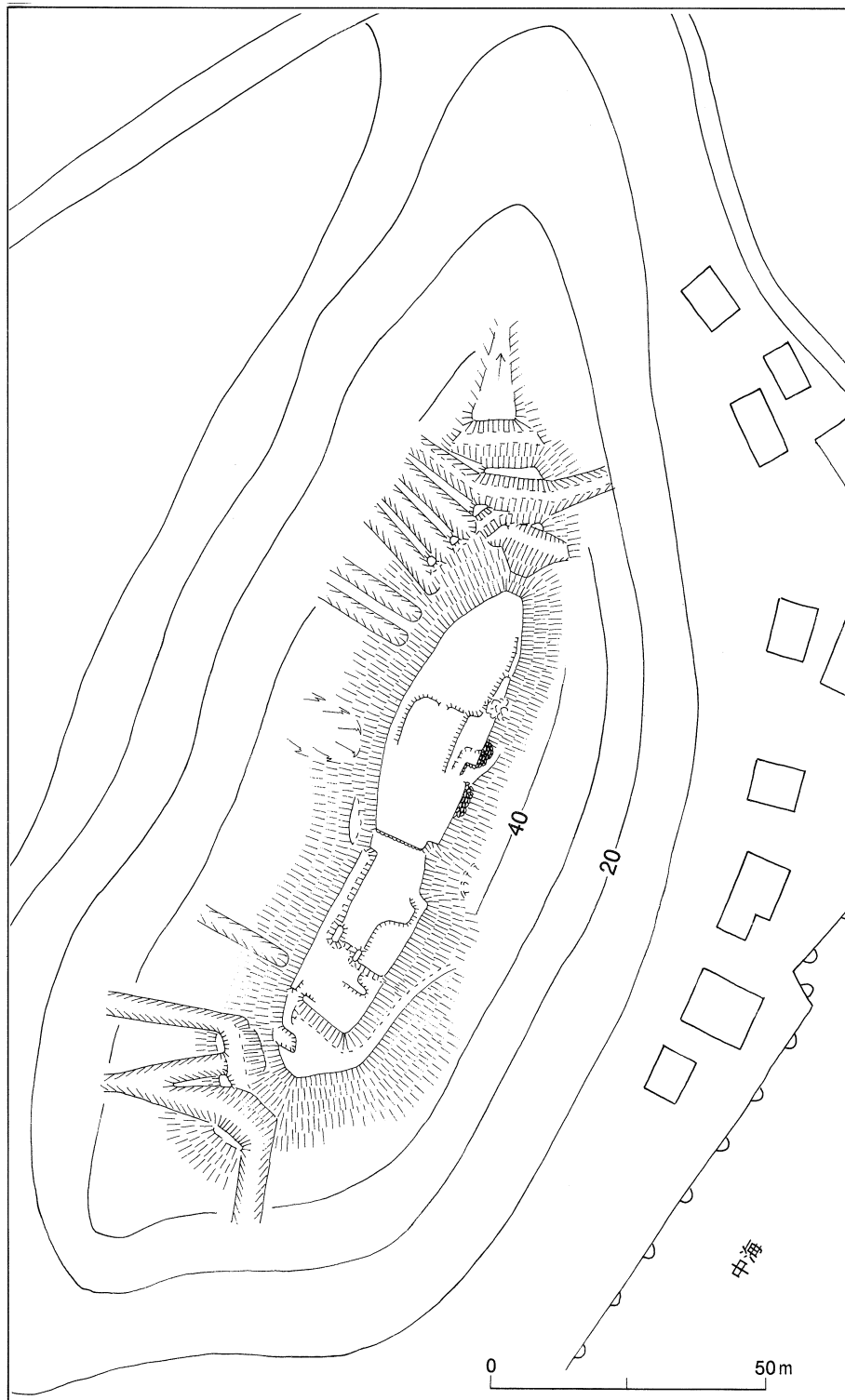
ケ3 権現山城跡略測図

ケ4 横田山城跡 八束郡美保関町大字森山 地図番号 5

現状 山林、社寺境内 保存状況 良 立地 独立丘陵 標高 50m 比高 50m

概要

境水道に突出した島状の山塊に築かれている。この地域には東側から尼子氏の重臣亀井安綱の居城と伝わる鈴垂城、権現山城、横田城と城郭が集中しており、軍事、水運の要衝であった。鳥取県境港市側に明確な城郭遺構が認められないことから、境水道の把握はこれらの城郭に委ねられていたと考えられる。縄張りは最高所を主郭として地形に合わせて築かれており、南北端に築かれている堀切と連続堅堀切群が特色である。縄張りを見ると郭に接している堀切と外側の堀切、連続堅堀切群の軸がずれていることに気づく。これは当初築かれた堀切（主郭側の堀切の可能性が高い）を別の時期に改修強化したためと考えられる。連続堅堀切群は石見地域で見慣れた技法で築かれているため、石見衆が築城に携わったことも想定される（広瀬町の勝山城の技法とも共通点が指摘される）。虎口に工夫が認められ、毛利軍によって改修強化されたと見るべきであろう。城将に秋上氏が伝わる。



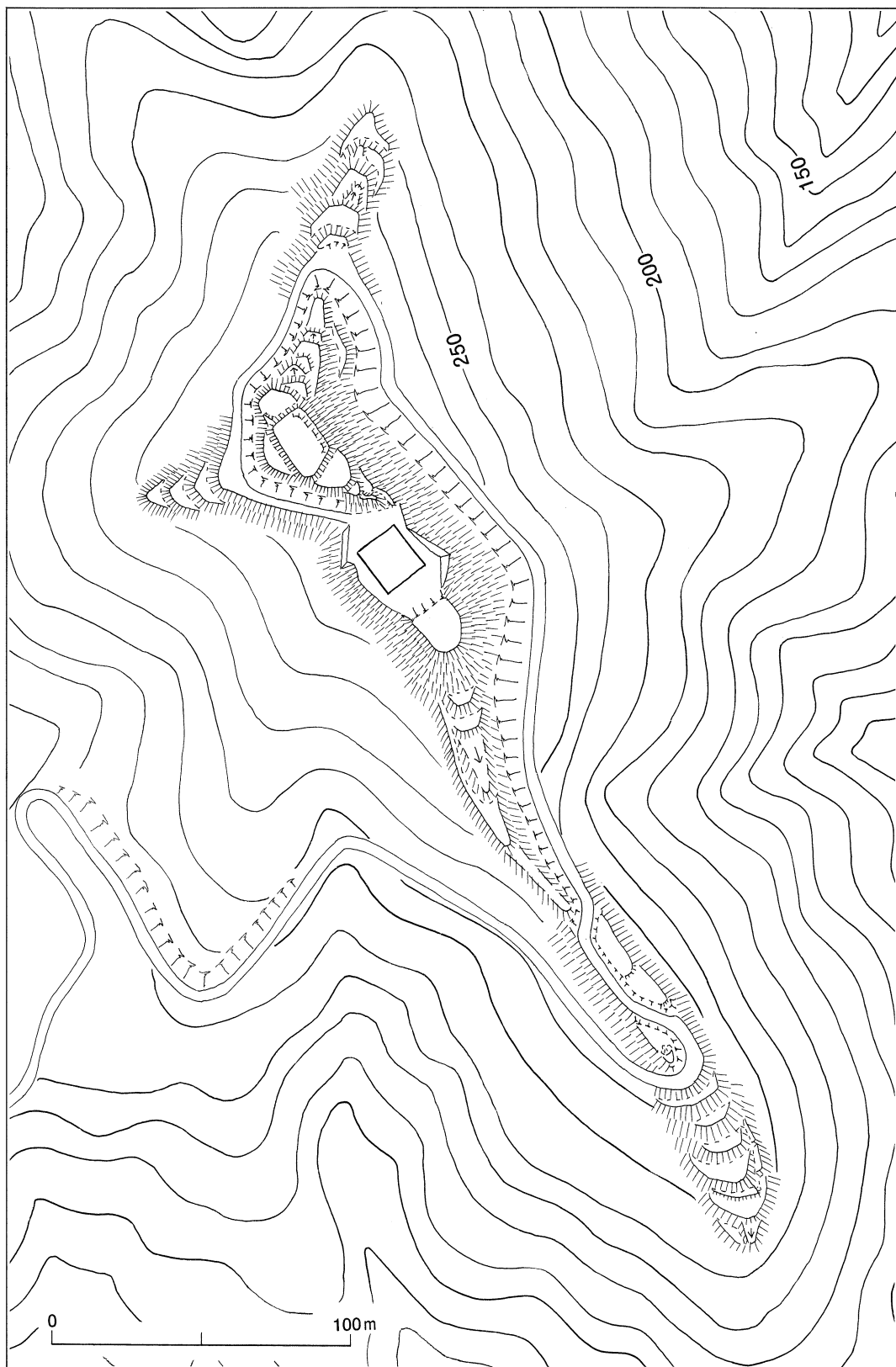
ケ4 横田山城跡略測図

ケ5 忠山城跡 八東郡美保関町大字森山 地図番号 5

現状 山林、無線中継所 保存状況 不良 立地 丘陵頂部 標高 290m 比高 290m

概要

松江市と美保関町との境に所在する。山頂からの眺望は良く、北に日本海、南に中海を隔てて能義郡をも望むことができる。永禄十二年(1569)、尼子氏復興を図った尼子勝久や山中鹿介等が隠岐を経て稲積浦に上陸し、真っ先に忠山に城郭を築いたのは、援助した隠岐為清等の水軍を十分に活用するためであった。二ヶ月後、本営は真山城に移るが、その後も使用されたものと考えられる。遺構は無線中継所とその管理道のため破壊が著しいが、随所に普請の痕跡を認めることができる。



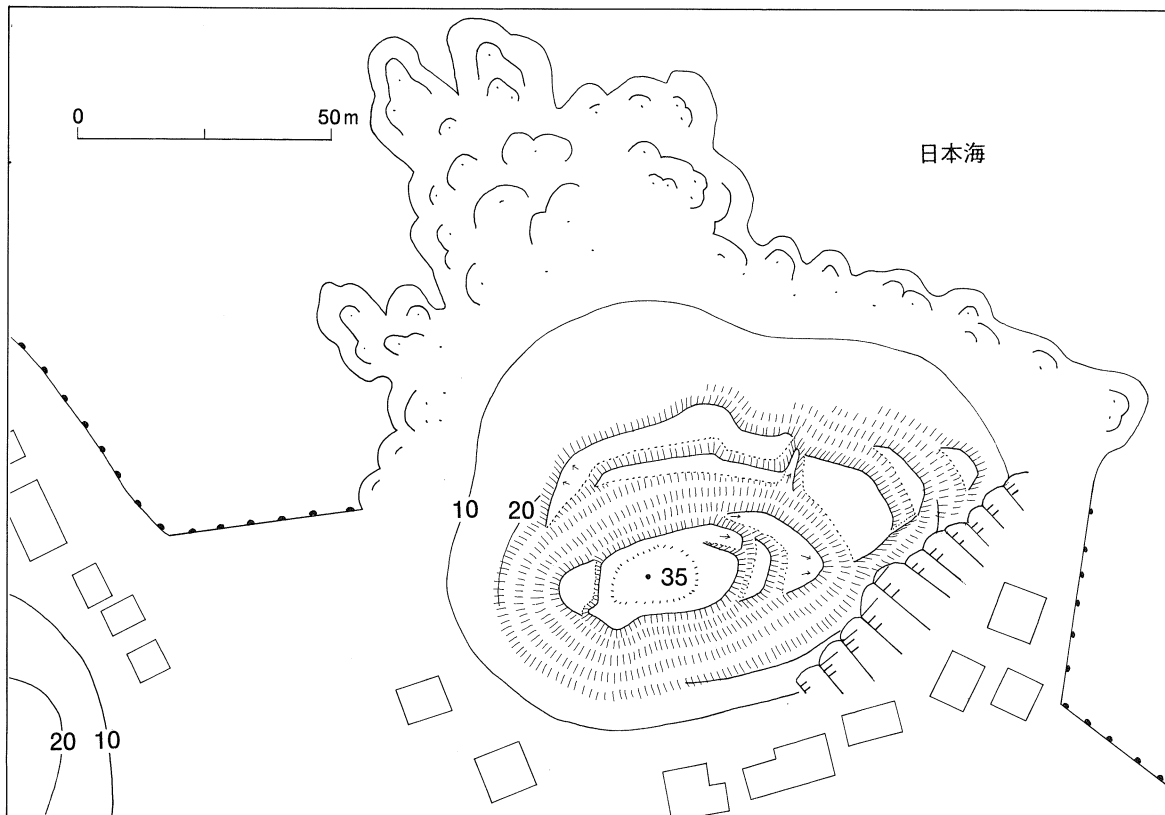
ケ5 忠山城跡略測図

コ4 要害山城跡 八束郡島根町大字加賀 地図番号 13

現状 山林 保存状況 やや良 立地 独立丘陵 標高 35m 比高 30m

概要

加賀港に突き出した独立丘に地取りした海城である。海側にあたる斜面に郭を重ねていることからそれと知られよう。約1キロメートル南方の、加賀城の支城の役割を持ったと考えられる。なお北西200メートルの独立丘にも、何らかの普請が施されていた可能性がある。



コ4 要害山城跡略測図

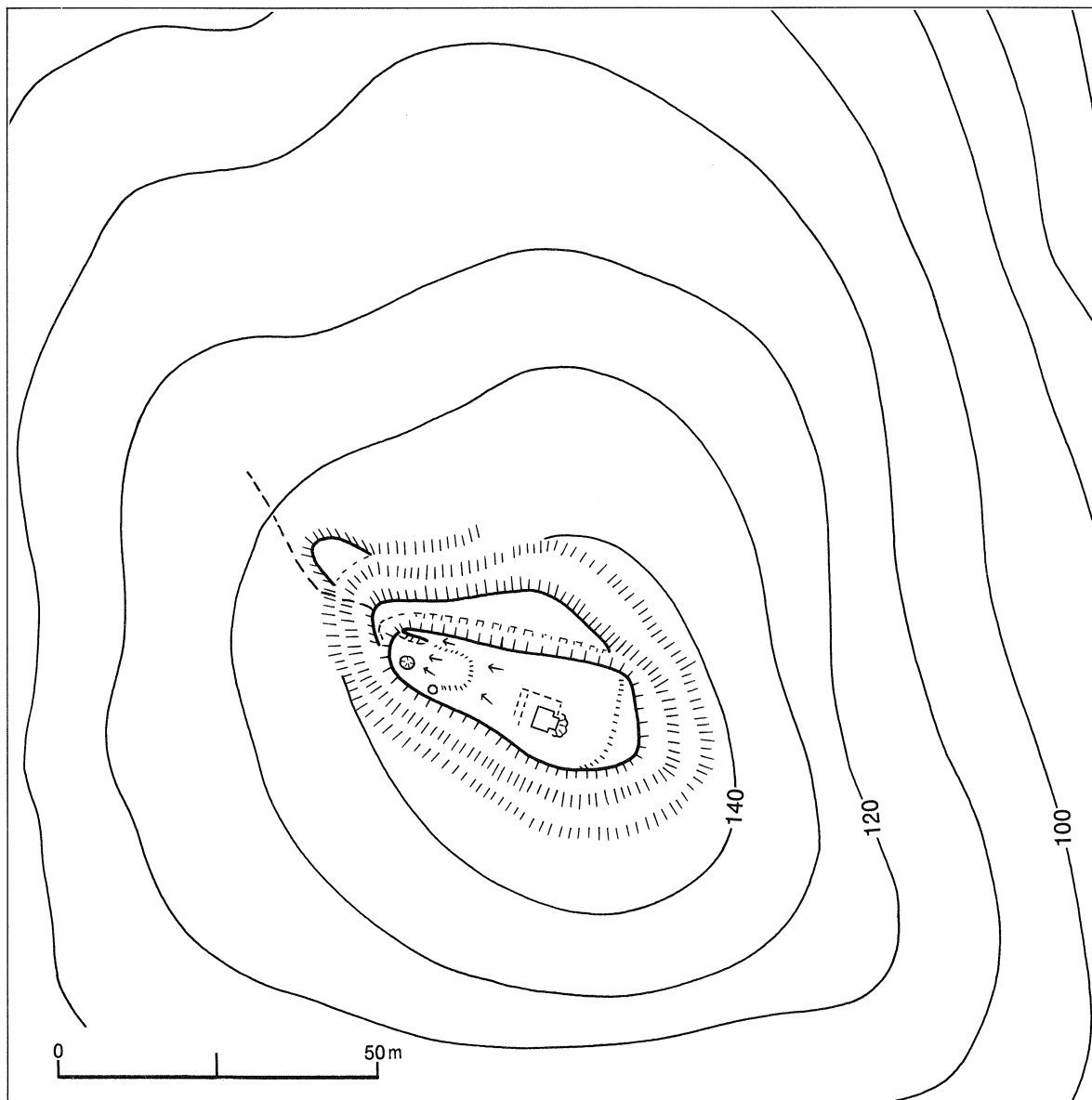


コ5 加賀城跡 八東郡島根町大字加賀 地図番号 13

現状 山林、寺社境内 保存状況 不良 立地 丘陵頂部 標高 152m 比高 130m

概要

湾口から加賀港へ入港する船が、まず目にするのが本城の地取りする弥山（寺山・浜田山とも）である。海岸から約1キロメートル離れた内陸ではあるものの、海城と見てよい。湯原春綱が、毛利氏の許可を得て改修したことが文書上明らかであるが、現在主郭には神社が祭られていて若干攪乱されている可能性がある。基本的に主郭と腰郭からなる単純な縄張りの城である。



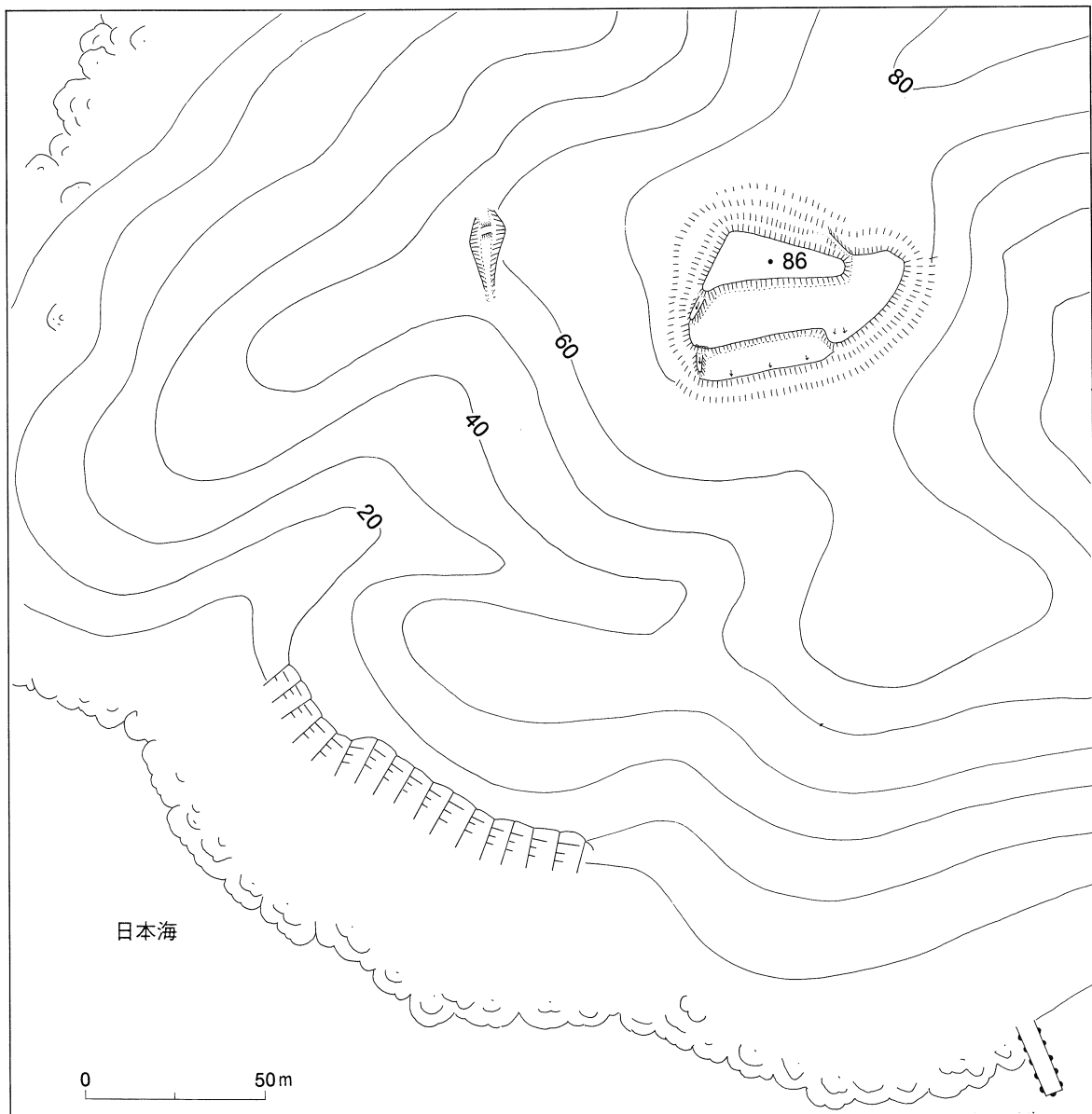
コ5 加賀城跡略測図

コ7 みほしの城跡 八東郡島根町大字野波 地図番号 13

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 86m 比高 80m

概 要

野波港を南方に見下ろす位置に地取りした海城である。西方の稜線に堀切りを配して西方の海側からの攻撃に備えているが、東方や南方の丘陵には普請が施されていない。駐屯空間として利用されたものかもしれない。



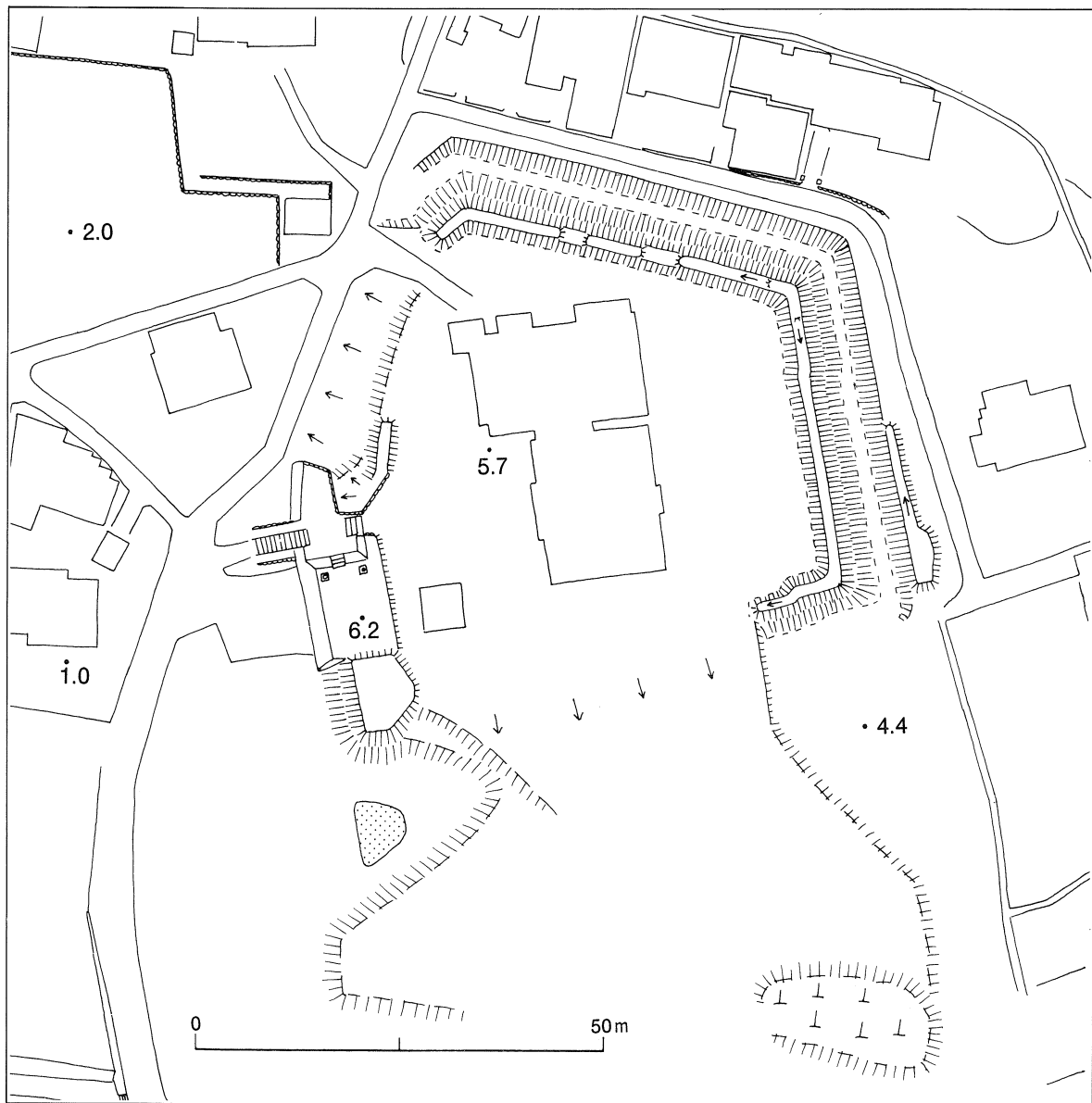
コ7 みほしの城跡略測図

シ1 全隆寺城跡 八東郡八東町大字波入 地図番号 6

現状 社寺境内 保存状況 やや良 立地 台地 標高 5 m 比高 4 m

概要

中海に面した丘陵に築かれた城郭で、大橋川から中海そして富田城方面への水上交通路を一望に見渡すことが出来る。当時は城郭の直下が海であったと伝えられているため、水軍の拠点と考えられる。城郭はほぼ方形で、土塁が巡っていたものと考えられる。西側と南側の土塁は破壊されているが、それぞれのコーナー部分を確認できるため全体の縄張りが復元できる。北側と東側には堀が巡っている。西側に石垣が残り戦国期のものと伝えられるが、石垣のコーナーの存在から比較的新しいものと考えられる。土塁と堀によって構成された平地および丘陵部の城郭は県内では益田氏の三宅御土居（益田市）等わずかししか認められないので、貴重な存在といえる。



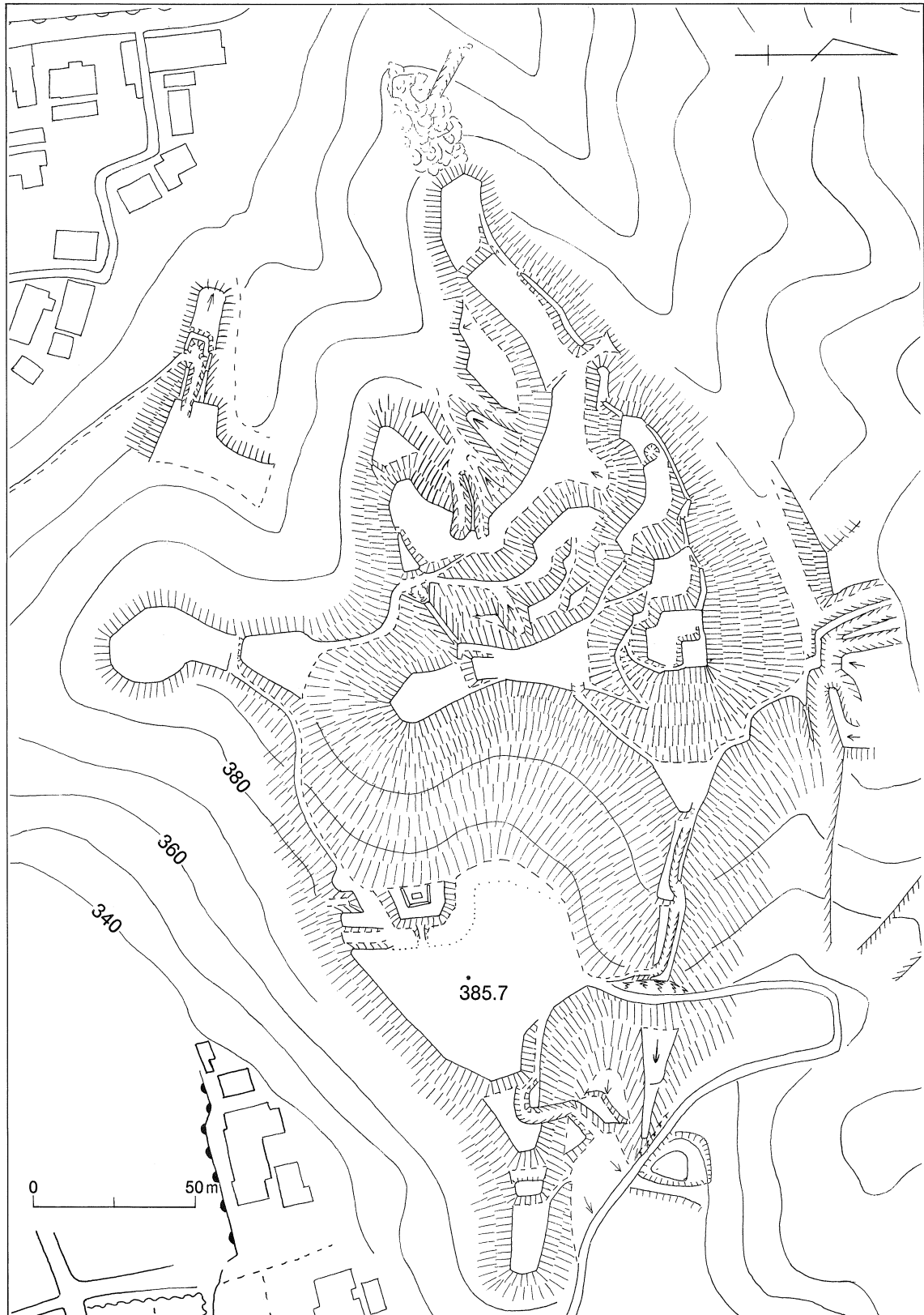
シ1 全隆寺城跡略測図

ス3 藤ヶ瀬城跡 仁多郡横田町大字横田 地図番号 17

現状 山林、畑、社寺境内 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 438m 比高 100m

概要

斐伊川と下横田川が合流する位置に所在する。最高所は櫓台と考えられ、主郭は一段下がった郭とみられる。尾根筋に深い堀切を築いて遮断している。主郭の西側は尾根の先端まで郭が築かれているが、いずれも北側を削り残して土塁とし、尾根筋に対する防御ラインを構成している。主郭東方の中



ス3 藤ヶ瀬城跡略測図

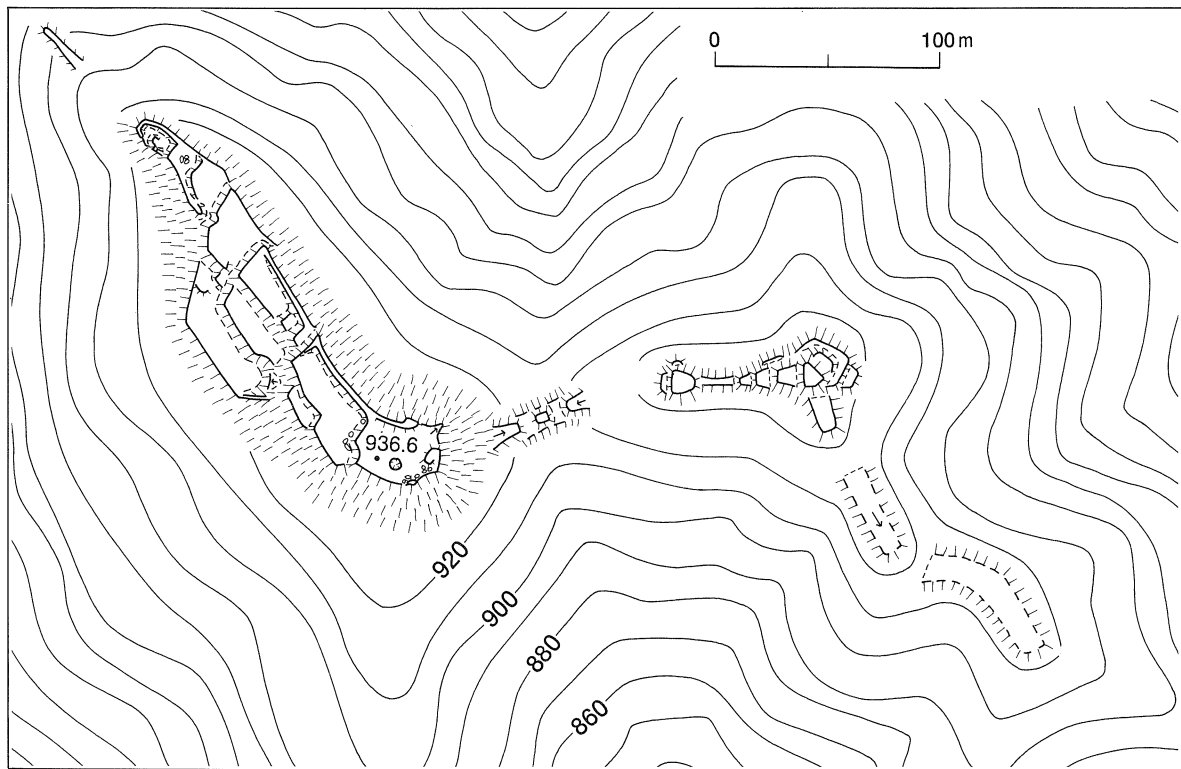
腹に築かれている郭は「馬乗馬場」と伝えられ、整地以前は多少の起伏があったものと伝えられる。三沢氏は三沢城から藤ヶ瀬城に居城を移したとされるが、櫓台を中心とした防御ラインの存在等から、毛利軍による改修強化の可能性もある。

**ス11 夕景城跡** 仁多郡横田町大字小馬來 地図番号 18

**現状** 山林 **保存状況** 良 **立地** 丘陵頂部 **標高** 936m **比高** 470m

**概要**

夕景城は矢筈山とも称し、東西二つの嶺があり、それぞれに城郭が築かれている。主郭は西側の最高所と考えられ、尾根筋に櫓台を築いている。主郭から北西に延びる土塁は防御ラインよりも風除けとして築かれた可能性も考えられる。高所に築かれたにもかかわらず、普請は十分であり、主郭の西側には石垣のコーナー部分が確認できる。馬來氏の居城として知られている。



ス11 夕景城跡略測図

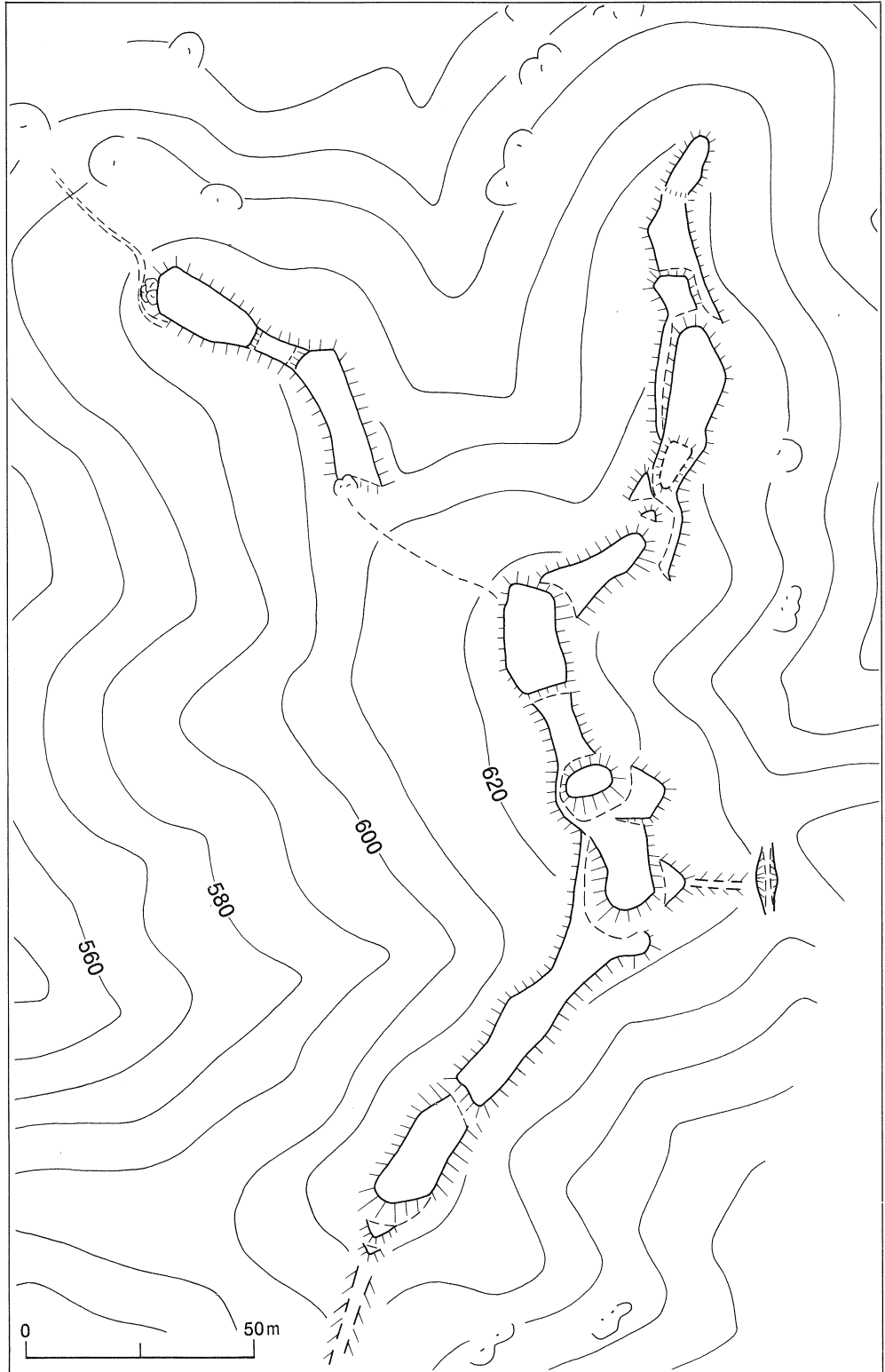
セ3 亀嵩城跡 仁多郡仁多町大字亀嵩 地図番号 18

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 624m 比高 310m

概要

岩頭が所々に突起する急峻な山岳頂部に縄張りした城で最頂部に櫓台を置き尾根上に郭を連続させる。続く尾根を堀切るのみで他に堀切や土塁等はなく、北端は岩頭に至り能義奥へ通う亀嵩中心部を遠望する。文明期以降に三沢氏が築城し為清、為虎が城主と伝える。北麓の古土居が居館址とされる。

新土居（消滅）  
はその後入部した  
冷泉民部の館  
址と伝えられる。



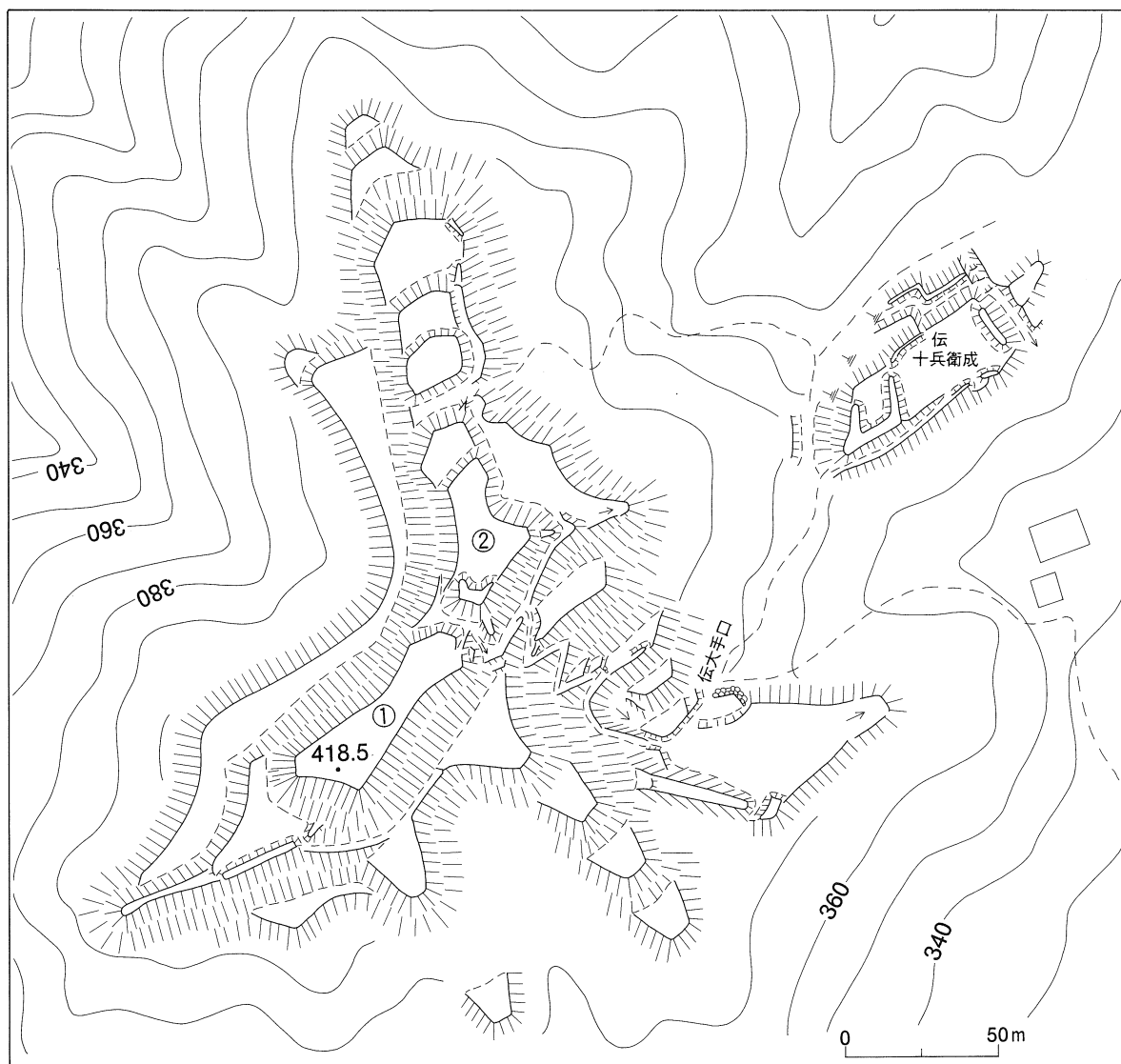
セ3 亀嵩城跡略測図

セ11 三沢城跡 仁多郡仁多町大字三沢 地図番号 24

現状 山林他 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 418m

概要

出雲最大の国人とされた三沢氏の居城として知られている。全山が要塞化しており、普請は十分である。四日市方面は比較的緩やかな地形だが、西方の阿井川方面は急峻な地形となっている。山頂はほぼ同じ高さの郭が堀切を隔てて築かれている。1郭を地元では「本丸」、2郭を「鳥居ヶ丸」と称しているが、2郭南端の土壇を櫓台と見るならば2郭が主郭になる。郭2の東方には水の手とされる池を隔てて「十兵衛成」が築かれており、北側には横堀が確認できる。虎口は随所に確認することができ、「大手口」には石垣が築かれている。尾根を削って土塁とし、防御ラインを構成する技法等から改修時期が新しいとも考えられる。四日市には「納戸垣内」、「座頭屋敷」、「成田屋敷」等の地名が残る。



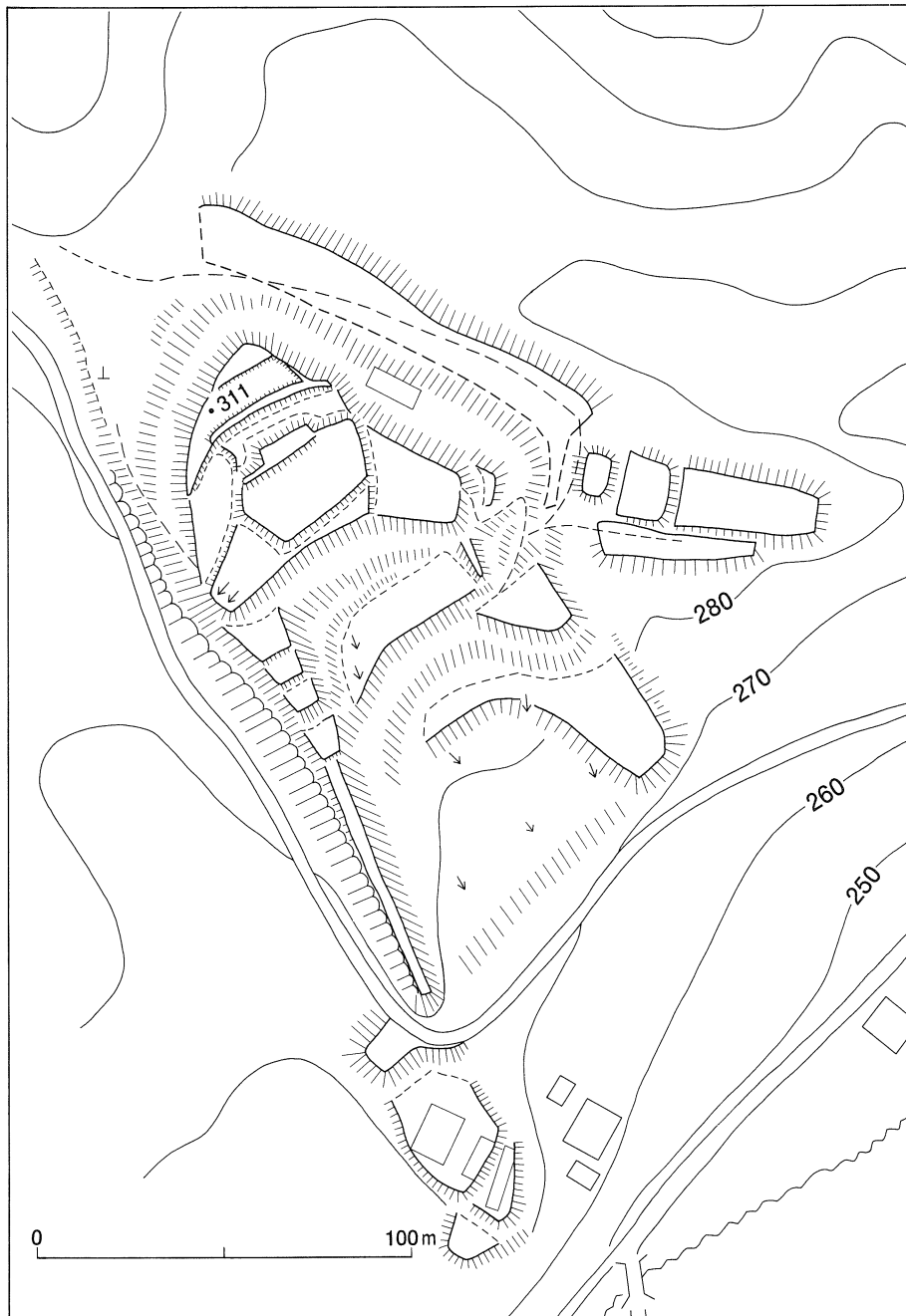
セ11 三沢城跡略測図

セ12 布広城跡 仁多郡仁多町大字三沢 地図番号 24

現状 山林、畑、宅地 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 310m 比高 60m

概要

張り出す尾根を大きく切り離して城域としている。前方へ扇形に開いて下がる墨壁と曲輪で囲んだ中に館を置き、後方の要部を主郭とする。主郭後方は高い切岸の袋状の横堀を挟んで土塁のある後方の郭を築いている。主城である三沢城の東約1kmにあって三沢郷中心部を眼下に見渡せる。天正期まで三沢の支族である布広氏累代の居城と伝わる。



セ12 布広城跡略測図

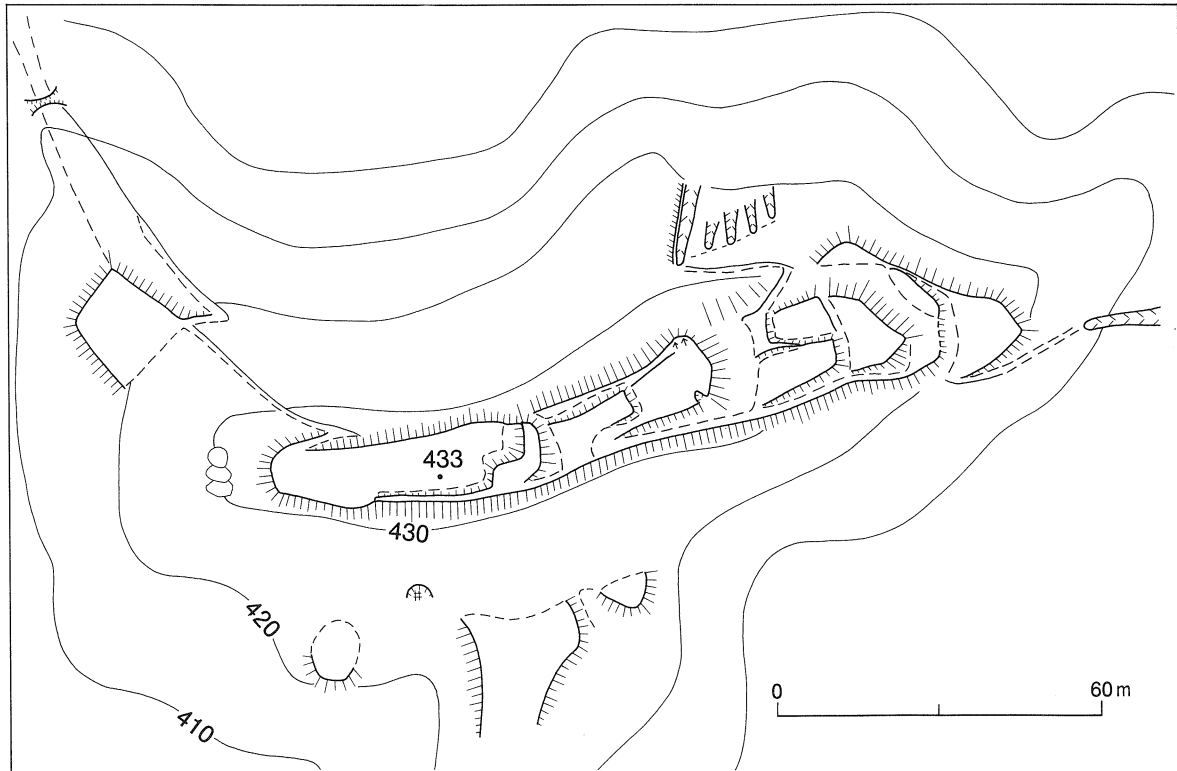


セ16 烏見城跡 仁多郡仁多町大字上阿井 地図番号 25

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 433m 比高 120m

概要

上阿井の中心部からやや奥まった山頂にあり、主郭部には横矢掛けの虎口が認められる。西へ下る郭列の背面には犬走り状の路が通る。前面には連続縦堀があり、東方低く張り出す尾根には堀切を設け、その先方尾根上にも単郭が点々と続く。北前方に阿井川を隔て備後街道を望むことができる。天正末年、毛利配下の伊達采女信清の城と伝わる。



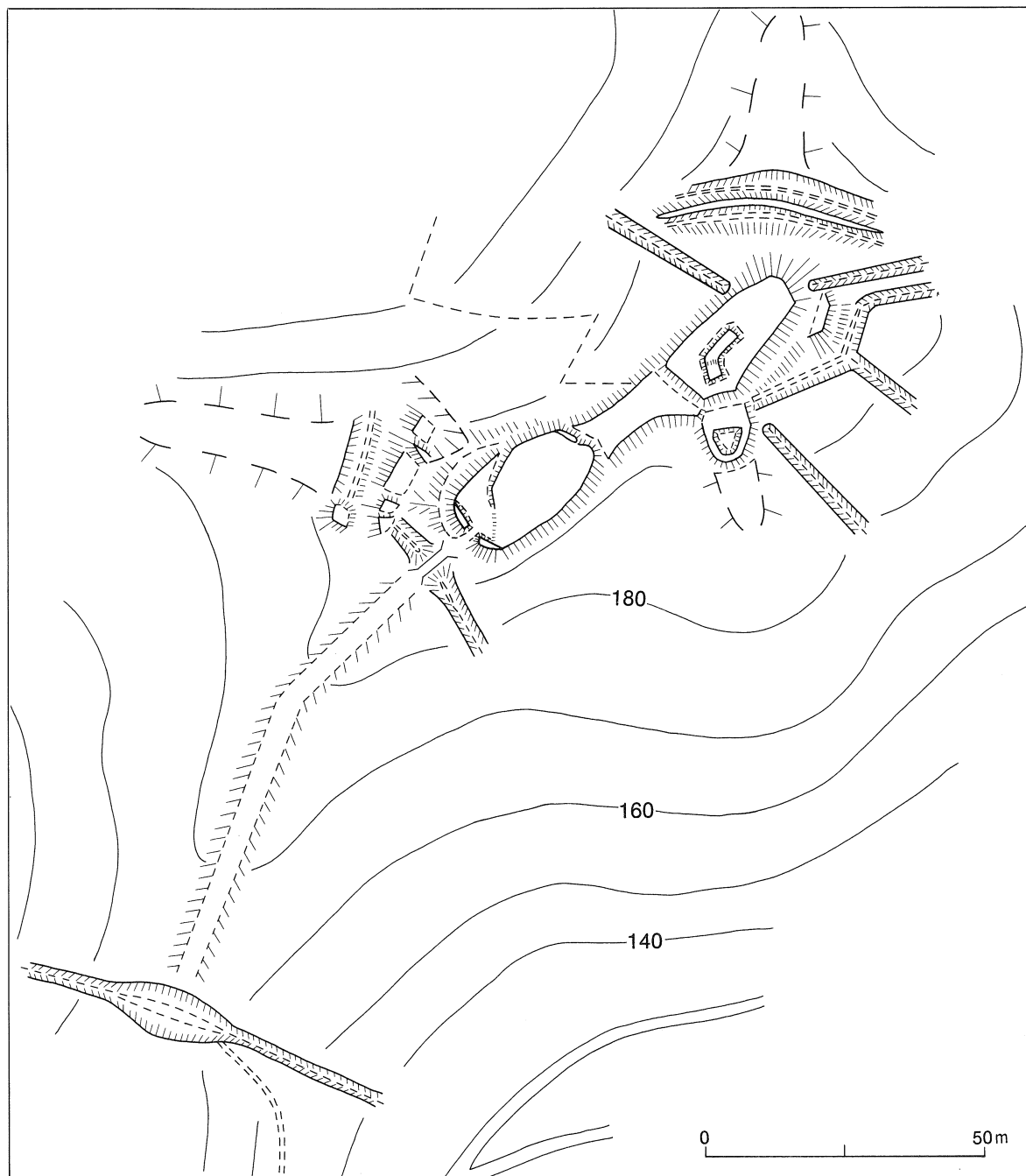
セ16 烏見城跡略測図

ソ2 諏訪城跡 大原郡大東町大字須賀 地図番号 15

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 211m 比高 60m

概 要

須賀神社後背の丘陵上に位置する。並立する二つの郭を主とし前方側方を横切り、後方には大きな二重堀切がある。正面の土橋を渡ると土塁で固めた虎口がある。東の横堀、縦堀群は特筆される。後方の八所集落には大屋敷、殿居などの地名が残る。淀本庄一部地頭菅代の拠点と伝わる。



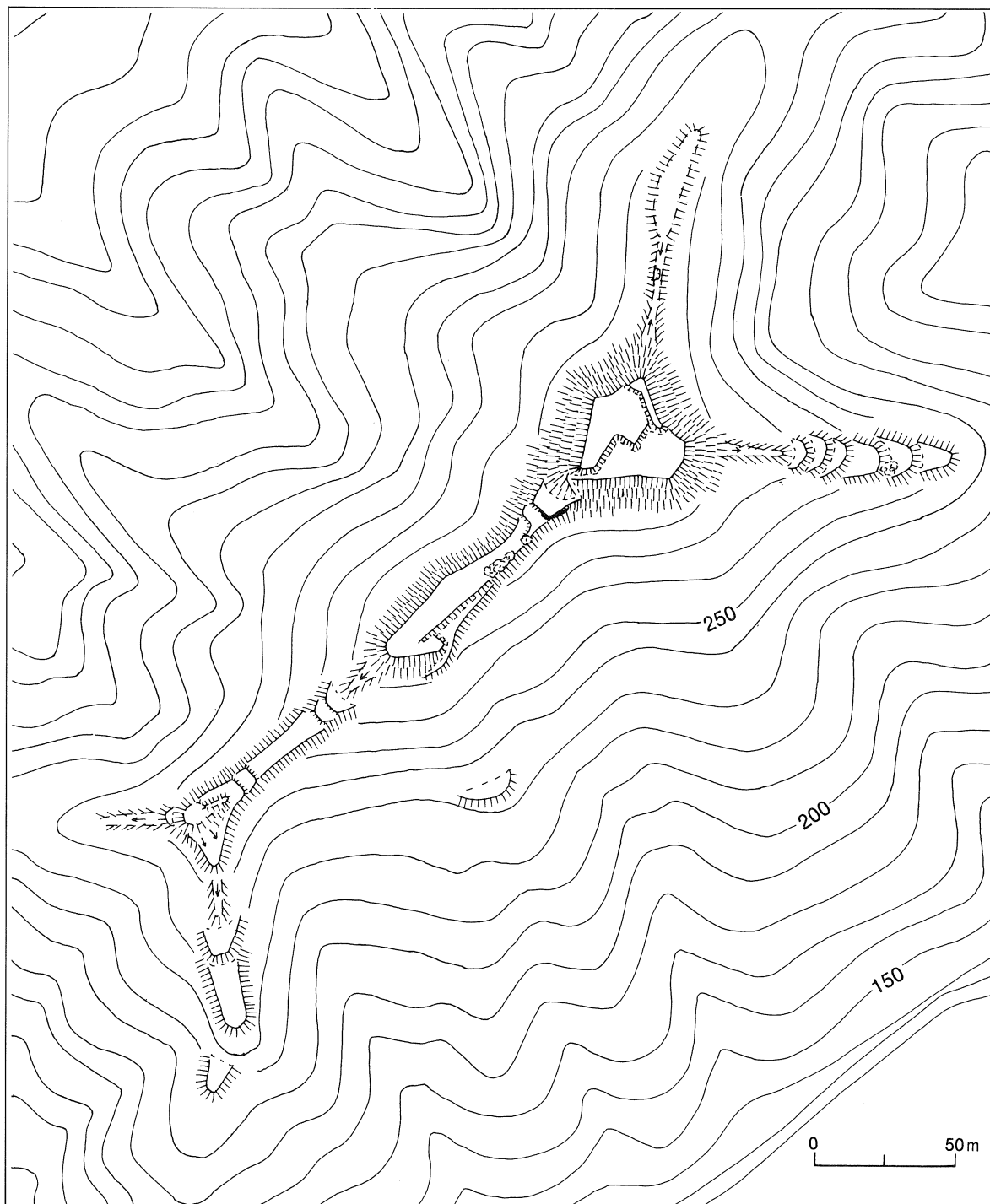
ソ2 諏訪城跡略測図

ソ6 三笠城跡 大原郡大東町大字南村 地図番号 15・16

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 302m

概 要

急峻な地形を利用して築かれており、堀切は確認できない。最高所が主郭と考えられ、尾根筋に対して土塁を築いている。普請は全体的に不十分だが、地形が急峻なため必要とされなかったものか。尾根伝いに八雲山を経て熊野城に連絡できる。毛利軍は八雲山に高津場番城を築いて両城の連絡を遮断し、個別撃破したと伝えられている。牛尾氏の居城として知られる。



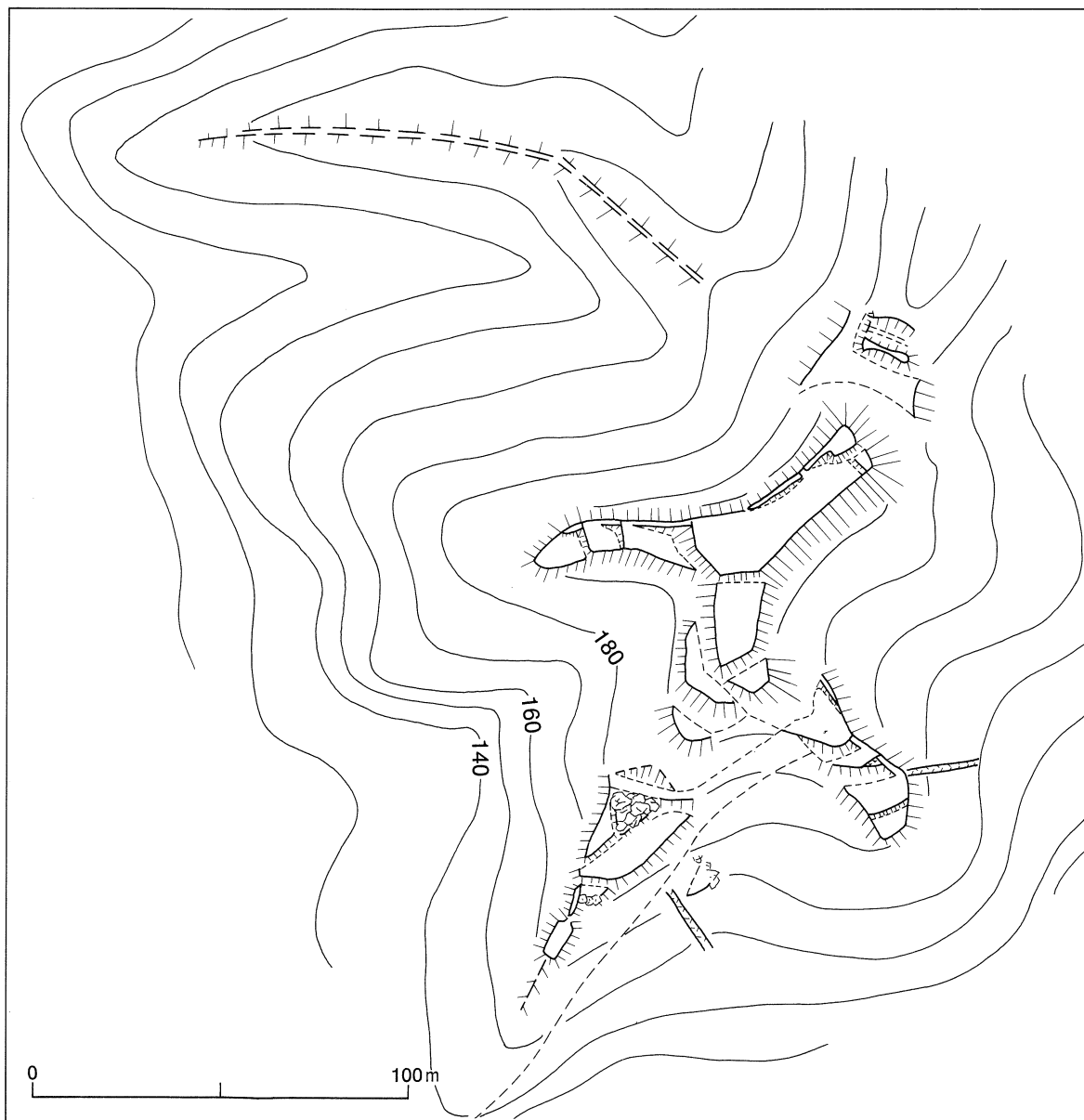
ソ6 三笠城跡略測図

ソ7 高平城跡 大原郡大東町大字南村 地図番号 15・16

現況 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 210m 比高 100m

### 概要

海潮本郷を眼下に見渡し、扇形に縄張りを広げている。縄張りの外縁を土塁で囲み、主郭に櫓台を築き、後背には大きく二重堀切を設けている。元亀年間、隣接の本家城である三笠城と尼子方、毛利方に分かれて合戦したとされる。牛尾氏の居城として知られる。



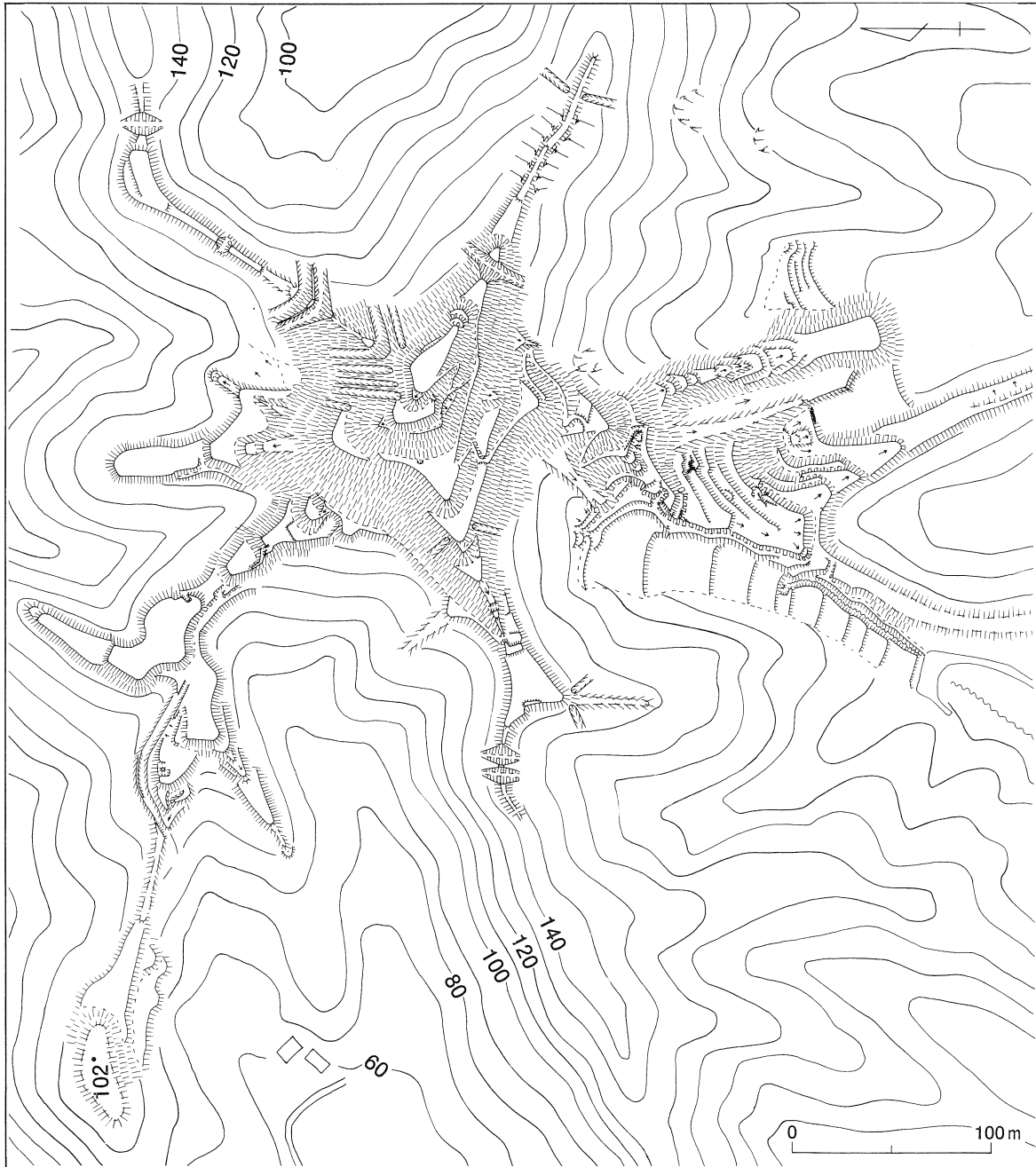
ソ7 高平城跡略測図

ソ12・タ8 高麻城跡 大原郡大東町大字仁和寺・加茂町大字大西 地図番号 22

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 195m

### 概要

急峻な地形を利用して全山を城塞としている。主郭は最高所と考えられ、北西尾根筋は二重堀と連続竪堀群によって遮断している。普請は全体的に行われており、特に虎口は未完成ながらも外柵形を呈している。土塁の上を連絡通路とする等、ルートが特徴的である。大西氏の居城と伝えられるが、毛利軍によって改修強化された可能性が高い。



ソ12・タ8 高麻城跡（主要部）略測図

ソ26 佐世城跡 大原郡大東町大字下佐世 地図番号 23

現状 公園他 保存状況 不良 立地 丘陵先端 標高 80m 比高 30m

概要

主郭は現在公園となっている1と考えられ普請は十分である。2は佐世城の方向に普請がおこなわれているが、反対側は殆ど行われていない。そのため佐世城を攻める陣城の可能性はある。尼子氏の重臣、佐世氏の居城と伝わる。



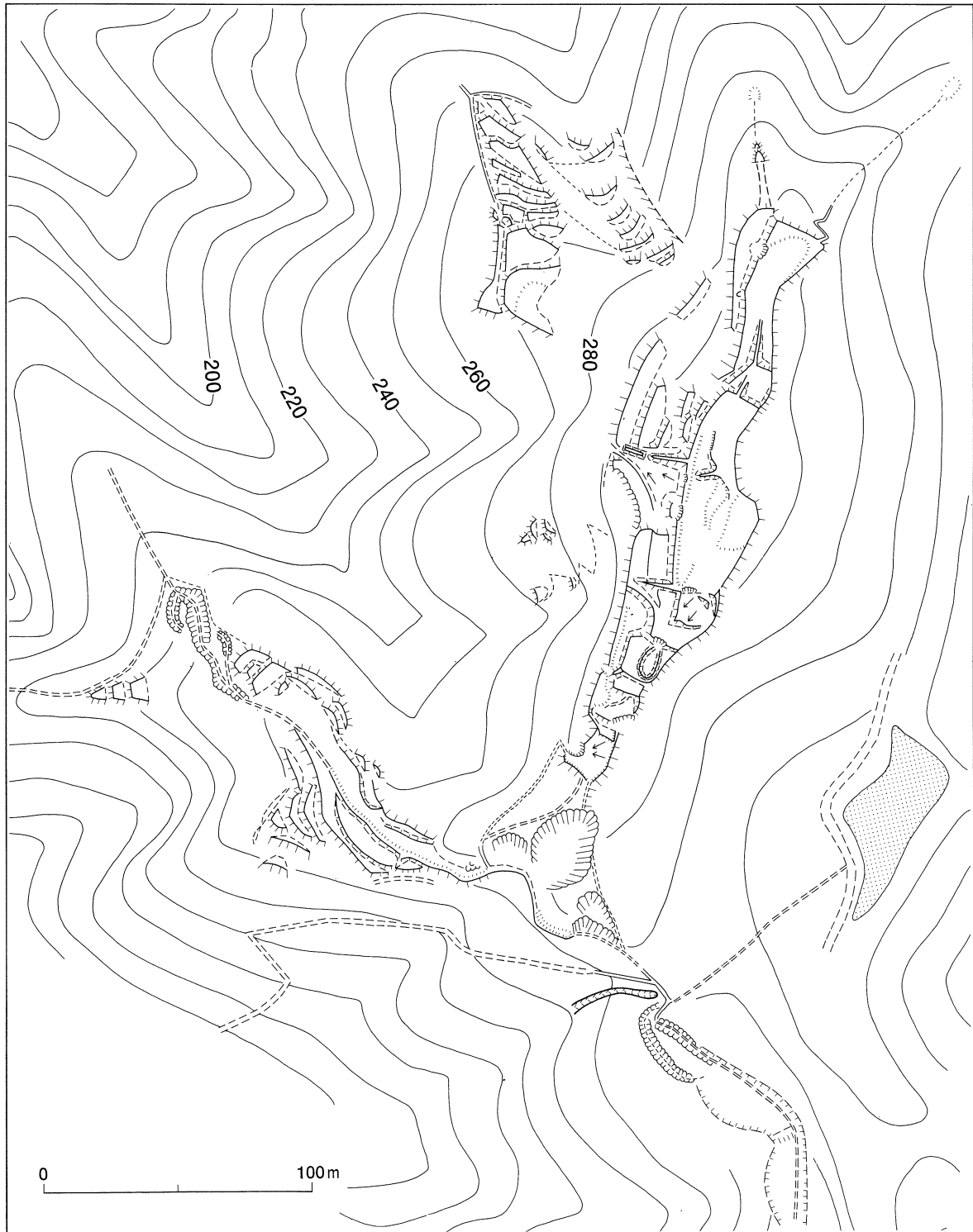
ソ26 佐世城跡略測図

ソ32 阿用城跡 大原郡大東町大字東阿用 地図番号 23

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 309m 比高 170m

### 概要

尾根上に3群からなり、郭は60余を数える。郭の削平は総じてあまいが主郭部は土塁で固め、虎口も充実している。自然の岩石を堀切に見立て、隣接する蓮花寺も城域としている。城将に桜井宗的が伝えられ、永正年中、尼子政久の大軍に攻められた。なお、政久はこの陣中で死したと軍記は伝える。



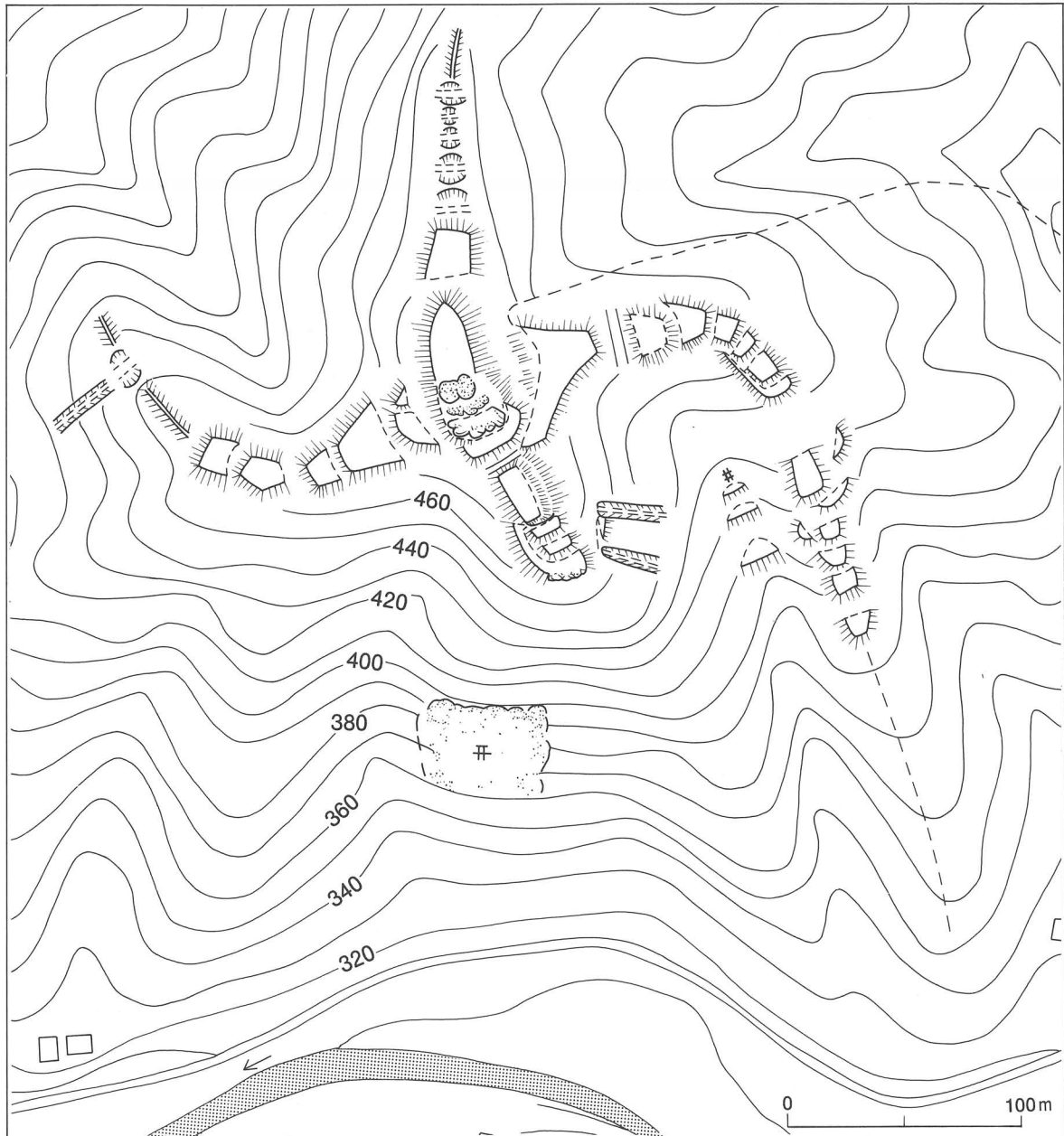
ソ32 阿用城跡略測図

ソ42 生山城跡 大原郡大東町大字上久野 地図番号 16

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 500m 比高 170m

概要

山頂の巨大な岩頭を頂点に四方の尾根上に縄張りしている。南方前面は麓までほとんど岩庇状である。深い堀切や豎堀を設け後背尾根続きは五重の堀切で遮断している。麓は久野川が迫り、広瀬への交通路が西へ向う。またこれに面して表、屋敷、馬場などの地名が伝わっている。



ソ42 生山城跡略測図

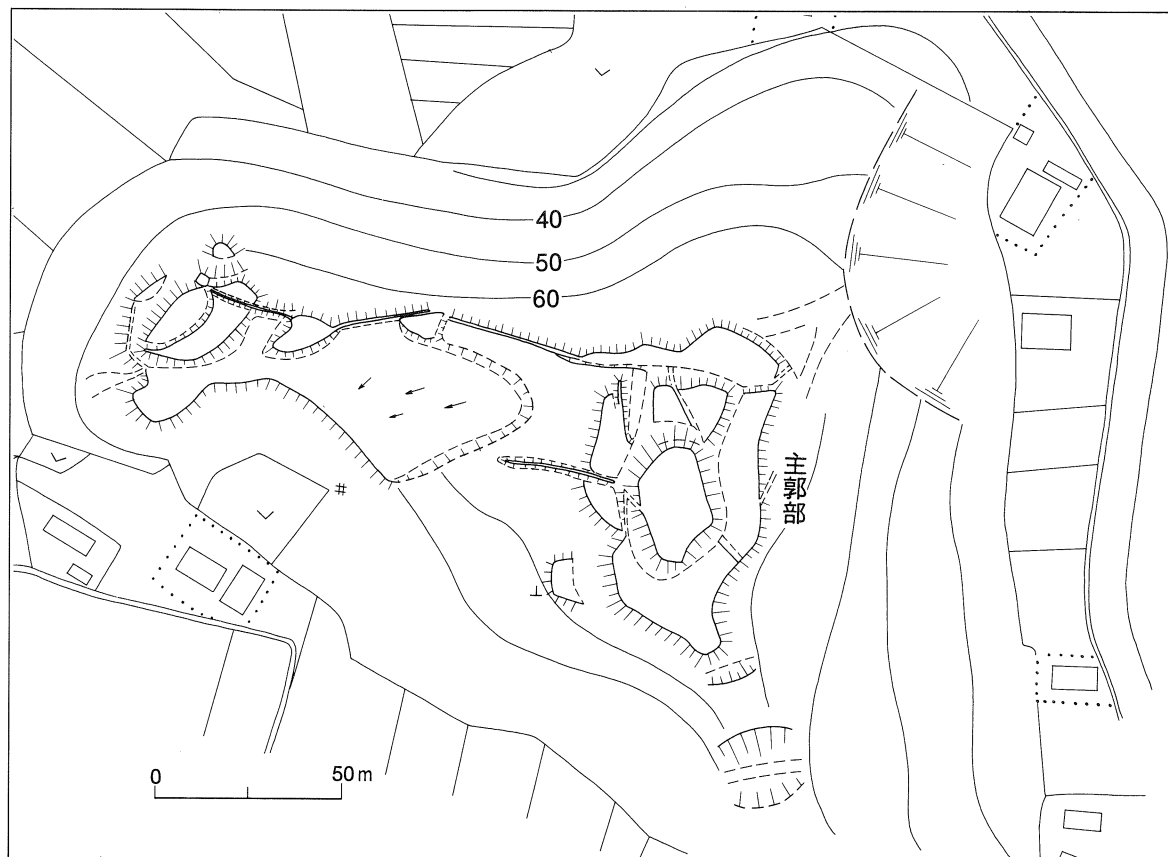


夕20 近松城跡 大原郡加茂町大字近松 地図番号 23

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵先端 標高 80m 比高 30m

概要

赤川の流れに突出する低丘陵の先端に位置する。南後方の尾根続きを大きな堀切で切断し、奥まった高所を主郭としている。東側の郭群は近世以降の土砂採掘で消滅した。郭はおおよそ円形に配し、西側の郭群との間に抱かれた緩斜面の空間は土塁で囲まれている。立原氏の居城と伝わる。大西城と呼ぶのはこの城か。



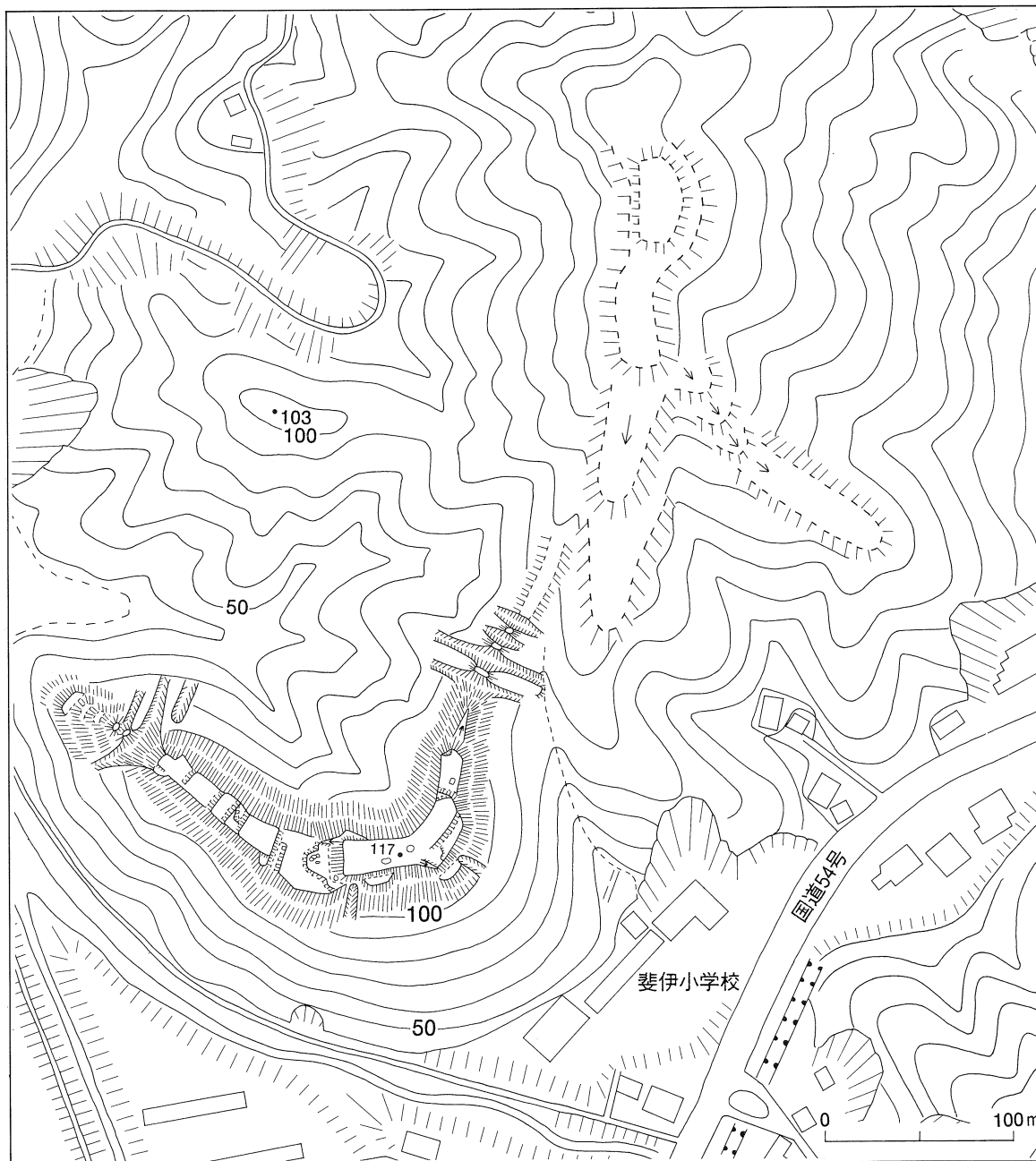
夕20 近松城跡略測図

チ1 城名樋山城跡 大原郡木次町大字里方 地図番号 23

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 171(120m) 比高 130(80m)

概 要

地形図に妙見山と記される山の全体に広がっていると思われる古い城と、南西部の丘陵端を四重の堀切で区切った新しい城がある。『出雲国風土記』にある大穴持命の城(き)は、里程・方角から、この妙見山が有力候補地だが、今後の研究のことを配慮するなら、少なくとも古い方の城に対する保存の配慮が必要である。



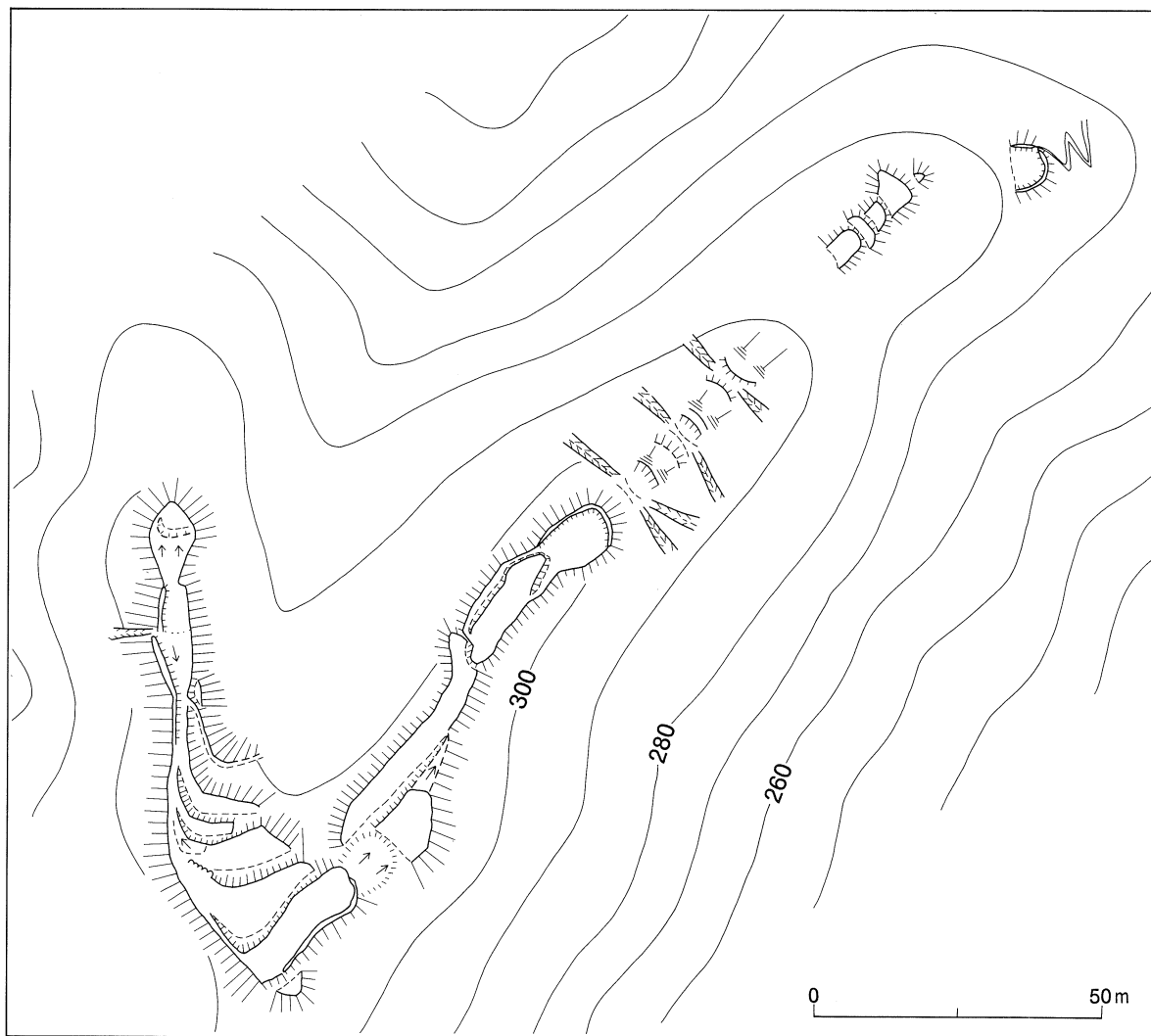
チ1 城名樋山城跡略測図

チ9 王守山城跡 大原郡大字寺領 地図番号 23

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 311m 比高 170m

概 要

久野川沿いに仁多への交通路を見下ろす丘陵上に位置する。主要部には土塁を巡らせ、突出する尾根の先端までの間には三重堀切、豎堀を築いている。山腹は急峻な崖面で、立地を活かした要害である。真野氏の居城と伝わる。寺領城とはこれか。



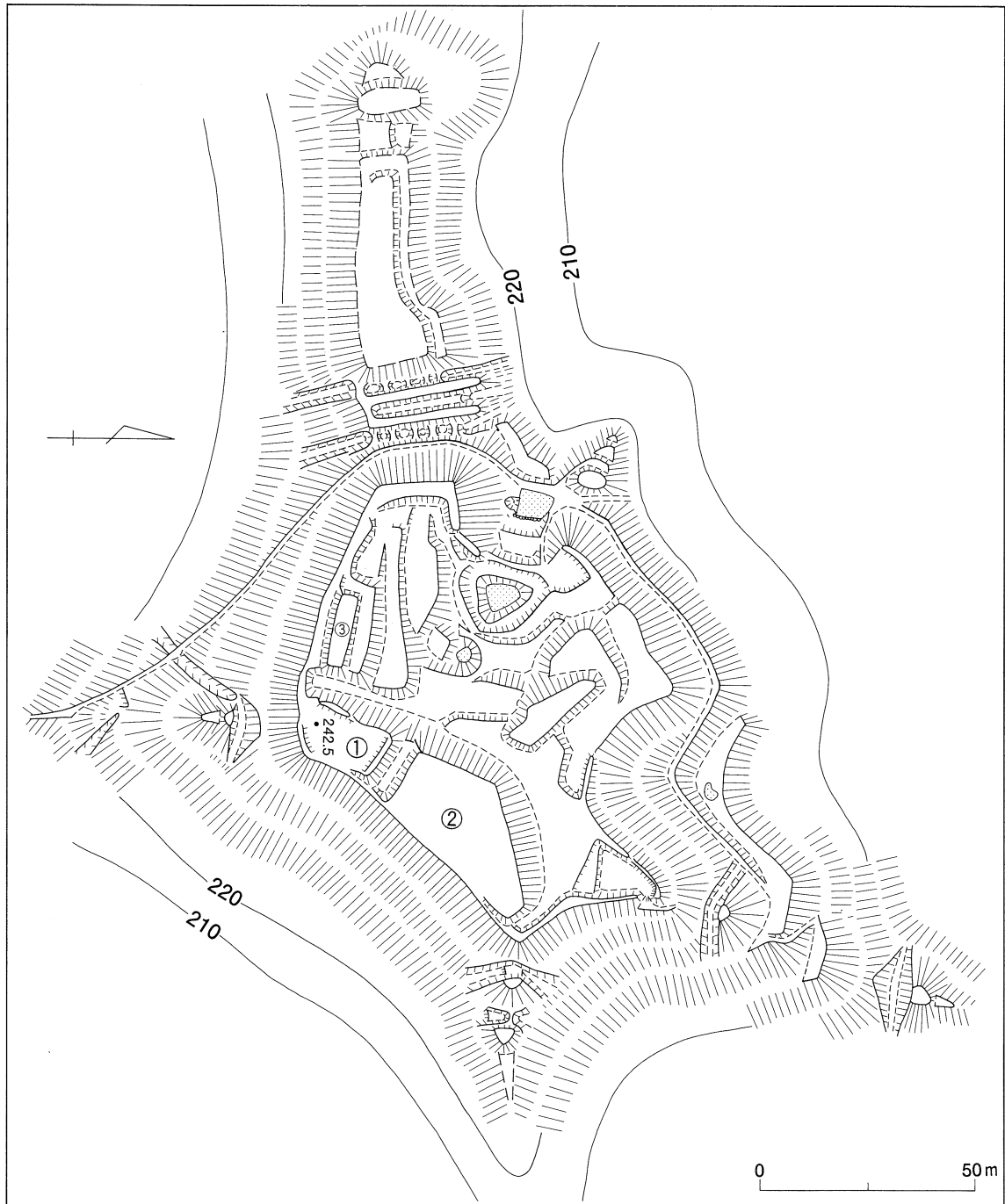
チ9 王守山城跡略測図

ツ10 三刀屋じゃ山城跡 飯石郡三刀屋町大字古城 地図番号 29

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 242m

概要

大字古城地区のほぼ中央に位置する通称「じゃ山」山頂に築かれた城郭である。急峻な地形にもかかわらず普請は十分である。主郭は最高所の1郭と考えられ、尾根筋に堀切を築いている。堀切の築き方には少なくとも三種類が見られる。一つは城域の南端、東端、北東端に築かれているもので、いずれも二重堀切となっている。次に1郭と2郭間の堀、1郭と3郭間の堀、そして2郭北東の堀で、いずれも一部（それぞれ城外側）を掘り残しているのが特徴である。これは通路として利用したことも考えられるが、主郭南側を中心とした土塁と郭による防御ラインを構成するためのものと見るべき



ツ10 三刀屋じゃ山城跡略測図

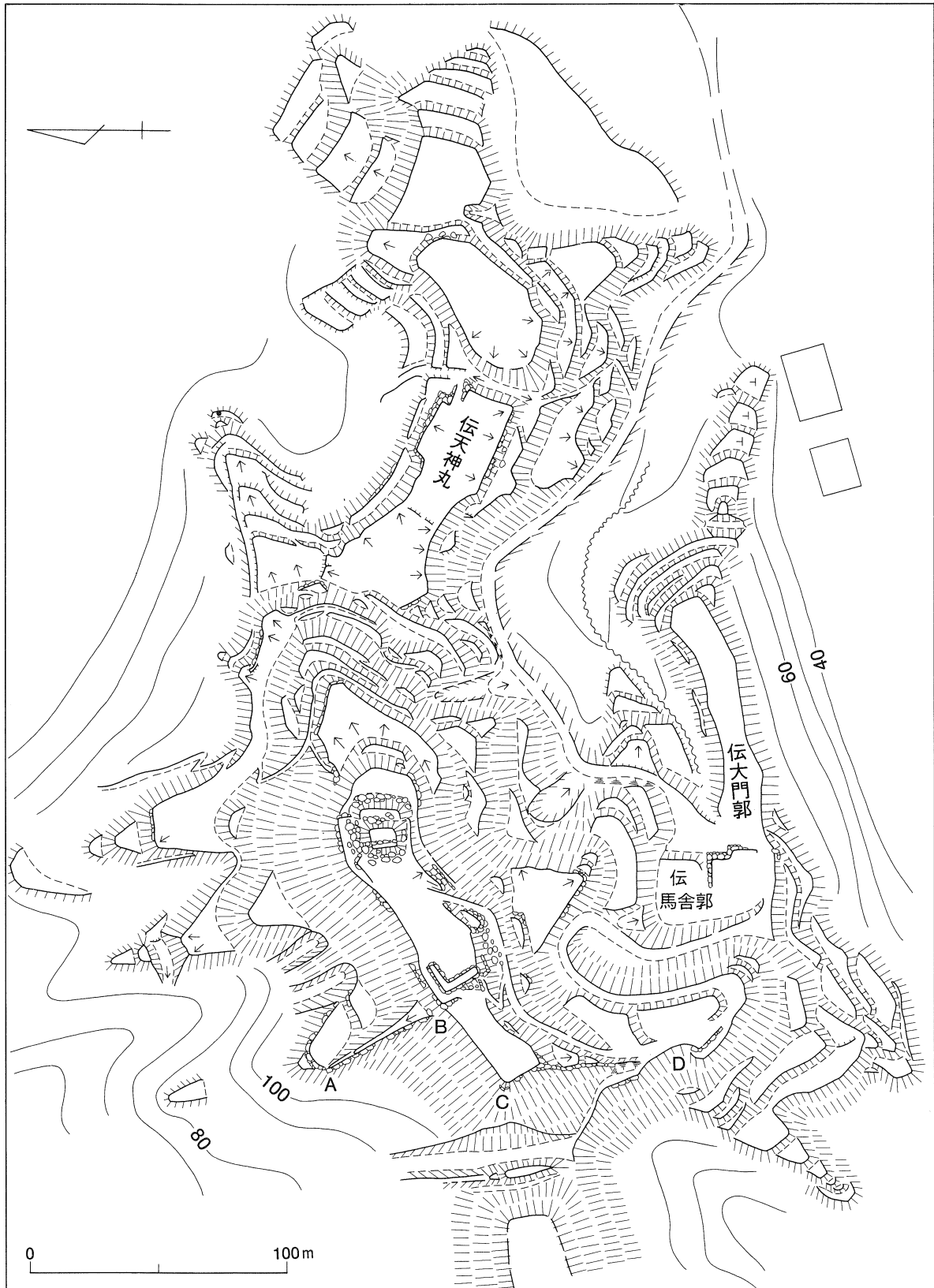
であろう。最後は西側に築かれた二重堀切である。堀底からは試掘調査の結果、1×1.5mの穴が4穴ずつ確認された。これは障子堀と見られる遺構で、出雲地区では横田町の藤ヶ瀬城後方の城塞群等、数例しか確認できていない。この堀切より西側は普請が不十分である。主郭北側の谷には池があり、池の北側には柵形虎口が築かれている。柵形虎口は2郭の西にも築かれている。三刀屋（諏訪部）氏の居城とされるが、独自の防御技術、規模等から考えて、毛利軍によって改修強化された可能性がある。

ツ14 三刀屋尾崎城跡 飯石郡三刀屋町大字古城 地図番号 23・29

現状 公園他 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 135m 比高 90m

概要

出雲国のほぼ中央に位置し、街道の要衝に築かれた城郭である。三刀屋氏は三刀屋じゃ山城からこ



ツ14 三刀屋尾崎城跡略測図

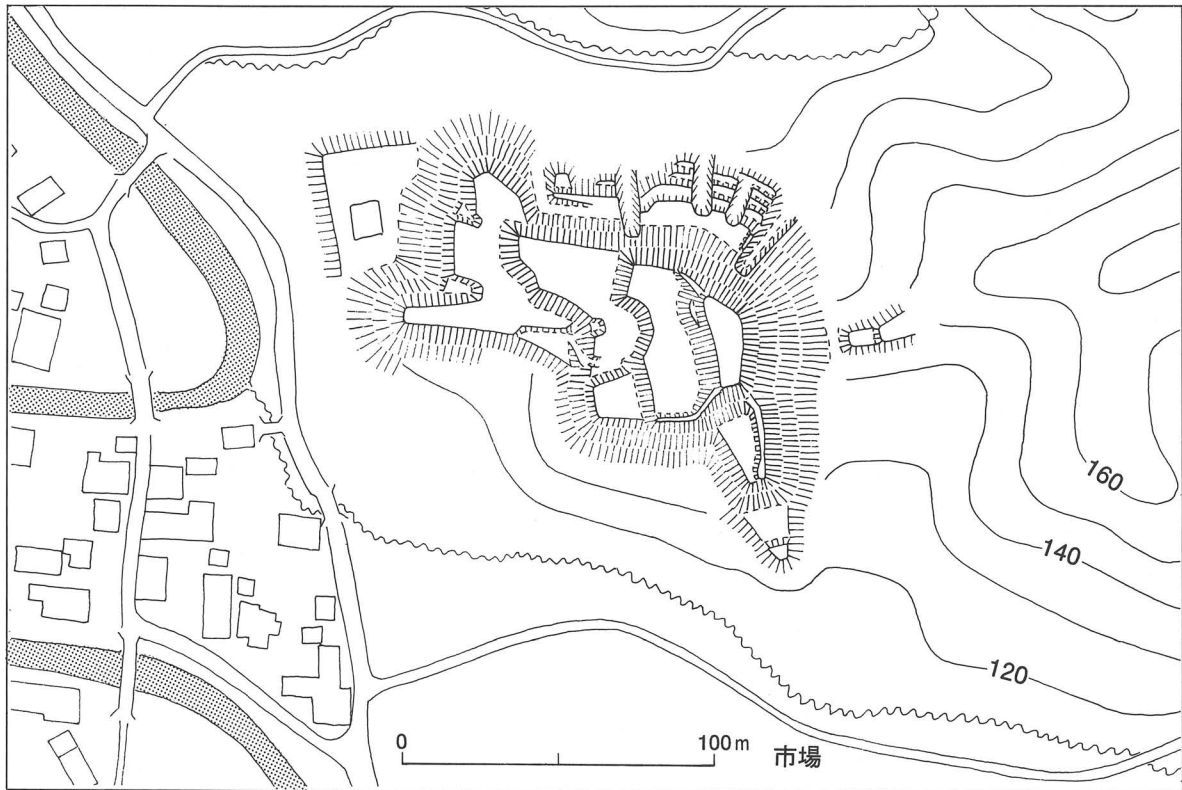
の地に居城を移したと伝えられているが、現在残る遺構は近世初頭の遺構である。主郭は最高所と考えられるが、「破城」と近年の公園化にともなう車道の設置によって破壊されている。主郭北東端には天守台が築かれていた。主郭は石土居によって二段に分けられている。主郭西端には深い堀切が築かれており、尾根筋に対してA－B－C－Dの防御ラインが築かれている。普請は、主郭、主郭南の「伝馬舎郭」、「大門郭」周辺は十分におこなわれているが、「伝天神丸」周辺は不十分である。水の手は「殿井手水路」と呼ぶ水路が伝わる。最終改修者は堀尾氏と考えられる。

ツ30 多久和城跡 飯石郡三刀屋町大字多久和 地図番号 23

現状 山林、社寺境内 保存状況 やや良 立地 丘陵先端 標高 140m 比高 60m

概要

最高所は櫓台と考えられ、主郭は西側に一段下がった郭と見られる。尾根筋は堀切で遮断し、尾根筋に対して土塁による防御ラインが確認できる。主郭の北方は緩斜面のため連続竪堀群によって強化している。市場の地名が残る。



ツ30 多久和城跡略測図

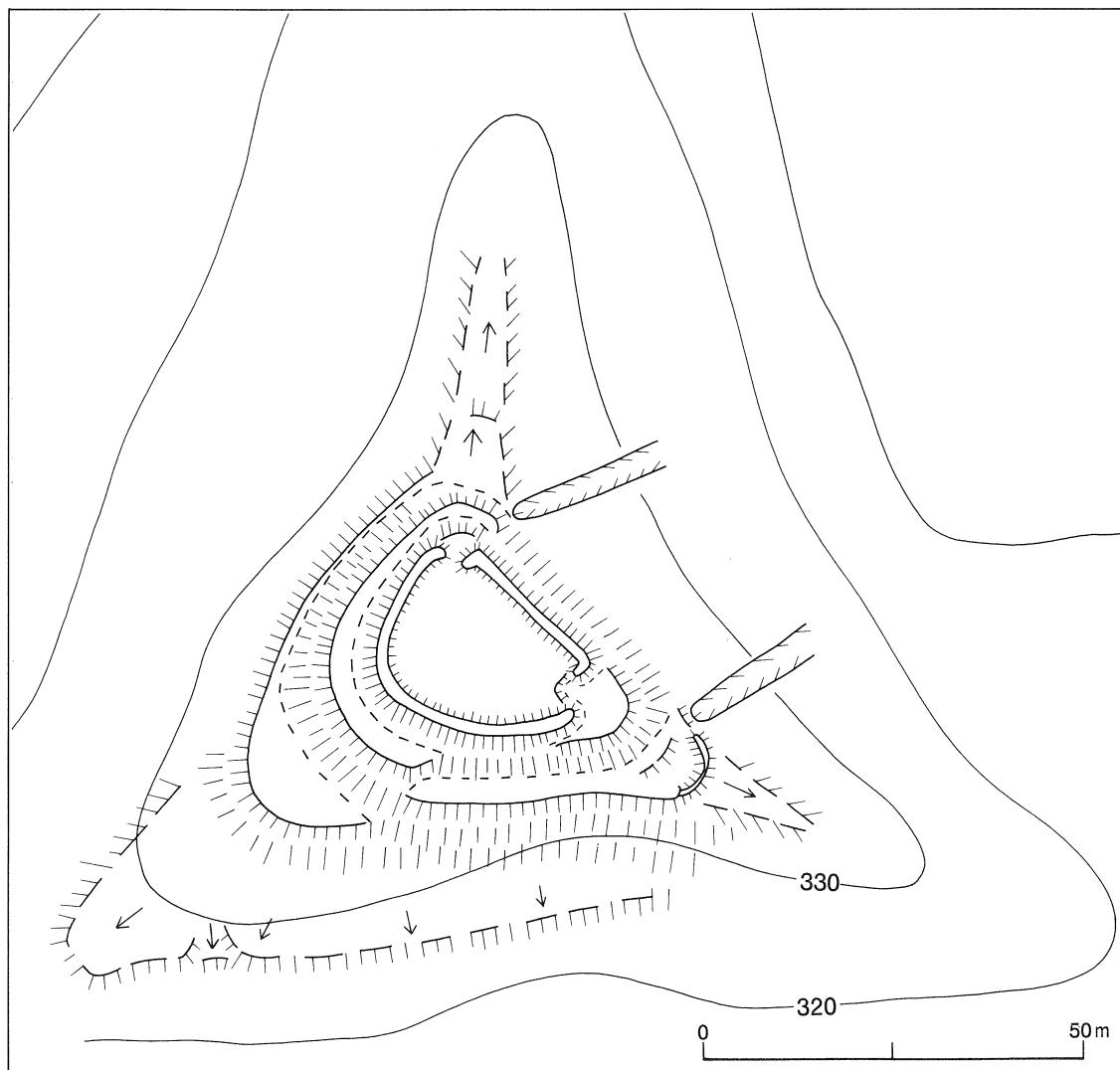


ツ41 茶臼山城跡 飯石郡三刀屋町大字根波別所 地図番号 29

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 340m 比高 40m

概要

北は出雲市野尻町、北西に出雲市所原町、南西に佐田町名梅、南東へ三刀屋町乙多田へとそれぞれの道を通じる交通の要衝に所在する。主郭は最高所と考えられ、周囲に土塁を築き、北端と西南に虎口を設けている。駐屯空間と見られる緩斜面を持つため、ベースキャンプとして使用されたものと考えられる。



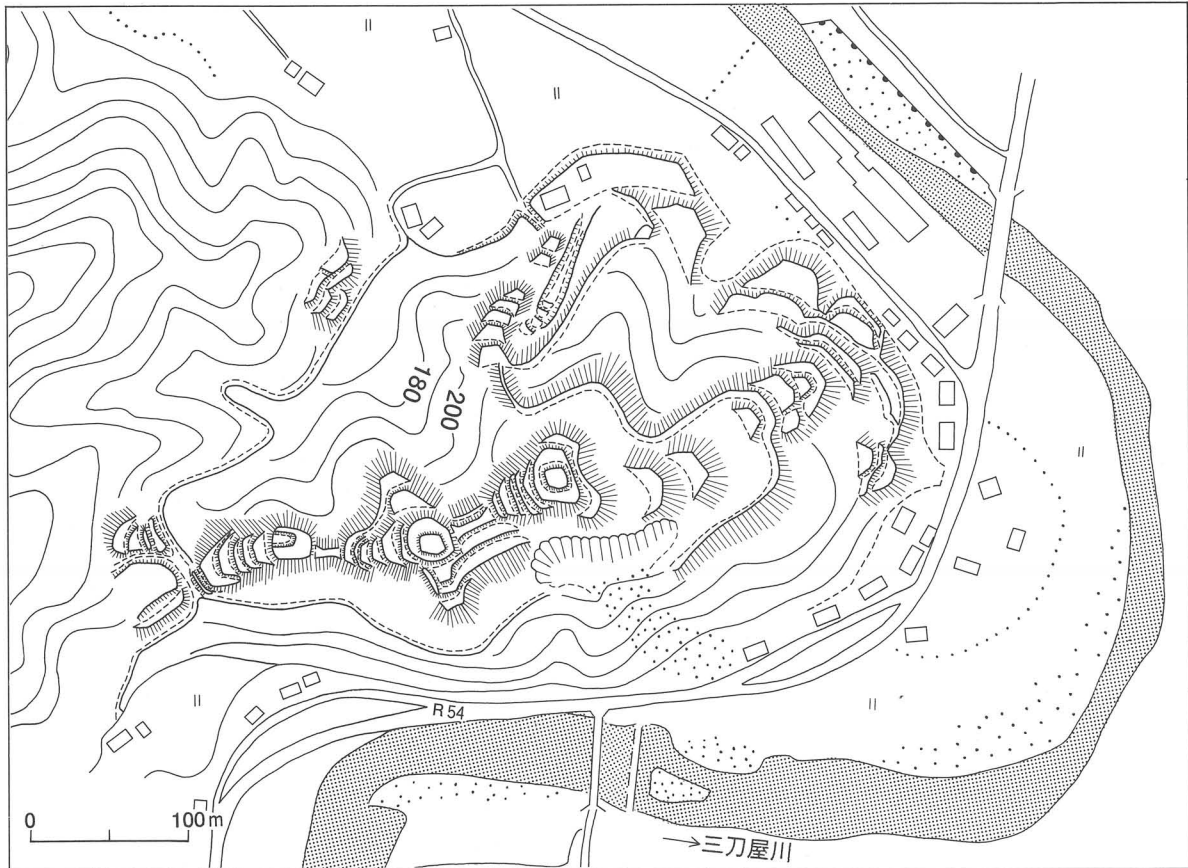
ツ41 茶臼山城跡略測図

テ4 堀田城跡 飯石郡掛合町大字多根 地図番号 30

現状 山林、畑他 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 242m 比高 90m

概要

史料によると、大田越中守の築城ということになっているが、時期等詳細は不明である。選地の状況から判断すれば、多根郷の拠点の城である。丘陵最頂部を主郭として稜線上に階段状の郭と腰郭を配置している。続き尾根の鞍部は堀切で遮断し、この堀切から等高線に沿って山腹を一周する帯郭を設け、丘陵先端部はこの帯郭から山裾まで緻密な郭群が見られる。



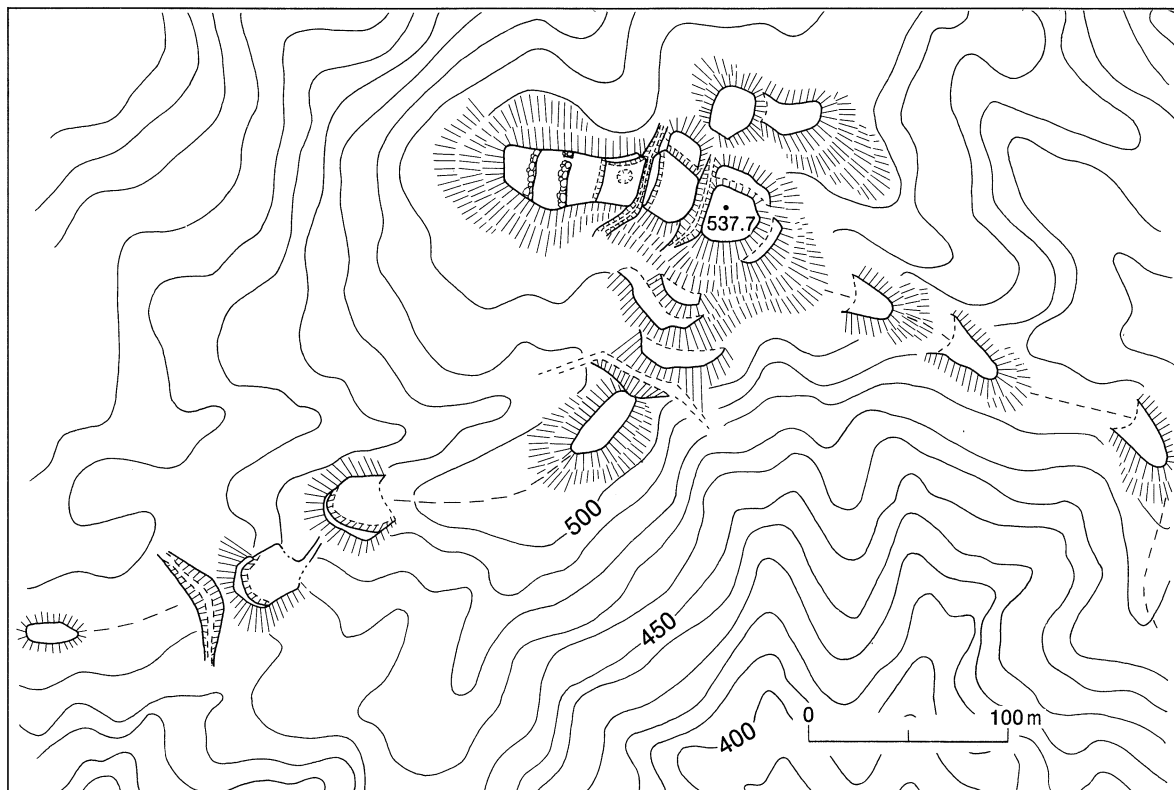
テ4 堀田城跡略測図

テ5・ヒ1 陣ヶ丸城跡 飯石郡掛合町大字松笠・簸川郡佐田町大字朝原 地図番号 30

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 537m 比高 180m

### 概要

町村の境界線となる稜線上にあって西側から続く尾根は二個所の堀切と土塁のある郭で侵入を防いでいる。主郭を最高所として階段状の広い郭群を設け、郭群の間、二個所を堀切りで遮断して主郭を防御し、主郭の周りに腰郭を設けている。各郭間の段差のある崖には大きな自然石を積んで土止めをしているのが特徴である。南側の山裾の集落の中には「土居」の地名が残る。

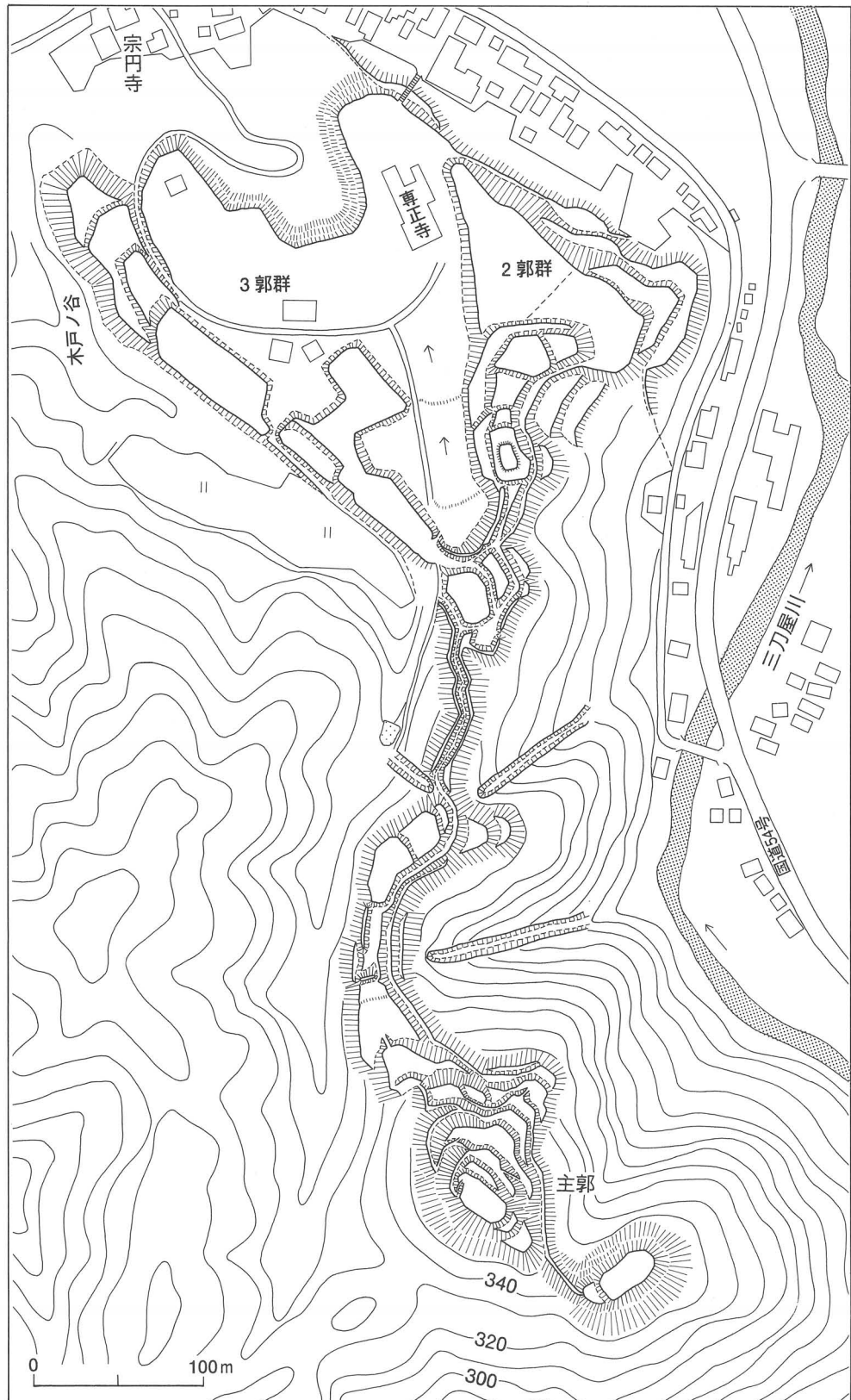


テ5・ヒ1 陣ヶ丸城跡略測図

テ6 日倉山城跡 飯石郡掛合町大字掛合 地図番号 30

現状 山林、畑、社寺境内 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 376m 比高 150m  
概要

15世紀末に備後多賀山氏が飯石郡南部に進出し、この城を拠点にしたと伝えられている。天文十一年(1542)尼子氏によって落城、永禄五年(1562)に再興。城の構造は山頂を主郭とし、稜線上に郭群を配置しながら麓の東側台地先端が2郭群となり、ここには櫓台跡も残る。3郭群は西側台地となるが館跡、居住区が配置された位置と推定される。この地点に至る通路は「木戸ノ谷」と呼ばれている狭い切り道の通過させる。



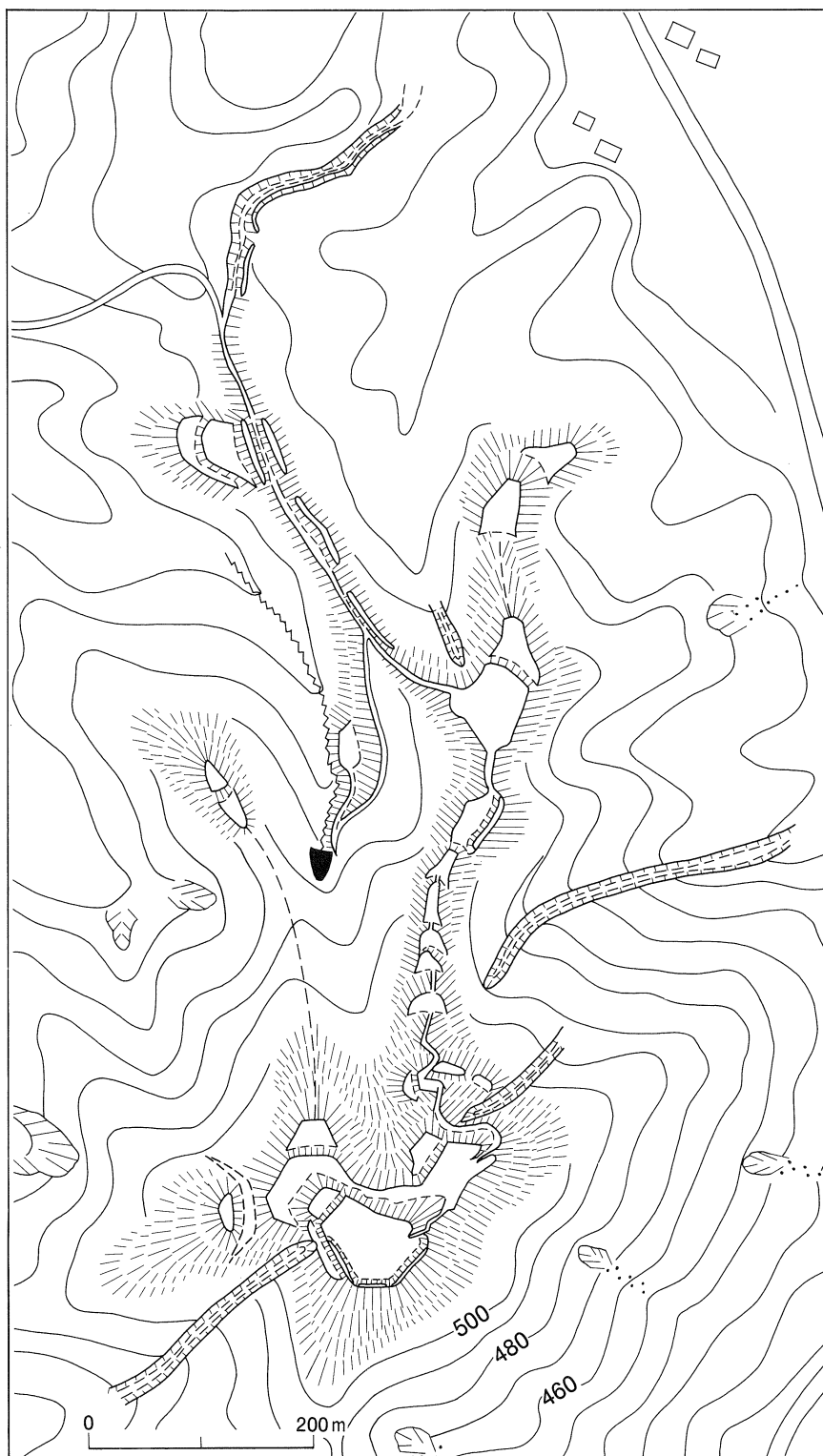
テ6 日倉山城跡略測図

テ8 熊野城跡 飯石郡掛合町大字波多 地図番号 38

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 538m 比高 130m

概要

この城については史料はないが山頂を主郭として高低差を持つ3段の郭群を築き、稜線上に郭群を配置しながら下降する。その通路は土塁で囲み、郭群の間に水源を確保するなど、構造と選地は大字掛合の日倉山城跡に共通する。



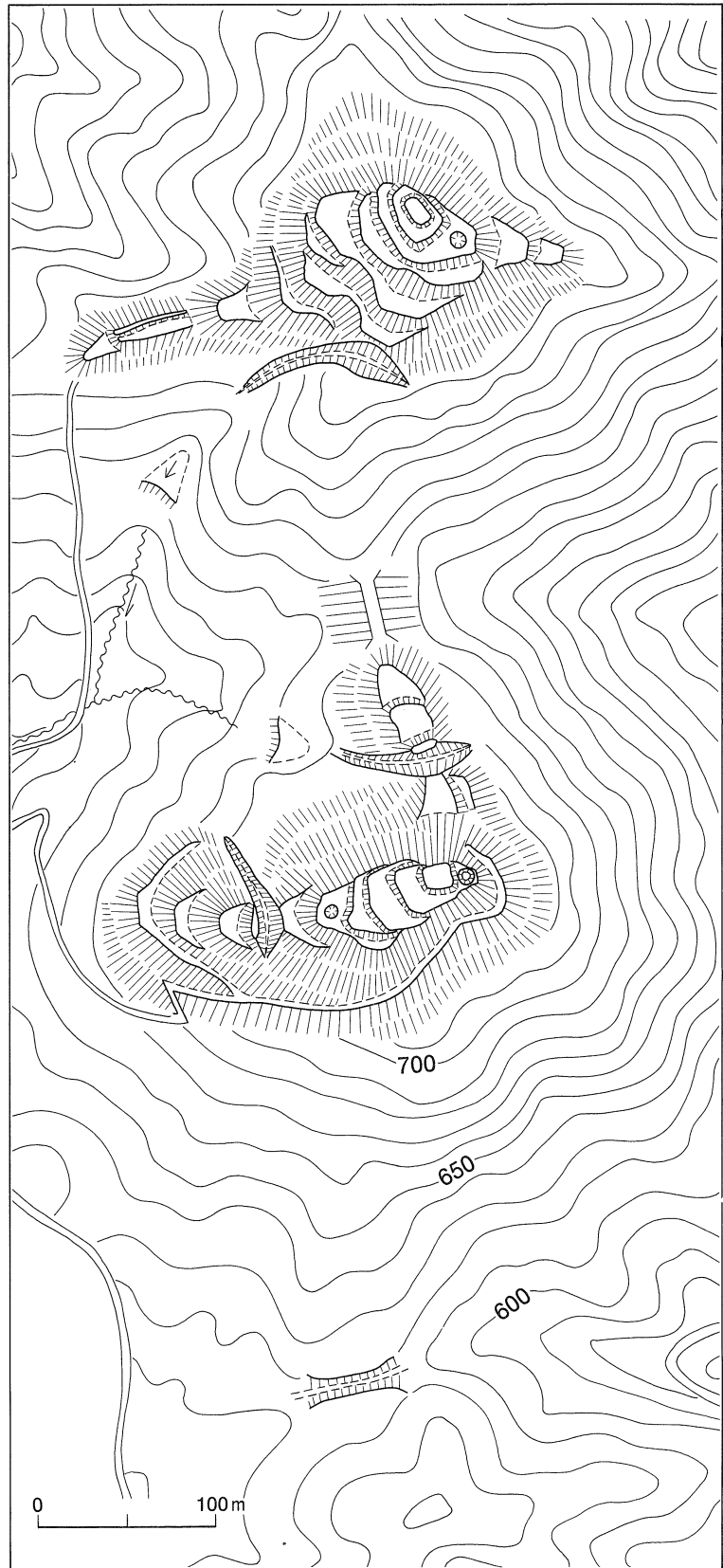
テ8 熊野城跡略測図

ト1・ニ5 要害山城跡 飯石郡頼原町大字都加賀・飯石郡吉田村大字民谷 地図番号 31

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 807m 比高 200m

概要

深山の高所にあり、尾根の稜線は市町村の境界となっている。構造は、2つの山頂部に独立した広い階段状の郭を設け、両者は堀切で遮断している。しかし、鞍部に陸橋を設けていることから関連する一つの城郭と見られる。南側山裾の「かす坂峠」は元亀元年(1570)1月、尼子の復興戦の際に毛利輝元の軍が通過した道と伝えられる。



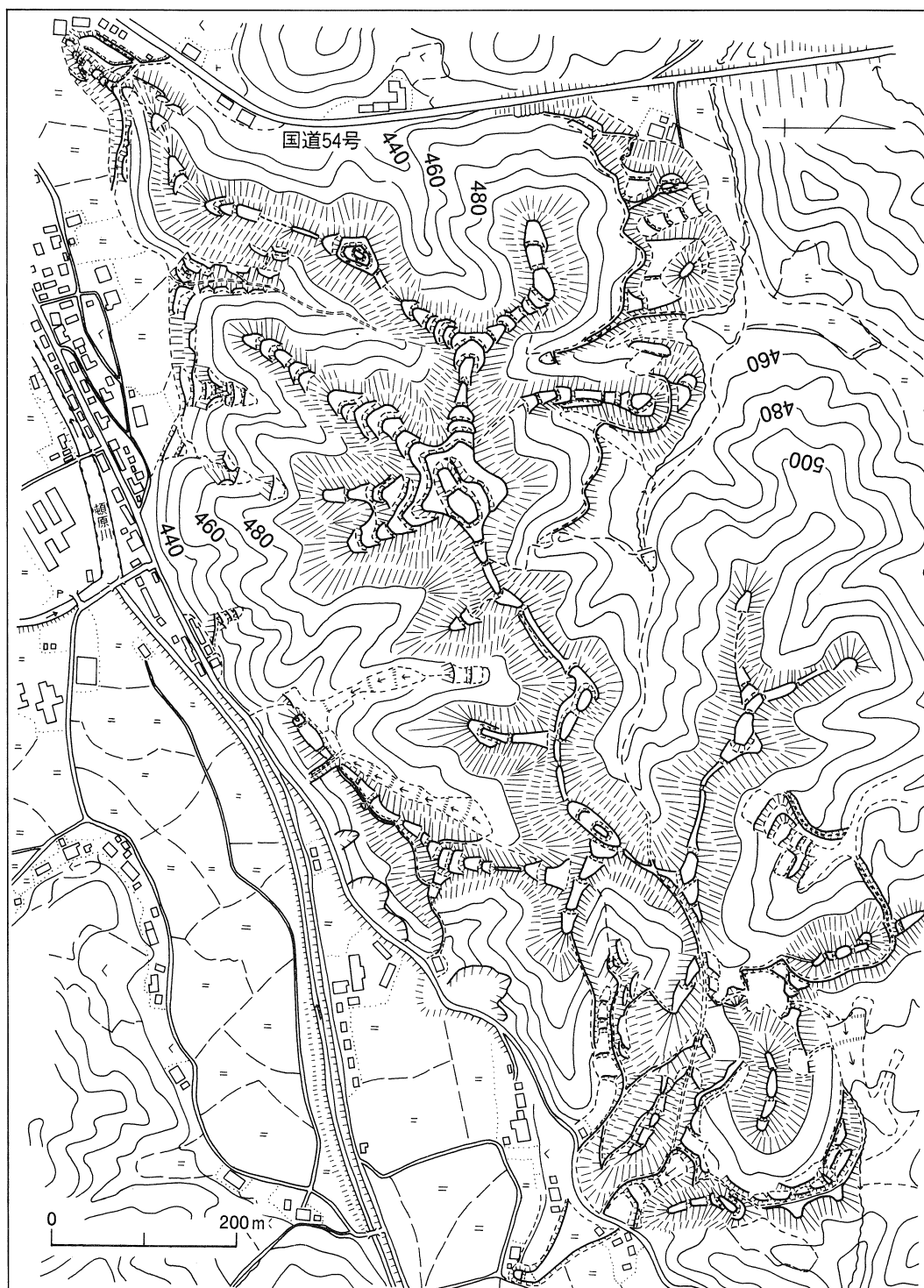
ト1・ニ5 要害山城跡略測図

ト3 由来城跡 飯石郡頓原町大字頓原村 地図番号 31・32

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 543m 比高 90m

概要

この城についての明確な記録はないが、城郭の規模は比較的大きなものである。全長1500mの稜線と丘陵頂部、支尾根に梯郭形の郭群を設けているが、大別して2つの郭群に分けられる。各尾根ごとに先端部に緻密な郭群を配置して南側頓原川沿いの沖積地（町並み）と、北側の東西に通じる旧街道を見下ろしている。



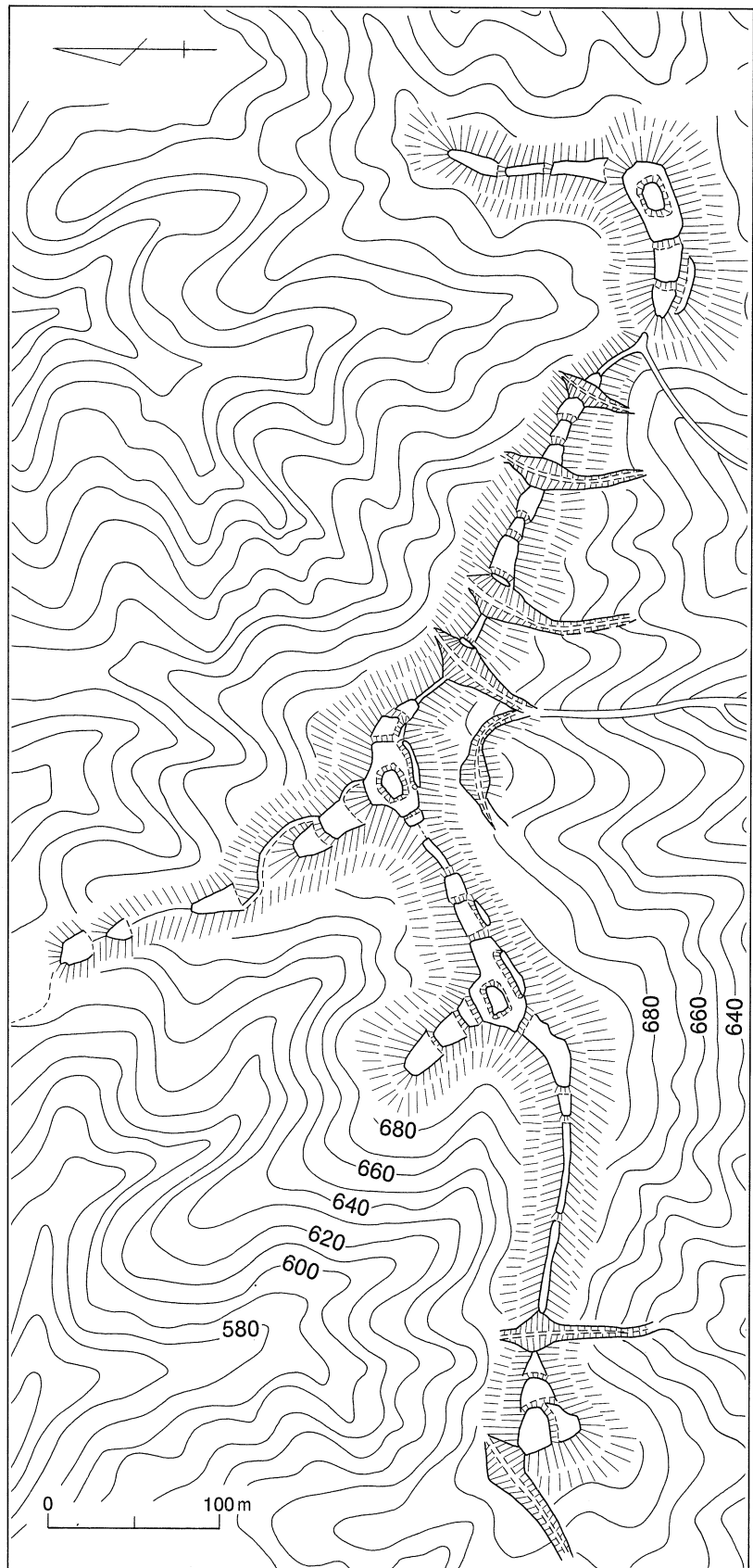
ト3 由来城跡略測図

ト9 矢櫃城跡 飯石郡頓原町大字頓原村 地図番号 32

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 724m 比高 120m

概要

深山で高所に構築されていることからして、広域的な戦闘に対応するための選地がうかがえる。地元の伝承に来島蔵人三郎入道がこの城で負傷したことを伝えている。この人物は南北朝期の三刀屋文書に登場することからこの時期の城とも考えられる。山麓に4箇所製の鉄遺跡が見られる。



ト9 矢櫃城跡略測図



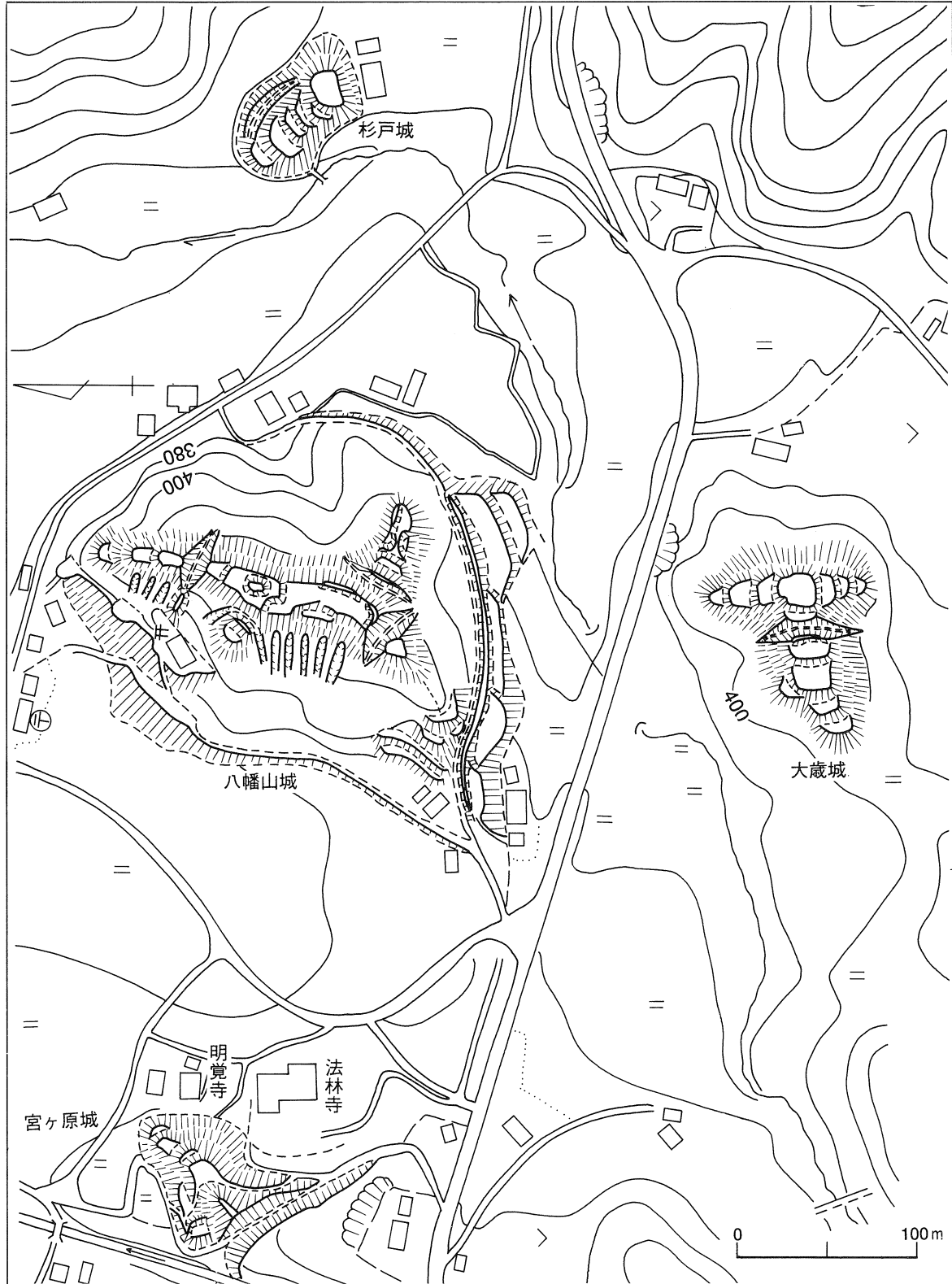
# ト11 角井城砦跡群（八幡城・杉戸城・大歳城・宮ヶ原城）

飯石郡頓原町大字角井 地図番号 38

現状 山林、社寺境内 保存状況 良 立地 独立丘陵 標高 431m 比高 60m

## 概要

八幡城は、稜線端部3箇所を堀切で遮断し、西側の緩斜面には9条の連続縦堀によって直進、横移



ト11 角井城砦跡群略測図

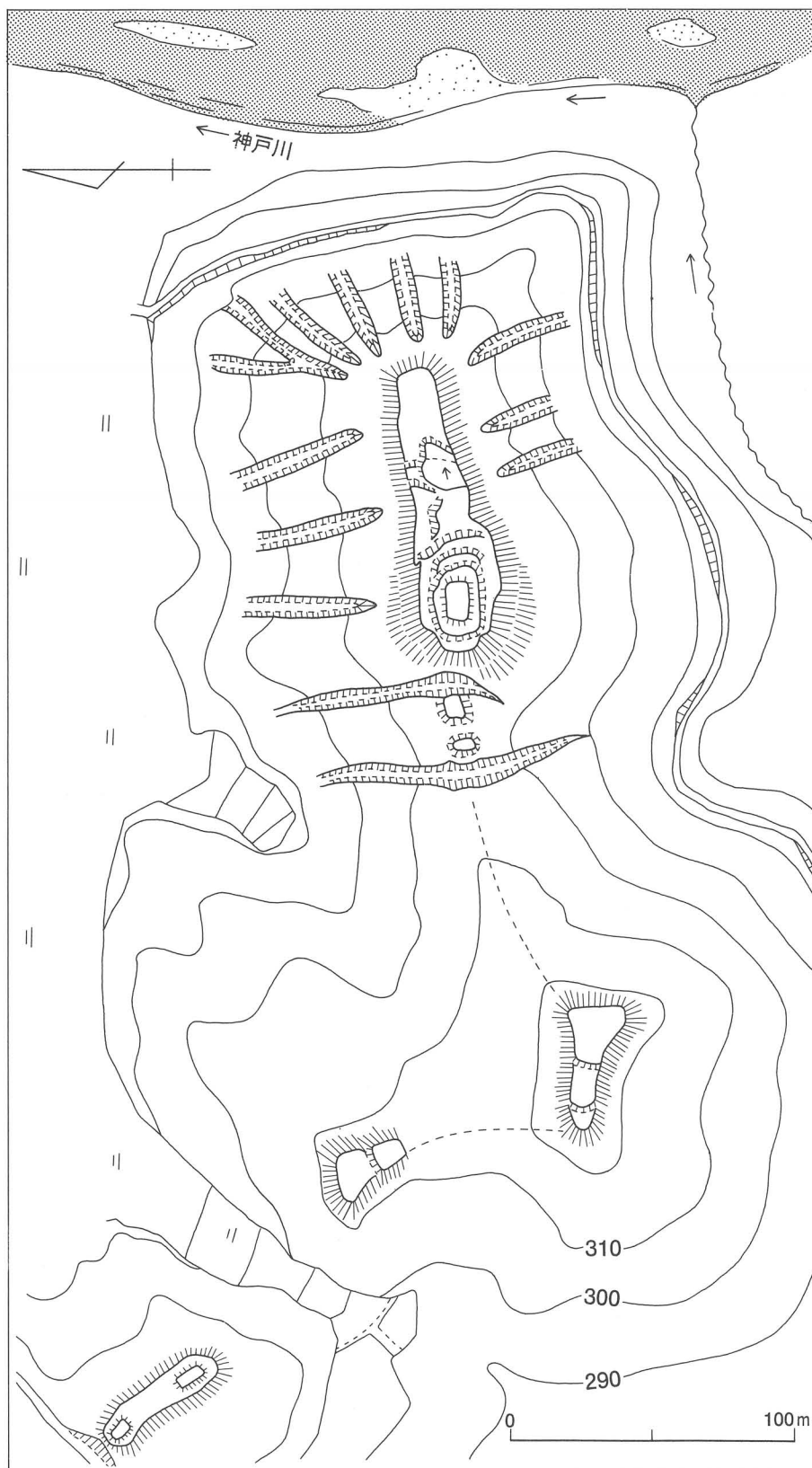
動を封じている。北西側、山腹の八幡宮社殿一帯は腰郭跡地を再利用したものであろうか。周囲の丘陵にも城郭群を配置して孤立を防いだ意図が伺え、小さいながら纏まりのある城砦群である。

ト12 森脇山城跡 飯石郡頓原町大字志津見 地図番号 38

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵先端 標高 325m 比高 50m

概要

二つの丘陵の西側を大きな堀切で遮断して独立させているが、西側の丘陵には普請の形跡は見られない。東側の丘陵に至る尾根の鞍部を二重堀切と土塁で遮断し、東側の丘陵を独立させている。主郭には櫓台を設け、東側には広く削平した郭群が続き神戸川対岸の沖積地を見通している。山腹には不規則な竪堀群が認められる。

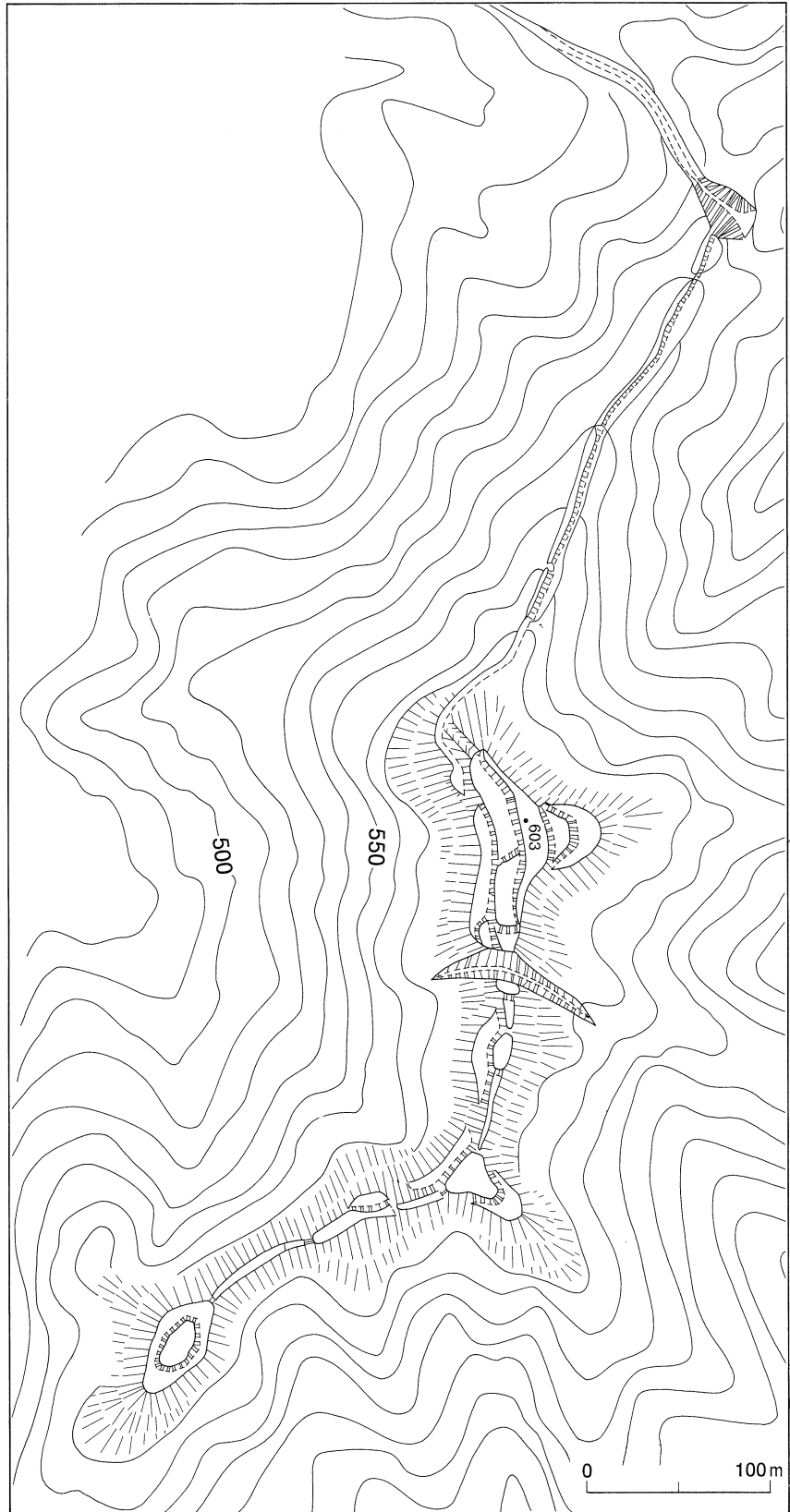


ト15 勘ノ浦城跡 飯石郡頓原町大字八神 地図番号 38

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 603m 比高 103m

概要

出雲、石見の国境線上にあり、稜線上に細長く続く境目の城である。麓から登る通路は西側を土塁で遮蔽し、稜線上の丘陵部に郭群を設け、それぞれの西側下段に腰郭を配置している。石見側を意識した縄張りで見られる。最高所を主郭として、稜線南側からの進路を遮断している。



ト15 勘ノ浦城跡略測図

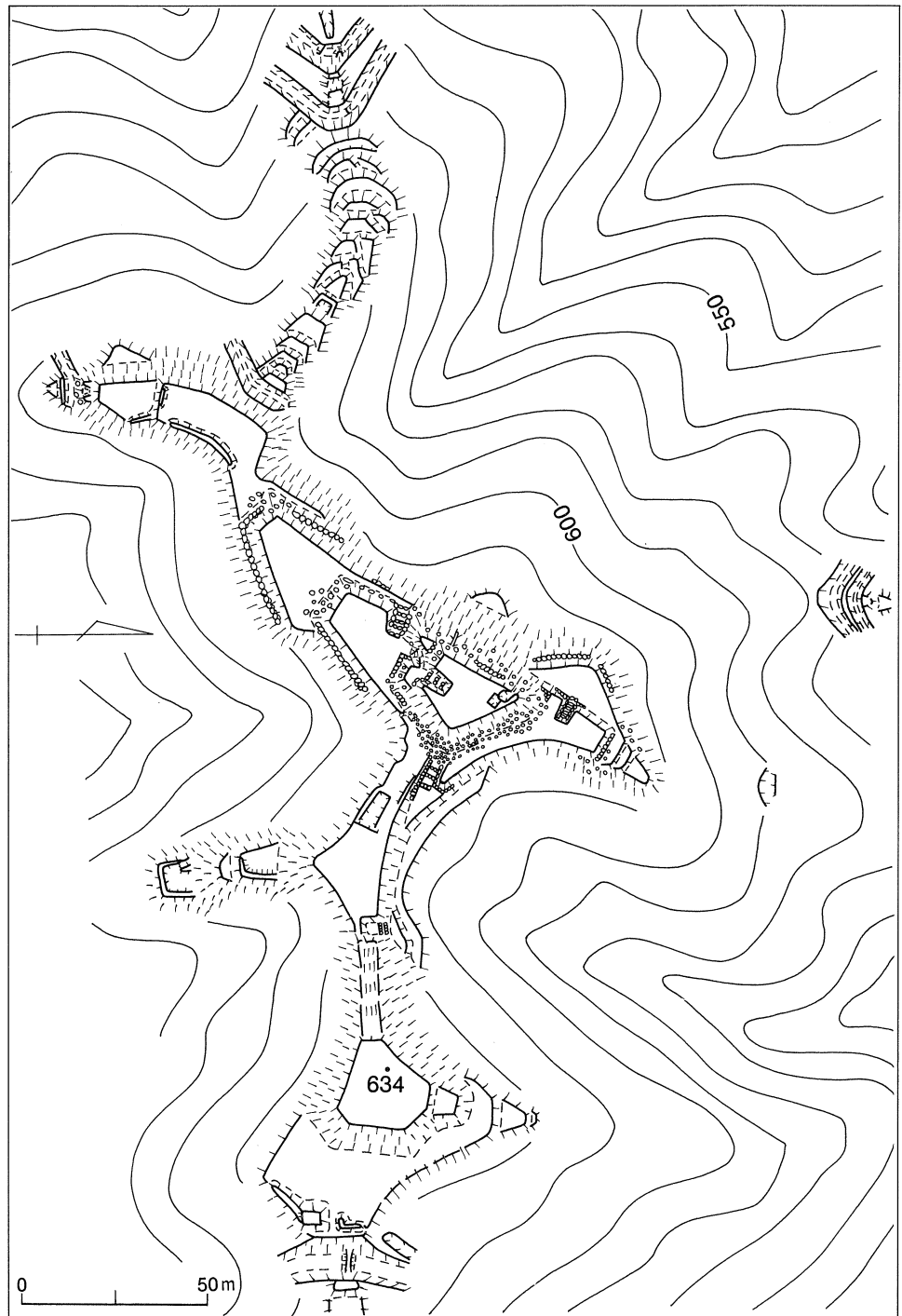
ナ9 瀬戸山城跡 飯石郡赤来町大字下赤名 地図番号 40

現状 山林、公園他 保存状況 良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 683m 比高 190m

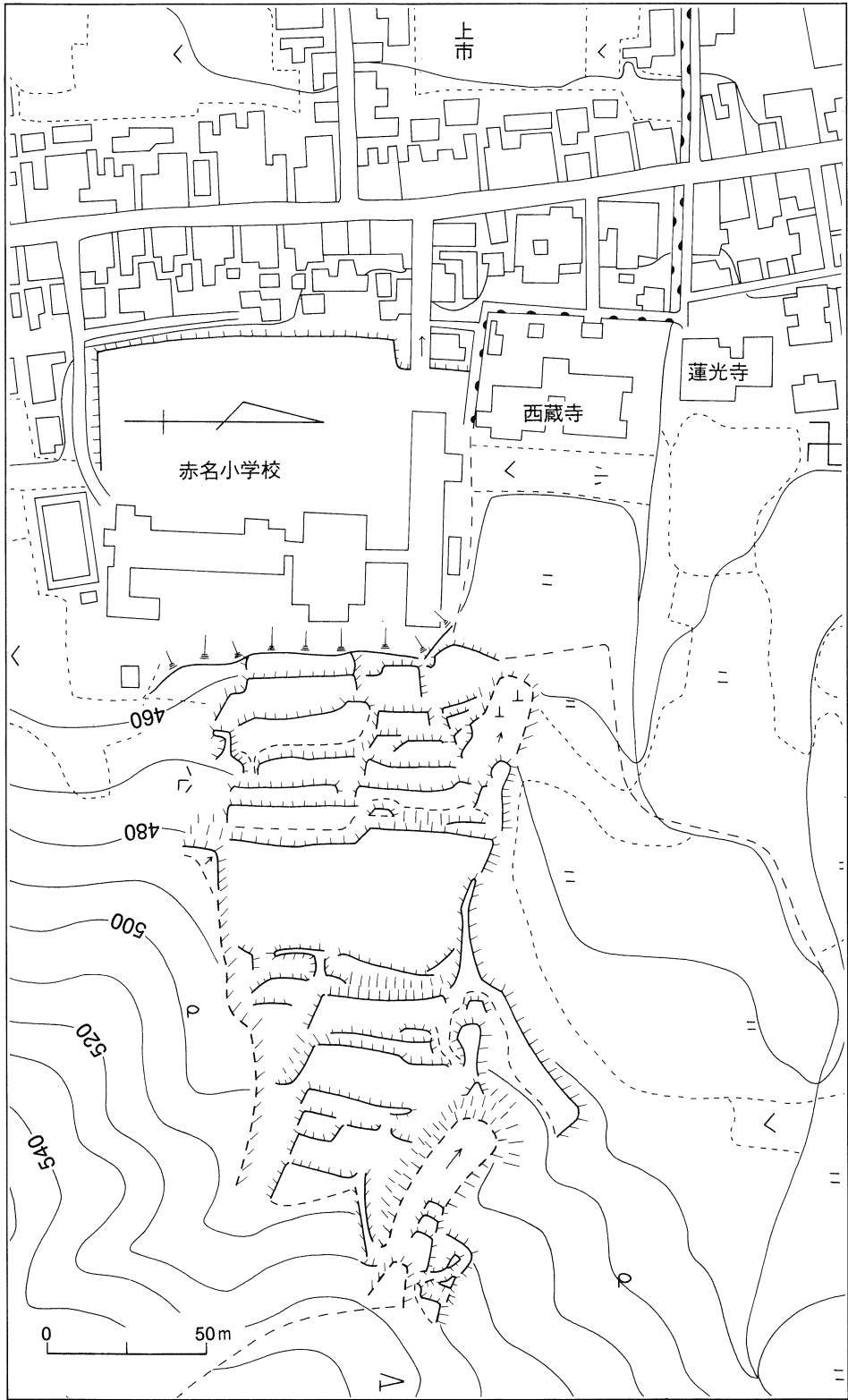
概要

出雲、石見、備後国の境界に位置する。出雲国へ、天文十一年（1542）に大内義隆、永禄五年（1562）には、毛利元就が攻め込んだ時の主戦場として知られる。赤名氏歴代の居城とされるが、現在残る遺構は近世初頭の総石垣の城郭である。主郭は最高所と考えられるが、石垣は「破城」によって破壊されている。特に街道に面した石垣は完璧に破壊されており、根石も確認出来ない。その他の面は石垣のコーナー部が数カ所確認出来る。主郭の南方に連なる郭にも石垣が築かれているが、これらは上部の破壊にとどまっている。虎口は数カ所で確認出来、特に主郭南側の虎口は城門がたてられていたものと考えられ、敷石が残存する。城域の端の方に普請の不十分な遺構を見ることが出来るが、これは改修強化の際、城外として放棄されたもので、赤名氏の時代の遺構とも考えられる。麓の小学校敷地は居館の跡と考えられる。最終改修者は堀尾氏と考えられ、現集落の各所に近世城下町の痕跡を見ることが出来る。

出雲、石見、備後国の境界に位置する。出雲国へ、天文十一年（1542）に大内義隆、永禄五年（1562）には、毛利元就が攻め込んだ時の主戦場として知られる。赤名氏歴代の居城とされるが、現在残る遺構は近世初頭の総石垣の城郭である。主郭は最高所と考えられるが、石垣は「破城」によって破壊されている。特に街道に面した石垣は完璧に破壊されており、根石も確認出来ない。その他の面は石垣のコーナー部が数カ所確認出来る。主郭の南方に連なる郭にも石垣が築かれているが、これらは上部の破壊にとどまっている。虎口は数カ所で確認出来、特に主郭南側の虎口は城門がたてられていたものと考えられ、敷石が残存する。城域の端の方に普請の不十分な遺構を見ることが出来るが、これは改修強化の際、城外として放棄されたもので、赤名氏の時代の遺構とも考えられる。麓の小学校敷地は居館の跡と考えられる。最終改修者は堀尾氏と考えられ、現集落の各所に近世城下町の痕跡を見ることが出来る。



ナ9 瀬戸山城跡 (山頂部) 略測図



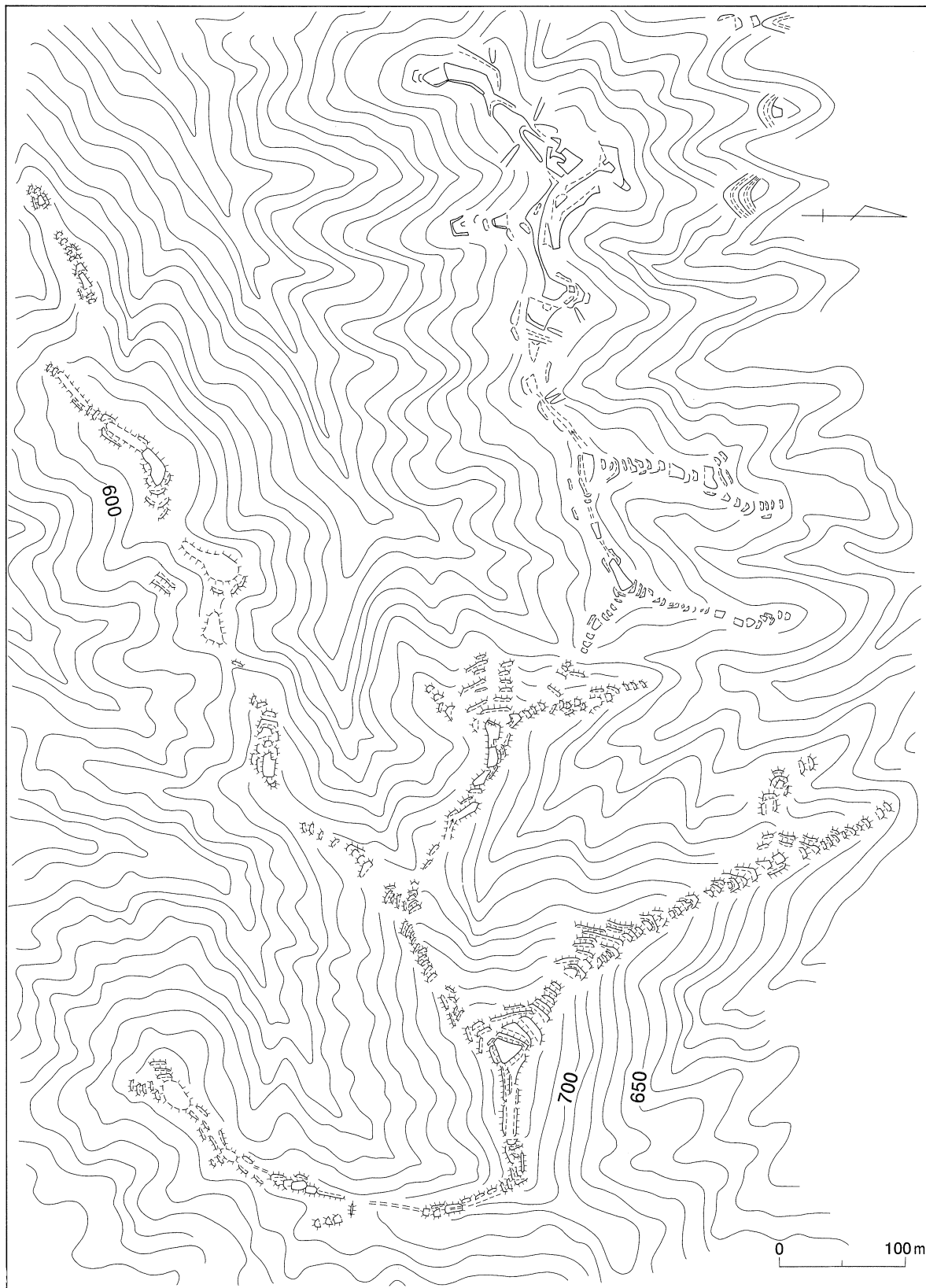
ナ9 瀬戸山城跡 (山麓部) 略測図

ナ12 武名ヶ平城跡 飯石郡赤来町大字赤名 地図番号 40

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 724m 比高 274m

概要

赤穴氏の居城である瀬戸山城背後の尾根に築かれた陣城である。瀬戸山城を見下ろす位置にあり、主として瀬戸山城に向かった尾根上に小規模で粗略な削平地が連なっている。これに対抗する形で瀬戸山城側からも小規模な削平地が築かれている。永禄五年（1562）の毛利元就による出雲攻略の際、



ナ12 武名ヶ平城跡略測図（上方は、ナ9 瀬戸山城跡）

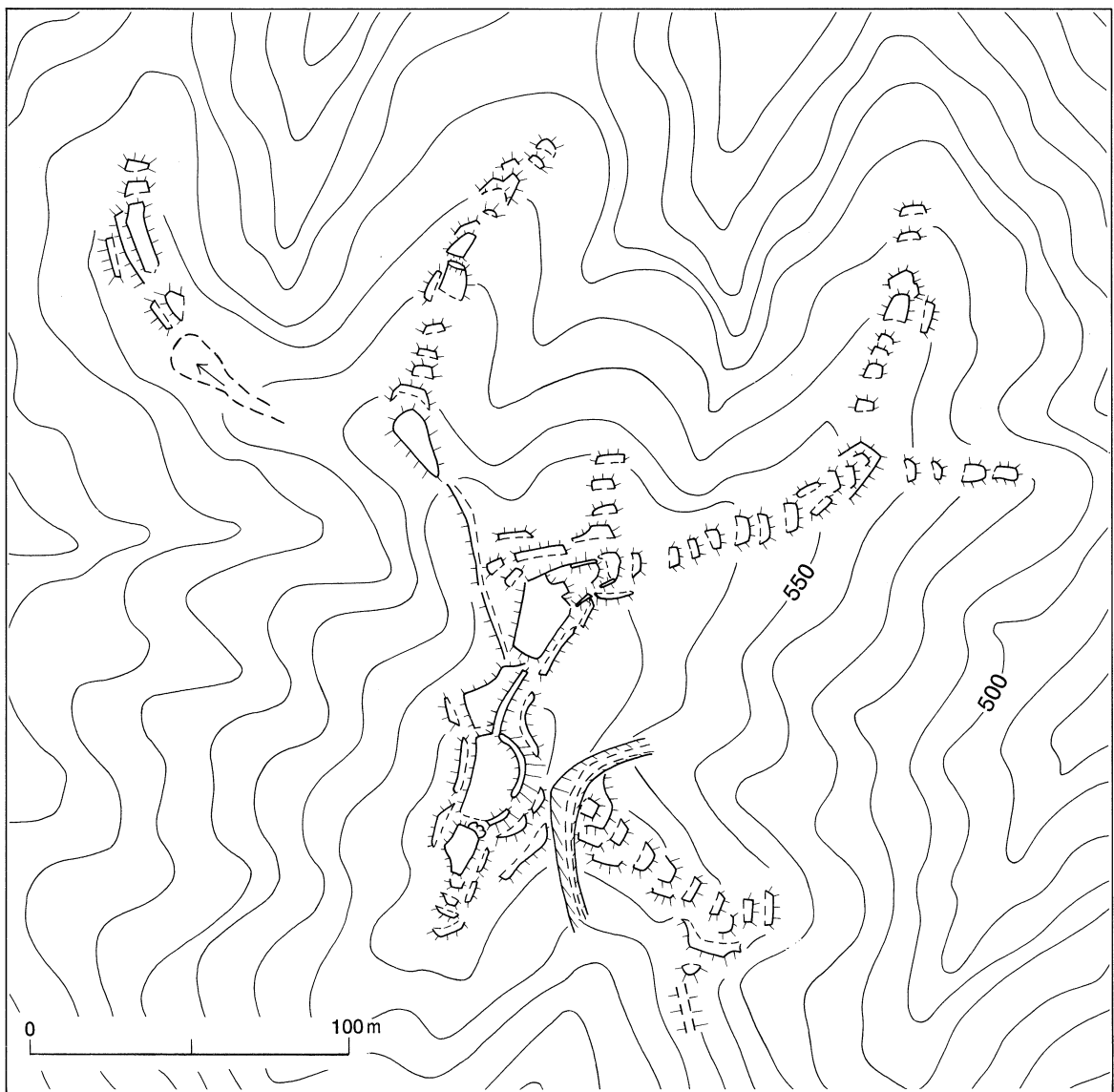
毛利氏により築かれたものと考えられる。

**ナ13 元山城跡** 飯石郡赤来町大字赤名 地図番号 40

**現状** 山林 **保存状況** 良 **立地** 丘陵頂部 **標高** 594m **比高** 144m

**概要**

赤穴氏の居城である瀬戸山城の正面に位置しており、天文十一年（1542）の大内氏による出雲攻略の際、毛利元就が陣を置いたと伝えられる。主郭部には瀬戸山城方向に大規模な土塁が築かれており、瀬戸山城に向かった尾根上に小規模な削平地が連なっているが、背後側には削平地は見られない。永禄五年（1562）の赤穴氏攻略時にも、毛利氏の拠点とされたものと考えられる。



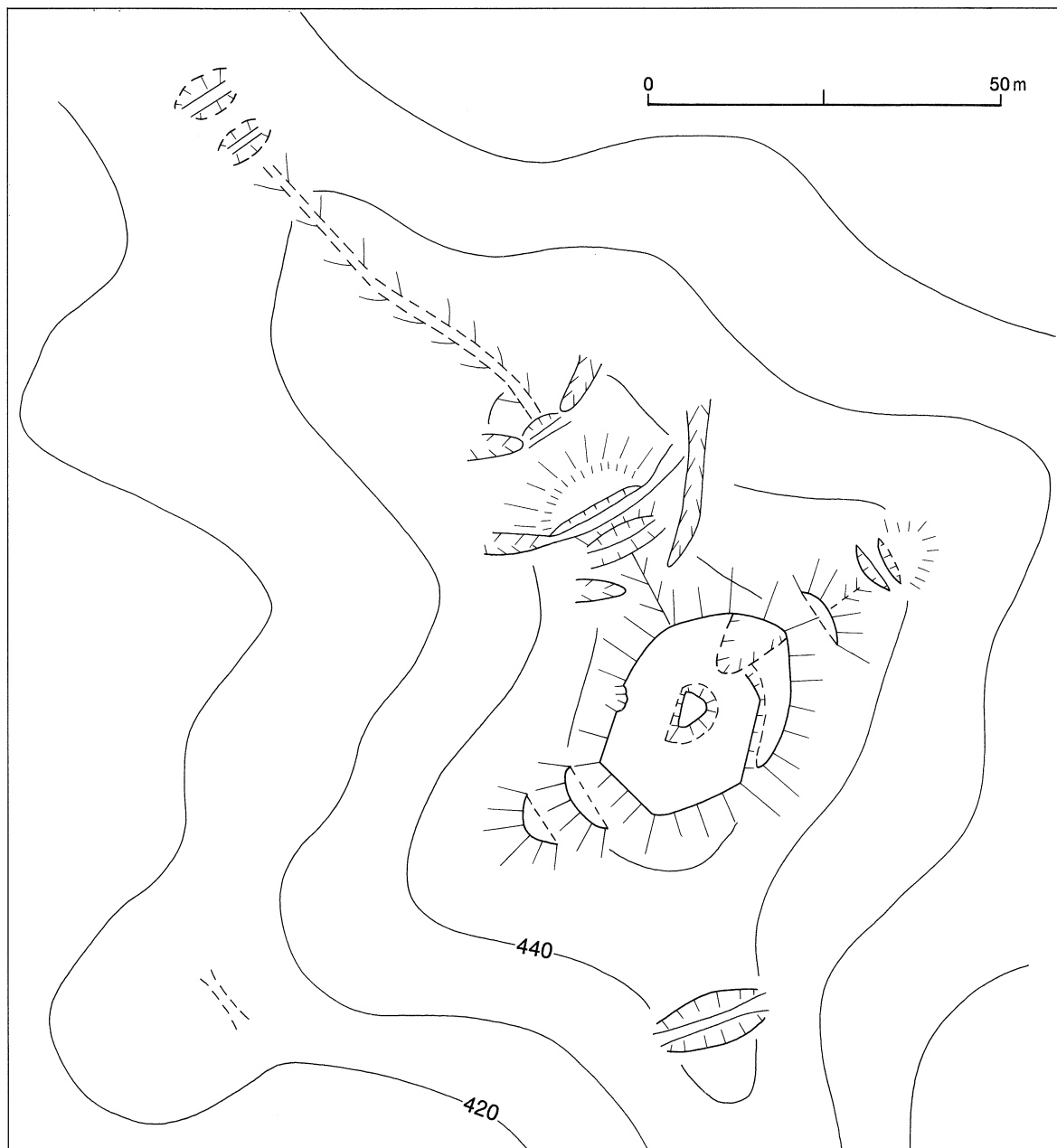
ナ13 元山城跡略測図

二 4 粟目山城跡 飯石郡吉田村大字吉田 地図番号 31

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 458m 比高 100m

概 要

丘頂を削平した主郭と付属する小腰郭からなる小規模な砦といえる。前方へ続く尾根には浅い三重堀切と豎堀を築いている。さらに前方の尾根はほとんど自然地形で所々に浅い堀切が見られる程度である。頓原から三刀屋への交通路上にあたり、菖蒲山城関連の砦で、吉田大蔵左衛門が築いたと伝えられる。



二 4 粟目山城跡略測図

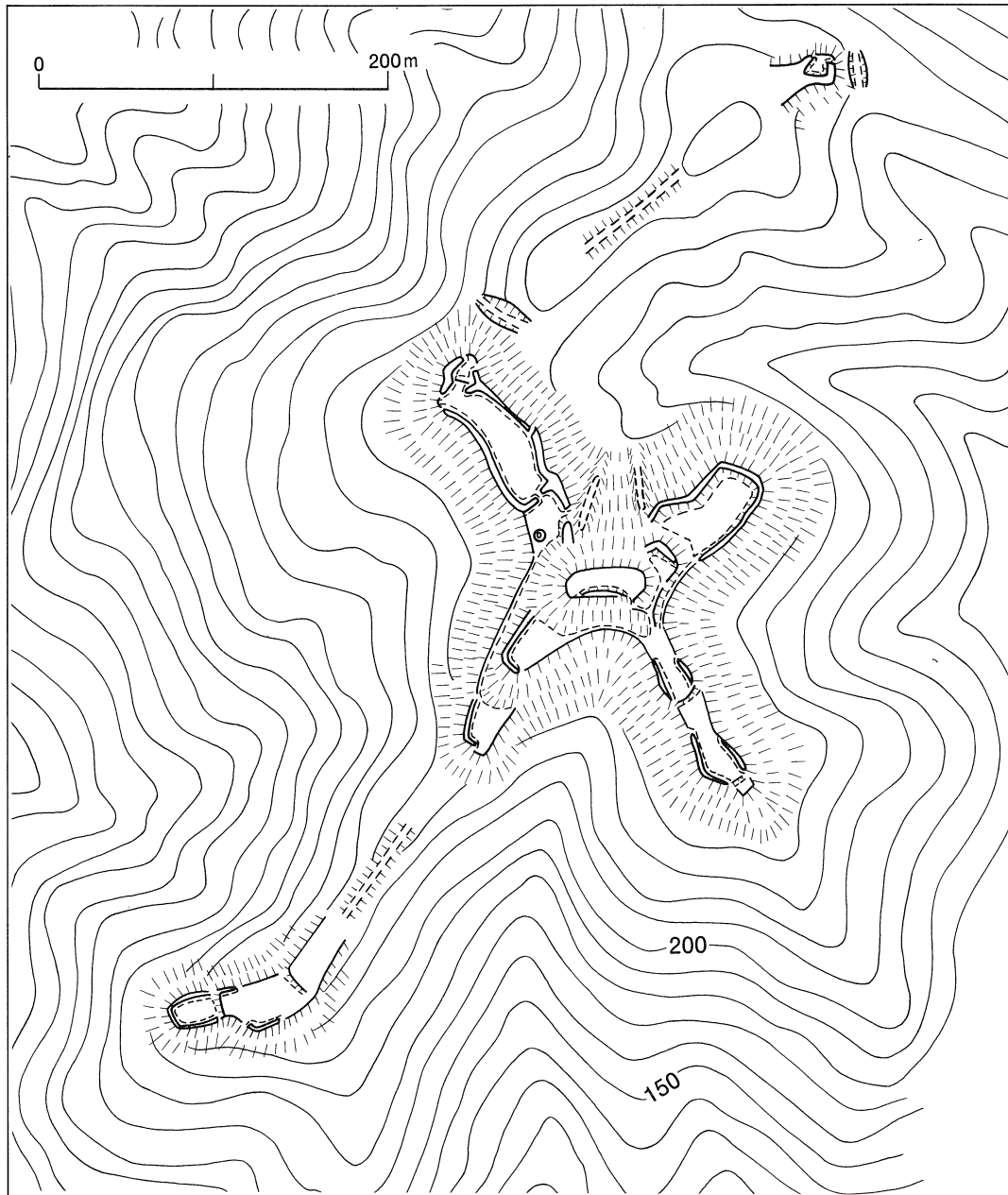


又2 鳶ヶ巢城跡 出雲市西林木町 地図番号 28

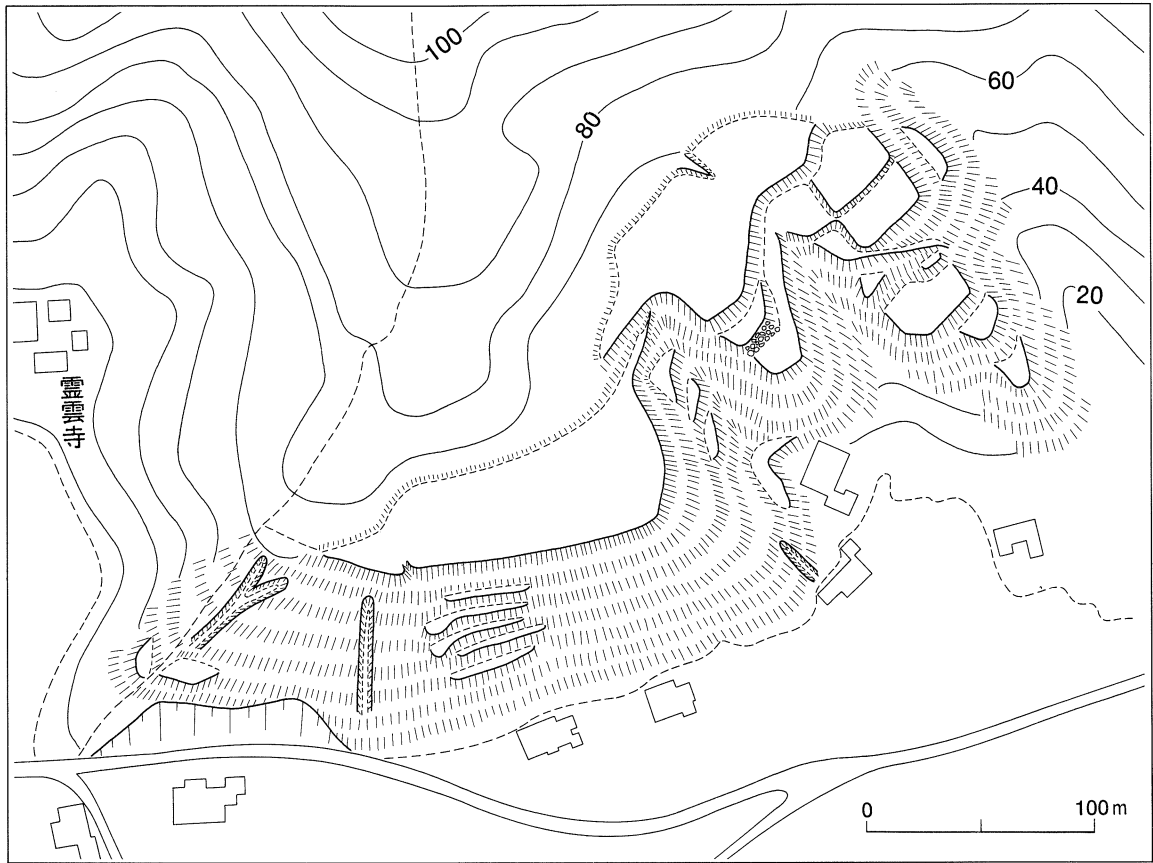
現状 山林他 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 281m 比高 260m

概要

毛利元就が、出雲国の平野部へ侵入して最初に築いた陣城で、標高281メートルの主郭を中心に、四方へ伸びる稜線上に郭を配した放射状連郭式の山城である。この山頂郭群とは別に、標高50メートルの南方山麓に広大な面積を有する山麓郭群が存在する。これは、毛利氏にとって雲芸攻防戦が有利に展開した結果、当城の機能が最前線の陣城から繋ぎの城に変化した結果、付け加えられた駐屯空間であろう。



又2 鳶ヶ巢城跡（山頂部）略測図



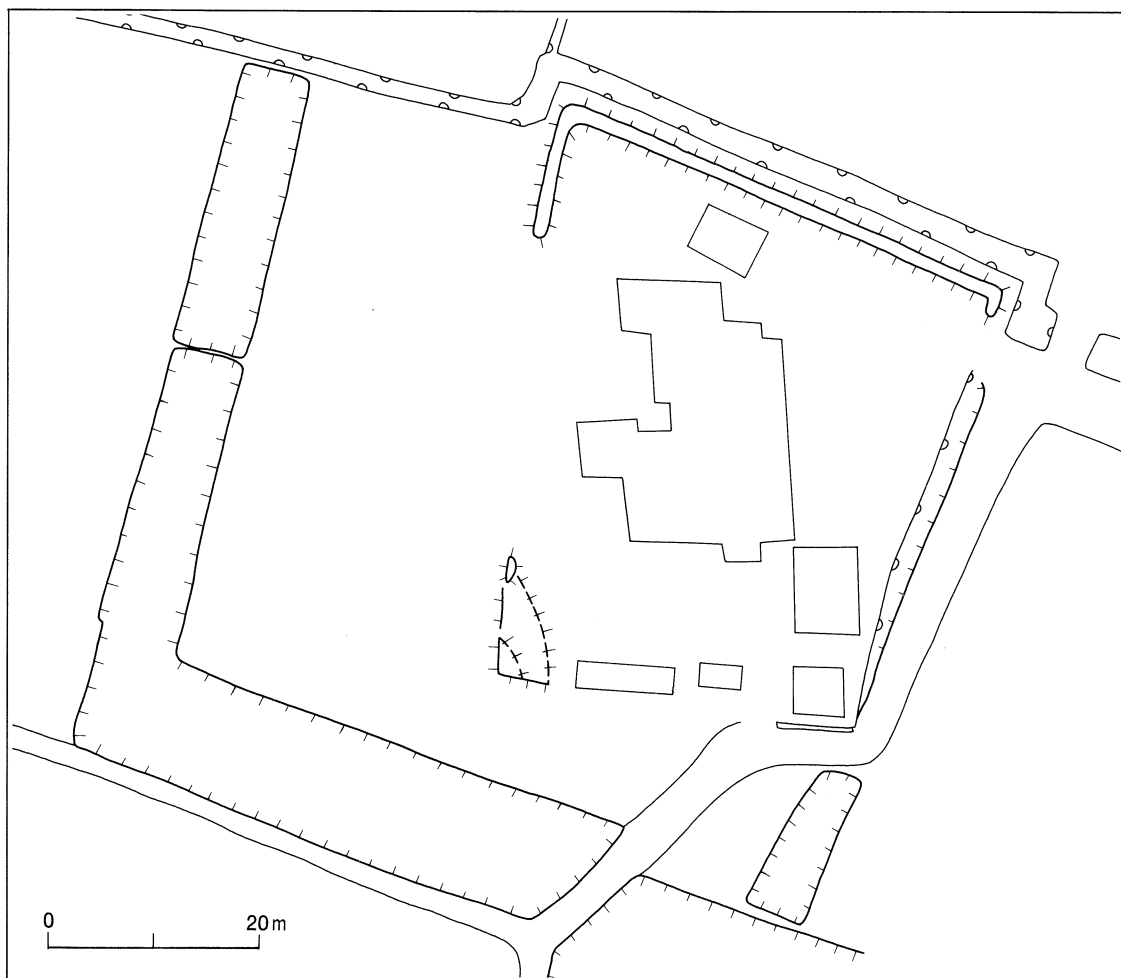
又2 鷹ヶ巣城跡（山麓部）略測図

又4 三木氏館跡 出雲市小山町 地図番号 35

現状 宅地 保存状況 やや良 立地 平地 標高 4m

概要

微高地に築かれたいわゆる平城である。館内は、土塁によって、二郭に分けられていたものと考えられる。現在、堀の跡が西から南にかけて残り畑地として残存している。地表面観察では、幅の広い深さ約40センチの浅い凹地として確認される。東側は、道路として埋められているが、館側は現水路として辿ることが出来る。北側は、灌漑用水路が、幅は狭くなっているが、ほぼ当時の流路のままに残されており、平野部における地域開発の拠点として評価される。三木氏は、古志氏の一族と伝えられている。



又4 三木氏館跡略測図

又5 智伊館跡 出雲市知井宮町 地図番号 36

現状 山林、社寺境内 保存状況 良 立地 独立丘陵 標高 28m 比高 23m

概要

現在の智伊神社社殿も、道路から比高約7mの高い位置にあり、館の建物はここに想定できる。周囲の景観も注意され、館のまわりに堀がめぐり、家臣の屋敷が配置されていた可能性も考えられる。



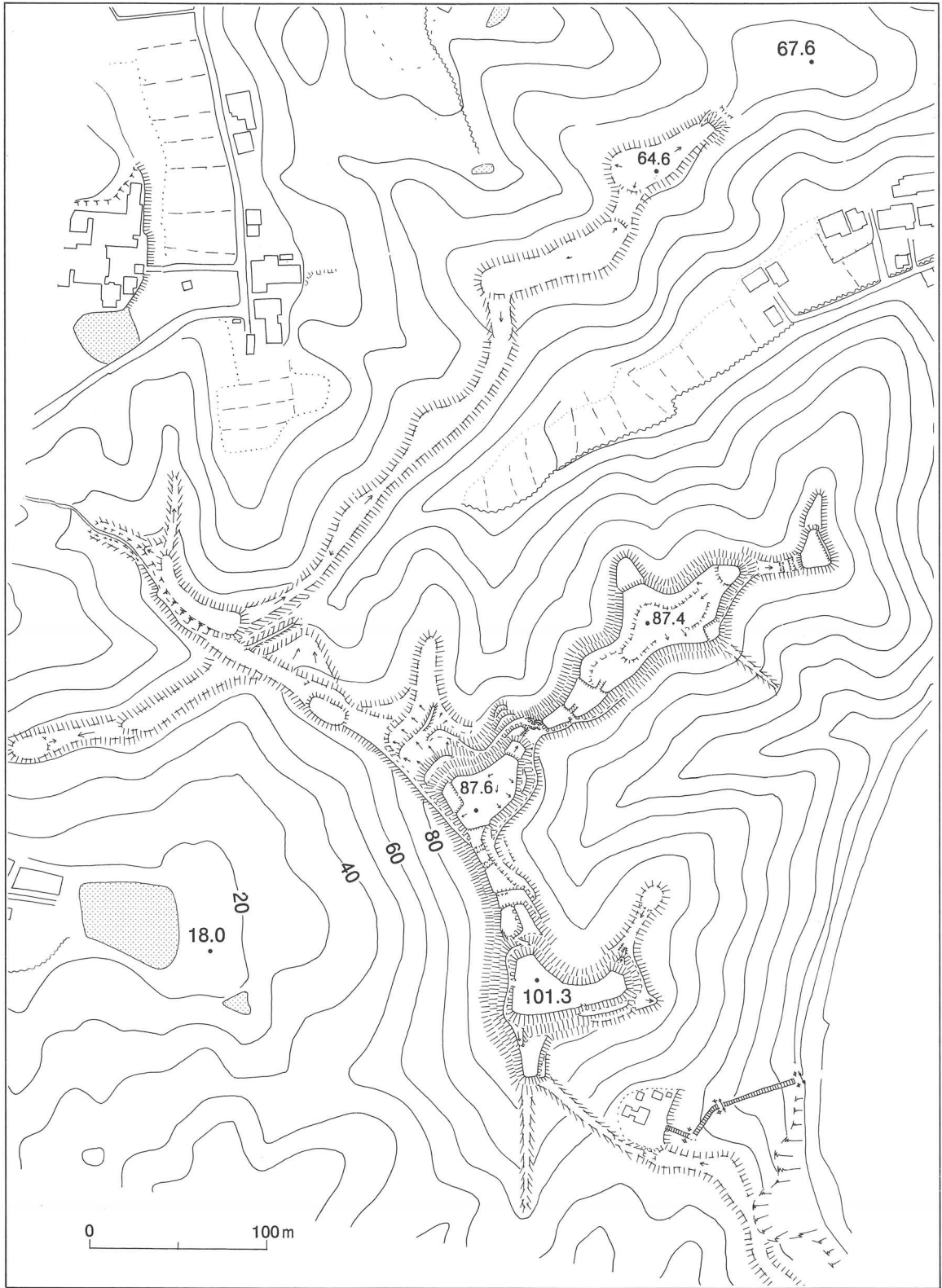
又5 智伊館跡

又6 **神西城跡** 出雲市東神西町 地図番号 36

**現状** 山林、社寺境内他 **保存状況** やや良 **立地** 丘陵頂部 **標高** 101m

#### **概 要**

神戸水海（現神西湖）の南岸に接する位置にある。中世の斐伊川の主流は神門湖に流れていたものとされることから、水運を意識した城郭であったと考えられる。主郭は最高所と考えられるが、近年の公園化による破壊が著しい。この城郭の最大の特徴は普請の度合いである。全体的に壁や虎口、連絡通路の普請は十分であるが、郭内部は削平が不十分なものが大半である。城郭としては未完成なものといえよう。「雲陽軍実記」では、大内義隆は追手、搦め手を赤穴、神西にさだめて出雲国中に攻め入るよう記している。富田城の尼子氏を攻めた際に、後方支援施設として毛利軍に使用された可能性がある。



又6 神西城跡略測図

又9 塩冶神社境内遺跡 出雲市上塩冶町 地図番号 28

現状 山林、社寺境内 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 33m

概 要

城郭としての伝承は無いが、塩冶郷を一望する立地にある。塩冶神社境内で改変されているが、壁の普請は十分である。最高所の普請は不十分であり、古い時代の城郭とも考えられる。塩谷判官館の参考地である。



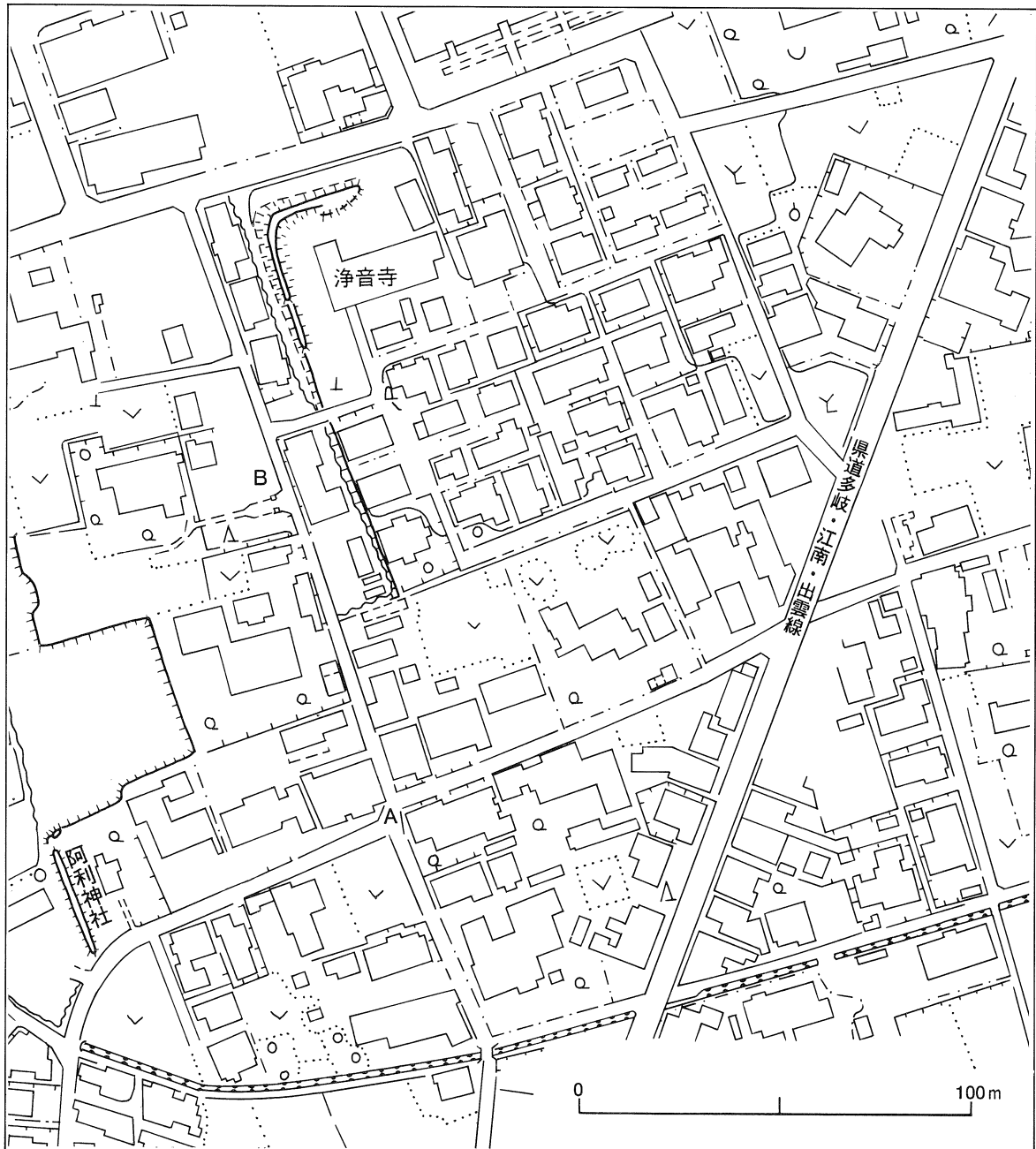
又9 塩冶神社境内遺跡略測図

又10 浄音寺境内館跡 出雲市塩冶町 地図番号 28

現状 畑、社寺境内、宅地 保存状況 不良 立地 平地 標高 7m 比高 7m

概要

浄音寺の西側に土塁のコーナー部分が残る。現在庭園となっているが、規模は益田氏の三宅御土居の土塁と比較しても見劣りしない。北側に堀の痕跡が残る。近年まで西側に堀が残っていた。地図上において現在残る土塁のコーナーを基点として100m四方の方形の館跡が想定しうる。しかし、南西に残る石州街道がA地点で不自然にクランクしていること、用水がA地点の南側を迂回するように流れていること等から、館跡の範囲は南東側に延びる可能性がある。阿利神社西側にも土塁が残る。塩冶氏の館跡と伝えるが、詳細は不明である。なお、B地点の屋号は「大門」である。



又10 浄音寺境内館跡

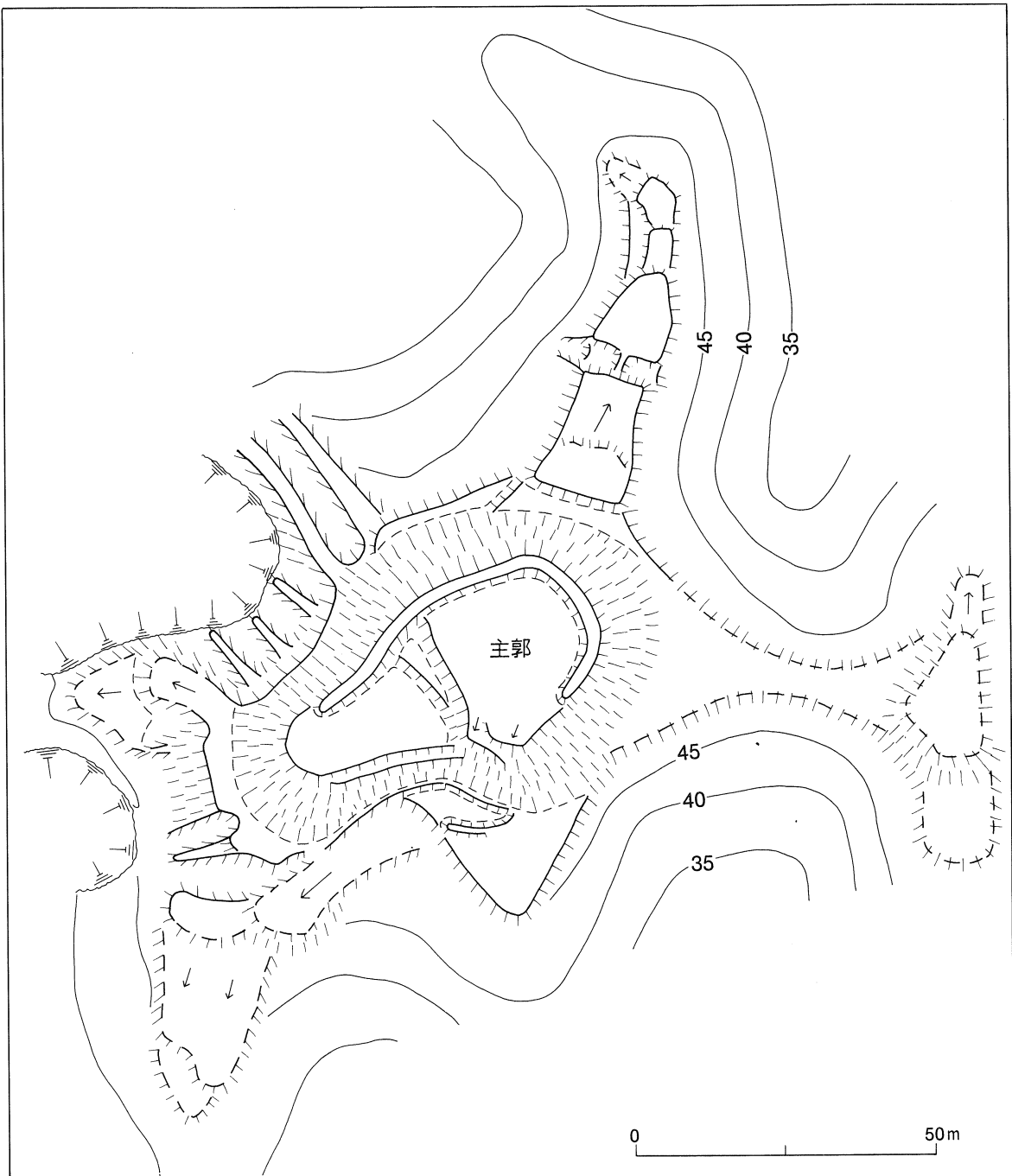


又14 半分城跡 出雲市上塩冶町 地図番号 28

現状 山林他 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 56m

概要

出雲工業高校の南側に位置し、塩冶郷を一望できる場所にある。郭は、発掘調査によって大規模な版築により造成されたことが分かっている。主郭は、最高所と考えられ、東から北西側にかけて土塁が築かれている。また、西側には破壊が著しいが、連続縦堀が確認できる。このように、中核部の防御は嚴重であるが、主郭北側に伸びる尾根の2箇所、堀切等、防御施設の普請は不十分である。主郭東側に伸びる尾根は、ほとんど加工されていない。城主には、塩冶氏の関係氏族が考えられるが、主郭をめぐる土塁の存在は、毛利軍による改修強化の可能性を物語る。



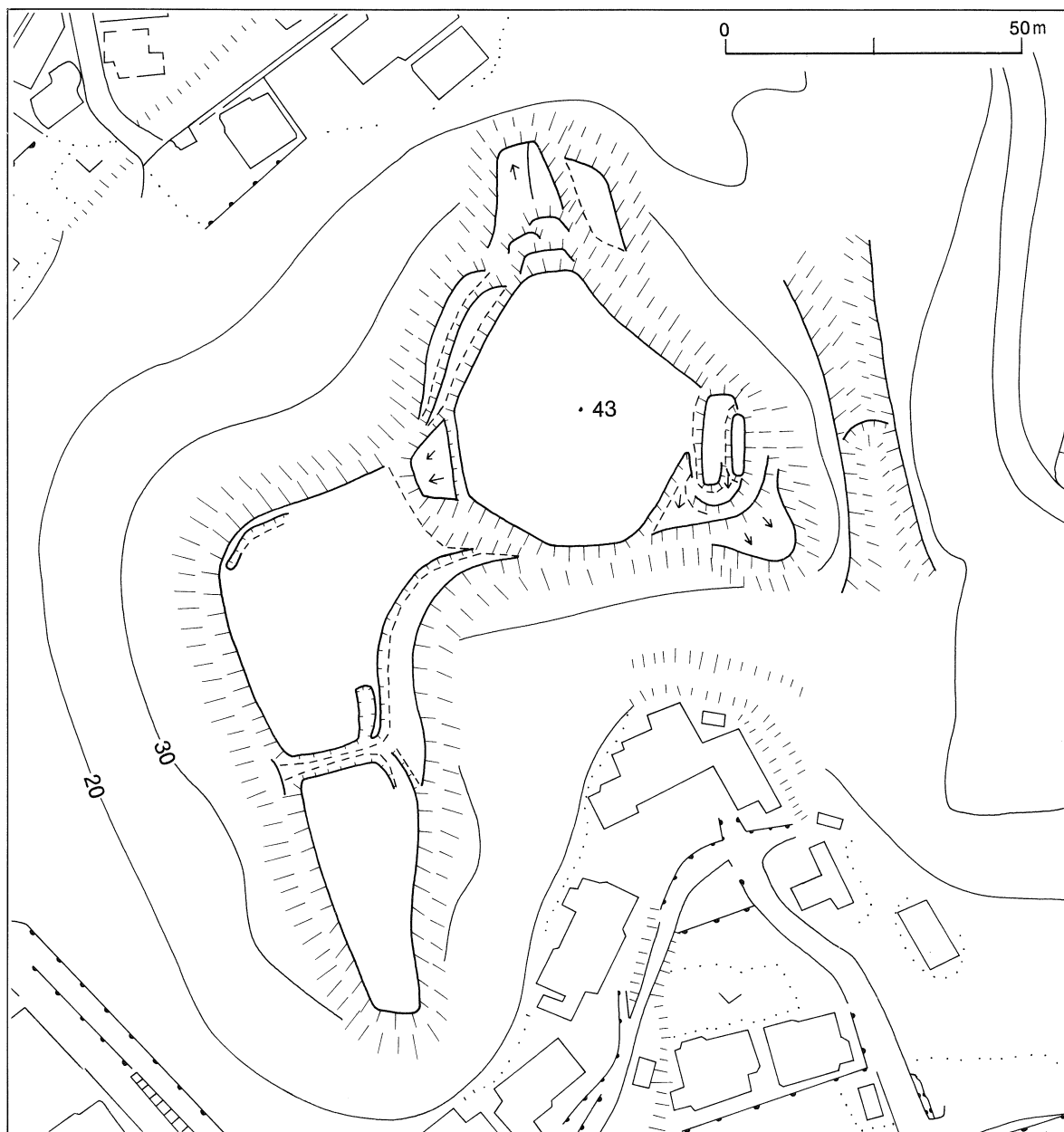
又14 半分城跡略測図

又18 向山城跡 出雲市上塩冶町 地図番号 28

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 43m 比高 30m

概 要

館跡が、南側の民家部分に想定できる。『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』(1980年)の報告でも、城の図に民家をわざわざ書き入れて同様の見解をとる。ただし、主要な各郭は面積も広く平坦なので、郭内にもかなりの建物があったと思われる。中世塩冶氏の中心はこのあたりだったと思われるが、周辺が無造作に開発されており憂慮される。



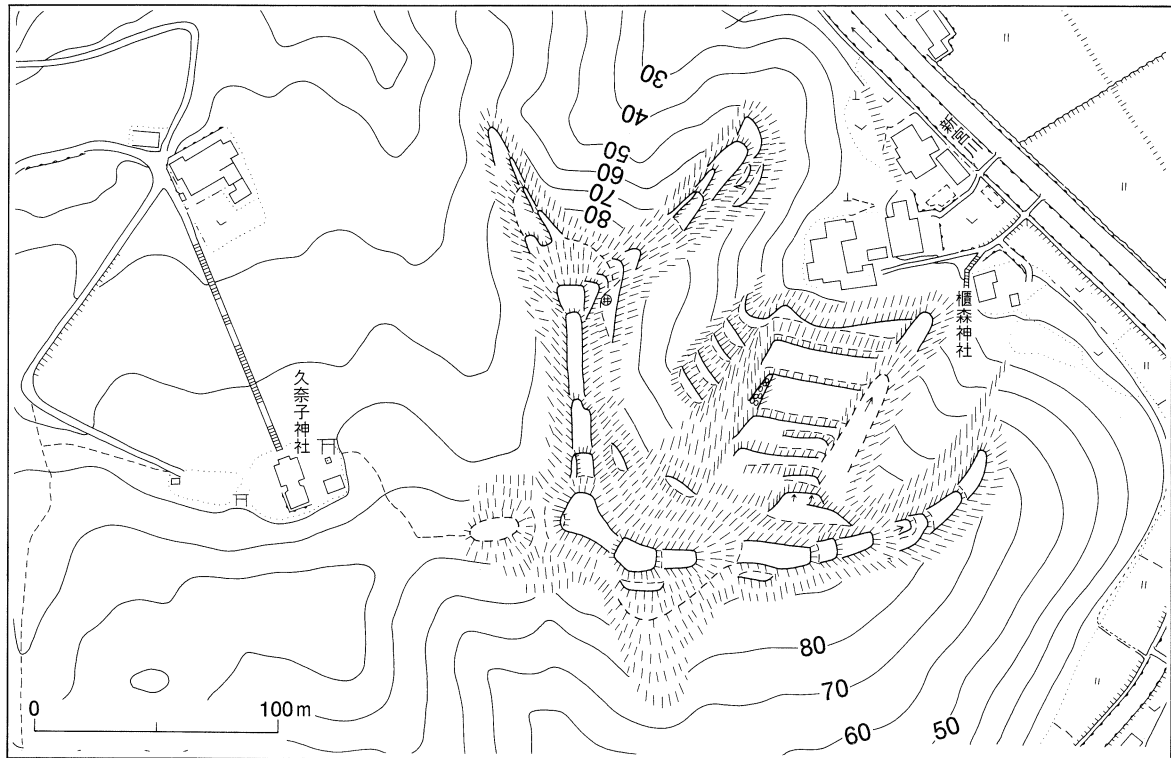
又18 向山城跡略測図

又19 栗栖城跡 出雲市古志町 地図番号 36

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 108m 比高 80m

概要

丘陵の麓にあるこの城の説明版には、久奈子神社のあたりに館跡があったと伝える。しかし、城全体の形からは、櫃森神社のあたりに考えるべきだろう。久奈子神社の西側に、中国自然歩道となった旧備後街道が通るが、現在の栗栖城はここまで広がらない。浄土寺山城移転後の古志氏の居城と伝える。



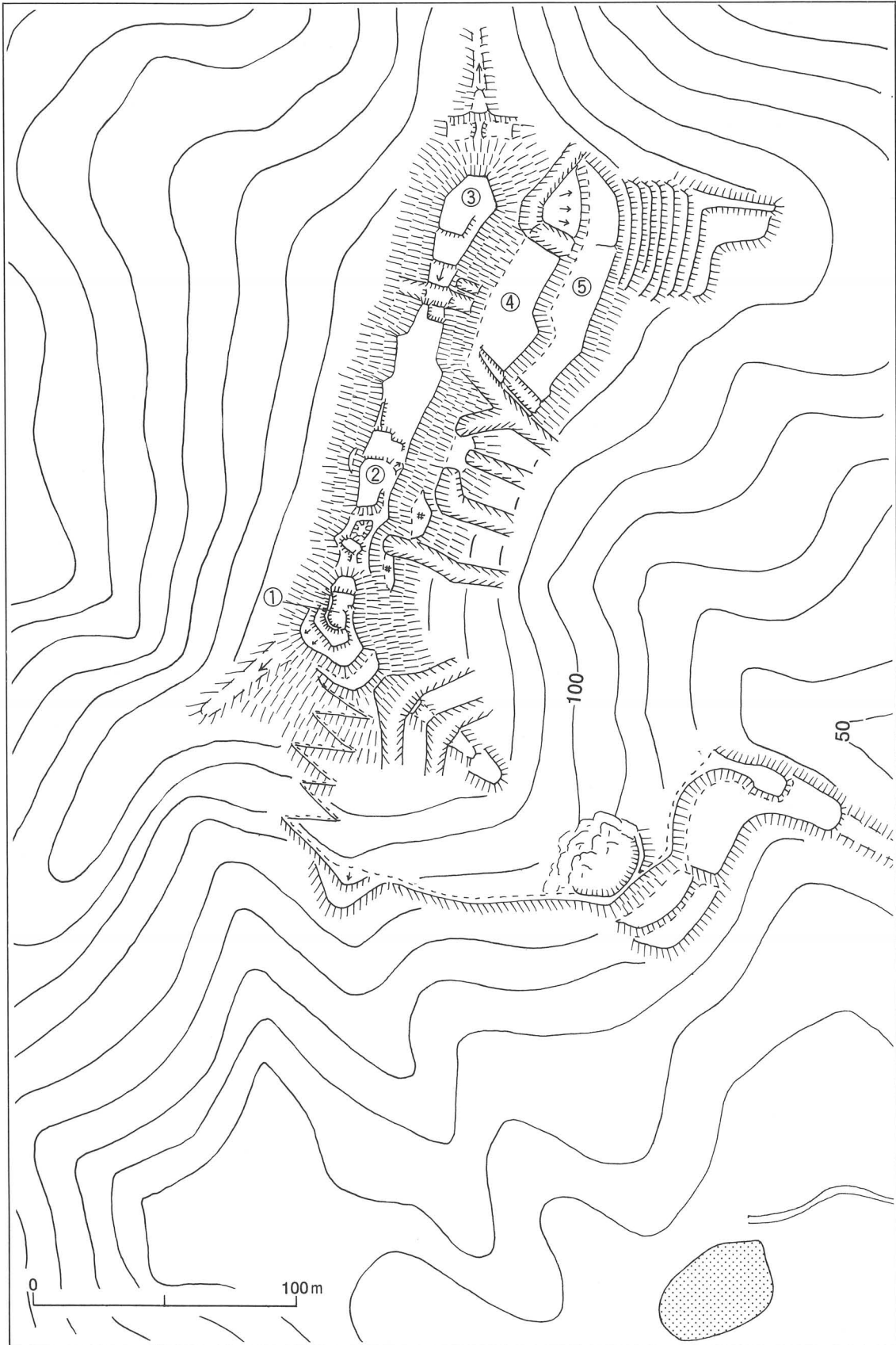
又19 栗栖城跡略測図

ネ7 八幡山城跡 平田市野石谷町 地図番号 27

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 160m 比高 120m

概要

尼子氏の家臣、大西三河守の居城と伝えられている。主郭は最高所で土塁が残る1郭と考えられるが、普請が不十分なので2郭の可能性も残る。1郭と2郭のあいだには空堀が築かれている。1郭の北側に位置する2郭は南北端に虎口が築かれているが、北側の虎口は柵形虎口になっている。普請は十分で、全体的に直線的に構成されている。「折り」を意識した所も認められ、築城技法が発達している。したがってある時期に改修強化が行われたことが窺える。2郭と3郭の間の堀切は両端が堅堀となっており、東側のものは4郭からの連絡通路として使われた可能性がある。3郭の北側は削り込まれており、直下の堀切とともに尾根筋を遮断している。4郭は普請が十分で、5郭の東側に続く削平地とともに駐屯空間を形成していたものと考えられる。4郭両端が堅堀によって防御を固めているが、南側の堅堀もルートとして使用されていた可能性が高い。5郭にはこの堅堀に接して武者溜りを築いて防御を固めている。また、南側に続く2本の堅堀は、緩斜面を破壊するためのものと見られる。3郭東側に築かれている堀切は他のものに比べて堀底が浅くなっている。これは当初、東側に延びる尾根を遮断するために築かれたものが、4郭周辺の拡張工事によって放棄されたものかもしれない。1郭の南側は二重の堀切により防御を固めているが、その先端直下に岩盤の露出した空堀状の遺構が残る。溜池なのか防御施設なのか判断に苦しむ遺構である。当城の縄張りは全体に東方を向き、また駐屯空間と思われる郭の存在、柵形虎口の存在、主郭の断定が難しいことなどから、毛利氏が富田城攻略の際に陣城として改修したものと推定される。

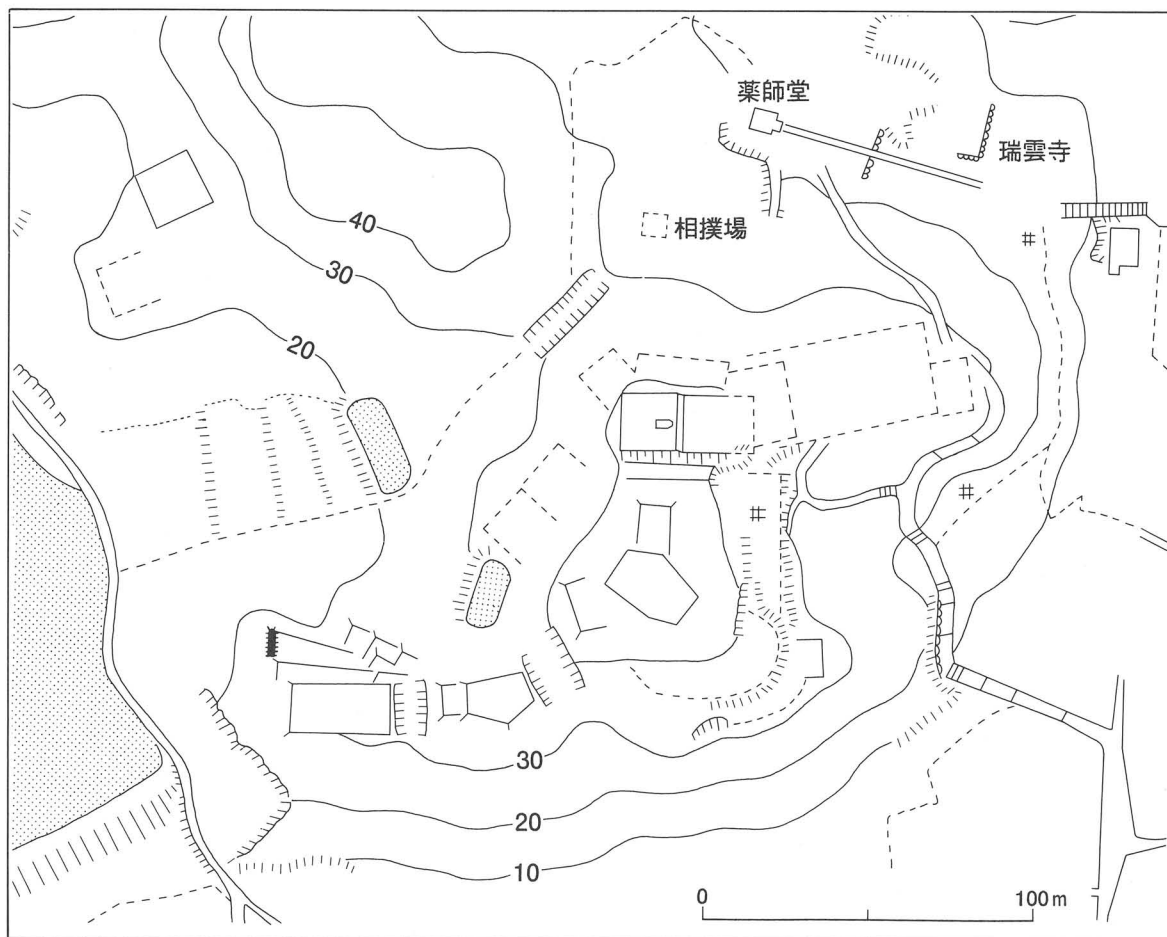


ネ7 八幡山城跡略測図

ネ12 平田城跡 平田市平田町 地図番号 27

現状 山林、寺社境内、宅地他 保存状況 不良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 53m 比高 45m  
概 要

平田港は、室町時代には中国にまで知られた内陸港で、雲芸攻防戦において毛利氏は兵站基地としてこの町を重視した。尼子家復興戦においても、尼子方の米原綱寛が執拗に当城を攻撃した。現状は、市民公園とされたためにずいぶん攪乱されているが、標高53メートルの主郭を中心に、やや屈曲した東西の稜線上に郭を配し、その間を堀切で切断する縄張りだったと推定される。



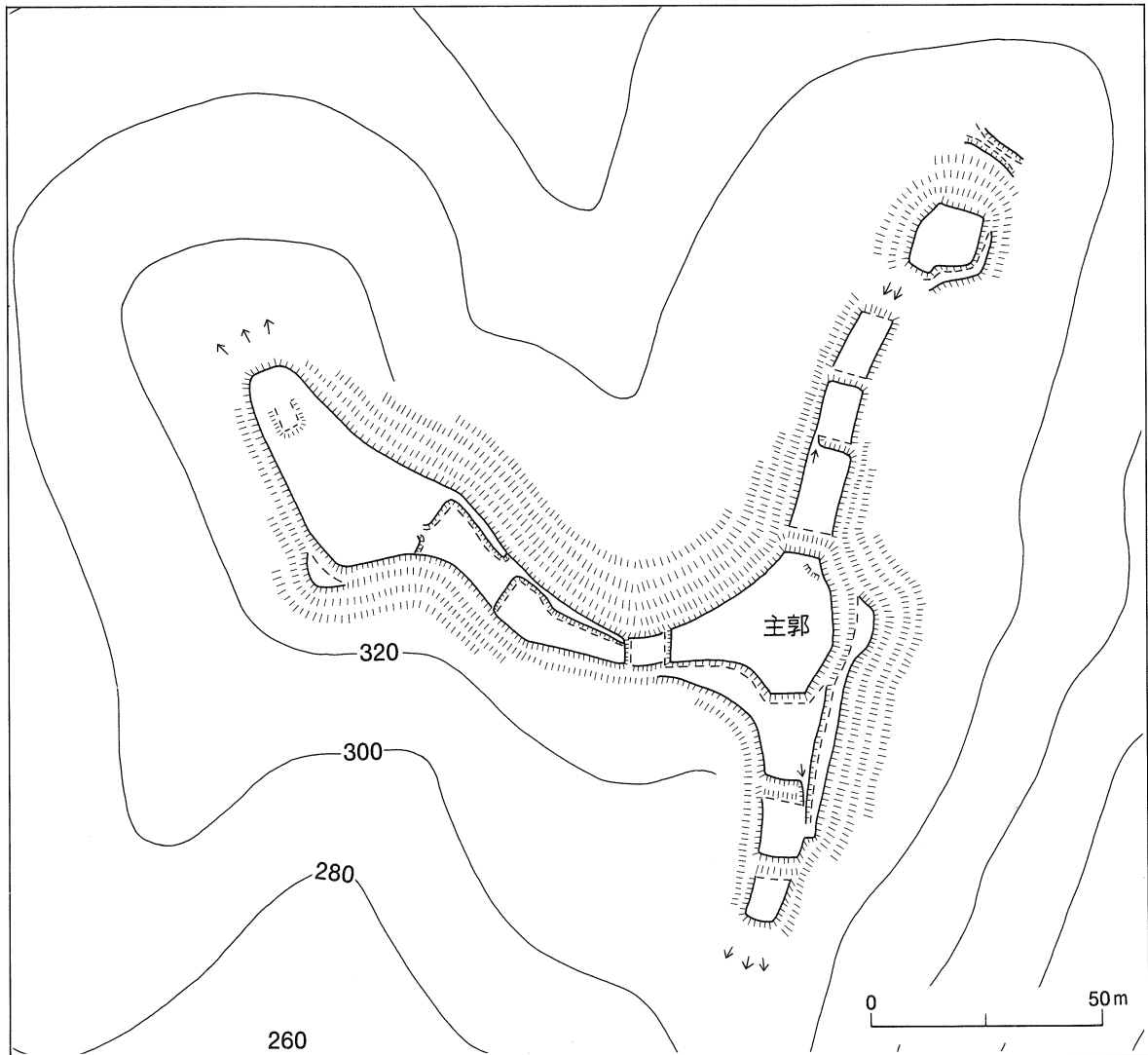
ネ12 平田城跡略測図

ネ14 檜ヶ仙城跡 平田市多久町 地図番号 27

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 333m 比高 230m

概要

独立峰に主郭を置き、三方の尾根に郭を配した放射状連郭式の山城である。普請は、主郭と南北の郭の上面、切岸は丁寧であるが、西方の郭は、やや粗放である。信頼できる文書によって、修築時期が確定できる数少ない事例である。



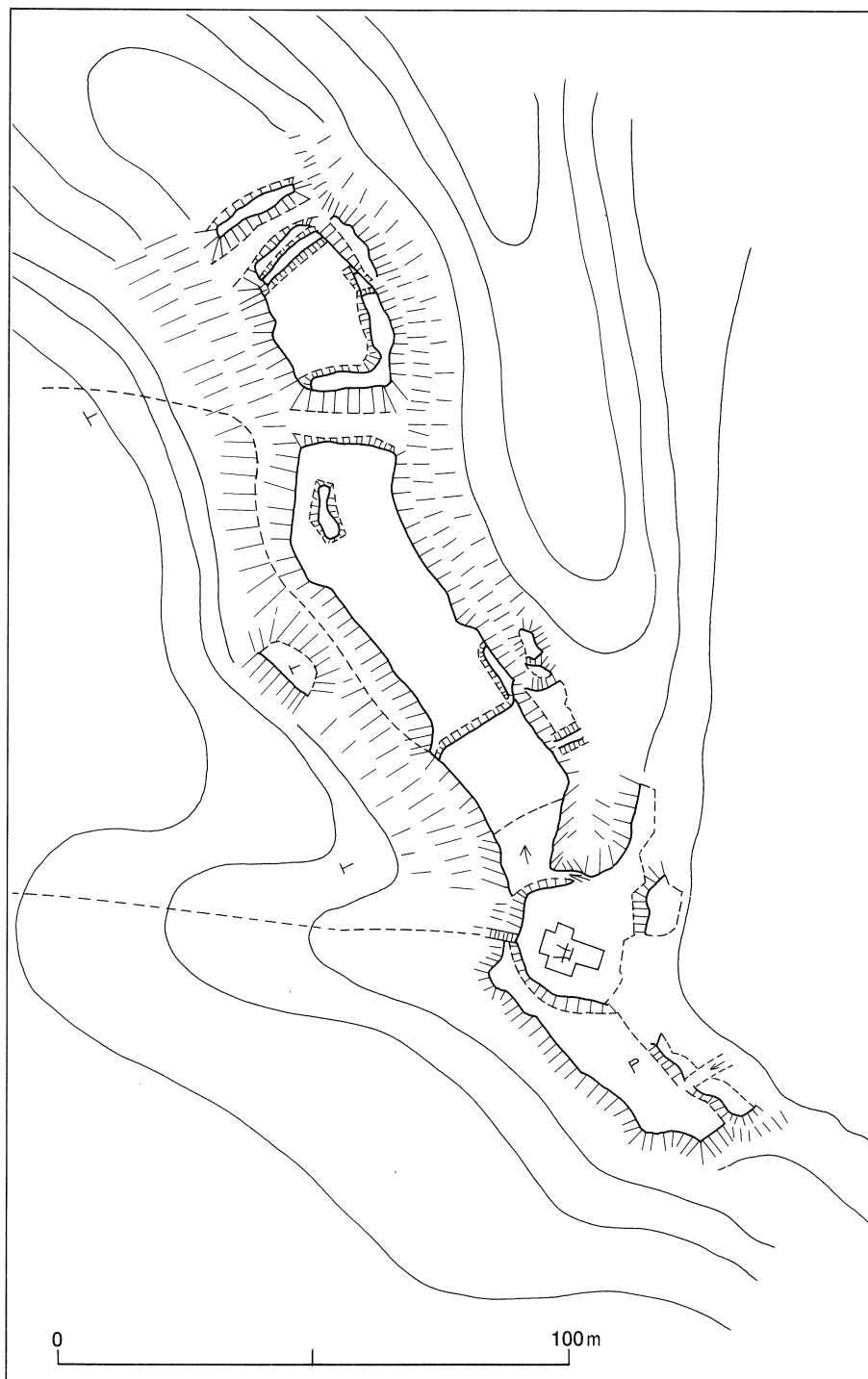
ネ14 檜ヶ仙城跡略測図

ノ3 宇屋谷城跡 簸川郡斐川町大字神庭 地図番号 28

現状 山林他 保存状況 良 立地 丘陵麓部 標高 65m 比高 35m

概要

尾根を堀切で遮断することによって築かれた城郭であり、基本的には単郭と考えられる。南北の堀切に接して土塁を築いており、南側の土塁は東側にまでめぐっている。南方の神社まで緩斜面が続くので、駐屯空間として使用していた可能性が考えられる。西麓に前ヶ市という屋号が伝わる。



ノ3 宇屋谷城跡略測図

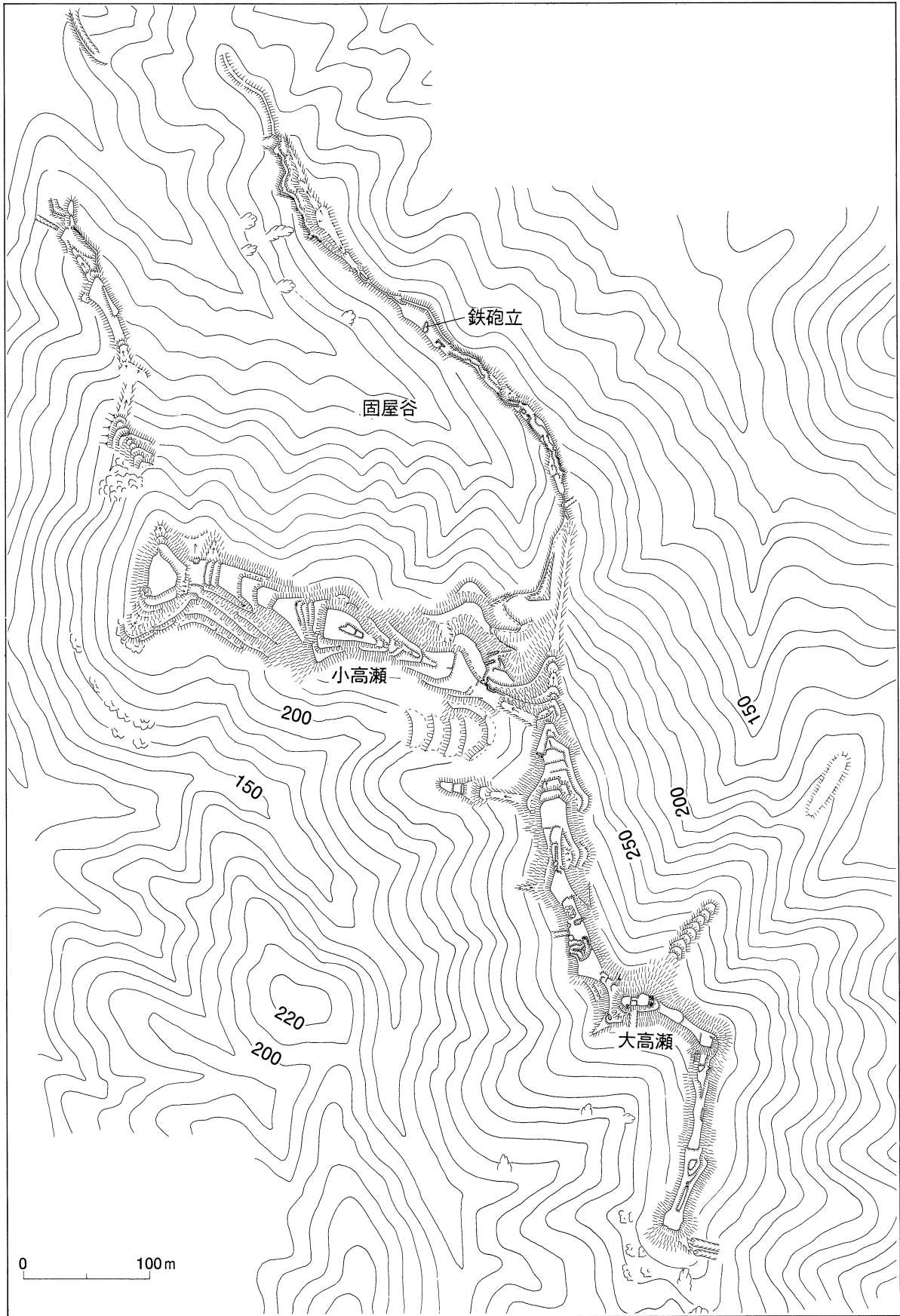


#### ノ4 高瀬城跡 簸川郡斐川町大字学頭 地図番号 28

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 316m 比高 210m

#### 概要

簸川郡と大原郡の境に位置し、北に簸川平野を一望し、南に高麻城と赤川周辺の地を望むことが出来る。急峻な地形を利用して築かれ、「大高瀬」、「小高瀬」、「鉄砲立」と呼ばれる防御拠点から構成されている。主郭は最高所「大高瀬」と考えられるが、規模の小さい郭が続く。「大高瀬」西側に「駄置場」と称する鞍部を隔てて位置する「小高瀬」は駄置場方面こそ普請が不十分だが、簸川平野に面する方面は規模の大きな郭が続き、普請も十分である。「小高瀬」が主城で「大高瀬」は詰め之城とする解釈もある。米原氏の居城として知られ、元龜二年（1571）の毛利軍との籠城戦時には、周辺に尼子、毛利両軍の陣城が多数築かれたと伝えられる。固屋谷、七曲がり、御局谷等の地名が残る。



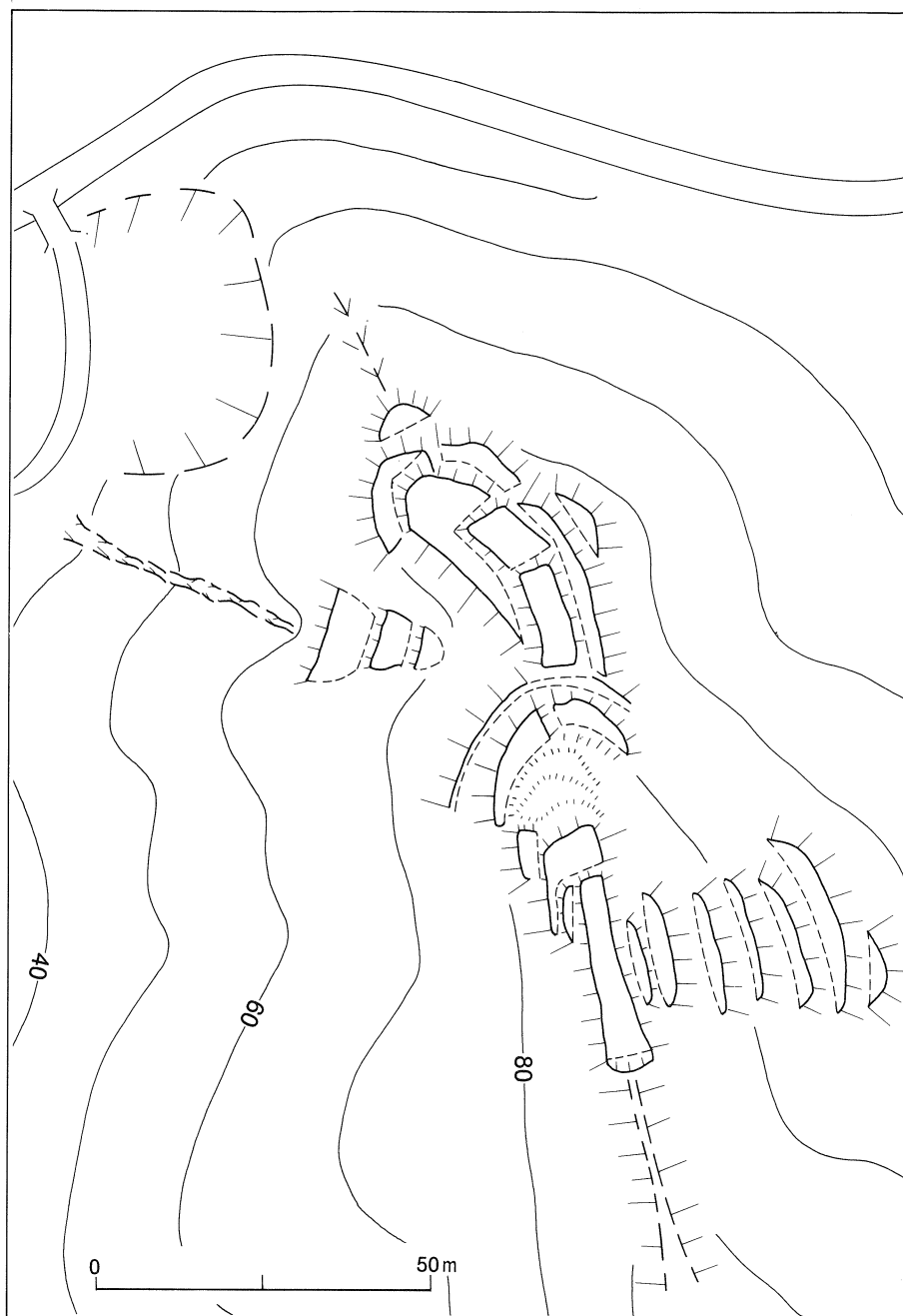
ノ 4 高瀬城跡略測図

ハ1 鵜鷺蛇バン谷城跡 簸川郡大社町大字鷺浦 地図番号 34

現状 畑、山林 保存状況 不良 立地 丘陵先端 標高 90m 比高 50m

概要

低く突出する尾根の先端に階段状の郭、腰郭をつくる。先端近くの急な岩盤質の自然谷を豎堀に見たてている。堀切や土塁等はなく、小規模な城である。浦集落の奥まる位置にあり、鵜峠への交通路に対して構えている。山麓の学校地あたりが居住区であろうか。伝承等は不明である。



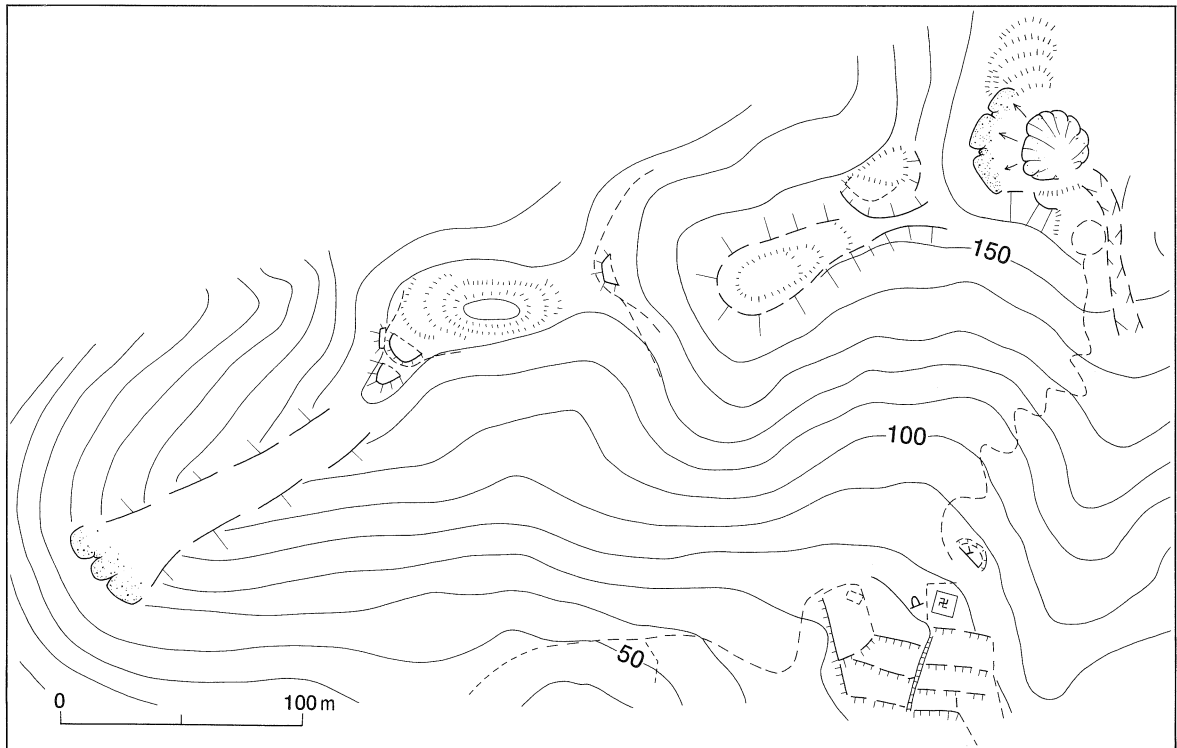
ハ1 鵜鷺蛇バン谷城跡略測図

ハ4 蛇山城跡 簸川郡大社町大字遥堪 地図番号 35

現状 山林 保存状況 不良 立地 丘陵頂部 標高 175m 比高 160m

概要

頂部の単郭のみである。ここからは南西大社方面の眺望が利く。西に張り出す尾根は自然地形のまま利用されたと見られ、その先端は岩壁に至る。南側の中腹には、寺庵や墓地があり、付近は広い畑地で館跡と伝えられる。



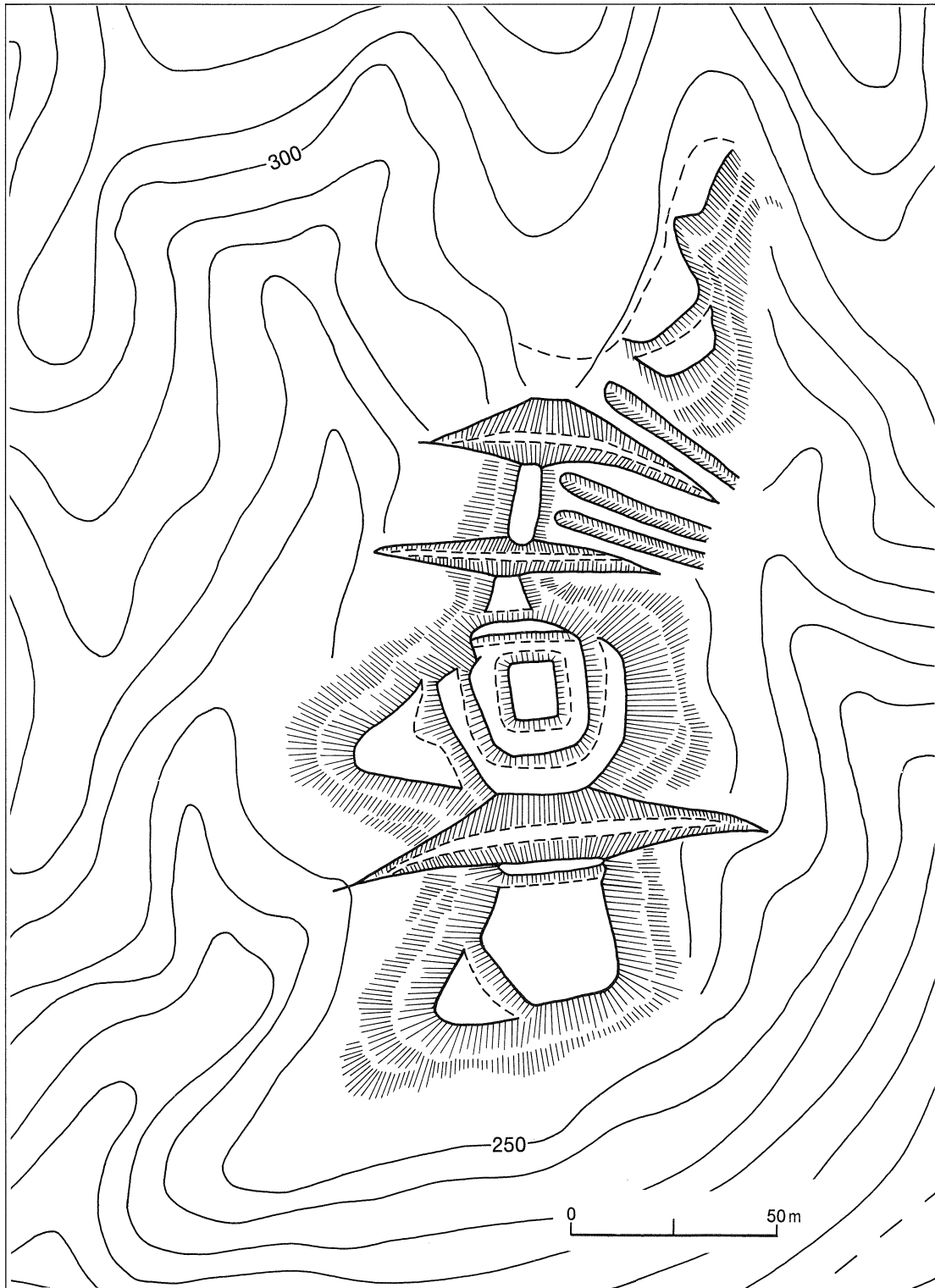
ハ4 蛇山城跡略測図

ヒ2 石宇城山城跡 簸川郡佐田町大字朝原 地図番号 30

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵先端 標高 300m 比高 100m

概要

選地は地域の全域を見下ろす位置を占め、突出する尾根の3箇所を堀切で遮断し、中央部が主郭となつて櫓台を設け周囲に腰郭を配置する。東側緩斜面の3条の豎堀は稜線の堀切に平行し、防御の効果を狙っている。この豎堀は緊急時の連絡通路と見られ、他に登り道は見当たらない。



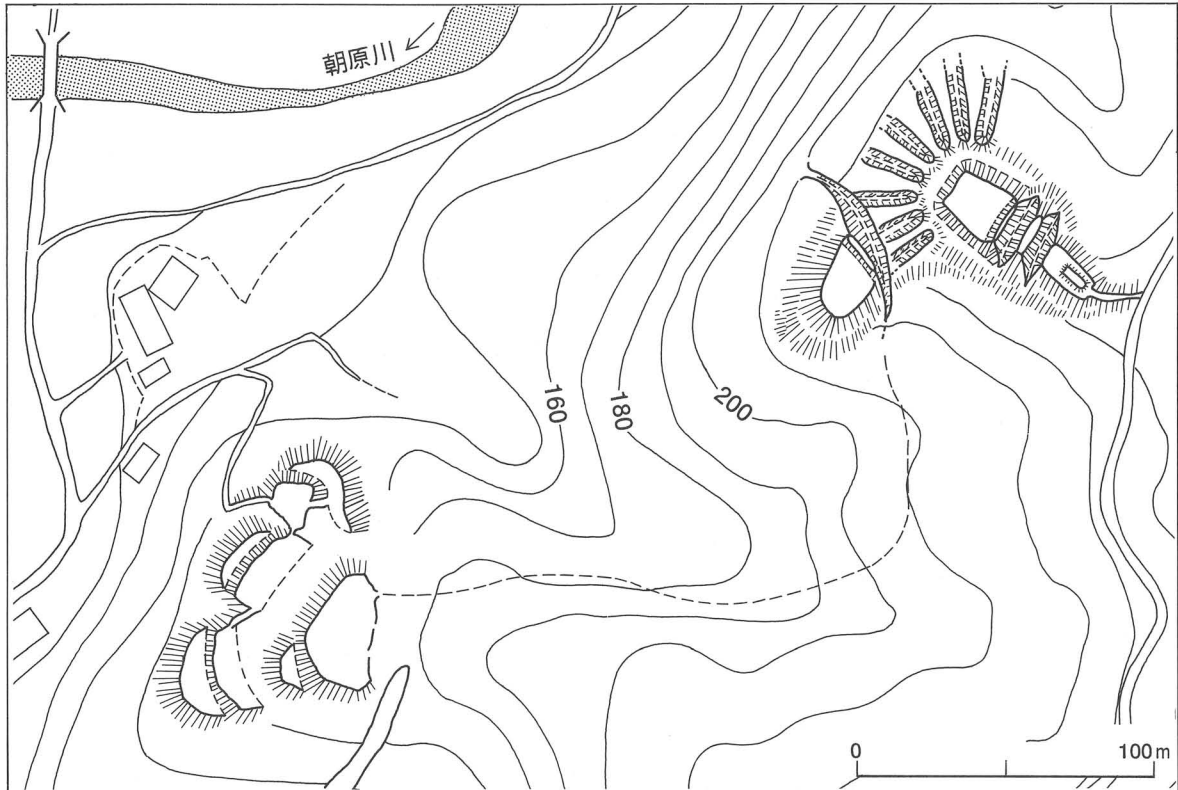
ヒ2 石宇城山城跡略測図

ヒ3 立花城跡 簸川郡佐田町大字宮内 地図番号 30・37

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵先端 標高 240m 比高 100m

概要

小さな尾根の先端の背後を二重の大きな堀切で遮断し、一つの郭を主郭として独立させている。主郭直下の緩斜面に築かれた8条の放射状の豎堀が特徴で、その先端の尾根も堀切で遮断している。須佐高槽城の支城であったと伝えている。



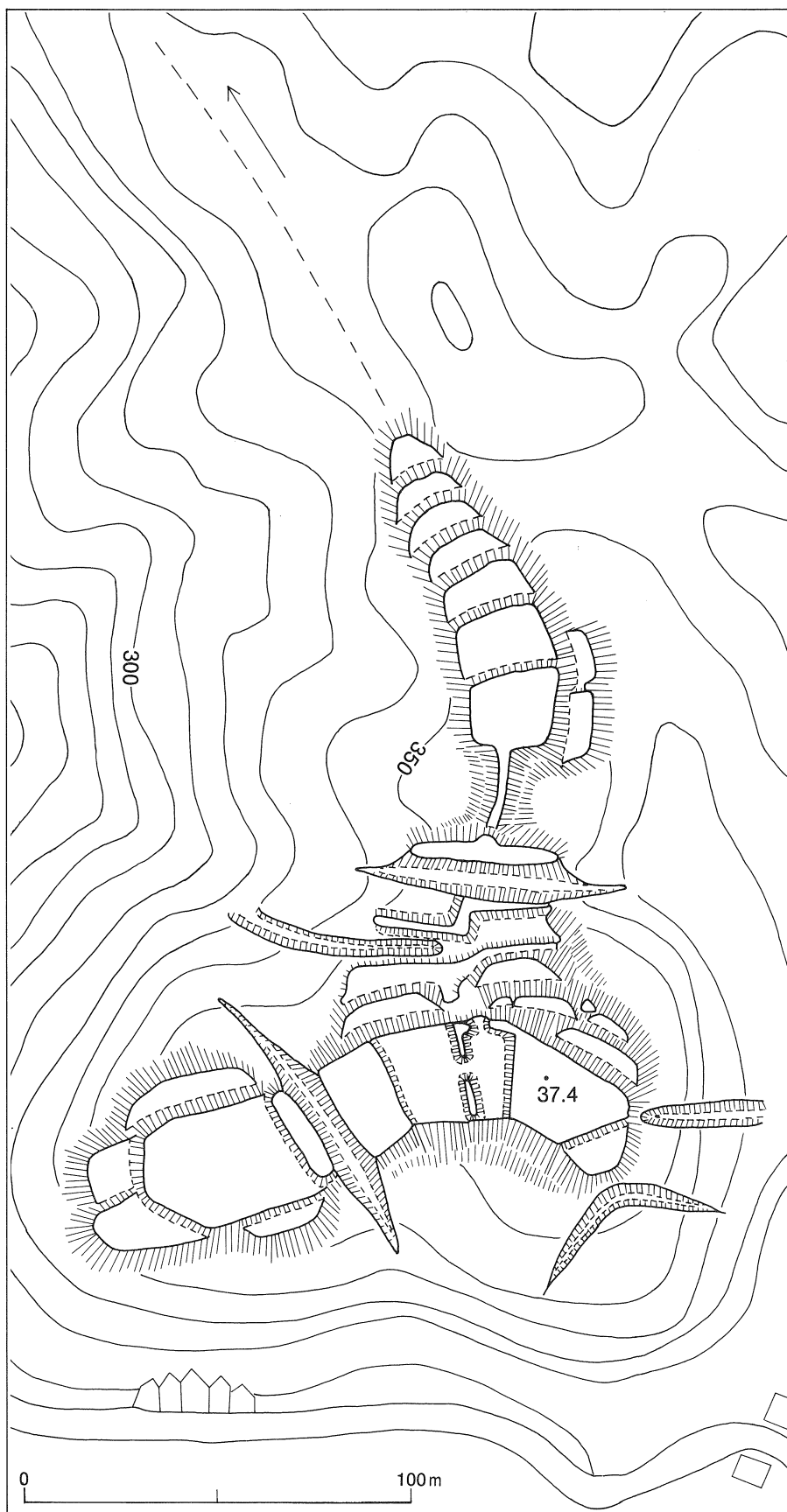
ヒ3 立花城跡略測図

ヒ4 尾崎山城跡 簸川郡佐田町大字宮内 地図番号 30

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 374m 比高 74m

概 要

地元では「じゃ山」と呼んでいる。堀切で遮断した中央部を主郭として土塁で囲み、緩斜面に通じる北側に虎口を開け、外側には郭群と土塁を配置するなど複雑な普請が特色である。登り口は見当たらないが、北東側の堀切が緊急時の通路であろう。須佐高櫓城の支城であったと伝えられている。



ヒ4 尾崎山城跡略測図

ヒ5 高櫓城跡 簸川郡佐田町大字反辺 地図番号 36・37

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 307m 比高 157m

概要

出雲と石見、山陰と山陽をつなぐ街道の要衝に位置する。その縄張りは広く、集団城郭形式をもつ城で、主郭を囲む周囲の丘陵にも後詰めに備えた陣形を配置する。永禄年間初期までは尼子の城とし



ヒ5 高櫓城跡略測図



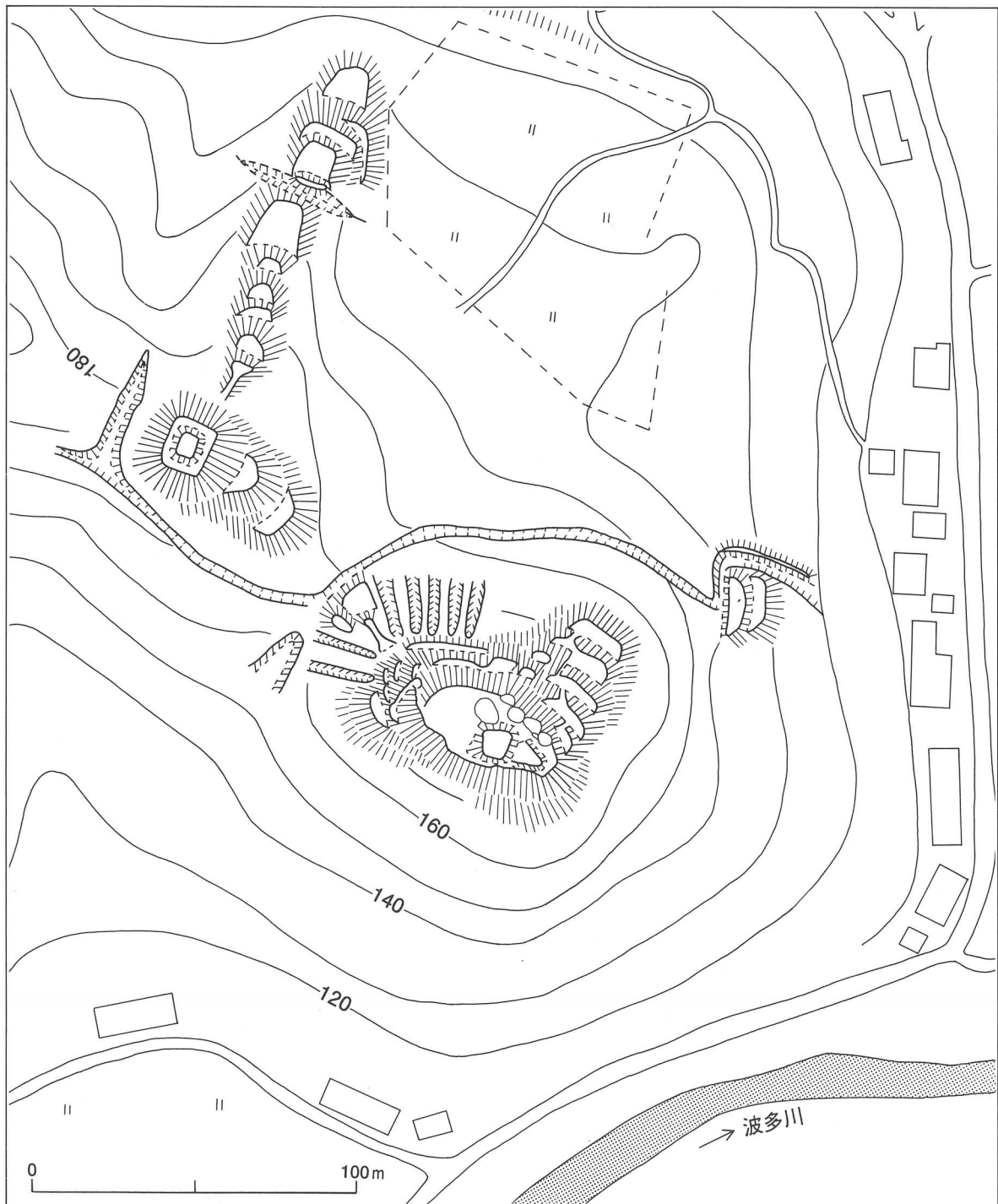
て本庄常光が城督であったが、永禄五年（1562）に常光が元就によって肅清された後、毛利方の城として関ヶ原の戦いまで続く。主郭部の北側を削り落とした壁にし、堀切と郭群を連続させ、南西側の緩斜面には郭群、腰郭の下方に連続堅堀、蛇行する通路には横矢構えなどを備えている。

ヒ8 茶磨山城跡 簸川郡佐田町大字大呂 地図番号 37

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵先端 標高 190m 比高 100m

概要

街道筋に突出した尾根の先端部にあつて、山頂の主郭に地元で秋葉神を祭る。主郭部直下の周囲は急斜面になるが北側と西側山腹は緩斜面となり、ここには7条の連続縦堀とその上に腰郭を配置している。西側から続く稜線は堀切で遮断しこの部分にも郭群を置き、小さいながら纏まりのある城跡である。



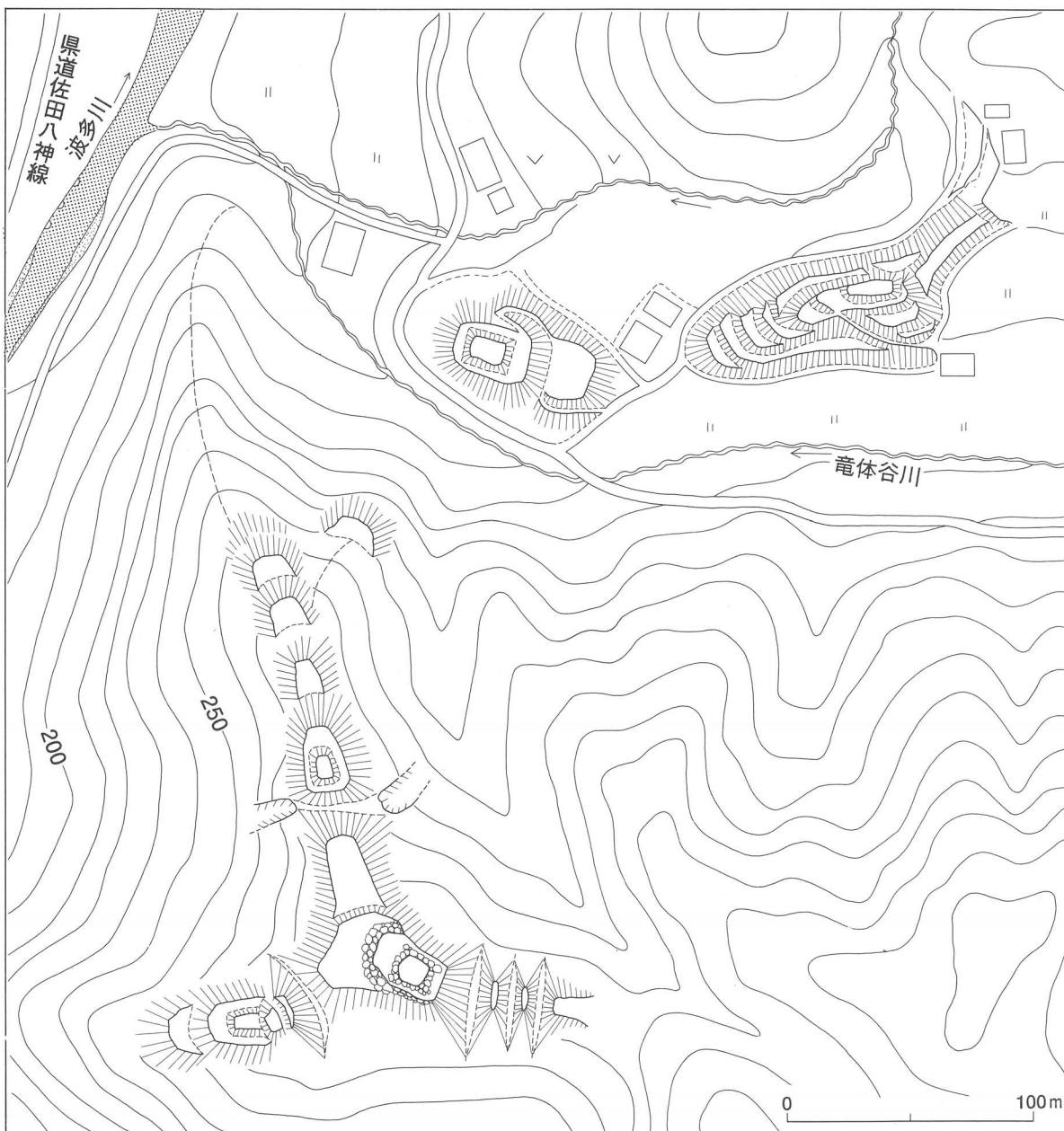
ヒ8 茶磨山城跡略測図

ヒ10 竜体谷城跡 簸川郡佐田町大字大呂 地図番号 37

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 260m 比高 90m

概要

街道の分岐点の城である。主郭部に近い続き尾根の鞍部を三重の堀切で遮断し主郭の中央には祭祀跡と見られる石組の小区画がある。段差を持つ郭は自然石を積んで土止めにし、二つに分かれる尾根も掘りきっているがその先端にも石積みの郭群を設けている。北側の谷の対岸にも物見台と郭群を持つ区画がある。



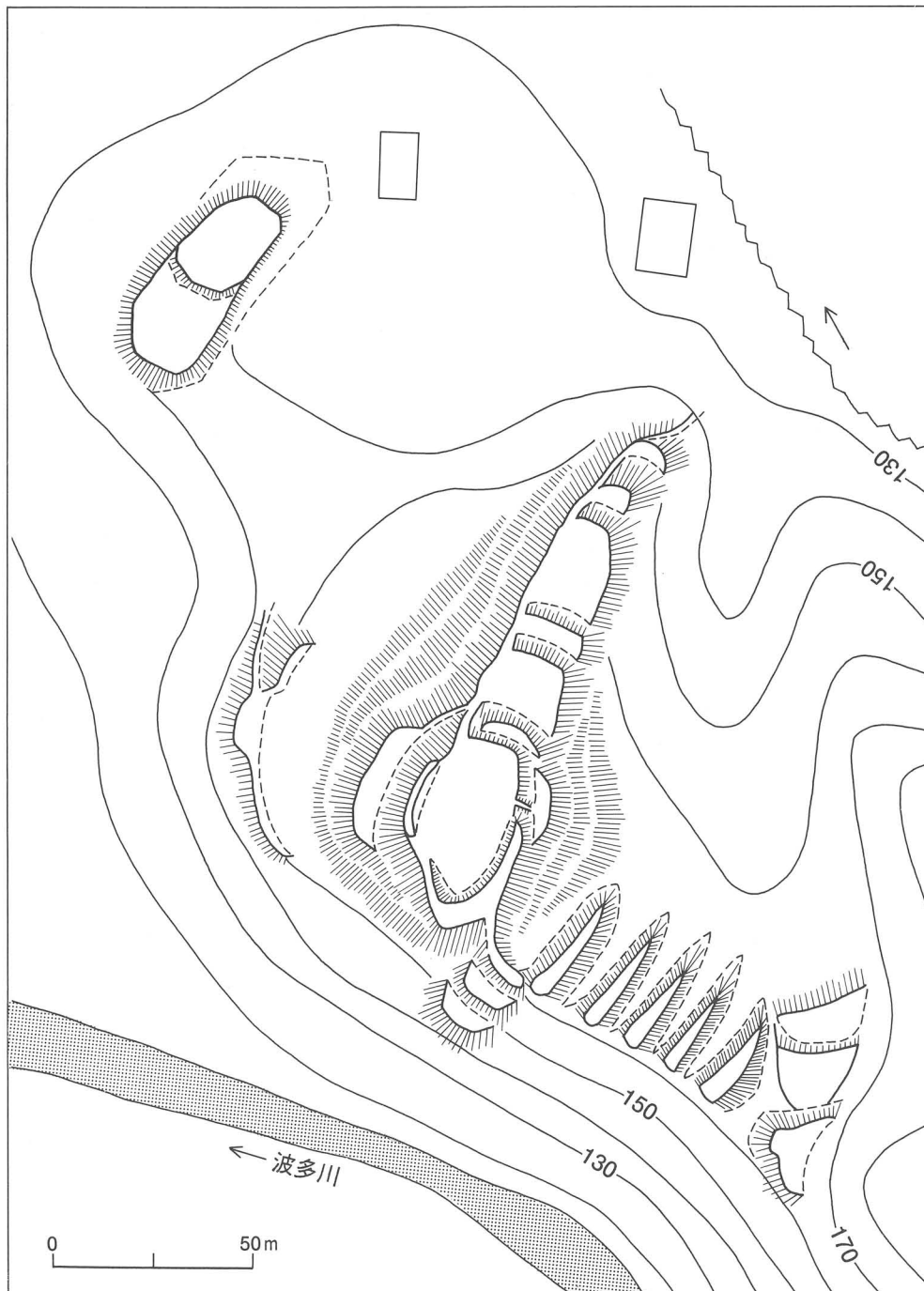
ヒ10 竜体谷城跡略測図

ヒ11 八幡山城跡 簸川郡佐田町大字大呂 地図番号 37

現状 山林、社寺境内 保存状況 やや良 立地 丘陵先端 標高 190m 比高 70m

概要

南側の急斜面の下方は波多川を堀に見立てている。続き尾根の鞍部を4本の堀切で遮断し、堀切は北側の緩斜面に延長した連続縦堀に仕立て背後に備えている。最上段の主郭の背後も大形の土塁で遮蔽している。北側に降りる斜面には高い段差を持つ郭群が連続し、中腹の郭には八幡宮の跡地が残る。



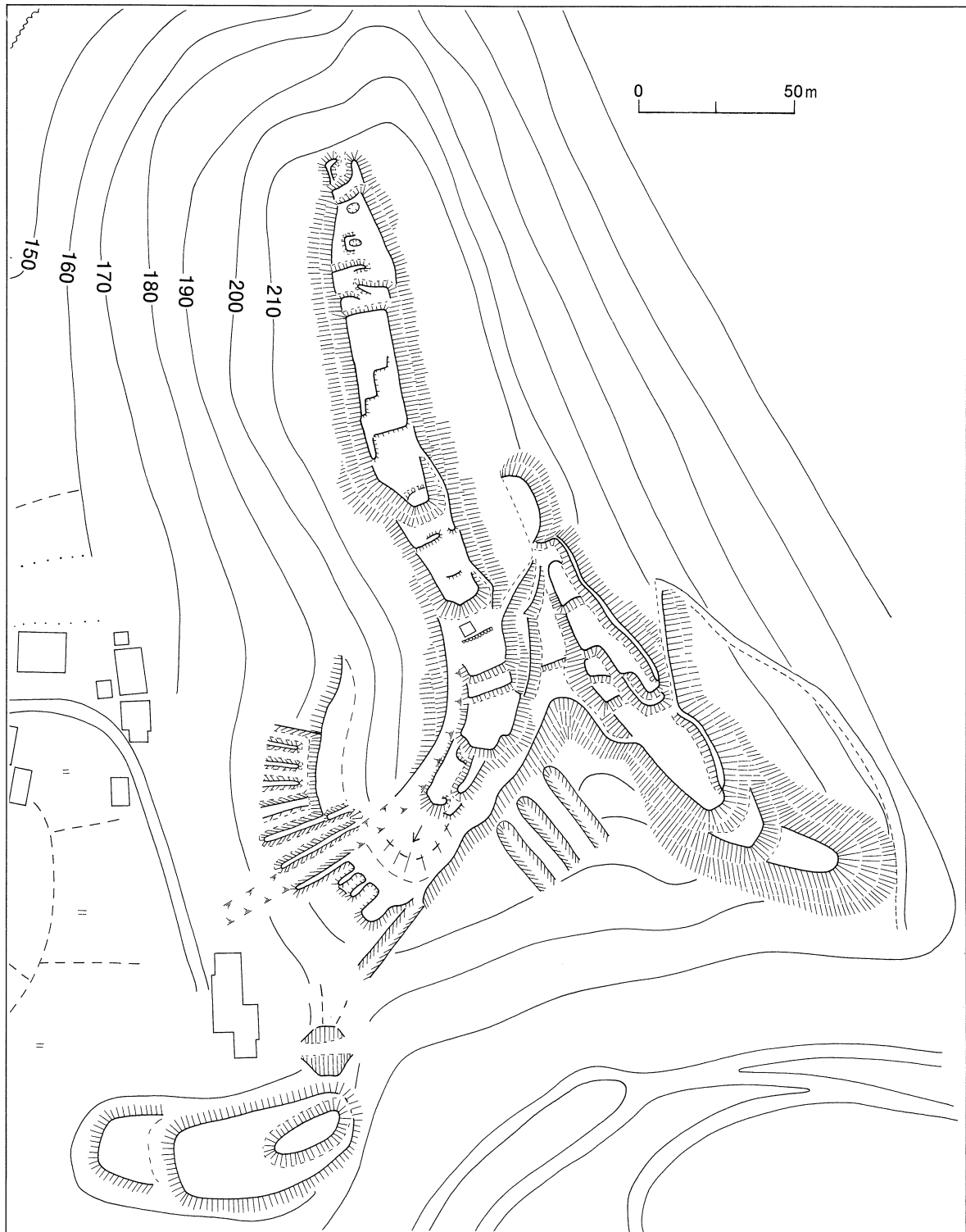
ヒ11 八幡山城跡略測図

ヒ14 伊秩城跡 簸川郡佐田町大字一窪田 地図番号 37

現状 山林、公園 保存状況 やや良 立地 独立丘陵 標高 240m 比高 90m

概要

この地域は古代から伊秩と称されている。城は応仁の乱の戦功で山名宗全の被官人、井筒行守が因幡国から移封され、地名の伊秩を姓にしたと伝える地域支配の城である。しかし現在に見える城の構造は後世に幾度かの改修を経た結果であろう。主郭となる頂部は広く、階段状の郭群で下降し、間に八幡郭を持ち、両端部に水源を備えている。南側の緩斜面は腰郭と連続竪堀群を配置する。大永三年



ヒ14 伊秩城跡略測図

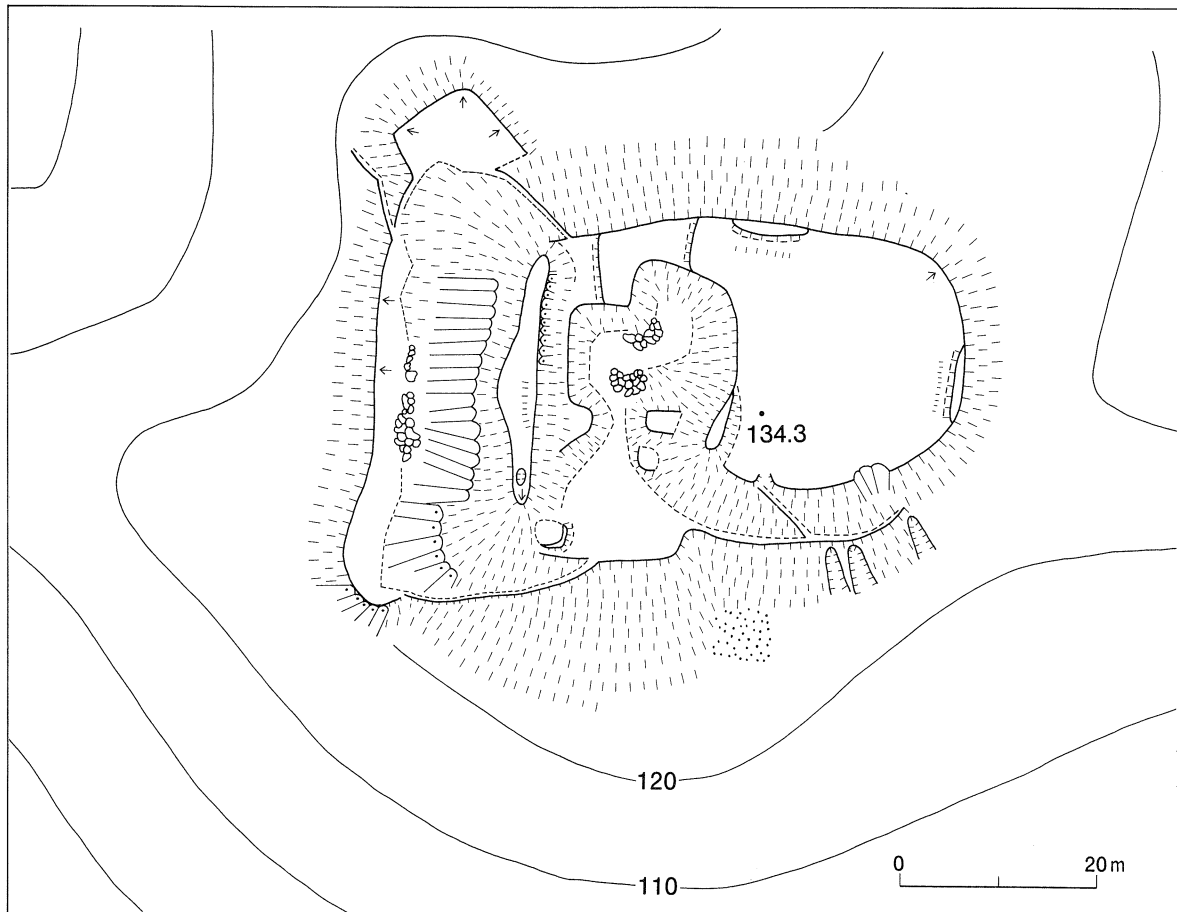
(1523)、尼子経久に攻められて落城、尼子解体の後、元就は出雲国内36個所の城に城督を置くが、その中にこの城と高櫓城がある。

**フ4 要害山城跡** 簸川郡湖陵町大字二部 地図番号 36

**現状** 山林 **保存状況** 良 **立地** 丘陵頂部 **標高** 134m **比高** 50m

**概要**

主郭の西部は、S字形に屈曲した凹地をなしており、敵兵が幅1メートル程度の木戸口を破って侵入すると、三方から俯瞰射撃が掛けられるような縄張りになっている。さらにその西部は高低差10メートル程度の崩落地形をなしており、この懸崖を縄張りに活用するねらいで地取りしたものであろう。



フ4 要害山城跡略測図

へ2 富士ヶ城跡 簸川郡多伎町大字小田 地図番号 36

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 148m 比高 110m

概 要

標高150メートルの主郭部と、小田川の曲流部に面した尾根先の郭群からなる。主郭部西端には櫓台と思われる高まりがあるが、全体に普請は雑である。これに対して尾根先の郭群のそれはいいねいで、対照的である。なおこの間の鞍部は岩石の採取によって大きく削られているが、小田氏の居館があったと推定される。



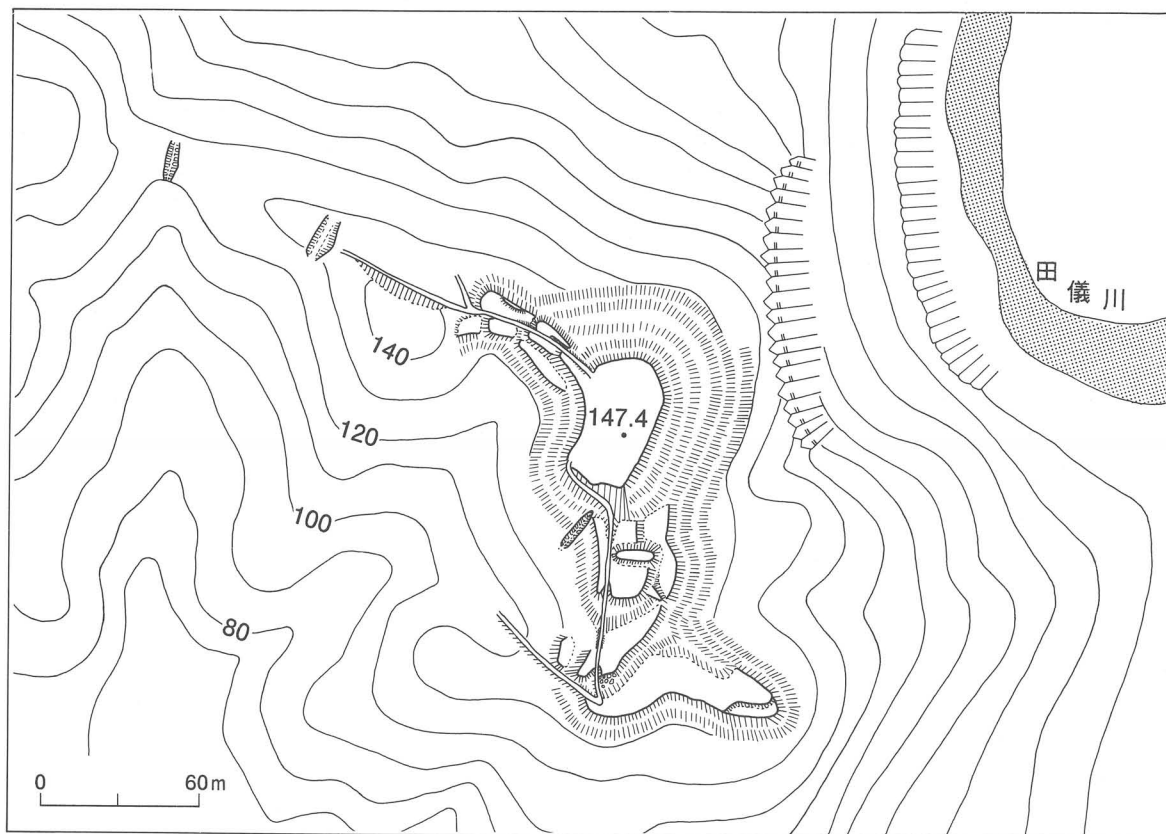
へ2 富士ヶ城跡略測図

へ4 鶴ヶ城跡 簸川郡多伎町大字口田儀 地図番号 41

現状 山林、公園 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 147m 比高 135m

概要

出雲と石見の国境の仙山峠を見下ろす、田儀川沿いの丘陵上に立地している境目の城。北西方の稜線には二本の堀切を掘って北方からの攻め口を切断している。仙山峠側から望める主郭南方の郭の切岸にだけは人頭大の石を積み上げており、見られることを意識した普請が施されている。ただ現在では、遊歩道工事のために破壊されて転落しているものが多い。



へ4 鶴ヶ城跡略測図

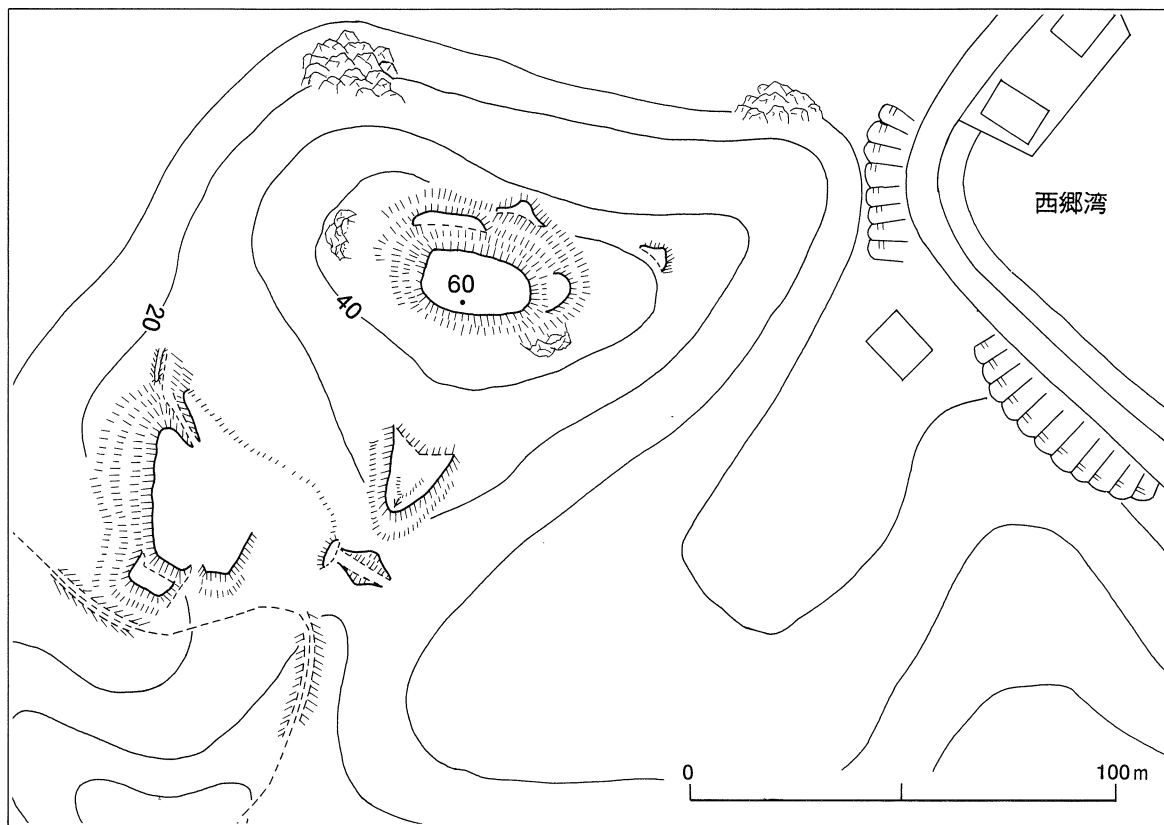


ホ1 宮田城跡 隠岐郡西郷町大字東郷 地図番号 44

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部 標高 60m 比高 55m

概要

西郷湾のもっとも奥部で、かつては城域の北側にも西郷湾が湾入していたというから、北部と東部が海に面した孤立丘の上に地取りした海城である。南方は堀切で切断しているが、駐屯空間として利用できるかなだらかな丘陵が続く。主郭南西の地点に居館跡らしい平坦面も残されている。



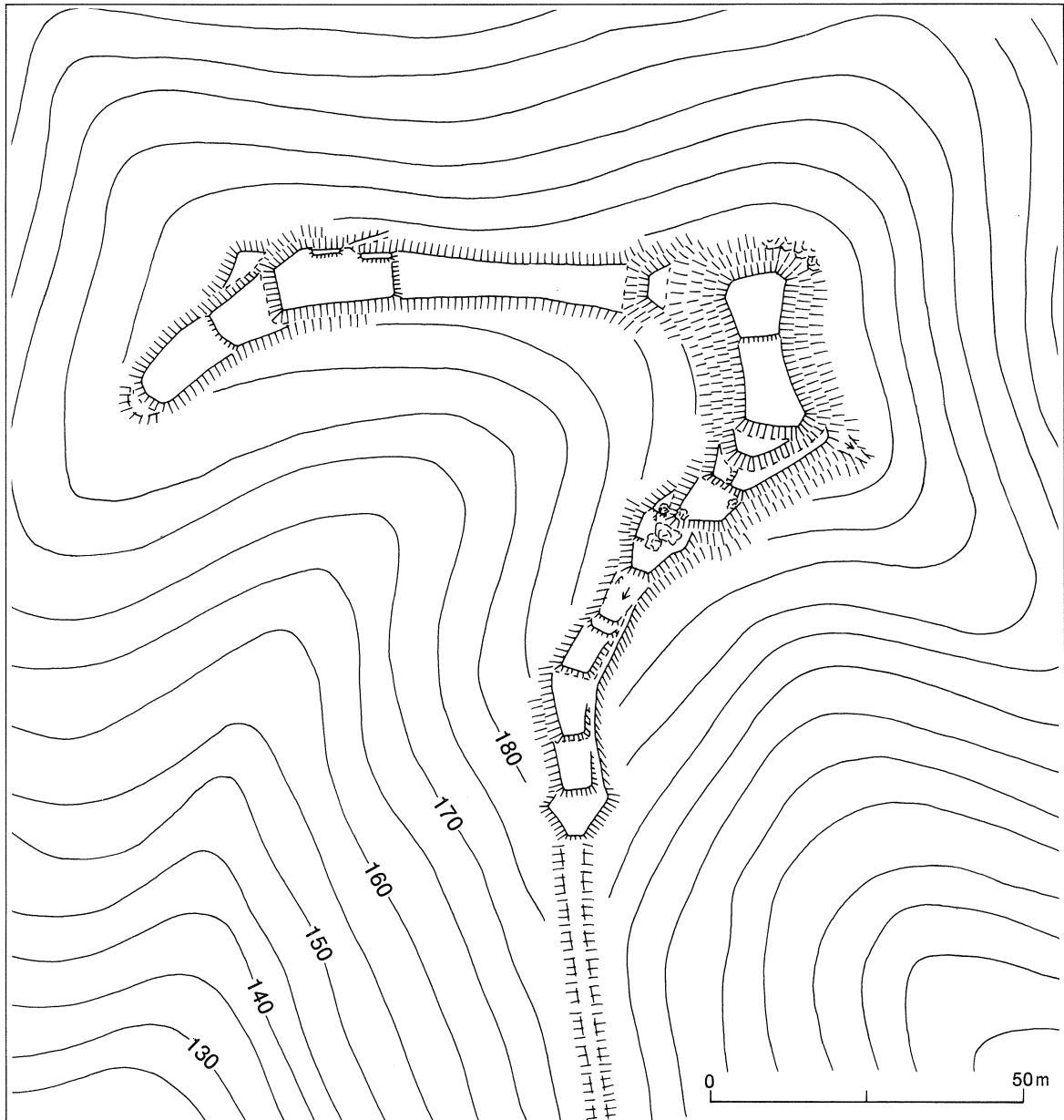
ホ1 宮田城跡略測図

ホ4 勝山城跡 隠岐郡西郷町大字原田 地図番号 46

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 218m 比高 180m

概要

主郭は最高所と考えられ、急峻な地形を利用して多くの防御施設を築いている。堀切は確認出来なかったが、主郭西側の郭には土塁が築かれており、虎口を構成している。主郭からは国府尾城を望むことが出来る。尼子勝久、山中鹿介等の尼子再興軍は但馬から隠岐に入国すると当城を拠点として勢力を整えた後、島根半島の千酌に上陸したとされる。



ホ4 勝山城跡略測図

ホ5 国府尾城跡・国府原館跡 隠岐郡西郷町大字港町 地図番号 44

(城跡) 現状 社寺境内、山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 129m 比高 129m

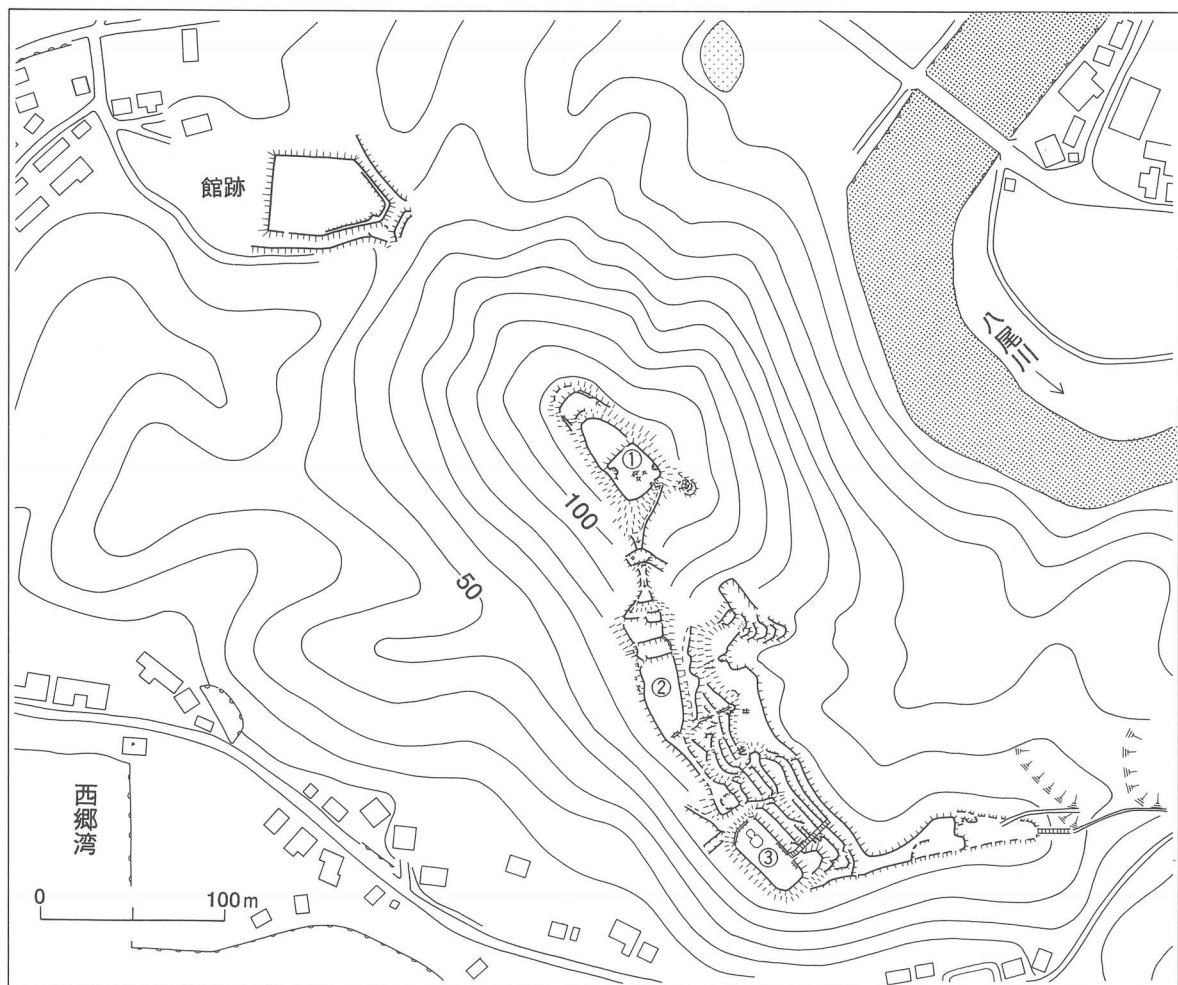
概 要

西郷湾北岸に接する位置に所在し、水運を意識した城郭である。東側から北東にかけて八尾川が囲む要害の地であった。主郭は最高所の1郭と考えられ西側に虎口が築かれている。主郭の南に築かれている堀切に井戸が認められる。2郭、3郭はまとまった面積を持ち、中核的な役割をもっていたものと考えられる。周囲に多くの腰郭を持つが、近年の改変が著しい。特に2郭東側から麓にかけての施設は慎重に検討を行わなければならない。主郭西北麓に堀切と土塁によって防御を固めた居館が築かれている。隠岐氏の居城として知られる。

(館跡) 現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵麓部

概 要

国府尾城の西北麓に位置し、隠岐氏の居館として知られている。尾根筋には土塁と堀切を築いて防御を固めている。館は方形を指向しており、普請は十分である。



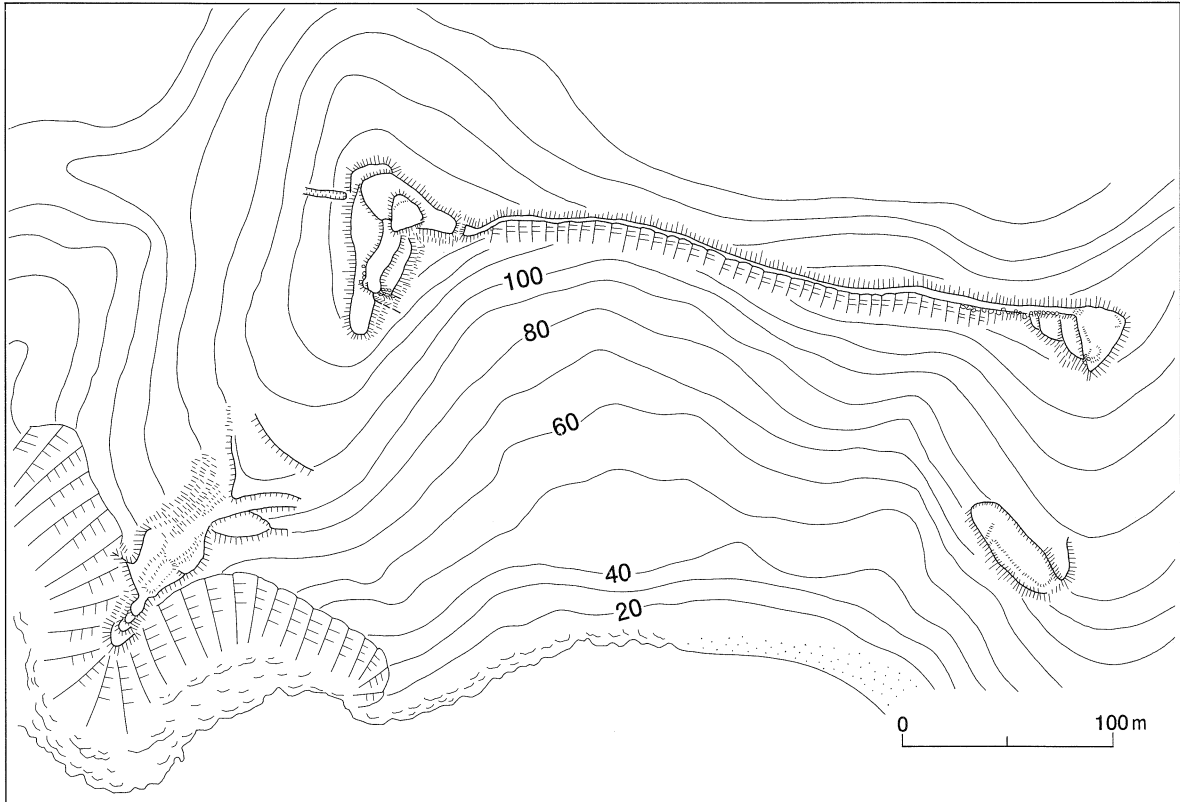
ホ5 国府尾城跡・国府原館跡略測図

ミ3 高尾城跡 隠岐郡都万村大字那久 地図番号 47

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 140m 比高 130m

概要

主郭を取り巻くようにして周囲に郭を配している。約300メートル東の丘陵突端にも郭が配置されており、その間は、浅い堀切をはさんで稜線上の通路によってつながっている。



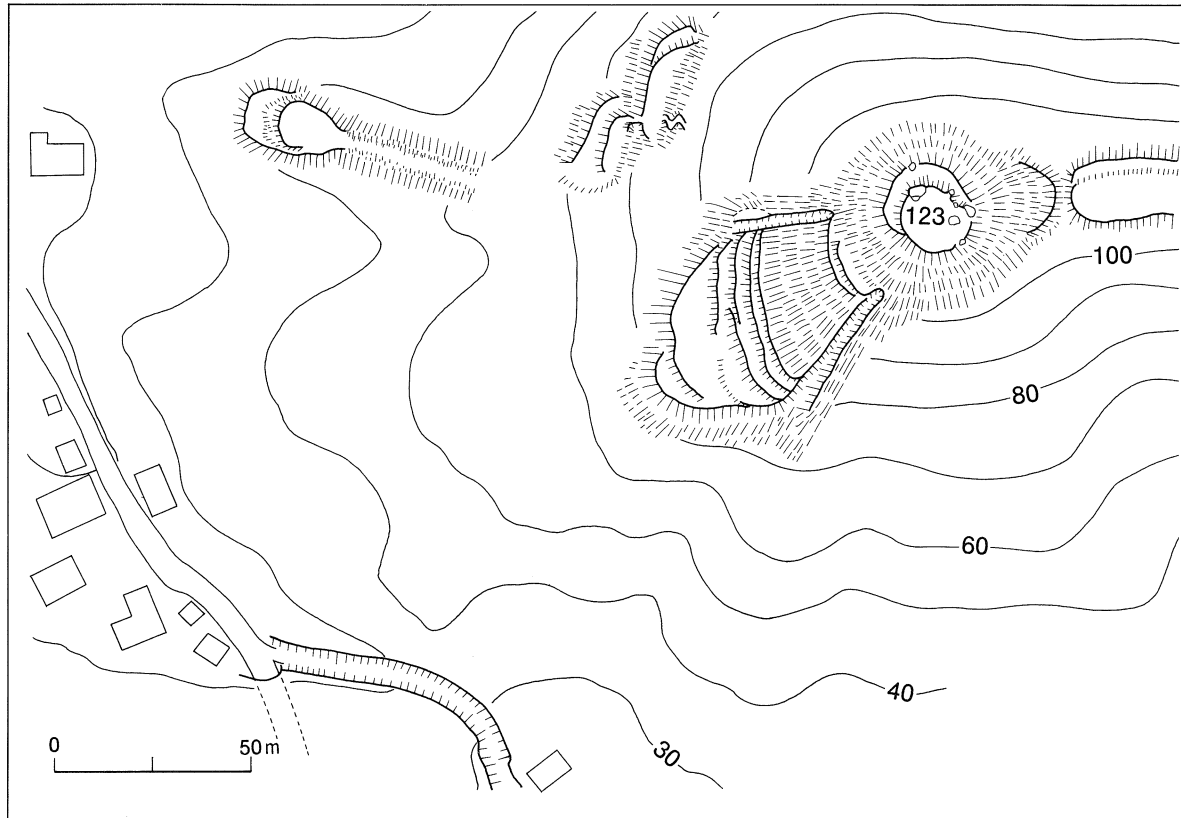
ミ3 高尾城跡略測図

ミ4 奈森城跡 隠岐郡都万村大字都万 地図番号 47

現状 山林 保存状況 不良 立地 丘陵頂部 標高 123m 比高 100m

概要

都万平野に向かって突き出した丘陵上に立地しており、主郭の東部には堀切が掘られて背後の丘陵と切断している。主郭の西下方の標高30メートルの地点は字「堀切」と呼ばれるが、その名のとおり堀切があって生活道路として利用されている。東西の谷のせばまる地点なので、中世の堀切が拡張されて現在に至ったものかもしれない。



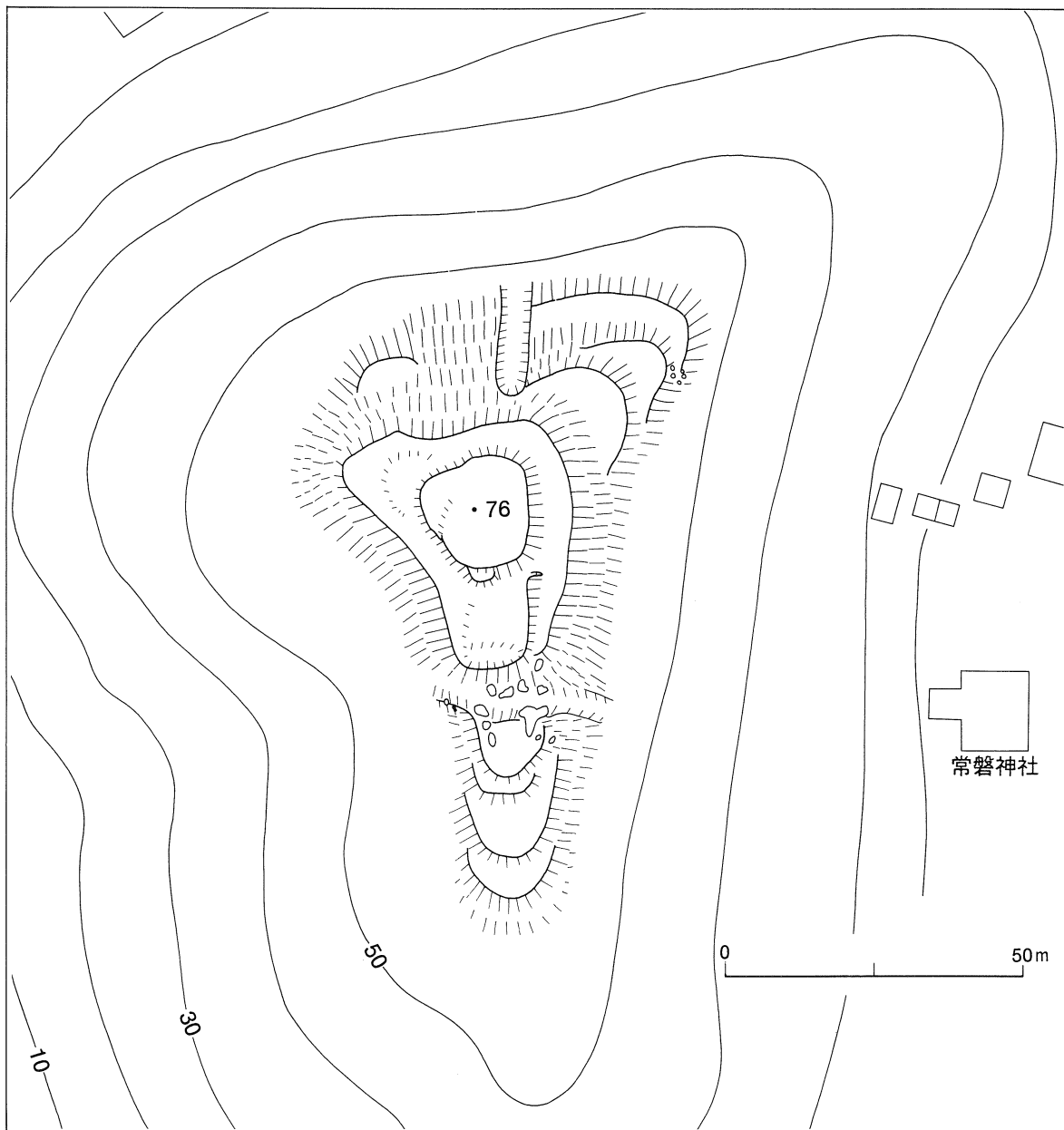
ミ4 奈森城跡略測図

△4 稲荷山城跡 隠岐郡五箇村大字南方 地図番号 46

現状 山林 保存状況 やや良 立地 丘陵頂部 標高 76m 比高 76m

概 要

重栖湾に続く重栖川に接しており、水運を意識した城郭と考えられる。主郭は最高所と考えられ、周囲を腰郭が取り巻く。尾根筋には堀切を築いているが、岩盤に阻まれて不十分なものとなっている。



△4 稲荷山城跡略測図

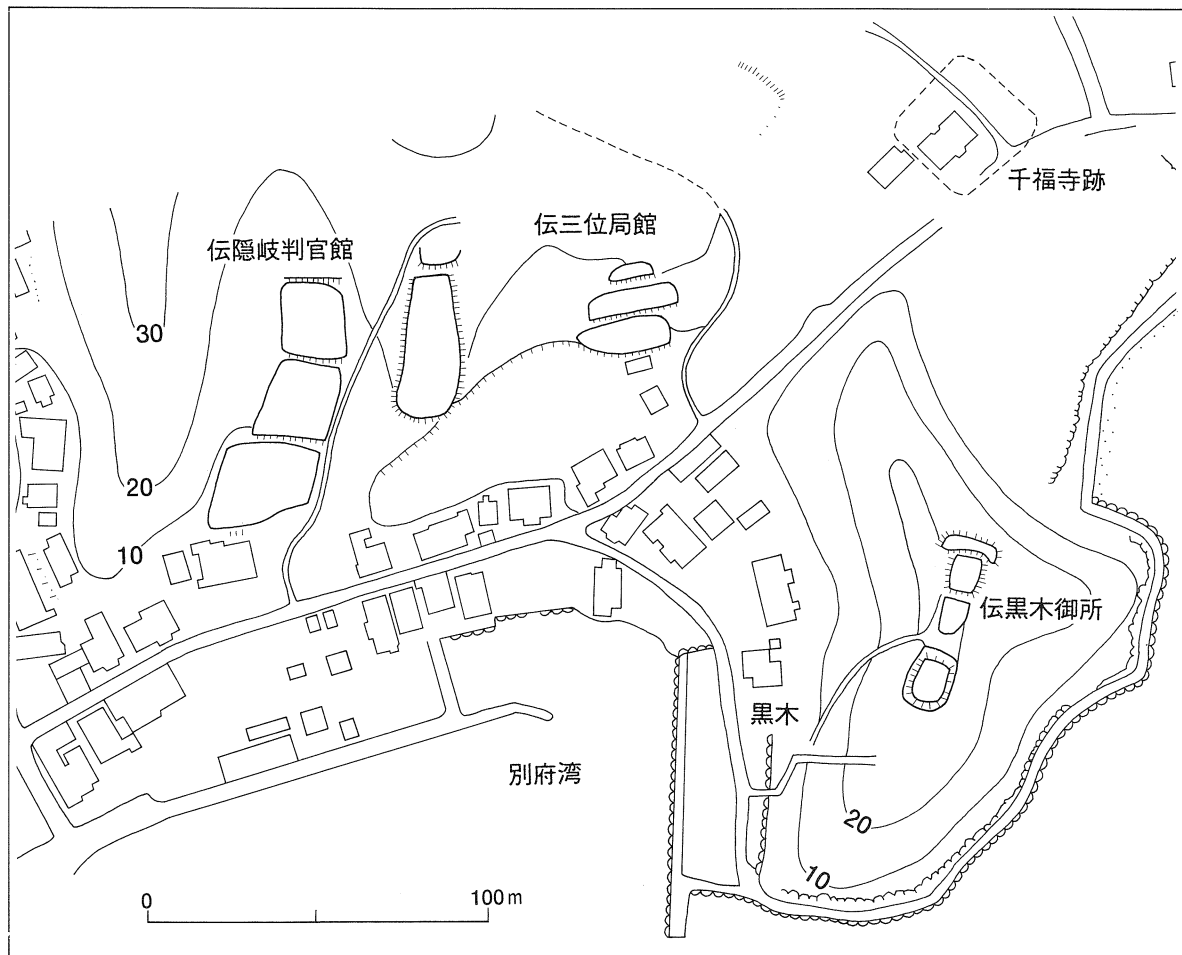
メ1・メ2・メ3 伝黒木御所跡・伝三位局跡・伝隠岐判官館跡 地図番号 50

現状 山林 保存状況 不良 立地 独立丘陵及び丘陵麓部

標高 30~10m 比高 20m(各遺跡の海拔差)

概要

黒木御所跡は、別府地区の東端黒木山の山頂に位置しており、南側眼下には島前内湾、眼前には中ノ島が横たわる。尾根部は、現在道路により切断されているが、北側尾根からが参道と考えられる。山頂北側には土塁をつくり、南側には2段の平坦地、堀切状の遺構がある。三位局跡は御所跡より北西側の字坪ノ内に位置し、3段の平坦地があり、中心部と思える平坦地に碑が建つ。隠岐判官館跡は、三位局跡の東側の字ニシノエの緩斜面に位置しており、階段状に数段の平坦地がある。また西側丘陵部にも平坦地がある。一部は発掘調査が実施されたが、遺構検出までには至らなかった。文献、遺物、島前の伝承等からこの3遺跡は、後醍醐天皇配流の関係遺跡としても、再検討が必要である。



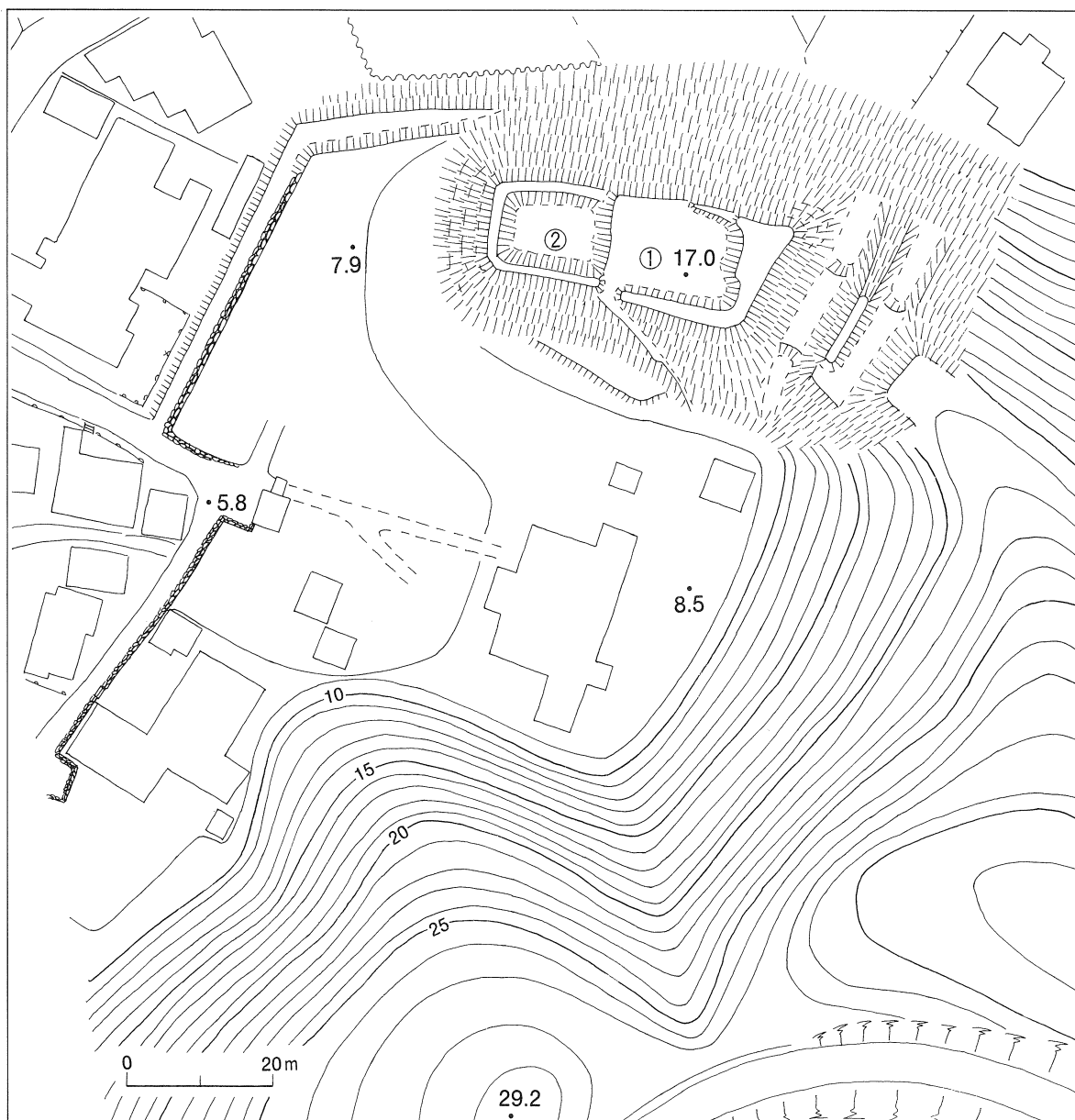
メ1 伝黒木御所跡・メ2 伝三位局館跡・メ3 伝隠岐判官館跡略測図

ヤ1 因屋城跡 隠岐郡海士町大字海士 地図番号 48

現状 山林 保存状況 良 立地 丘陵頂部～麓部 標高 20m 比高 12m

概要

承久の変によって後鳥羽上皇が流されたときに世話をしたのが村上氏と伝えられる。村上氏館は周囲を尾根が取り巻く谷戸地形に築かれており、西北のみが開いていた。当時は館の門の近くまで海であったと伝えられている。因屋城は村上氏の館の北隣りの尾根に築かれている。尾根筋を二重堀切で遮断しているが、主郭1側の堀切は規模が大きく、壁の普請も十分になされている。主郭は2郭と接する面と北西以外は土塁を築いている。堀切に接する部分は土塁の幅が広いので、櫓台として築かれたものと考えられる。2郭は主郭に西側に築かれているが、穴蔵状の遺構である。出入口が確認できないので櫓形虎口ではない。土塁状のものは西側からしだいに高くなり、主郭南側の土塁と虎口を形成している。この虎口は僅かだがずれており、食違虎口となっている。因屋城は小規模な城郭だが、戦国期のものとして完成度が高いため、島外の勢力によって改修された可能性がある。館と城郭がセットであり、貴重な遺構である。



ヤ1 因屋城跡略測図





## 5 城館関連史料一覧

### 凡 例

- 1 この表にみられる事項は、出雲・隠岐の中世城館で、中世文書に明確に当該城館、もしくは、当該城館をめぐる事項と判断されるもの〔 〕を付して表記)を掲載した。従って、戦記物など史料的に検討を要するものは、今回は、これに含めなかった。
- 1 この表作成にあたり直接用いた史料は以下のとおりである。

#### 既活字史料

『萩藩閩閩録』マツノ書店(防長寺社証文を含む。／表中では「萩閩」と略す。以下( )内略名。)、『大日本古文書 家わけ 毛利／吉川／小早川家文書』東京大学出版会(大日古)、『新修島根県史 史料編』(新島史)、「石見久利文書の研究」『立命館大学人文科学研究紀要』16、1967(久利家什書)、『隠岐国因屋城』隠岐島前教育委員会 1985、『鳥取県史』1973、『隠岐の文化財』(隠岐文)隠岐島後教育委員会、「石見小笠原文書について」『山陰地域研究紀要について2(伝統文化)1986(山陰地研)』、「安芸内藤家文書」『広島大学文学部紀要 第四九卷特輯号一』広島大学文学部 1990。『富家文書』島根県古代文化センター 1996。「堀立家証文」『内海文化研究所紀要』16、1988。

#### 未活字史料

『(大社町)坪内家文書』、『(出雲市)朝山家文書』、『(出雲市)神門寺文書』、『日御碕神社文書』、『佐々木文書』、『多胡家証文』山口県文書館所蔵、『三刀屋文書』東大史料編纂所蔵、『吉川家中並寺社文書』(吉川家中)岩国徴古館蔵、『岩国藩中諸家古文書纂』(岩国諸古)岩国徴古館蔵  
(未活字史料については、島根県立図書館所蔵の旧島根県史(明治末・大正期)編纂時に作成した影写本、島根県中世史研究会において長年蒐集したデータを活用させていただいた。なお、同研究会の蒐集史料の閲覧にあたっては、本調査の調査指導をいただいた井上寛司氏(元島根大学教授、現大阪工業大学教授)に便宜をお計いただいた。)

なお表中の出典の欄には、おおむね原史料名史料所載刊本名・論文名の書名全部もしくは略名と、各刊本の文書番号もしくはページ数を記し置いた。略名については上記( )内を参照されたい。

- 1 ここにみられる城館名は、史料上の名称であり、現在、現地に残されている城館名とは必ずしも一致しないことがあるので、あらかじめお断りしておく。

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西 曆	文 書 名	出 典
赤 穴 城	天文 11、7、29	1542	大内義隆袖証判出羽裕盛軍忠状	萩閼卷43出羽-80
赤 穴 要 害	天文 11、8、24	1542	大内義隆感状	萩閼卷46大庭-10
赤 穴 一 城	天文 13、9、3	1544	赤穴久清置文	萩閼卷37中川-114
赤名瀬戸要害	天文 13、9、3	1544	赤穴久清置文	萩閼卷37中川-114
赤 穴 表	(永禄 5) 7、29	1562	三吉隆亮書状	萩閼遺4浄専寺-1
赤 穴 表	(元亀 元) 1、21	1570	毛利元就書状写	萩閼卷35阿曾沼-6
赤 穴 表	(元亀 元) 1、21	1570	毛利元就書状	萩閼卷48阿曾沼-1
赤穴瀬戸籠城				萩閼卷37中川-補
尼 子 要 害	天文 12、3、20	1543	内藤興盛感状	萩閼卷170勝間田-12
尼子要害大手口	天文 22、6、16	1554	内藤興盛感状	萩閼卷170勝間田-12
尼子之本城	(永禄 11) 3、28	1568	毛利輝元直状	萩閼卷15国司-28
尼子殿土居	年未詳 4、14		毛利輝元書状	萩閼卷16志道-16
阿用庄蓮花寺城	観応 元、8	1350	諏訪部貞助(扶貞)軍忠状	三刀屋文書23
阿用福富之要害	(元亀 元) 2、7	1570	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-18
あらわひ崎	(永禄 5、12)	1563	毛利元就書状	萩閼卷52兼重-2
洗 会 在 陣	(永禄 8) 8、10	1565	毛利元就書状	萩閼卷34草刈-1
あらわい	(天正 9) 3、20	1581	吉川経家自筆書状	大日古・吉川別集石見吉川145
洗崎御陣所	(天正 12) 6、28	1584	内藤隆春書状	防長29今八幡-6
あらわひ	年未詳 11、18		吉川元春奉行人連署書状	大社町坪内家文書24
あらわひ	年未詳		内藤家之次第覚書	安芸内藤家文書105
洗 合	年未詳		香川家軍功略記	吉川家中2-91
洗骸御陣所				萩閼卷53樽崎-22補
石 丸 城	観応 2、9、22	1351	須和部信恵(扶重)軍忠状	三刀屋文書50
井尻難波城	文明 3、12、11	1471	京極政高感状	佐々木文書
忌 部 普 請	(元亀 元カ) 3、27	1570	吉川元春書状	萩閼卷123野村-14
牛 尾 要 害	永禄 13、卯、17	1570	出雲国牛尾要害合戦頸注文	大日古・毛利文書374
牛 尾 陣	(元亀 元) 4、20	1570	毛利輝元書状	萩閼卷102冷泉-18
牛 尾	年未詳 6、6		吉川元春書状	岩国諸古14
牛 尾	年未詳 6、6		吉川元春書状	岩国諸古14
内 固 屋 在 番	年未詳 7、10		毛利輝元書状	萩閼卷20桂-7
畝 地 山	(天文 22) 12、3	1553	山内隆通条数	萩閼卷13ノ1山内-3
馬 田 城	応仁 2、10、20	1468	京極持清感状	佐々木文書
馬 田 城	(応仁 2) 10、23	1468	京極持清感状	佐々木文書
江 田 表	天文 22、12、26	1553	尼子氏奉行人連署書状	大社町坪内家文書41
ゑたらうしゃう	天文 23、極、26	1554	疋田幸利書状	隠岐・国代考証「隠岐文」1-c8
江 田 表	永禄 4、7、20	1561	尼子義久袖判奉行人連署奉書	大社町坪内家文書44
塩冶周防守城	文明 17、11、3	1482	山名政豊感状	萩閼卷89田総-17
お く 津	(永禄 6)	1563	毛利隆元書状	萩閼卷138兼重-2
お く 津	(永禄 6)	1563	毛利隆元書状	萩閼卷138兼重-3
尾 小 森 口				萩閼卷53樽崎-22補
尾 小 森 口				萩閼卷72国司-補
かからみ丸番所	(元亀 元) 4、20	1570	毛利輝元書状	萩閼卷102冷泉-18
加 賀 浦	(元亀 元) 10、19	1570	毛利元就書状	萩閼卷100児玉-34
加 賀 浦	(元亀 元) 10、19	1570	毛利輝元書状	萩閼卷100児玉-37
加 賀 浦	(元亀 元) 10、28	1570	毛利元就・同輝元連署書	萩閼卷100児玉-32
加 賀 浦	(元亀 元) 11、1	1570	毛利元就・同輝元連署書	萩閼卷100児玉-48

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西曆	文 書 名	出 典
加 賀 浦	(永祿 13) 11、 4	1570	毛利元就・同輝元連署感状	萩閼卷100兎玉-29
加 賀 小 城	(元龜 2) 2、 13	1571	毛利輝元書状	萩閼卷115湯原-113
加 賀 城 普 請	(元龜 2) 3、 3	1571	毛利元秋書状	萩閼卷115湯原-12
加 賀 御 番	(元龜 2) 3、 23	1571	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-114
加 賀 城 御 番	(元龜 2) 4、 23	1571	宍道隆慶書状	萩閼卷115湯原-119
加 賀 御 在 番	(元龜 2) 5、 21	1571	毛利元秋書状	萩閼卷115湯原-9
加 賀 城 普 請	(元龜 2) 5、 21	1571	毛利輝元書状	萩閼卷115湯原-19
加 賀 在 番	(元龜 2) 5、 25	1571	毛利元秋書状	萩閼卷115湯原-111
加 賀 要害 在 番	(元龜 3) 5、 1	1572	福原貞俊書状	萩閼卷115湯原-26
加 賀 在 城	(元龜 3) 5、 4	1572	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-25
加 賀 要害 普 請	(元龜 3) 5、 12	1572	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-117
加 賀 御 番	(元龜 3) 5、 21	1572	天野隆重書状	萩閼卷115湯原-124
加 賀 要 害	(元龜 3) 5、 21	1572	天野隆重書状	萩閼卷115湯原-124
加 賀 御 要 害	(天正 2) 3、 12	1574	天野隆重書状	萩閼卷115湯原-123
加 賀 御 城 番	(天正 2) 3、 12	1574	天野隆重書状	萩閼卷115湯原-123
春 日 城	応仁 2、 10、 1	1468	京極持清感状	佐々木文書
春 日 城	応仁 2、 10、 20	1468	京極持清感状	佐々木文書
春 日 城	(応仁 2) 10、 23	1468	京極持清感状	佐々木文書
月 山 城 在 番				萩閼卷70天野-補
熊 野 入 城	永祿 5、 9、 28	1562	尼子義久知行充行状	多胡家證文
熊 野 在 番	永祿 6、 9、 20	1563	尼子義久書状	佐太神社 新島史P463
熊 野 表	(永祿 6) 11、 13	1563	吉川元春軍忠状	大日古・吉川文書511
熊 野 一 城	(元龜 元) 2、 20	1570	吉川元春自筆書状	大日古・毛利文書791
熊 野	(元龜 元) 4、 20	1570	毛利輝元書状	萩閼卷102冷泉-18
熊 野	(元龜 元) 7、 22	1570	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-21
熊 野	(元龜 元) 8、 3	1570	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-10
小 白 鹿	(永祿 6) 9、 5	1563	毛利元就書状	萩閼卷84兎玉-6
(海士郡)固屋	年未詳 7、 12	1569頃	小早川隆景書状	「隠岐国因屋城」所引村上家文書
(海士郡)固屋	年未詳 7、 12	1569頃	小早川隆景書状	「隠岐国因屋城」所引村上家文書
佐 陀 城	観応 元、 8	1350	北垣光政軍忠状	小野 新島史P317
佐 陀 江	(元龜 元) 5、 25	1570	小早川隆景書状	萩閼卷123野村-18
佐 陀	(元龜 元力) 8、 19	1570	小早川隆景書状	萩閼卷38井上-29
佐 陀 江	(元龜 元) 11、 23	1570	口羽通良・吉川元春連署	萩閼卷115湯原-11
[ 佐 陀 城 ]	(天正 10) 8、 7	1582	小早川隆景書状	萩閼卷104湯浅-79
貞 江 城				萩閼卷26兎玉-補
宍道塚表一城	(元龜 元) 12、 18	1570	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-112
嶋 根 陣 所	(永祿 6) 4、 6	1563	毛利隆元書状	萩閼卷139粟屋-1
嶋 根 之 表	(元龜 元) 2、 20	1570	吉川元春自筆書状	大日古・毛利文書791
嶋 根 陣 替	(元龜 元) 4、 20	1570	毛利輝元書状	萩閼卷102冷泉-18
嶋 根	元龜 元、 5、 14	1570	毛利輝元書状	萩閼卷123野村-12
嶋 根 陣 替	(元龜 元) 5、 26	1570	毛利輝元書状	萩閼卷84兎玉-51
嶋 根	(元龜 元) 6、 6	1570	毛利元就書状	萩閼卷123野村-4
嶋 根 陣 替	(元龜 元) 8、 15	1570	毛利輝元消息	防長14善福寺-27
嶋 根 陣 替	(元龜 元) 8、 26	1570	毛利元就書状	萩閼卷11浦-15、 大日古・小早川文書(浦家寫)15
嶋 根	(天正 4) 12、 18	1576	毛利輝元起請文	岩国諸古10

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西 曆	文 書 名	出 典
嶋 根 陣	年未詳		乃美宗勝一代感状陣所合戰場付立	萩閼卷11浦-54、 大日古・小早川文書(浦家寫)54
嶋 根 御 陣	年未詳 12、23		吉川元春・小早川隆景連署書状	萩閼卷33粟屋-63
嶋 根 陣	年未詳 6、晦		吉川元春他三名連署書状	千家家文書3-90
白 鹿	(永祿 4カ) 1、5	1561	毛利隆元書状	萩閼卷7益田-17
白 鹿	(永祿 5、12)	1562	毛利元就書状	萩閼卷52兼重-2
白 鹿	(永祿 6、3)	1563	氏名未詳書状	萩閼卷52兼重-7
白鹿小白鹿	(永祿 6) 8、15	1563	毛利元就書状	萩閼卷119福井-19
白 鹿 城	永祿 6、8、18	1563	尼子義久感状	朝山家文書
[白鹿]落去	(永祿 6) 8、23	1563	毛利元就書状	萩閼卷84兎玉-38
白鹿小高丸合戦	永祿 6、10、18	1563	毛利元就感状	萩閼卷51小川-1
白鹿小高丸合戦	永祿 6、10、18	1563	毛利元就感状	萩閼卷59平佐-1
白鹿小高丸合戦	(永祿 6) 10、18	1563	毛利元就書状	萩閼卷64二宮-1
白鹿小高丸合戦	(永祿 6) 10、18	1563	毛利元就書状	萩閼卷44村上-3
白 鹿 要 害	(永祿 6) 11、13	1563	吉川元春軍忠状	大日古9吉川-511
白 鹿 城	(永祿 6) 12、2	1563	毛利元就書状	萩閼卷102冷泉-50
白 鹿	(永祿 6)	1563	毛利元就書状	萩閼卷138兼重-1
白 鹿	永祿 8、5、6	1565	尼子義久知行充行状	笠置 新島史P525
白 鹿	永祿 8、5、6	1565	尼子義久知行充行状	笠置 新島史525
白 鹿 要 害	(天正 20) 2、9	1591	藏田就貞覚書	萩閼卷126藤田-3
白髮小鳥丸	(慶長 17) 1、9	1612	小川信秀軍忠付立	萩閼卷110小川-1
白 鹿 之 城	年未詳		氏名未詳軍忠付立	萩閼卷83福間-24
白鹿小高丸				萩閼卷56桜井-補
宍 道 中 藏	永祿 6、9、1	1563	毛利元就感状	萩閼卷168池永-1
宍 道	(天正 20) 2、9	1591	藏田就貞覚書	萩閼卷126藤田-3
新 山	天文 14、卯、16	1545	山名久通書状	鳥取県史2-82
真山一普請	(永祿 12) 3、16	1569	小早川隆景・吉川元春連署書状	萩閼卷108赤川-33
新 山 衆	(永祿 12) 7、20	1569	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-103
新 山 衆	(元龜 元) 5、28	1570	毛利輝元感状	清水寺 新島史P459
新 山 衆	(元龜 元) 5、29	1570	小早川隆景書状	萩閼卷123野村-27
新 山	(元龜 元カ) 6、5	1570	富田元秋書状	萩閼卷115湯原-102
新 山	(元龜 元) 6、6	1570	毛利元就書状	萩閼卷123野村-4
新 山	(元龜 元) 7、18	1570	毛利輝元書状	萩閼卷161後藤屋-3
新 山	(元龜 元) 8、3	1570	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-10
新 山	(元龜 元) 9、5	1570	小早川隆景・毛利輝元連署書状	萩閼卷55国司-13
新 山	(元龜 元) 11、2	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100兎玉-33
新 山	(元龜 元) 11、12	1570	毛利元秋書状	萩閼卷47南方-22
真山舟手	(元龜 元) 11、23	1570	毛利輝元書状	萩閼卷109三戸-10
新 山	(元龜 元) 12、12	1570	毛利輝元書状	萩閼卷128末国-17
新 山	(元龜 元カ) 12、13	1570	口羽通良・吉川元春連署書状	萩閼卷76中嶋-26
新 山 麓	(元龜 2) 1、19	1571	吉川元春書状	萩閼卷144洞玄寺-4
新 山	(元龜 2) 1、23	1571	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-108
新 山	(元龜 2) 2、3	1571	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-110
新 山	(元龜 2) 3、14	1571	毛利輝元書状	萩閼卷76中嶋-2
新 山	(元龜 2) 3、22	1571	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷55国司-9
新 山	(元龜 2) 4、4	1571	毛利輝元書状	萩閼卷123野村-9

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西曆	文 書 名	出 典
真 山	(元龜 2) 4、27	1571	毛利元就書状	萩閼卷101児玉-31
新 山	(元龜 2) 4、29	1571	志道元保・口羽通良・吉川元春連署書状	萩閼遺1多賀-57
新 山	(元龜 2) 5、4	1571	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷144洞玄寺-3
新 山	(元龜 2) 5、15	1571	出羽毛利元俱書状	大日古・吉川文書632
新 山	(元龜 2) 6、5	1571	毛利元秋書状	萩閼卷115湯原-6
新 山	(元龜 2) 6、23	1571	吉川元春書状	萩閼卷76中嶋-4
新 山	(元龜 2) 8、20	1571	毛利元秋書状	萩閼卷115湯原-14
新 山	(元龜 2) 8、20	1571	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-140
新 山	(元龜 2) 8、24	1571	毛利輝元書状	萩閼卷123野村-13
新 山	(元龜 2) 9、11	1571	吉川元春書状	萩閼卷76中嶋-7
新 山城	(元龜 2) 10、13	1571	毛利輝元書状	萩閼卷38井上-14
新 山御普請	(元龜 2) 12、8	1571	毛利元秋書状	萩閼卷38井上-40
新 山番	(元龜 3) 2、6	1572	毛利輝元書状	萩閼遺1多賀-17
新 山	(元龜 3) 4、2	1572	毛利輝元書状	萩閼遺1多賀-16
新 山御番	(元龜 3) 4、6	1572	天野隆重書状	萩閼卷38井上-35
新 山城	(元龜 3) 5、12	1572	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-117
新 山	(天正 9) 5、19	1581	吉川経家書状	大日古・吉川別集石見吉川143
新 山	(天正 9) 6、13	1581	吉川元春同夫人熊谷氏連署書状	大日古・吉川文書1240
新 山在番	天正 11、7、8	1583	毛利元康書状	成相寺 新島史P432
新 山	天正 13、4、3	1585	小早川隆景書状	吉川家中5-33
新 山	年未詳 5、15		吉川元春書状	岩国諸古10
新 山	年未詳 6、8		吉川元春書状	堀立家證文・秋山-73
新 山	年未詳 8、18		(日野カ)某書状	神門寺文書35
新 山入城	年未詳 9、28		吉川元春書状	萩閼遺1多賀-64
神在城御合戦	(文明 元) 極、10	1469	多賀高忠書状	萩閼卷37中川-68
神 西	(元龜 元) 10、6	1570	毛利元就書状	萩閼卷100児玉-47
神 西表	(元龜 元) 10、19	1570	毛利輝元書状	萩閼卷100児玉-37
神 西在陣衆	(元龜 元) 10、25	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷124平賀-58
神 西	(元龜 元) 11、2	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100児玉-33
神 西	(元龜 元) 11、20	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷80岡-12
神 西表在陣	元龜 2、3、26	1571	吉川元春書状	日御碕神社文書46-8
神 西表在陣	(元龜 2) 3、26	1571	□□□芳盛・井上春信連署書状	日御碕神社文書46-9
神 西	(元龜 2) 5、25	1571	吉川元資書状	萩閼遺3重見-82
神 西陣	年未詳		吉川元春書状	萩閼卷80岡-34
末 次土居	(永祿 12) 7、20	1569	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-103
末 次	(元龜 元) 7、18	1570	毛利輝元書状	萩閼卷161後藤屋-3
末 次之土居	(元龜 元) 7、22	1570	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-21
末 次在番	(元龜 元) 8、14	1570	小早川隆景・口羽通良・福原貞俊・ 吉川元春連署書状	萩閼卷123野村-30
末 次	(元龜 元) 8、16	1570	毛利輝元書状	萩閼卷107赤川-13
末 次之城普請	(元龜 元) 8、26	1570	毛利元就書状	萩閼卷11浦-15、 大日古・小早川文書(浦家寫)15
末 次城	(元龜 元) 9、5	1570	小早川隆景・毛利輝元連署書状	萩閼卷55国司-13
末 次在番	(元龜 元) 12、18	1570	毛利元就書状	萩閼卷115湯原-100
末 次之城	(元龜 2) 3、3	1571	毛利元秋書状	萩閼卷115湯原-12
末 次在番	(元龜 2) 4、3	1571	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-8

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西 曆	文 書 名	出 典
末次在番	(元亀 2) 10、13	1571	毛利輝元書状	萩閼卷161後藤屋-4
末次御番	(天正 2(1))3、12		天野隆重書状	萩閼卷115湯原-123
末次城				萩閼卷3毛利-補
高瀬	(永禄 4) 10、16	1561	吉川元春書状	石見小笠原文書・山陰地研2-6、 林 新島史P507
高瀬向城	(元亀 元) 4、20	1570	毛利輝元書状	萩閼卷102冷泉-18
高瀬陣替	(元亀 元) 6、2	1570	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-20
高瀬	(元亀 元) 6、6	1570	毛利元就書状	萩閼卷123野村-4
高瀬表	(元亀 元) 8、7	1570	毛利元就書状	萩閼卷11浦-16、 大日古・小早川文書(浦家寫)16
高瀬	(元亀 元) 9、5	1570	小早川隆景・毛利輝元連署書状	萩閼卷55国司-13
高瀬	(元亀 元) 10、15	1570	口羽通良・吉川元春連署書状	萩閼卷80岡-31
高瀬	(元亀 元) 10、18	1570	毛利元就・同輝元連署感状	大日古・吉川文書514
高瀬	(元亀 元) 10、23	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷80岡-10
高瀬	(元亀 元) 11、3	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷80岡-11
高瀬勢	(元亀 元) 11、12	1570	毛利元秋書状	萩閼卷47南方-22
高瀬	(元亀 元) 11、23	1570	毛利輝元書状	萩閼卷109三戸-10
高瀬	(元亀 元) 11、24	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷38井上-4
高瀬	(元亀 元) 12、12	1570	毛利輝元書状	萩閼卷128末国-17
高瀬	(元亀 元) 12、18	1570	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-112
高瀬	(元亀 元)	1570	藤岡より差出候覚書	吉川家中1
高瀬	(元亀 2) 1、23	1571	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-108
高瀬	(元亀 2) 3、22	1571	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷55国司-9
高瀬	(元亀 2) 4、1	1571	吉川元春書状	萩閼卷32口羽-28
高瀬	(元亀 2) 4、4	1571	毛利輝元書状	萩閼卷123野村-9
高瀬	(元亀 2) 4、27	1571	毛利元就書状	萩閼卷101児玉-31
高瀬	(元亀 4) 10、2	1573	小早川隆景書状	萩閼卷11浦-88
高瀬	(天正 2(1)) 3、12		天野隆重書状	萩閼卷115湯原-123
高瀬	(天正 9) 5、19	1581	吉川経家書状	大日古・吉川別集石見吉川143
高瀬	(天正 15) 正、17	1587	吉川元長書状寫	大日古・吉川別集石見吉川97
高瀬勢	年未詳 12、25		吉川元春書状	萩閼卷80岡-34
高瀬	年未詳 10、14		益田藤兼書状	久利家什書-43
高瀬			前代已来人帳内覚	吉川家中10
高瀬				萩閼卷71佐波-10補
高矢倉要害城督	永禄 5、11、23	1562	毛利元就・同隆元連署知行充行状	萩閼卷42熊谷-4
高矢倉城主				萩閼卷42熊谷-補
多賀丸	年未詳		氏名未詳軍忠付立	萩閼卷83福間-24
多久和	(元亀 元) 1、21	1570	毛利元就書状	萩閼卷48阿曾沼-1
多久和	(元亀 元) 2、7	1570	小早川隆景書状	萩閼卷115湯原-18
多久和之城				萩閼卷44村上-4補
十神城	応仁 2、10、20	1468	京極持清感状	佐々木文書
十神城	(応仁 2) 10、23	1468	京極持清感状	佐々木文書
十神在番	永禄 8、5、6	1565	尼子義久知行充行状	笠置 新島史P525
十神	(永禄 13) 11、4	1570	毛利元就・同輝元連署感状	萩閼卷100児玉-29
十神	(元亀 元) 9、1	1570	国司元武・児玉元良・口羽通良連署書状	萩閼卷104湯浅-84
十神	(元亀 元) 9、11	1570	吉川元長・同元春連署書状	萩閼卷5毛利-10

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西曆	文 書 名	出 典
十 神	(元龜 元) 9、25	1570	小早川隆景・毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷115湯原-105
十 神	(元龜 元) 10、11	1570	毛利輝元書状	萩閼卷11浦-105
十 神	(元龜 元) 11、 1	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100児玉-48
十 神	(元龜 元) 11、 2	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100児玉-33
十 神	(元龜 元) 12、26	1570	毛利元就書状	萩閼卷100児玉-31
十 倉 入 城	(元龜 元) 卯、19	1570	尼子勝久書状	米村 新島史P472
十 倉	(元龜 元) 4、20	1570	毛利輝元書状	萩閼卷102冷泉-18
十 倉	(元龜 元) 5、 7	1570	毛利輝元書状	萩閼卷95柳沢-5
十 蔵	(元龜 元) 11、12	1570	毛利元秋書状	萩閼卷47南方-22
富 田 觀 応 元、 8	1350	諏訪部貞助(扶貞)軍忠状	三刀屋文書23	
富 田 応 仁 2、 7、 6	1468	京極持清感状	佐々木文書	
富 田 要 害 (文明 8) 5、17	1476	京極政高感状	佐々木文書	
富 田 陣 執 (天文 12) 2、 6	1543	大内義隆感状	清水 新島史P503 林 新島史P505	
富 田 陣 (天文 12) 2、 6	1543	大内義隆書状	石見小笠原文書・山陰地研2-17	
富田要害菅谷口 (天文 12) 3、18	1538	毛利隆元・同元就連署感状	萩閼卷19児玉-7	
富田要害塩谷口 (天文 12) 3、20	1538	毛利隆元・同元就連署感状	萩閼卷133山縣-1	
富田要害塩谷口 (天文 12) 3、20	1538	毛利隆元・同元就連署感状	萩閼卷119福井-1	
富田要害塩谷口 (天文 12) 4、12	1538	毛利隆元・同元就連署感状	萩閼卷78井上七-3	
富田 塩谷口 (天文 12) 4、12	1538	毛利隆元・同元就連署感状	萩閼卷15国司-20	
富田月山之城下 (天文 12) 4、12	1538	毛利隆元・同元就連署感状	萩閼卷15国司-20	
富 田 要 害 (天文 12) 4、12	1538	毛利隆元・同元就連署感状	萩閼卷15国司-20	
富田要害塩谷口 (天文 12) 4、12	1538	毛利隆元・同元就連署感状	萩閼卷93井上-16 大日古・毛利文書283	
富田要害塩谷口 (天文 12) 6、11	1538	毛利隆元・同元就連署書状	萩閼卷114三宅-2	
富 田 一 城 天文 13、 9、 3	1539	赤穴久清置文	萩閼卷37中川-114	
富 田 月 山 城 (天文 22) 10、26	1548	毛利元就・同隆元連署感状	萩閼卷15国司-27	
富 田 (永禄 元) 11、15	1558	平佐就之書状	萩閼卷19児玉-13	
富 田 (永禄 4カ) 3、24	1561	毛利隆元書状	萩閼卷7益田-17	
富 田 (永禄 5カ) 正、12	1562	僧玄龍策雲外二名連署状	大日古・毛利文書858	
富 田 永 禄 5、 7、 27	1562	坪内重吉父子証状	大社町坪内家文書17	
富 田 一 城 (永禄 5) 7、29	1562	三吉隆亮書状	萩閼遺4浄専寺-1	
富 田 (永禄 5、12)	1562	毛利元就書状	萩閼卷52兼重-2	
富 田 城 (永禄 6) 3、 6	1563	毛利元就感状	萩閼卷115湯原-3	
富 田 (永禄 7) 2、15	1564	小早川隆景書状	萩閼卷31山田-9	
富 田 籠 城 永 禄 8、 2、 10	1565	町原豊教・大折信友連署書状	坪内家文書32-2	
富 田 (永禄 8カ) 4、 1	1565	毛利元就書状	萩閼卷31山田-6	
富 田 (永禄 8) 5、 2	1565	毛利元就書状	萩閼卷84児玉-19	
富 田 (永禄 8) 8、10	1565	毛利元就書状	萩閼卷34草刈-1	
富 田 永 禄 9、 3、 6	1566	小早川隆景・吉川元春連署起請文	三刀屋文書108	
富 田 要 害 (永禄 9) 3、24	1566	毛利元就書状	萩閼卷37中川-6	
富 田 城 永 禄 9、 5、 5	1566	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷11浦-86	
富 田 (永禄 9カ) 5、17	1566	毛利元就書状	萩閼卷11浦-72	
富 田 永 禄 9、 8、 8	1566	香川(光)景・児玉元良・桂元忠連署書状	萩閼遺2小野村-2	
富 田 表 (永禄 9) 8、11	1566	毛利元就書状	萩閼卷70母厚-1	
富 田 表 (永禄 9) 8、23	1566	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷53樽崎-4	



島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西曆	文 書 名	出 典
富 田	(永禄 9) 11、28	1566	小早川隆景書状	萩閼卷102冷泉-16
富 田 要 害	(永禄 9) 12、25	1566	毛利輝元書状	萩閼卷102冷泉-110
富 田	(永禄 9) 12、25	1566	小早川隆景書状	萩閼卷102冷泉-111
富 田	(永禄 10) 7、9	1567	口羽通良書状	萩閼卷37中川-32
富田御在城	永禄 10、7、24	1567	毛利元就・同輝元連署知行充行状	萩閼卷73天野-2
富田城在番	永禄 11、6、11	1568	毛利元就・同輝元連署知行充行状	萩閼卷3毛利-1
富 田	(永禄 11) 7、9	1568	口羽通良書状	萩閼卷37中川-33
富 田 籠 城	(永禄 12カ) 3、25	1569	毛利輝元書状	萩閼卷17児玉-58
〔富田〕在番	(永禄 12) 5、23	1569	毛利元就書状	萩閼卷109赤川-1
富 田	(永禄 12) 7、3	1569	毛利元就書状	萩閼卷123野村-5
富 田 城	(永禄 12) 7、17	1569	小早川隆景書状	萩閼卷123野村-17
富 田 城	(永禄 12) 7、19	1569	毛利元就書状	萩閼卷123野村-6
〔富 田〕	(永禄 12) 8、23	1569	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷88井原-1
富 田 籠 城	(永禄 12) 9、18	1569	毛利輝元書状	萩閼卷17児玉-59
〔富田〕籠城	永禄 12、9、29	1569	天野隆重書状	竹矢 新島史P449
〔富田〕籠城	(永禄 12) 12、20	1569	毛利輝元・同元就連署書状	竹矢 新島史P449
〔富田城〕	(永禄 12) 12、20	1538	毛利元就・同輝元連署知行充行状	萩閼卷123野村-2
〔富田城〕	(永禄 12) 12、22	1538	毛利元就書状	萩閼卷123野村-1
富 田 兵 糧	(永禄 13) 2、7	1570	三沢為清書状	晋叟寺 新島史P453
富 田 陣 替	(元亀 元) 2、15	1570	毛利元秋書状	萩閼卷47南方-58
富 田	(元亀 元) 2、20	1570	吉川元春自筆書状	大日古・毛利文書791
富田御籠城	(永禄 13) 3、16	1570	吉川元春・口羽通良・福原貞俊・小早川隆景連署書状	萩閼卷88井原-4
〔富田〕城取懸	(元亀 元) 5、28	1570	毛利輝元感状	清水寺 新島史P459
富 田 籠 城	(元亀 元) 6、9	1570	福原貞俊・小早川隆景連署書状	萩閼卷92天野-5
富 田 籠 城	(元亀 元) 7、26	1570	吉川元春書状	萩閼卷92天野-6
富 田 籠	永禄 13、9、3	1570	小早川隆景・口羽通良・福原貞俊・吉川元春連署書状	萩閼卷109赤川-3
〔富田〕城堅固	(元亀 元) 10、12	1570	毛利元就感状	清水寺 新島史P459
富 田 籠 城	(元亀 2) 10、12	1571	毛利輝元書状	萩閼卷17児玉-60
富 田 在 番	(元亀 3) 10、3	1572	吉川元春書状	萩閼卷109赤川-7
富 田 城	(元亀 4) 10、2	1573	小早川隆景感状	萩閼卷11浦-87
富田岩倉麓	(天正 2) 5、25	1574	毛利輝元袖判桂元将覚書	萩閼卷39桂-3
富 田 一 城	(天正 3) 4、24	1575	三刀屋久扶起請文	大日古・吉川文書611
富田城普請	(天正 5カ) 7、24	1577	毛利輝元書状	萩閼卷100児玉-51
富 田 籠 城	天正 7、6、6	1579	毛利元康書状	竹矢 新島史P450
富 田 籠 城	(天正 7) 10、5	1579	小早川隆景書状	萩閼卷144洞玄寺-12
富 田 要 害	(天正 11) 5、27	1583	小早川隆景・吉川元長・福原元俊・同貞俊・吉川元春連署書状	萩閼卷73天野-7
富 田	天正 11、8、13	1583	吉川元長起請文	大日古・吉川文書1247
富 田 入 城	(天正 14) 1、10	1586	末次元康書状	萩閼卷115湯原-79
富 田 城	(天正 19) 3、13	1591	豊臣秀吉檢地知行物并目録寫	大日古・吉川文書120
戸 田 之 城	(天正 19) 3、14	1591	黒田孝高自筆書状	大日古・吉川文書121
戸 田 之 城	(天正 19) 3、14	1591	黒田孝高自筆書状	大日古・吉川文書695
富 田	(天正 19) 4、20	1591	妙寿寺周景書状	大日古・吉川別集石見吉川153
富 田 入 城	(天正 19) 8、16	1591	吉川広家書状	秋上 新島史P413
富 田	(文禄 2) 10、5	1593	小早川隆景書状寫	大日古・吉川別集石見吉川114
富 田	(慶長 15) 4、23	1610	伊志美作守覚書	吉川家中3

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西 曆	文 書 名	出 典
富 田	(慶長 19) 11、11	1614	吉川広家置文	吉川家中10
富 田	(慶長 19) 11、11	1614	黒田家譜之抜書	吉川家中10
富 田	元和 8、 3、 5	1622	小川信秀軍忠付立	萩閼卷51小川-35
富 田 要 害	年未詳 7、 2		毛利元秋書状	萩閼卷47南方-50
富 田	年未詳 10、 9		毛利輝元書状	萩閼卷47南方-36
富 田 塩 谷 口	年月日未詳		御郷茂政軍忠覚書写	萩閼卷137御郷-11
富 田 城	年月日未詳		内藤元泰略伝	萩閼遺5内藤-1
富 田 表	年未詳 5、 27		毛利元就書状	萩閼遺5栄蔵-2
富 田 要 害	年未詳 9、 16		吉川広家書状	久利家什書-51
富 田	年未詳 4、 23		湯原幸清河副久盛連署状	大日古・吉川文書365
富 田	年未詳 3、 14		湯原幸清河副久盛連署状	大日古・吉川文書366
富 田	年未詳 3、 18		秋上伊織之介解状	吉川家中6
富 田 城	年月日未詳		永興寺由緒書	吉川家中7
富 田	年月日未詳		盤目山洞泉寺由緒書	吉川家中8
富 田 ノ 城	年月日未詳		前代已来人帳内覚	吉川家中10
富 田	年未詳 8、 18		某書状	岩国諸古3
富 田	年未詳 8		某書状	岩国諸古3
富 田	年月日未詳		某書状	岩国諸古3
富 田	年未詳 6、 16		某書状	岩国諸古3
富 田	年未詳 3、 29		吉川広家書状	岩国諸古6
富 田	年月日未詳		某定書	岩国諸古6
富 田	年未詳 10、 9		吉川広家書状	岩国諸古6
富 田	年月日未詳		某定書	岩国諸古6
富 田	年未詳 正、 13		吉川広家書状	岩国諸古7
富 田	年未詳 正、 13		吉川広家書状	岩国諸古8
富 田	年未詳 9、 6		吉川広家書状	岩国諸古9
富 田	年未詳 12		某定書	岩国諸古11
富 田 表	年未詳 3、 21		□□元通書状	坪内家文書2-6
富 田	年未詳 7、 21		吉川元春書状	鳥取県史2-122
富 田	年未詳 12、 2		吉川元春書状	鳥取県史2-235
富 田 一 城	年月日未詳		尼子義久家臣人数帳	佐々木文書
富 田	年未詳 8、 19		千家義広書状	大社町坪内家文書18
富 田 表	年未詳 卯、 5		田総元里書状	大社町坪内家文書46
富 田 表	年未詳 3、 2		毛利元就書状	富家文書
富田月山之城	年月日未詳		内藤家之次第覚書	安芸内藤家文書105
鳶 巢	(元亀 元) 6、 9	1570	福原貞俊・小早川隆景連署書状	萩閼卷92天野-5
鴟 巢 番 衆	(元亀 元) 8、 16	1570	毛利輝元書状	萩閼卷107赤川-13
鴟 巢	(元亀 2) 5、 4	1571	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷144洞玄寺-3
とひのす御陣				萩閼卷71佐波-10補
野 老 原	正平 9、 7、 19	1354	足利直冬軍勢催促状	三刀屋文書64
野 老 原 城	正平 9、 11、 4	1354	足利直冬感状	三刀屋文書65
[ 平 田 ] 城	(永禄 4) 10、 16	1561	吉川元春書状	林 新島史P507
				石見小笠原文書・山陰地研2-6
平 田 表	永禄 13、 7、 16	1570	毛利元就書状	萩閼卷153悪-1
平 田	(元亀 元) 8、 16	1570	毛利輝元書状	萩閼卷107赤川-13
平 田	(元亀 元) 9、 5	1570	国司元武・児玉元良・口羽通良 連署書状	萩閼卷104湯浅-84

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西曆	文 書 名	出 典
平 田 城	(元龜 元) 10、18	1570	毛利元就・同輝元連署状	大日古・吉川文書514
平 田	(元龜 元) 10、23	1570	毛利輝元書状	萩閼卷107赤川-24
平 田	(元龜 元) 11、22	1570	宍戸隆家・口羽通良・吉川元春 連署書状	萩閼卷100兎玉-59
平 田 表	(天正 9カ) 8、11	1581	吉川元長・同元春連署書状	萩閼卷115湯原-66
平 田 表	(天正 9カ) 8、11	1581	吉川元長・同元春連署書状	萩閼卷115湯原-67
平 田 在 番	年未詳 12、25		吉川元春書状	萩閼卷80岡-34
布 部 要 害	(永祿 13) 2、18	1570	毛利元就感状	大日古・吉川文書648
布 部 要 害	(永祿 13) 2、18	1570	毛利元就書状	大日古・毛利文書369
布 部	(永祿 13) 4、17	1570	吉川元春自筆書状	大日古・毛利文書371
布 部	(元龜 元) 2、15	1570	赤穴久清書状	萩閼卷50飯田-11
布 部 山 陣	(元龜 元) 2、18	1570	毛利元就書状	萩閼卷37中川-18
布 部 要 害	(元龜 元) 2、18	1570	毛利元就書状	萩閼卷37中川-19
布 部	(元龜 元) 3、3	1570	吉川元春書状	萩閼卷115湯原-30
布 部	元龜 元、12、26	1570	毛利輝元書状	萩閼卷17兎玉-30
星 上 退 口	永祿 8、5、9	1565	毛利元就・同輝元連署感状	萩閼卷11浦-84
星 上 退 口	元龜 4、10、2	1573	小早川隆景感状	萩閼卷11浦-85
本 城 要 害	享祿 4、2、12	1531	毛利元就起請文	萩閼卷43出羽-1
本 城	永祿 13、11、28	1570	毛利元就・同輝元連署感状	萩閼卷61桑原-6
本 城	永祿 13、11、28	1570	毛利元就・同輝元連署感状	萩閼卷100兎玉-30
滿 願 寺 之 城	(元龜 元) 2、7	1570	毛利元就感状	萩閼卷115湯原-13
[ 滿 願 寺 ]	(元龜 元) 9、20	1570	毛利元就書状	萩閼卷115湯原-7
滿 願 寺 之 城	(元龜 元) 9、20	1570	毛利元就書状	萩閼卷115湯原-7
[ 滿 願 寺 ] 城	(元龜 元) 9、25	1570	小早川隆景・毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷105湯原-105
滿 願 寺 山	(元龜 元) 10、25	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷124平賀-58
滿 願 寺 山	(元龜 元) 11、2	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100兎玉-33
滿 願 寺	(元龜 元) 11、20	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷80岡-33
滿 願 寺	(元龜 元) 11、22	1570	宍戸隆家・口羽通良・吉川元春連署書状	萩閼卷100兎玉-59
滿 願 寺 之 城	(元龜 元) 11、29	1570	毛利輝元書状	萩閼卷115湯原-16
滿 願 寺	(元龜 元) 12、4	1570	毛利元就書状	萩閼卷100兎玉-50
滿 願 寺	(元龜 元) 12、12	1570	毛利輝元書状	萩閼卷128末国-17
滿 願 寺	(元龜 元) 12、18	1570	毛利元就書状	萩閼卷115湯原-100
滿 願 寺	(元龜 元) 12、20	1570	口羽通良書状	萩閼卷104湯浅-90
[ 万 願 寺 ]	(元龜 2) 2、3	1571	吉川元春書状	萩閼卷105湯原-110
滿 願 寺	(元龜 2カ) 4、24	1571	毛利元就書状	萩閼卷86田中-9
滿 願 寺	(元龜 2) 6、5	1571	毛利元秋書状	萩閼卷115湯原-6
滿 願 寺 在 番	(元龜 2) 7、4	1571	小早川隆景書状	萩閼卷105湯原-115
三 笠 城	年未詳		香川家軍功略記	吉川家中2
三 久 須	(弘治 2) 8、9	1556	毛利元就書状	大日古・小早川(浦)文書21、
	(弘治 3カ) 8、9	1557		萩閼卷11浦-3
三久須在番普	年未詳 3、26		毛利元就・同輝元連署書状	萩閼遺5山本-8
三 久 須	年未詳 3、11		吉川元春書状	吉川家中9
三 久 須	年未詳		毛利元就書状	吉川家中9-204
三 澤 城	(応仁 2) 10、23	1468	京極持清感状	佐々木文書
三 澤 陣	永正 2、7、14	1505	赤穴郡連久清置文	萩閼卷37中川-103
三 沢 表	(永祿 12カ) 10、6	1569	小早川隆景・吉川元春 連署書状	萩閼卷68三隅-5
三 刀 屋 城	明德 4、3、21	1393	須和部詮扶軍忠状	三刀屋文書75

島根県内中世城館史料目録（出雲編）

事 項	年 月 日	西曆	文 書 名	出 典
三 刀 屋 城	明德 4、 3、 21	1393	須方部扶久軍忠状	三刀屋文書76
三 刀 屋 表	(永禄 5、 12)	1562	毛利元就書状	萩閼卷52兼重-2
三 刀 屋	(元亀 元) 正、 15	1570	小早川隆景書状	大日古・毛利文書821
三刀屋籠城	(元亀 元) 1、 16	1570	毛利元就書状	萩閼卷62青水-2
三刀屋籠城	(元亀 元) 3、 3	1570	毛利輝元書状	萩閼卷62青水-3
三刀屋籠城	(元亀 元) 3、 3	1570	小早川隆景書状	萩閼卷62青水-4
三刀屋籠城	(元亀 元) 8、 1	1570	富田元秋書状	萩閼卷62青水-5
美保関在番	弘治 元、 7、 11	1555	尼子晴久写	萩閼卷115湯原-183
森 山 陣	(元亀 元) 5、 27	1570	小早川隆景書状	萩閼卷123野村-28
森 山	(元亀 元) 5、 29	1570	小早川隆景書状	萩閼卷123野村-27
森 山	(元亀 元) 7、 2	1570	富田元秋書状	萩閼卷123野村-33
森 山	(元亀 元) 10、 17	1570	毛利元就書状	萩閼卷100兎玉-46
森 山	(元亀 元) 10、 19	1570	毛利輝元書状	萩閼卷100兎玉-37
森 山	(元亀 元) 10、 27	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100兎玉-53
森 山	(元亀 元) 10、 28	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100兎玉-32
森 山	(元亀 元) 11、 1	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100兎玉-48
森 山	(元亀 元) 11、 2	1570	毛利元就・同輝元連署書	萩閼卷100兎玉-33
森 山	永禄 13、 11、 4	1570	毛利元就・同輝元連署感	萩閼卷100兎玉-29
森 山 在 城	天正 5、 卯、 3	1577	吉川元長書状	久利什-34
森 山	(天正 5) 4、 3	1577	吉川元春書状	岩国諸古9
森 山	(天正 5) 4、 5	1577	吉川元長書状	岩国諸古9
森 山 在 城	天正 5	1577	吉川元長書状	久利家什書-33
森 山	年未詳 3、 18		秋上伊織之介解状	吉川家中6
森 山 城	年未詳 6、 8		吉川元春書状	堀立家證文・秋山-73
森 山 之 城				萩閼卷82長屋-補
屋 根 山 城	康永 4、 3	1345	諏訪部扶貞軍忠状	三刀屋文書20
横 田 之 城	(永禄 4) 閏3、12	1561	尼子義久判物	吉川家中9
横 田 要 害	年未詳 6、 11		尼子経久書状	三刀屋文書98
羽 倉 表	(永禄 5、 12)	1562	毛利元就書状	萩閼卷52兼重-2
羽 倉	(元亀 元) 5、 25	1570	小早川隆景書状	萩閼卷123野村-18
羽 倉	(元亀 元) 5、 29	1570	小早川隆景書状	萩閼卷123野村-27
羽 倉 山	(元亀 元) 6、 6	1570	毛利元就書状	萩閼卷123野村-4
羽 倉	(元亀 元) 6、 12	1570	毛利輝元書状	萩閼卷88井原-6
羽 倉 山	(元亀 元カ) 6、13	1570	毛利氏奉行衆連署書状	萩閼卷144洞玄寺-20
羽 倉	(元亀 元) 7、 2	1570	富田元秋書状	萩閼卷123野村-33
羽 倉 山	(元亀 元) 9、 5	1570	小早川隆景・毛利輝元連署書状	萩閼卷55国司-13
わ く ら 山	(元亀 元) 11、 2	1570	毛利元就・同輝元連署書状	萩閼卷100兎玉-33
羽 倉 山 在 番	元亀 2、 3、 14	1571	毛利輝元書状	萩閼卷76中嶋-2
羽 倉 山 在 番	元亀 2、 3、 21	1571	内藤元栄書状	萩閼卷76中嶋-3
羽 倉 在 番	(元亀 2) 6、 23	1571	吉川元春書状	萩閼卷76中嶋-4
羽 倉 在 城	(元亀 2) 6、 23	1571	吉川元春書状	萩閼卷76中嶋-5
羽 倉	(元亀 2) 9、 11	1571	吉川元春書状	萩閼卷76中嶋-7
羽 倉	(元亀 3) 1、 28	1572	吉川元春書状	萩閼卷76中嶋-8
羽 倉 山	年未詳 6、 8		吉川元春書状	堀立家證文・秋山-73



### 第Ⅲ章 総括「出雲・隠岐の城館跡」

# 中世出雲国・隠岐国における城館成立の歴史的背景

はじめに

ここでは、中世出雲・隠岐における城館成立の背景について概観する。

出雲国の中世守護は、鎌倉時代の佐々木政義以来、室町時代における京極佐々木氏、戦国時代にはその流れをくむ守護代尼子氏の台頭と戦国大名化と、南北朝期の一時期を除けば、おおむね、近江源氏の系統によって占められることが多かった。隠岐国においても、鎌倉時代の佐々木定綱・義清以来、事情はほぼ同じであった。

一方、出雲国では、杵築大社（現出雲大社）、日御碕、鰐淵寺など、島根半島を中心に、地方寺社としては大きな力を有した寺社勢力が政治的に影響力を保ち続けた。

地域交通体系を概観すれば、斐伊川・神戸川水系、宍道湖・大橋川から中海、飯梨川水系から中海につながる、幹線水上交通路などが地域を経済的にも政治的にも支える要素になっていたと考えられる。また、室町・戦国時代にかけて、これらの水系の出口から日本海沿岸にかけて、市・町・湊が発達している。沿岸部では日本海屈指の港湾である美保関がすでに鎌倉時代にみられ、これを筆頭に、宇竜・杵築・園、中海では安来・馬潟が、宍道湖から大橋川にかけては平田・白潟などが知られる。隠岐においても、島後の西郷湾付近を中心に、また、島前では中ノ島の崎や、西ノ島の焼火山を中心に、海上交通が盛んであったことが推測される。

以上のような社会的背景をもとに、以下、出雲・隠岐における政治史の動きから城館成立の背景を概観していく。

現在、考えられる限りでいえば、出雲、隠岐が政治的に変化を余儀なくされ、それが城館と関連してくる画期としては、おおむね以下の6つの時期と事件があるであろう。

まず、第一が、後醍醐天皇の隠岐脱出、守護塩冶高貞の横死事件から足利直冬の出雲入部と退去にかけての、いわゆる建武新政の成立・崩壊から南北朝動乱期、1330年代から1360年代。第二が、応仁文明の乱の時期で、守護代尼子清定らが、松田氏・三沢氏など国内の反守護派有力国人の反乱を押さえ、続いて尼子経久が守護京極氏から自立化傾向を示した1460年代から80年代の時期。第三が、尼子詮久（晴久）が天文9・10年（1539・40）吉田郡山城攻に失敗し、引き続いて周防の大内義隆が出雲に侵入、富田城を攻めて敗退する天文11・12年（1542・3）。第四が、永禄5年（1562）の毛利氏の出雲侵入から、尼子義久の富田城籠城と永禄9年（1566）の尼子氏降伏にいたる時期。第五が、毛利氏領国支配下、永禄12年（1569）の尼子勝久の隠岐から島根半島への侵入にはじまる尼子氏復興戦の頃。そして、第六が、1600年の関ヶ原の戦いにより毛利氏が防長二州へ転封になって堀尾氏が出雲へ入部して、元和の一国一城令が出る元和元年まで。

## 〔第一の画期〕

正慶2年（元弘3年）（1333）閏2月、後醍醐天皇は配流の地隠岐島を脱出して伯耆国船上山に鎌倉幕府討幕の拠点置く。その直後、後醍醐天皇は、出雲の守護をはじめとした武士層や杵築大社・鰐淵寺などの寺社勢力にも、討幕に参画するよう勧誘し、3月の半ばころには、かれらの多くが天皇方に参画した。その結果、天皇は還京し、6月には新政を開始することになる。

ところが、建武2年(1335)10月、足利尊氏が鎌倉で建武新政に反抗すると、塩冶高貞もこれに従った。このことで、出雲における動乱が展開をみせるようになるのである。

暦応4年(1341)、出雲・隠岐国守護であった塩冶高貞は、足利尊氏の執事高師直の陰謀で、謀反の疑いをかけられたことにより京都を出奔し、横死する。この時、尊氏から、鰐淵寺や出雲国内の武士らに対して軍勢催促が行われており、高貞方と幕府方との間に軍事的緊張が高まったことが推測される。この後、出雲国では、山名時氏を経て、康永2年(1343)佐々木道誉が守護に任じられることになる。

観応3年(南朝;正平8、北朝;文和2)(1352)、九州から中国へ移動した足利直冬と結んだ山名時氏は、因幡・伯耆に本拠を構えて出雲へ侵入し、守護佐々木氏の代官であった吉田厳覚を駆逐する。この混乱は、貞治2年(1363)山名氏が、幕府に帰順することで、一応の終息をみたようである。

### 〔第二の画期〕

応仁文明の乱の勃発は、出雲国内においても守護代尼子清貞を中心とする守護京極持清派と有力国人松田氏・三沢氏らを中心にした反京極派の対立を生み出した。というのは細川勝元を主将とする東軍方の有力大名であった京極持清が守護をつとめる出雲・隠岐をとりまくように、西軍主将山名宗全一族の領国、因幡・伯耆・石見国などが位置していたからであった。

このような状況下、出雲国内において、当初から一貫して京極方にあったのは、三刀屋氏・赤穴氏・牛尾氏などごく限られた国人衆にすぎなかったと考えられている。守護代尼子清貞は、応仁2年(1468)に、岩坂・外波(現八雲村)、出雲郷(現東出雲町)、十神山(現安来市)などを転戦、安来・美保関など中海から日本海沿岸の要衝を拠点とする松田備前守を抑えて美保関代官職を獲得し、後に松田氏を京極方へ帰順させた。

また、清貞は、この年に、出雲西部方面に転戦し、神西城を攻め苦戦している。

一方、松田氏と連動するように、三沢郷(現仁多郡仁多町)を拠点に横田庄を含む支配を展開した雲南地方最大の国人領主三沢氏も、周辺国人を語らって反京極派の中心的役割を果たした。この時期、三沢氏は、稲頼庄(簸川郡湖陵町付近)・塩冶郷荻原村(出雲市荻柝町)などに所領を持ち、文明13年には、富郷・鳥屋郷・千家郷・遥勘郷にあった山科家の権益を押領、文明16・19年ころには隠岐国美多郷にも拠点を有していた可能性が指摘されている。このように、三沢氏は、斐伊川水系から出雲西部の平野部、そして隠岐にまでその影響力を行使しうる存在として、京極方にとっては最大の対抗勢力であった。

また、文明6(1474)年には、能義郡の土一揆の蜂起で、尼子清貞は、富田要害を守って奮戦し、一揆を撃退しているが、この一揆も背後に三沢氏の影響があったとされる。

三沢氏は、この後も、出雲山間部最大の国人領主として、清貞の後継者である尼子経久による出雲一国支配の確立(それは戦国大名化でもあるが)にとって、最大の対抗勢力としてたちはだかった。

### 〔第三の画期〕

天文11年(1542)6月、周防の大内義隆は、大軍を率いて出雲へ侵入し、赤穴瀬戸山城(現赤来町赤名)を攻撃し、これを開城させた。この前年、尼子晴久は、毛利元就の本拠、安芸国郡山城を攻撃して敗北を喫しており、その痛手を見越した大内軍の侵入であった。赤穴を落した大内軍は、由木



(現飯石郡頓原町)に本陣を移し、同年10月には三刀屋カ峰、ついで馬潟(現松江市馬潟町)に着陣した。赤穴は、備後・石見方面に通じる国境の交通路上にあり、後の尼子・毛利戦においても重要なポイントになる。三刀屋カ峰は、三刀屋川と斐伊川の合流点付近にあり斐伊川中流域の要衝木次市場きすきに隣接する場所である。また、馬潟は宍道湖から中海への出口付近にあたり、宍道湖から現在の大橋川沿岸を、富田城に本拠を置く尼子氏から切離し、島根郡方面を抑える要衝でもあった。翌天文12年(1543)2月、大内勢は、本陣を富田城の前面にある京羅木山きょうらぎに移し、同城に籠城する尼子軍と決戦の態勢を整えた。ところが、富田城麓における戦いが一進一退していた同年5月、大内氏は、一旦配下に入った出雲の国人衆の寝がえりにあい大敗北を喫して周防へ引揚げた。

#### 〔第四の画期〕

石見平定を終えた毛利元就は、永禄5年(1562)7月、続いて出雲へと侵入した。すでに多くの出雲国人衆は毛利方へ入り、それを背景に、元就は、赤穴・三刀屋・宍道を経て、12月に洗合あらわい(洗骸・荒隈)(現松江市国屋町・南平台付近)に着陣した。洗合は、宍道湖北岸に位置する水上交通の要衝であり、やや東に位置する末次すえつぐ・白潟しらかた(現松江市末次・白潟付近で、当時は湊があり宍道湖沿岸から中海、美保関方面へ抜ける要衝)を抑える要地であり、また、尼子方の松田兵部丞が籠城する白鹿城しらが(松江市法吉町)を攻撃するための足場でもあった。そこで、元就は、洗合に恒久的な陣城を築くこととし、ここを、尼子義久の本城である富田城攻略の拠点にすることとした。

また、元就は、後方の安全を期するため、三刀屋に配下の宍戸・山内を置き、掛合に息男の毛利隆元を配置した。これに対して尼子方も、毛利勢後方の補給路を遮断するため、富田城から宇山・立原らの諸将を三刀屋へ派遣し、尾崎城前面の地王峠で毛利勢と戦闘を展開するが、目的を達することなく引揚げている。

永禄6年(1563)8月、元就は、宍道湖から中海に抜ける水路(現大橋川)の北側に位置する白鹿城への攻撃を開始する。9月には石見銀山の鉦夫を動員してトンネルを掘らせるなどして激しい攻撃を加え続けた。これに対して、尼子義久も白鹿城を救援するため、白鹿城麓船本、そして馬潟から和久羅付近で戦いを展開するが、毛利勢に抗することはできなかった。また、同じ9月、熊野城の熊野兵庫介も、毛利勢と激しい戦いを展開している。この時、尼子軍は、鉄砲を本格的に用いて戦っている。しかし、結局10月下旬、白鹿城は開城、城将松田兵部丞は隠岐へ退去した。この城は島根郡から宍道湖・中海を抑える要であり、これを失うことで、尼子氏は富田城へ事実上封じ込められることになったのである。また、この年の11月、毛利水軍は、尼子氏の兵糧補給路であった弓ヶ浜も押さえてしまう。

永禄8年(1565)に入ると、毛利本陣は星上山(現八束郡東出雲町・八雲村の境)へ移され、京羅木山ほか富田城前面に陣を敷く毛利軍は富田城麓において尼子方と戦闘をくりかえした。永禄9年(1566)になると、富田城中からの投降者が続出し、この年の11月下旬、ついに尼子義久は毛利氏に降伏し富田城を開城した。

#### 〔第五の画期〕

永禄12年(1569)、尼子勝久は、山中幸盛あきあげいおりのすけ・秋上庵介あきあげいおりのすけほかの尼子旧臣と共に、但馬から隠岐を経て、島根半島東部に上陸、真山城しんやま(現松江市法吉町・持田町／新山城)を根拠地として、出雲の奪回に乗り出した。これに応じ、出雲国内の旧尼子方国人衆も続々と勝久方に参加し、一時は、毛利の守将天

野隆重の籠る富田城に迫る勢いを示した。

尼子勝久の出雲上陸と尼子旧臣の蜂起を重大視した毛利輝元らは、永禄13年（元亀改元）（1570）正月に軍勢を率いて出雲へ入り、2月、布部（現能義郡広瀬町）において尼子軍と激突した。激戦の末、尼子軍は敗退。末次城（現松江城付近カ）へ撤退した。これを境に、尼子方は急速に衰え、一旦は尼子方に寝がえっていた熊野（熊野氏／八束郡八雲村）・森山（秋上氏／八束郡美保関町）・三笠（牛尾氏／大原郡大東町南村）ほかの諸城が、次々と開城または落城し、元亀2年には真山とならぶ尼子方の拠点であった高瀬城（米原氏／簸川郡斐川町学頭）が開城した。同年中には真山城周辺の佐陀城（現松江市浜佐田の満願寺付近カ）などで両者が戦闘に及んだが、結局、勝久が隠岐へ退去して、尼子復興戦は失敗して終了した。

#### 〔第六の画期〕

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いにおいて、毛利氏は防長2州へ転封となり、これに代わって、堀尾吉晴が、出雲国富田城へ入城した。これ以後、1608年に堀尾氏が松江城へ移るまでの間、富田城には改修の手が入られたものと考えられる。また、領内に多く散在する城郭の整理を行いながら、要衝に位置する城郭整備も行われたものとみられ、現在、三刀屋・赤穴瀬戸山城などには、中世の山城遺構と近世石垣造りが併せ残されている。

（島根県古代文化センター 佐伯徳哉）

- 井上寛司「中世日本海地域の水運と交流」『日本海と出雲世界』小学館 1991  
長谷川博史「戦国期出雲国における大名領国の形成過程」『史学研究』201号 1993  
長谷川博史「出雲国三沢氏の権力編成とその基盤」『山陰史談』26 1993  
米原正義『出雲尼子一族』新人物往来社 1981  
『新修島根県史』通史編1 1968  
『島根県史』七巻 1929  
『日本歴史地名大系33 島根県の地名』平凡社 1995



# 出雲・隠岐地方の中近世城館跡の分布とその特徴について

## 1、はじめに

島根県出雲地方は旧出雲国に相当する島根県東部地方、隠岐地方は旧隠岐国に相当する島根県隠岐郡をいう。出雲地方は山間部が多いが、飯梨川、斐伊川、神戸川といった比較的大きな川が日本海側に肥沃な沖積平野を形成している。隠岐地方は島根半島の北方約60Kmの海上にあり、島前、島後の四島と無数の小さな島からなる。後鳥羽、後醍醐天皇の配流地として知られるが、水上交通の要衝でもあった。以下、今回の現地調査を基に出雲・隠岐地方の城館跡の分布とその遺跡の特徴を述べることにする。

※文中（ ）内の記号は、本書における遺跡番号を示す。

## 2、立地について

出雲・隠岐地方は圧倒的に山間部が多く、大多数の城郭が山城に分類される。近世初頭に改修された広瀬町の富田城(ウ4)、三刀屋町の三刀屋尾崎城(ツ14)、赤来町下赤名の瀬戸山城(ナ9)がいずれも山城であり、江戸期を通じて使用された松江市の松江城(エ16)も主要部は丘陵部に築かれている。

平城は出雲市塩谷町の浄音寺境内遺跡(ヌ10)等、少数しか確認されず、平野部でも丘陵に築かれた例が多い。

## 3、特殊な城郭について

ここで、特殊な性格が看取された数種の城郭について列記しておきたい。

### (1) 窟城

八束郡美保関町雲津に岩屋城と称する城郭が伝えられている(註1)。源義親が嘉承年間に潜伏していた窟が城跡とされている。今回場所を確認できなかったため、今後検討の余地がある。

### (2) 水軍城

水軍の拠点となる城郭は島根半島、境水道、中海沿岸、大橋川沿い、そして宍道湖沿岸で多くの事例を確認することができた。これらの城郭は平時は水運を監視し、必要とあれば軍事力(水軍と呼ばれる海上・水上で活躍する武装集団)をもって襲撃や封鎖等を行なったものと考えられる。以下、地域ごとの特色をまとめる。

#### <島根半島>

日本海沿岸は複雑な地形が多く、天然の良港を多く持つ。これらの港に接したり、望む場所には水軍城と見られる城郭が築かれている例が散見される。大社町の宇竜では確認できなかったが、鷺浦に鷺鷹蛇バン谷城(ハ1)、平田市では十六島の高島城(ネ38)、鹿島町の恵曇に池平山城(サ8)が築かれている。島根町では加賀の要害山城(コ4)が水軍城と見られ、背後に築かれた加賀城(コ5)との関連が考えられる。また、島根町野波にある、みほしの城(コ7)も水軍城に位置付けられる。島根半島西端には水運を監視するために何らかの施設の存在が想定される

が、灯台建設と近年の公園化によってか確認ができなかった。美保関には馬着山城（ケ6）が知られている（註2）。現在の五本松公園が城跡と考えられるが近年の公園化による改変のため十分に確認できなかった。

#### <境水道>

美保関町森山には尼子氏の重臣とされる亀井氏の居城（註3）の鈴垂城（ケ2）を初め、権現山城（ケ3）、横田山城（ケ4）が集中して築かれており、いずれも境水道に突出した尾根や島状地形に築かれている。船溜りと見られる地形が付近に存在することから、水軍の拠点として使用されていたものと考えられる。また、横田山城には連続竪堀群が確認され、戦略的な拠点としての役割も持っていたと言えよう。

#### <中海沿岸>

安来市の十神山城（ア1）が尼子側の水軍の拠点として知られる（註4）。当時は島であったものと見られ、全体的に普請は不十分なものとなっている。松江市新庄町の城山城（エ3）は八束町（大根島）西側の水運を監視する位置にあり、船溜りの存在から水軍城と確認できた。八束町の全隆寺城（シ1）は中海に接する丘陵先端部に築かれている城郭である。境水道や大橋川から富田城へ物資を運ぶ水上ルートを一望する位置にあることから、水運を監視する役割を持っていたものと考えられる。安来市の武嶺山城（ア4）は飯梨川の河口部に位置し、当時は島であったものと考えられ、富田城への水上ルートを監視するには絶好の地である。松江市馬潟町の角森城（エ24）は中海と大橋川が接する地に突出した丘陵に築かれている。全体的に普請は不十分なものとなっているが、付近に天文年間、大内義隆が一時期本陣を置いたとされる正久寺跡が存在する（註5）ように要衝の地である。永禄12年に尼子勝久を擁した尼子再興軍が拠点とした美保関町の忠山城（ケ5）は、標高290mの山頂部にあるが、北側に日本海、南側に中海を見渡せる位置に築かれており、それぞれを同時に監視することが可能である。

#### <大橋川沿い>

松江市朝酌町の和久羅城（エ22）は大橋川北岸に位置し、この方面の戦略的な拠点である。大橋川を一望する位置にあり、多くの支城を持つが、支城の一つと考えられる松江市西川津の城山城（エ23）は、その位置関係から見て大橋川の水運を監視、掌握する拠点と考えられる。

#### <宍道湖沿岸>

松江市浜佐陀町の満願寺城（エ13）は宍道湖に突出した岬の先端部に築かれており、宍道湖の制海権を握るための拠点と考えられる。また、宍道町の宍道要害山城（ク5）も当時は宍道湖に突出していたものと見られるため、水運を監視、掌握するための拠点と考えられる。

#### <隠岐地方>

海士町の因屋城（ヤ1）は、諏訪湾に接し、西郷町の宮田城（ホ1）、国府尾城（ホ5）は西郷湾に接しており、水運を意識したものとなっている。また、中村城（ホ3）や都万村の高尾城（ミ3）等も集落や港を望む位置にあるため、水運との関連が考えられる。

### （3）物資流通の拠点としての城郭

斐伊川は当時出雲市の林木で東西に分流し（註6）、西流は神門水海（現神西湖）を経て杵築湾に注ぎ、東流は平田市の平田城（ネ12）下を流れて宍道湖に注いでいた。永禄5年、山間部から出雲

平野に進出した毛利軍は橋頭堡として水運の要衝である林木に鳶ヶ巣城（ヌ2）を築くとともに、奥出雲方面と杵築湾からの物資集積地として位置づけていたものと考えられる。後に毛利軍に有利な状況下において戦線が東方に移ると、平田城が松江市国屋町の荒隈城（エ15）への物資中継地として整備されたことが知られている（註7）。

荒隈城（エ15）は永禄5年に宍道湖北岸に進出した毛利軍によって築かれた城郭である。この方面の尼子軍の拠点である松江市法吉町の白鹿城（エ6）に圧力を加えると同時に、大橋川、中海へと侵攻する毛利水軍の拠点として位置づけられていたものと考えられる。城域は広く、町屋も設けられていたことが知られているため（註8）、戦線が東方に遠ざかると物資中継所、後方支援拠点として機能が変化していったものと考えられる。

出雲市の神西城（ヌ6）は毛利元就が赤穴の瀬戸山城と同様に重視した城郭として知られ（註9）、神門水海の南方に位置する。城域は広く、壁は十分に普請が行われており、郭間の連絡道も明確である。ところが郭内部の普請が不十分であり、壁が無ければ城郭と気付かないような部分も存在する。当城の性格には諸説があるが、杵築湾からの物資集積場所、中継地点としての可能性が考えられる。

#### （4）陣城について

陣城は野戦や攻城戦において自軍に有利な状況を作るために築かれる城郭である。使用目的が優先されるため、必要のない方面の普請は簡略化されたり、省略される傾向がある。また、主郭の断定が難しいのも特徴である。目的が達成された後は使用されない例が多い。

赤来町の瀬戸山城（ナ9）は赤穴氏の居城であり、天文年間に大内軍、永禄年間に毛利軍によって攻城戦が行われたことが知られている。今回の調査で瀬戸山城の尾根続き、城郭を見下ろす位置にある武名ヶ平山を中心に瀬戸山城を包囲するかたちで武名ヶ平城（ナ12）が確認された。毛利軍の陣城と考えられ、武名ヶ平城に対して赤穴氏が築いた陣城も確認できた。又、谷を隔てて南西に対峙する位置にも毛利軍の陣城とみられる元山城（ナ13）が確認された。

頓原町油来は天文11年に大内義隆率いる大軍がしばらく滞陣したことが知られており、陣城と見られる施設が密集して築かれている（註10）。

大東町の佐世城（ソ26）の南側に大堀切を隔てて築かれている郭群は、当初佐世城側の軍勢の駐屯空間と考えていたが、佐世城方面以外の普請が不十分なことから、佐世城を攻撃するための陣城と考えられる。

松江市の真山城（エ5）は本来白鹿山城砦群（エ6）を構成する一つの防御拠点と考えられる。白鹿城を見下ろす位置にあるため毛利軍によって占領された後、陣城として改修されたものとされる（註11）。尼子氏の居城、富田城（ウ4）を毛利軍が攻めた時に京羅木山城砦群（ア19・ウ28・オ4）と勝山城（ウ1）が拠点として築かれたことが知られていたが（註12）、今回の調査で勝山城から三笠山城（ウ31）までの尾根、塩谷、新宮谷において陣城群が確認された。富田城を包囲するように築かれていることや、普請が全体的に不十分だが、雛壇状の施設が麓近くまで執拗に築かれていること、富田城に面する方面以外には施設がほとんど築かれていないこと等から、毛利軍によって陣城として築かれたものと考えられる（註13）。特に塩谷に築かれている陣城（ウ6）は富田城主郭部を見上げる位置にあり、ここまで陣城を築くことが可能であった毛利軍と、築かせてしまった尼子軍の勢いの差を如実に物語る遺構と言えよう。

また、八雲村の熊野城（カ2）と大東町の三笠城（ソ6）との連絡を遮断するために築かれた高津場番城（カ1）、亀遊山城（イ5）を攻める拠点として築かれた豊岡城（イ19）等、毛利軍のものと考えられる陣城が多数確認出来た。毛利軍の陣城は攻撃目標である城郭の尾根筋に築く傾向にある事が石見地方で顕著に見られたが、この傾向は出雲地方でも認められた。

#### （5）平城について

平城は平地の微高地に堀や土塁等の人工的な防御施設によって築かれた城郭である。出雲地方では類例が少なく（註14）、尼子氏の居館とされる里御殿（ウ20）が痕跡すら残さない現状にあつては、出雲市の浄音寺境内遺跡（ヌ10）が平城の代表的な遺構とされる。塩冶氏の関係のものとなされ、土塁のコーナーと堀の一部が残るのみであるが、地形図からある程度の縄張りが復元可能である。また、土塁は益田氏の三宅御土居に匹敵する規模を持つ。同市内の三木氏館（ヌ4）も微高地に築かれており、土塁と堀を持つ。北端を灌漑用水が接しており、開発領主の拠点として評価される。

### 4、遺構各論

ここで、出雲、隠岐地方の城館跡で見られた各種遺構の性格と特徴の概要を整理してみたい。

#### （1）堀切

堀切は攻撃対象となりやすい尾根筋を遮断するために築かれた防御施設で、堀切の端をそのまま延長し、堅堀とする事例が多数確認された。出雲、隠岐地方全域で確認できたが、堀切による防御法を採用していない城郭も散見された。急峻な地形に築かれた場合が多いが、何らかの理由で放棄され、築城当時のまま残された城郭が多い。また、白鹿山城砦群（エ6）のように毛利、尼子軍の激戦地として知られる城郭でも堀切がほとんど築かれていない例が見られた。

#### （2）堅堀、連続堅堀群

堅堀は等高線に垂直に築かれた堀を指し、山腹の水平移動を遮断するための施設で、登城ルートとしても使用された（註15）。単体の場合と連続して築かれる場合とがあり、後者を連続堅堀群という。連続堅堀群はあたかも畑の畝のように見える事から畝状堅堀群とも呼ばれており、時代が下ると緩斜面を破壊する目的で使用されたとされている。堅堀は出雲、隠岐地方全域で確認できたが、連続堅堀は隠岐地方では確認できなかった。連続堅堀群の技法はまず横堀を築いて、それを破壊するように堅堀を築く等、石見地方で見られたものと共通点が多く感じられた。また、松江市上大野町の土居城（エ32）は緩斜面を堅堀で破壊しているが、その規模の大きさから、堀底は堀底道として使用されていたものと考えられる。

#### （3）横堀

横堀とは等高線に平行に築かれた堀である。地形的制約をうけず、郭を創意的に築くことに特色がある。隠岐地方では確認ができず、出雲地方でも仁多町の三沢城（セ11）や大東町須賀の諏訪城（ソ2）、伯太町井尻の平の城（イ21）、松江市の満願寺城（エ13）等でしか確認できない。旧街道や鉄生産に伴う「鉄穴流し」の水路、腰郭に築かれた土塁を横堀と見間違える事例が多い。ところ

で、水軍の拠点となった満願寺城の主郭に築かれている横堀が、小早川隆景が一時期居城としていた新高山城（広島県豊田郡本郷町本郷）の通称鐘の段の横堀と似ているのは単なる偶然だろうか。

#### （４）障子堀

障子堀は堀底を土橋状に掘り残す技法で、障子の棧のように見えることから、このように呼ばれている（註16）。堀底の移動を妨げるために築かれたものとされ、関東を中心に広く分布している技法である。隠岐地方では確認できない。出雲地方では三刀屋町の三刀屋じゃ山城（ツ10）の試掘調査で当初存在した大堀切の堀底に三重の堀切を新たに築き、西側と東側の堀底に3～4m間隔で1×1.5mの長円形の穴が四穴ずつ掘られているのが確認された（註17）。深さは二種あり、中央寄り二穴は浅く、他は1.8mに達している。同様の施設は横田町の藤ヶ瀬城（ス3）後方の城砦群でも確認されている。表面観察では発見しづらいため、今後事例が増加する可能性がある。

#### （５）櫓台

防御の拠点として築かれた施設である。戦闘指揮所としての使用も想定でき、重層の見通しの効く建物が築かれていたものと考えられる。横田町の夕景城（ス11）、藤ヶ瀬城（ス3）、仁多町の三沢城（セ11）、三刀屋町の三刀屋尾崎城（ツ14）、多久和城（ツ30）、大東町の高平城（ソ7）、玉湯町の玉造要害山城（キ3）、松江市法吉町の白鹿山城砦群（エ6）、広瀬町の富田城（ウ4）等で確認できた。富田城と三刀屋尾崎城は近世に改修されたものであり、白鹿山城砦群は本城の主郭のほぼ中央に築かれているが、その他は防御ラインの中核として築かれている例が多い。虎口脇に築かれている例は少ないようだ。

#### （６）土塁

土塁は土を突き固めたり、削りだして築いた障壁で、出雲、隠岐地方全域で確認出来た。郭の端、上位の郭と接する場所を削り残すかたちで築かれたものが多いが、虎口の周囲に集中的に築く例が多い。出雲市の半分城（ヌ14）や三刀屋町の茶白山城（ツ41）等、主郭の周囲のみに築く例も認められた。毛利軍が橋頭堡として築いた鳶ヶ巣城（ヌ2）が郭の周囲に土塁を巡らすことを基本としていたこととの関連性が指摘される。又、藤ヶ瀬城（ス3）に代表される櫓台を防御の拠点とし、土塁による防御ラインを構成する城郭の存在が確認できた。その分布は国境の横田町から宍道湖湖畔の玉湯町の間しか確認できなかったため、毛利軍との関係が考えられる（註18）。

#### （７）虎口

虎口は郭への入口であり、戦いの際には最も攻撃が集中しやすいため、城内で最も慎重に築かれている施設である。実戦の経験等により改良、発展するものであり、築城、改修者の考え方が最も表れる場所でもある。柵等で構築するのが一般的だが、土塁や石積み等で補強したり、虎口内や直前で何回もルートを変えて築く等、様々な工夫を凝らしていた。土塁を食違わせて築いた例が玉湯町の玉造要害山城（キ3）等に見ることができ、虎口両脇に土塁を張り出した両袖枡形が松江市上大野町の土居城（エ32）に認められる。枡形虎口は虎口の外か中を土塁や壁によって方形に仕切った空間を指し、二カ所の出入り口がある。ルートは通常枡形内で左右に折れるため、極めて防御



力の高い構造となっている。枡形虎口は、勝山城（ウ1）が知られているが、鳶ヶ巢城（ヌ2）、斐川町の高瀬城（ノ4）、宍道町の金山要害山城（ク2）、瀬戸山城（ナ9）、富田城（ウ4）等で確認されている。ただし、勝山城や近世初頭に改修された富田城、瀬戸山城以外は規模が小さい例が多い。瀬戸山城（ナ9）では敷石が残る虎口が確認された。

隠岐地方では海士町の因屋城（ヤ1）で食違虎口が確認できた。

#### （8）馬 出

虎口の外側に堀を隔てた位置に築かれた比較的小型の郭で、城内から出撃するための拠点として位置付けられていた。地形が島状になっていることが特色で、富田城（ウ4）、金山要害山城（ク2）等で確認されたが、隠岐地方では確認できなかった。

#### （9）郭間の連絡路について

城内の郭間の連絡が明確な城郭が出雲地方で散見された。土塁上を歩かせて虎口に入れる例が加茂町の高麻城（タ8・ソ12）等、主郭を経由することなく郭間の連絡が可能なバイパス的な施設が伯太町の高守城（イ20）、松江市の和久羅城（エ22）等で確認された。また、斐川町学頭の高瀬城（ノ4）では虎口の前面に豎土塁を築き、なかなか近づくことが出来ない巧妙な縄張りが見られた。また、ルートの山側に堀を築いたり、崖側に土塁を築く例が高瀬城等で確認された。

#### （10）横矢について

横矢は城壁に取り付こうとする攻撃勢力を側面から攻撃する施設を示し、比較的新しい技法とされる。出雲地方で散見され、壁のみによるものと土塁を伴うものがある。勝山城（ウ1）や京羅木山城砦群（ア19・ウ28・オ4）が知られている。隠岐地方では一部に類例が見られる。

#### （11）石垣、石積みについて

ここではコーナーのあるものを石垣、無いものを石積みという。石積みは出雲地方全域で散見され、隠岐地方でも数例確認出来た。石垣はほとんど確認できず、富田城（ウ4）や瀬戸山城（ナ9）、三刀屋尾崎城（ツ14）等のように近世初頭に改修された城郭以後しか確認出来ない。富田城は城域が広いので、必要な場所や城下、街道から見える場所のみに石垣を築いていたものと考えられる。中核である山中御殿は総石垣造りであり、その西側は鈍角で折れる高石垣、東側は直角に折れる石垣で構成されている。櫓台も東側のみに認められるため、両者には時代差があるものと考えられる。ここで岡山県の岡山城が参考となる。同様の事例として鈍角で折れ曲がる岡山城の本段を宇喜多氏、それ以外の直角に折れ、横矢を効果的に多用する縄張りを関ヶ原後に入城した小早川氏、池田氏による改修とする説（註19）にもとづくならば、西側を毛利（吉川）氏時代に築かれたものであり、東側は関ヶ原後に入城した堀尾氏による改修と考えられる。

また仁多町の三沢城（セ11）伝大手口の石垣は、堀尾氏による改修の可能性もある。

#### （12）破城について

破城は近世初頭に改修された城郭のみに確認された。これらは元和元年の一国一城令と寛永14年

の島原の乱後に再度出された一国一城令によって破壊されたものと考えられる。富田城(ウ4)は山中御殿の通称大手門の破壊と山頂部の通称二の丸と呼ばれる虎口の埋め戻しと石垣上部の破壊、コーナー部の取崩し等が確認できた。

三刀屋尾崎城(ツ14)は出雲地方では数少ない天守台を持つ城郭であるが、現在天守台は完全に破壊されており、どのような構造であったか不明である。主郭周辺は石垣で固めていたものと考えられるが、ほとんど崩されている。瀬戸山城(ナ9)の主郭(天守台の可能性も残る)も破壊されており、特に街道に面した方面は根石すら確認できなかつた。しかし反対側の郭にはひと抱えもする石が散乱しており、石垣のコーナーが二カ所確認できたため、石垣上部の破壊にとどまったものと見られる。虎口の石垣も比較的に原形を留めている。

#### (13) 城内の飲用水路について

三刀屋尾崎城(ツ14)と金山要害山城(ク2)において主郭の付近まで飲用水路を引いた事例が報告されている。三刀屋尾崎城のものは「殿井手」と呼ばれ、西方約3kmの古城川の字殿井手に取水口があり、途中で何か所かの字殿井手を經由して主郭付近まで築かれている(註20)。金山要害山は約2.7km離れた比丘尼池から馬場池まで築いている(註21)。このような例は玉造要害山城(キ3)等、他の城郭でも伝承として伝えられており、今後の調査によって事例は増加するものと考えられる。

#### (14) 居館

尼子氏の居館が里御殿(ウ20)と呼ばれていたことが知られているが(註22)、居館を土居と呼ぶ例が多い。仁多町亀嵩の亀嵩城(セ3)の麓に古土居、新土居、仁多町三沢の三沢城(セ11)では御納戸垣内、ボクリ屋敷、座頭屋敷、成田屋敷等の地名が伝わっている。隠岐地方では隠岐氏の居館として国府原館(ホ5)が知られる。国府尾城の麓に位置し、尾根続きを堀切と土塁で遮断し、全体的に方形を意識して築かれている。

### 5. おわりに

今回の出雲・隠岐地方の分布調査では調査員の精力的な調査によって城館数は飛躍的に増加した。しかし個人的には石見地方の調査と富田城およびその周辺に時間をかけすぎてしまい、最後の頃は遺跡地図に掲載されている城館の位置確認と縄張り調査を優先する事態となった。その結果平地の館や城郭の麓にその存在が考えられる居館がほとんど確認できなかった。町誌等には今回位置が確認できなかった城館が少なからず掲載されているため、今後城館の数は増加することが十分予想される。隠岐地方は時間の関係で数城しか調査出来なかつた。ただ、隠岐地方の調査員も城館に関する関心は高いため、今後隠岐地方の城館数も増加してゆくものと考えられる。幕末に築かれた台場の取り扱いや馬出、横堀等の用語に混乱が見られた事、縄張図を鮮明に印刷するため基本的にトレースをおこなつたので、縄張図に込めたこだわりや微妙な線が曖昧になったのは残念であった。いろいろと悔いの残るものとなったが、出雲、隠岐地方の城館の位置、縄張とその分布が概ね明らかになったことは評価すべき事だと思う。本報告書においてこのたびの島根県の城館跡分布調査は一応終了するが、実態はようやく城館調査の基礎資料が出揃った状況にある。本稿が今後の城館調査研究、地域史解明の一助になれば幸いである。

(調査員 寺井 毅)

- 註1 『日本城郭大系14』 新人物往来社 1980
- 註2 同 註1
- 註3 同 註1
- 註4 同 註1
- 註5 『続竹矢郷土誌』 1990
- 註6 『斐川町誌』 1950
- 註7 山根正明「出雲における毛利氏の山城について」『山陰史談22』
- 註8 同 註1
- 註9 山根正明「湖陵町と周辺の中世城館について(一)」『湖陵町誌研究2』湖陵町教育委員会  
1993
- 註10 頓原町の遺跡 頓原地区 頓原町教育委員会 1990
- 註11 村田修三 「真山城、付白鹿城」『中世城郭事典3』 新人物往来社
- 註12 三島正之 「勝山城、付京羅木山城塞群」『中世城郭事典3』 新人物往来社
- 註13 村田氏は塩谷と新宮谷に見られる施設を毛利軍によるものと指摘している。  
村田修三「富田城周辺の城跡」広瀬町内遺跡総合整備計画策定報告書 島根県教育委員会
- 註14 県下有数の平野である出雲平野と簸川平野で城館を探したが、洪水対策の屋敷地のかさ上げ、  
簸川平野独特の築地松の根元部が土塁と区別出来ないことが城館の確認を困難にした。
- 註15 木次町里方の城名樋山城(チ1)は好例。
- 註16 後北条氏が多用したとされ、居城の小田原城や山中城等が知られている。
- 註17 「三刀屋氏とその城跡」三刀屋城跡調査委員会  
「三刀屋城跡調査報告書Ⅰ～Ⅲ」三刀屋町教育委員会
- 註18 尼子氏の居城の富田城や重要な拠点である白鹿城(エ6)や熊野城(カ2)等に櫓台を中心  
とした城郭が見られないことから尼子軍の可能性は低い。
- 註19 三浦正幸「築城の歴史を語る縄張」『歴史群像 名城シリーズ12 岡山城』(株)学研 1996
- 註20 同 註16
- 註21 山根正明「宍道町の山城」宍道町ふるさと文庫5 宍道町教育委員会 1991
- 註22 同 註1

# 普請未成の山城について

## 1. はじめに

城館の現地調査の実施中に、疑問に思うことがいくつかある。その一つが「この普請は、果たして完結したのだろうか」という疑問である。というのも、いかにも不自然で、理解し難い縄張りとしてしか図化出来ないような遺構に遭遇することがあるからである。

もとよりそれは、縄張り調査という調査方法の限界や固有の弱点によるものもあろうし、自然の営みや年月の経過がもたらした結果と考えざるをえない事例もある。また調査者の力量不足からくるものもあろう。

これまで、多くの場合、不自然で理解し難い縄張りの遺構に対しては、築城者の縄張り観についての洞察力が不足しているから、あるいは他地域の類似の事例研究が貧困だからといった、要するに調査者の力量や努力不足に原因を求めているのではなかろうか。つまり、みずからの眼力の無さを嘆いて終われりとしていたのではなかろうか。少なくとも筆者にあっては、決して謙遜などではなく、全く力不足のせいと考えてきた。しかし、それを調査者の真摯な姿勢とみなして称揚してよいのだろうか。

考えてみると、城館の築造は、多数の人力と多量の資材を必要とするのみならず、長い時間を必要とする大事業である。規模にもよるが、数カ月から数年を要する場合もあろう（註1）。とすれば、当然その間に、城館の築造や改修を必要とした政治状況に変化が生ずる可能性は否定できない。つまり、当該城館に求められた機能の変化や戦況の推移によって、大小の変更が生ずることは大いにあり得ることと思われる。特に陣城の場合にその可能性が高い。以下、そうした変更が生じたことと推定される事例と、そこから推測される背景などを考えてみたい。

※文中（ ）内の記号は、本書における遺跡番号を示す。

## 2. 鳶ヶ巣城北部稜線上の普請について

雲芸攻防戦にあって、飯石郡赤名の瀬戸山城（ナ9）を進発して奥出雲の山間の道を北進した毛利勢が、出雲国の平野部に突出して、最初の拠点とした陣城が出雲市の鳶ヶ巣城（ヌ2）である。斐伊川が、東の宍道湖と西の大社湾の両方に曲折する中間点を見下ろす、北山山系から出雲平野に突き出した支脈の先端の、比高270メートルの鳶ヶ巣山の山頂に地取りしている。築城の時期は、永禄五年（1562）の八月ごろと推定（註2）される。

縄張りの基本は、標高281.4メートルの山頂に設けられた主郭を中心として、四方の尾根に配された郭からなる、放射状連郭式山城といえる。最前線の陣城として築城された山城にふさわしく、地取りにも縄張りにも、緊張感・緊迫感を感じさせるものがある。ただ、主郭の北西の郭群に続く稜線上の普請については疑念を持たざるをえないところがあり、後に詳述することとしたい。

この山頂の郭群に対して、鳶ヶ巣山の南麓の標高50メートルの地点には、東西約300メートルにわたりテラス状に削平段を重ねた郭群が設けられている。したがって鳶ヶ巣城は、山頂の郭群と山麓の郭群との二群から構成されているのであり、（以下この二つの郭群を、便宜上山頂郭群・山麓郭群と呼ぶことにする。なお主郭の南西の標高224メートル地点に設けられた郭群は、両郭群を繋ぐ役割を担っ

ている。) 両郭群の間には、築城時期の先後と機能の分担があったと考えなくてはならないだろう。

この背景としては、永禄五年(1562)十一月に元就が本城常光を誅殺したことから、いったん服属した出雲国人が反旗をひるがえすといった一時的な停滞にもかかわらず、雲芸攻防戦が、毛利氏にとって有利に順調に展開したことが考えられる。つまり翌永禄六年二月には、松江市の荒隈城(エ15)が元就以下毛利軍主力の滞陣が可能なほどに整備された結果、鳶ヶ巣城に求められる機能としては、最前線の陣城としてよりも、荒隈城に向かう、あるいは尼子方の白鹿城(エ6)へ侵攻する、兵員や物資の中継基地的な機能に重点が移ったと推定される。

山麓郭群に見られる各郭は概して収容力の大きいものが多いが、それは、当城が中継基地的な機能を果たす必要から、山頂郭群とは一定期間遅れて築造されたからであろう。山麓郭群の西方の山裾にある霊雲寺の境内地や、宅地化されている東方の山裾も、恐らく臨時の駐屯空間として同時期に普請が行われて利用されたに違いない。

なお、このように、中継基地的な機能を担った山麓部と純軍事的機能を分担した山頂部との二群構成は、毛利氏が出雲国への侵入口として重視した赤名の瀬戸山城にも同様に確認することができる。

ところで問題は、主郭の北西の郭群に続く稜線上の普請についてである。この稜線は、北山山系から出雲平野に突き出した支脈そのものであり、この先端のピークに鳶ヶ巣城の山頂郭群が地取りしているのである。

実のところこの部分は、1986年度の時点では、ブッシュに阻まれて未調査のままに終わってしまった。ところが1990年度に精査してみると、主郭の北北東約300メートルの位置に普請の痕跡のあることが判明した。前回の調査の不十分さを恥じるばかりである。

ところでその普請とは、北方に向けて開口した、土塁で囲まれた榊形虎口と、その東側下方の堀切であった。ところが、榊形の内側にあたる標高272.5メートルの稜線上には、ほとんど普請の痕跡がないのである。二人立ち程度の幅の通路がのびているだけであった。

土塁囲みの榊形虎口を造るからには、その内側を郭として造成する意図があったと考えなくてはならない。にもかかわらずこの地点は、丸みを残した稜線上面と、切岸として削り落とされた壁もない、要するに自然地形のままに放置されていて、せっかくの榊形虎口がまったく虎口の用をなしていないのである。

このように、不合理としか思われないう縄張りや普請は、鳶ヶ巣城のこの部位が、造成途中で放棄されたものとするれば納得がいく。つまり、主郭北西の郭群に続くこの稜線上の平坦面を、郭として造成する必要が生じて普請が開始されたものの、状況の変化によって普請の必要性がなくなってそのまま放置された結果と考えられるのである。

このような推定を、鳶ヶ巣城を取り巻く戦況と城史の視角から再検討してみよう。鳶ヶ巣城が再び軍事拠点として重視されるのは、尼子家復興戦の時期である。永禄十二年(1569)六月に始まった出雲国における戦闘は、翌年二月の能義郡布部の合戦で山中鹿介らが<sup>ふべ</sup>大敗して毛利方の優位が確定するが、元就の発病によっていくぶんこう着状態になる。吉川元春を残して、輝元・隆景・元長らが安芸国吉田へ撤収するからである。この折に元春は「鳶巣を本城に召され」、輝元・隆景・元長らは元龜元年(1570)八月二十一日に「雲州林木鳶巣城を発馬」したという(註3)。元春は、出雲市神西城(ヌ6)・平田市平田城(ネ12)にも滞在して指揮を取ったから、一時的とはいえこの間に、鳶ヶ巣城は再び毛利軍の指揮中枢という機能を担ったのである。

主郭北西の郭群に続く稜線上の平坦面は、こうした戦況から、北方の北山山系からの尼子方の攻撃に備えて急遽縄張りが行なわれ、普請が開始されたものと推測される。つまり、山頂郭群の普請（第1期）山麓郭群の普請（第2期）に続いて、鳶巣城の第3期の普請が始められたのであろう。

北方正面が重視されたことを思わせる普請は、主郭の東方先端の郭の土塁にも見出すことができる。この郭は周囲を土塁で固めているが、南側の土塁が底幅約3メートル高さ約1メートル程度なのに対し、北側から東側に続くそれは底幅約9メートル高さ約2メートル程度の堂々たる土塁なのである。しかも北側の谷斜面に向けて横矢が掛けられるように土塁線を凹入させている。また北側の谷斜面に向けて二本の堅堀を掘っていることも、北方重視の表われとみてよい。

なお、主郭の北西方向の郭の土塁にも、厚みと高さを増した部分が認められる。この北端の、土塁囲みの榊形虎口と堀切の組み合わせは、基本的にこの郭群に続く稜線上の平坦面の縄張りと同様と考えてよかろう。少なくとも、主郭の南東方向の郭群の先端に設けられた榊形虎口とは明らかに異なっている。この榊形は柵か塀で構築されたのであろう。

以上から推定すると、吉川元春の在陣によって、標高272.5メートルの稜線上には、その北東端に榊形虎口を持った、周囲に土塁をめぐらせた郭が急遽築造されることになったと思われる。しかし、元春の移動と尼子家復興戦の戦況が毛利方の優勢のうちに展開したために、普請途中でそれが放棄されたものと推定される。

### 3. 城山城と佐々布川左岸の山城の普請について

八東郡宍道町の佐々布川左岸の枝谷の一つ、岡田谷の奥の茅原堤を見下ろす、標高70.5メートルの丘陵上のピークに地取りしているのが城山城（ク4）である。岡田谷の谷口には、字「土居（宅地）」・字「土井（畑・山林）」があり、また字「岡田奥ヶ市（水田）」・字「奥ヶ市（山林）」・字「古屋敷（山林）」・字「廣屋敷（山林）」など、中世の名主屋敷を思わせる字名が岡田谷の両側に点在している。したがってこうした景観から、城山城は、茅原堤を開いて水源とした、この地の土豪的小領主の山城と思われ、その居館跡が谷口の字「土居」（本常正巳氏宅で、本常家は屋号も土居という）と推定される（註4）。

城山城では、主郭の北側に八本の連続堅堀を掘って緩斜面防御としていること、東側と西側に堀切を掘って稜線を切断していることなどが注目される。さらに東側の堀切は、その内側に細長い榊形状の虎口を設けており、茅原堤の側から堀切ぞいに登った兵員を収容できる縄張りになっている。しかし主要部はというと、基本的に単郭で普請も粗放な小規模山城でしかない。主郭とその四方に配された腰郭は、いずれも不定形で削平も不十分であり、古式を感じさせる。また南側中腹の井戸を守るためと思われる堅堀も、東側に一本だけで西側にはないのでは、効果を減殺していると思える（註5）。つまり縄張りの精妙さに対比して、普請の粗放さが際だっているように感じられるのである。

ところで、字「土居」の本常正巳氏宅の北側で、字「土井」・字「成り」・字「矢廻」にかけての山林と畑には、八幡宮の勧請と耕作による若干の攪乱はあるものの、明瞭に普請の跡が残されている。（これを便宜上土居郭群と呼んでおく。）「土居」の裏手（標高37.1メートル）には八幡宮が祭られているが、もともと郭として造成されていたらしく、この東側の堀切をへだてた丘陵の突端（標高29.3メートル）にも、南北に二段からなる郭が造られている。この郭は佐々布川の氾濫源に面しており、しかも比高が約15メートルほどしかないから、堅堀と腰郭をめぐらせて防御としている。また西側の

堀切に続く尾根筋の北側には二段の帯郭が築かれているが、これは北の矢廻の谷側からの攻撃に備えて銃陣を敷くためであろう。

実は先の城山城と土居郭群は、岡田谷を形成している丘陵の同じ稜線上に地取りしており、西方の城山城の主郭と東方の土居郭群の主要部とは、直線距離にして700メートルほど離れている。この間の稜線上には郭とするに適当なピークが三か所あるが、いずれも普請は施されていない。

なお土居郭群の北方約500メートルの<sup>うんべ</sup>海部谷の谷口には、海部城（ク11）が築かれている。丘陵の突端に地取りしており、佐々布川の氾濫源に面した東端の郭は比高が約10メートルほどしかないが、上面の削平はきわめていいである。さらに海部谷の開口部の北側の丘陵には、旧山陰道を縄張りに取り込んだ<sup>かんげやま</sup>掛屋山城（ク6）が築かれている。

土居郭群の岡田谷を隔てた南側の丘陵にも、山城としての普請の跡が残っている。ただこの上野城（ク7）の佐々布川の氾濫源に面した東端は、妙岩寺の境内と墓地にされたために原形を損なっているようである。だがその西部になだらかに続く丘陵上面は、駐屯空間とするに十分な面積を持っているといえよう。

いずれにしても、佐々布川の左岸の氾濫源に面する丘陵の突端は、上面が平滑に削平された郭に造成されているのである。後述する佐々布要害山城（ク3）を除いては、比高が10メートル程度という低位置にあるにもかかわらずである。したがって防御拠点として見ると、土居郭群のようにいかに堅堀や腰郭をめぐらせたとしても、脆弱性は否めない。むしろ移動途中の多数の兵員や物資を収容することがその役割の、繋ぎの城であったと考えられる。

佐々布要害山城は、城山城土居郭群の南方約1キロメートルに地取りしている。当城は佐々布川に面した標高101.8メートルに主郭を置く郭群（便宜上東方郭群と呼ぶ）と、その稜線上の約200メートル西側の標高126.7メートルに主郭を置く郭群（便宜上西方郭群と呼ぶ）とからなる、いわゆる一城別郭の城である。しかも東方郭群の北東端には、邑智郡瑞穂町の二ツ山城などと共通する、二つの尾根を切断した堀切を一本の堅堀りに合流させるという技法が見られ、西方郭群の西端は南側の柵形虎口から一直線の土塁のラインが認められるなど、縄張りにおいても普請の面からも、見事な仕上りの山城といえる。

機能面から見ると、もともと佐々布要害山城は佐々布氏の本城で、佐々布地域の支配拠点として築城されたものであろう。しかし佐々布氏が衰退して宍道氏の被官化するにしたがい、宍道氏の本城である金山要害山城（ク2）の支城化していったものと推定される。

そしてこの段階までの佐々布要害山城は、おそらく西主郭を中心とした西方郭群だけだったと考えられる。なぜなら、東方郭群には西方からの攻撃に対する防御がまったく講じられておらず、全面的に西方郭群に依存しているからである。つまり一城別郭の城とはいうものの、東方郭群が単独では防御が全うできないのに対し、西方郭群は東方郭群が無くても自立できる縄張りになっているのである。したがって、佐々布氏の要害山城が改修されて西方郭群に整備されると併行して、東方郭群が新設されたと考えられよう。

なお佐々布川の河谷は、佐々布要害山城の東方郭群の東麓あたりでいったん狭まり、上野城や土居郭群の地取りする佐々布中で広がるから、佐々布川沿いにさかのぼって侵入しようとする敵に備えるには、格好の位置を占めている。したがって金山要害山城に対する防御拠点としての機能を十分に果たせたであろう。しかし基本的に佐々布要害山城は、広い郭面積を活用して兵員を収容する繋ぎの城

として大改修されたと考えるべきであろう。とりわけ東方郭群は、雲芸攻防戦の初期段階に新造されたのではあるまいか。

このように推定する理由は、宍道地域が、三刀屋・頓原・赤名を経て安芸国へ向かう陸路と、宍道湖・大橋川・中海に連なる水路との結節点に位置しているからである。毛利勢は、雲芸攻防戦の初期段階からこの宍道地域を中継基地として利用し、佐々布川左岸の低平な丘陵を駐屯地として占拠したのである（註6）。そしてその丘陵の先端に、防御機能を持たせるための普請を施したものと考えられる。城山城と土居郭群に見られる、先端部の緊密な普請と背後の丘陵の粗放な普請という二重構造は、このようにして生じたものであり、八東郡東出雲町の古城山城（オ1）・簸川郡湖陵町の日出城（フ1）などと共通するところである。両者とも背後に低平な丘陵が続き、部分的には削平されたと推定できる平坦面も広がっているが、壁がないために郭と断定しにくいのである。切岸をとまなわないとはいえ、背後の丘陵上面が、駐屯空間として利用されたことは確実であろう。

なお地取りに際しては、既存の山城を利用しないはずはなく、佐々布要害山城の西方郭群や城山城も毛利勢によって接収されたと思われる。そしてそこに、戦塵の中で鍛えられた縄張り観による、在来の小領主の簡素な山城とは隔絶した精緻な普請を施そうとしたのであろう。城山城の精妙な縄張り観は毛利方が再活用しようとしたためであり、粗放な普請の部分が残ってしまったのは全面改修に至らなかったからであろう。

なお佐々布要害山城の東方郭群は、土居郭群のような、緊密な普請の丘陵先端部に相当するものである。土居郭群と城山城は、改修が継続されれば、稜線の途中のピークごとに郭群が設けられて、佐々布要害山城の東方郭群と西方郭群のように、一体の山城として整備されたであろう。

#### 4. むすびにかえて

紙幅の関係もあって少数の事例のみで論断する結果になったが、以上の検討のように、すべて城館は統一した縄張り観にしたがって普請され、完成されたと考えるよりも、情勢の変化によって未完成のまま普請が中断する場合もあると見たほうが実態に近いと思われる。特に陣城を見る場合には、戦況の変化とそのなかでの機能の変容を考慮する必要がある。現地調査に際して予断を持ってこれに臨むことはいましめなくてはならないが、地域の戦況や広く政治状況を出来る限り把握して調査に入ることは、遺構の読み取りを深くする上で必須といえよう。

普請が中断された事例が教えてくれる知見は、鳶ヶ巣城北部の稜線上と、城山城と佐々布川左岸の山城を例として述べてきたような推論にとどまらない。その例としてまずあげられるのが、城館の部位（パーツ）ごとの普請の順序を推定できることである。普請を中断し放棄するまでに何を造ったか、多くの事例を収集することで、普請の順序（それはその部位の重要性や緊急性を意味するであろう）が推定できよう。

また当該城館の防御正面の変化（それは攻撃正面の変化でもあろう）も推定することができる。そしてそのことは、ひるがえって、文献史料では明らかに出来ない地域の細かな戦況の変容や推移を教えてくれるであろう。

このように、普請が中断された事例を集積することが、新たな知見を城郭史や地域史に加えてくれることは、間違いない。

縄張り調査という調査方法の限界や固有の弱点を十分わきまえて臨むかぎり、この調査方法はまだ



まだ多くの史実を語ってくれるものと思う。

(調査員 山根正明)

- 註1 『鳥根県中近世城館跡分布調査報告書 第1集 石見の城館跡』で紹介した鷯丸城(邇摩郡温泉津町所在)の場合だと、永禄十三年(1570)の二月二十四日に命じられて、一か月間で築城しなければならなかったことがわかる。
- 註2 雲芸攻防戦と尼子家復興戦において当城の果たした機能についての詳細は、拙稿「出雲における毛利氏の山城について」『山陰史談』22所収を参照されたい。以下関連する城館の築城時期などもこれによっている。ただ後述するように、当城の縄張りや普請に対する理解は、精査によって得た知見によって一部を訂正したい。
- 註3 『雲陽軍実記』による。諸将が当城に在城した事実を、確かな史料で明示することは出来ないが、事実を反映しているとみてよかろう。
- 註4 地名配置とその分析については、拙稿「宍道の中世城館」平成2・3年度科研報告『尼子氏の総合的研究』所収を参照されたい。
- 註5 城山城は、発掘調査の担当者東山信治氏のご教示によって精査した。また、縄張り図は鳥根県教育委員会による測量図を基礎とし、東山氏の縄張り図を参考にした。
- 註6 雲芸攻防戦の時期の宍道地域についても註2の拙稿を参照されたい。

# 城館調査を終えて

踏査の中で気がついた事を列記して、報告書を読む方の参考に供したい。

- 1 悉皆分布調査が完結できればよかったのだが、そこまで出来ていない。今回の調査は地名や文書の側からの城館へのアプローチが不十分であったためであろう。調査員の寺井氏はひそかに、『城郭大系』が集成した城館は全て踏査したいという目標を持っていたようだが、それもかなわなかった。『鳥根県遺跡地図』に掲載された城館は、全て踏査することを目標としたが、それも完全には果たせていない。特に幕末期の台場跡などが未調査であるのは心残りである。
- 2 調査カードに添付された城館の図は、全部掲載することが出来なかった。そのまま印刷にまわせる図もあったし、再踏査しないとそのまま印刷は無理かなと思われる図もあったが、今回は、予算と時間の都合で掲載出来る図が限られた。  
「百聞は一見にしかず」というのは、特にこのような遺跡・遺物の報告書に言えることで、未公表の縄張図については、補遺編の刊行を期待したい。
- 3 1項にも関連して、踏査が不十分なままに終わった城館も多い。特に、印象に残っているものについてふれる。

## (1) 月山富田城

鳥根県中近世城館研究会の踏査報告が刊行されており、今まで報告されたものの中では一番丁寧に踏査がされている。しかし、これとても月山富田城の全体像を示すものとは言えないのではなかろうか。富田城背後の山に独松山城砦群が発見されており、これと日向丸と呼ばれている富田城背後の城との関連が解明されていない。独松山城砦群全体の広がりも未解明である。新宮谷・塩谷の外側であって、富田城の外郭を守ったと思われる城砦についても、その一部を確認したにとどまっている。ここには、もちろん、毛利方の陣城も造られており、一部は重複しているであろう。富田城の西側には従来から寺山城跡が報告されていて、今回の踏査でも尼子氏のものかと思われる城砦群が確認されたが、独松山城砦群・富田城外郭の城砦群とも関連して、どのような広がりを示すか検討すべきである。すべて、今後の踏査によって解明すべき宿題である。

また、付言すれば、現在、月山富田城は整備事業が進行しているが、広大かつ複雑な展開を示す縄張全体を視野に入れ、遺跡の重要性にふさわしい着実な整備が不可欠である。

## (2) 京羅木山城砦群

このような名称が適当かどうか、『城郭事典』で紹介された三島正之氏の京羅木山城砦群は、三島氏が図に掲載した範囲で終わらずに、東側へ尾根伝いに伸びていくことを途中まで踏査して確認している。これに、今回の踏査で確認した亀井ヶ成・誓願寺裏城砦群と大成山城砦群の知見と、同じく三島氏の勝山城跡を付け加えるならば、京羅木山から広瀬の町の裏山まで毛利氏の城

砦が続いていたと思われる。

これらの城砦群の間を、踏査によって縄張図の上でつないで見せることが必要である。さらに城砦群の南限は、経塚山に尼子・毛利の時期の城がなかったので、三笠山・富田八幡宮付近の城砦群までと考えてよかろうが、北限については未確認である。

### (3) 荒隈城跡

1960年代・1970年代に一部が島根県と松江市によって発掘調査され、主要部分には住宅団地などが造成されたため、荒隈城は消滅したと思っている人も多いかもしれない。しかし、今回一部を紹介したように、周囲を精査し、以前の発掘資料を再検討すれば、なおこの城の全体像に迫ることが可能であることを確認できた。

### (4) 塩冶氏の城

半分城跡・向山城跡・平家丸城跡・浄音寺境内館跡・塩冶神社境内遺跡・神門寺境内等々いわゆる中世塩冶氏の中心が現出雲市塩冶地区周辺にあったことは動かないだろうが、城館跡の視点から見ると、市街地化とJR出雲市駅の高架化による再開発で遺跡の保護が憂慮される地域でもある。今回の踏査は不十分なものではあるけれど、塩冶氏関係遺跡の保護保存に役立てば幸いである。

### (5) 山吹城

山頂部の郭は、石見編等に図が掲載されている。大手門部分についても発掘調査の成果が公表されている。しかし、この中間部分は未踏査で、全体像は把握されていない。有名な大森銀山にある城で、何度も攻防戦にさらされた記録がある城なので例にあげたが、実は山吹城同様に踏査不十分な城は多い。報告書の利用にあたっては、顧慮されたい点である。

4 公園整備などで不用意に破壊される城館が後を絶たない。特に名案はないのだけれど、先ず県市町村の教育委員会が、城の知識を持っていないと、どのような保護策も取りようがないだろう。今回の城館跡分布調査の期間中に、調査会が何回か持たれた。県内教育委員会の埋蔵文化財専門職員や城館調査員が集まって城を踏査しながら図を書く会だったのだが、参加しても図を書く人は少なかった。

今回の報告書に掲載された図をみても、城館調査員の手になるものばかりである。教育委員会の専門職員は、日々の業務、開発にともなう発掘調査で多忙を極めているためかもしれないが、城館調査会時の作風から見て、城を踏査してもそれを縄張図にする能力をほとんど身につけていないのではないかと思われた。

今回このような城館跡分布調査が企画されたのは、それだけ城館跡が開発による破壊の危機にさらされつつある現状を鑑みた結果と受け取っている。この調査報告書が無駄にしないためにも、県内の教育委員会は、地表面観察と縄張図作成によって城館跡の内容と価値をある程度認識する能力を、今以上に備えておくべきである。古墳にしても土器にしても、観察した結果を図化することで学術資料となり、理解も深まるのであり、考古学出身者の多い教育委員会の専門職員は、そのあたりを十分認識する必要があるだろう。

5 1967年に、鳥根県教育委員会におられた近藤正氏による荒隈城の発掘調査を手伝った。正直なところ、近藤氏も私も当時、十分な調査ができたとは思わなかったのだが、さりとてどこをどのように調べれば城をきちんと調べたことになるのかわからなかった。城については、この調査以来気になっていた。

その後、就職して中世史と城を研究しておられた三上鎮博氏と、考古学を門脇俊彦氏に、中世を三上氏に学んだ吉川正氏の居られる邑智郡へ行き、「堀切」「塹堀」などの言葉を知った。途中名称が変わったが、現在の文化財保護指導委員の仕事を引き受けて、城を踏査する機会もあったが、城を観察し図化する良い方法にめぐりあうこともなく年月が過ぎた。

転勤で益田市に3年ほどいたのが縁で、中世益田氏の館跡三宅御土居の保存運動にかかわり、その中で寺井毅氏と知り合った。寺井氏の城の縄張図とその説明を聞きながら、長年探し求めている城の観察方法はこれだと思った。

気がつくやうと、中世史をやっておられる山根正明氏も、三上鎮博氏について城の勉強をしていた吉川正氏も縄張図を書いている。私も寺井氏の城の踏査に同行して縄張図の勉強をさせてもらうことにした。鳥根県の城館跡分布調査が始まったのは、それから間もなくのことである。

この調査を契機に、鳥根県中近世城館研究会もできた。今回の調査は、不十分に終わった面も多々あるが、少なくとも1967年当時、近藤氏と私が途方に暮れていたような状況ではない。やるべきことは、はっきりしている。私自身の縄張図の腕はまだまだだが、今後も仲間とともに城館調査に野山を歩きたいものだ。鳥根県の城館調査は、まさに緒についたばかりである。

(調査員 今岡 稔)



## 付編 主要参考文献一覧

(1945年以降に発行された出雲・隠岐地方の城館跡に関するもの)

No.	著者名及び編者名	発行年	文献名(出版元)	主な掲載城館
<調査報告書関係>				
1	島根県教育委員会	1968	島根県文化財調査報告第五集	黒田館跡(エ28)
2	島根県文化財愛護協会	1970	東岩坂城跡緊急調査概報	東岩坂要害山城(カ8)
3	〃	1974	史跡松江城二之丸下の段状遺構調査	松江城二之丸(エ16)
4	島根県教育委員会	1975	八雲立つ風土記の丘周辺の文化財	黒田館跡(エ28)
5	広瀬町教育委員会	1976	尼子里御殿跡の調査について	富田城里御殿(ウ4)
6	〃	1977	史跡富田城跡環境整備に伴う発掘調査報告(塩谷口付近門跡)	富田城御殿平(ウ4)
7	出雲市教育委員会	1979	中国電力高圧送電線鉄塔工事に伴う大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書	大井谷城(ヌ16) 半分城(ヌ14)
8	松江市教育委員会 〃	1980 1980	史跡松江城-54年度環境整備事業報告書- 出雲国造館跡発掘調査報告書	松江城本丸(エ16) 出雲国造館跡(エ27)
9	島根県教育委員会	1980	出雲上塩谷地域を中心とする埋蔵文化財調査報告	平家丸城(ヌ21)、唐墨城(ヌ22)、鳶ヶ巣城(ヌ2)、栗栖城(ヌ19)、姉山城(ヌ23)
10	島根県文化財愛護協会	1980	尼子氏・新宮党の居城	富田城(ウ4)
11	松江市教育委員会	1981	岩穴平・稲葉城跡	稲葉城(エ21)
12	富田城関連遺跡群調査整備委員会	1981	塩谷遺跡発掘調査報告書	富田城(ウ4)
13	広瀬町教育委員会	1981	塩谷遺跡発掘調査報告書	富田城(ウ4)
14	三刀屋町教育委員会	1982	三刀屋城跡調査報告書-I-	三刀屋尾崎城(ツ14)
15	松江市教育委員会	1982	荒隈城跡	荒隈城(エ15)
16	広瀬町教育委員会	1982	新宮谷遺跡発掘調査報告書	富田城(ウ4)
17	三刀屋町教育委員会	1983	三刀屋城跡調査報告書-II-	じゃ山城(ツ10)、三刀屋城(ツ14)
18	島根県教育委員会	1983	風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書II- 松江市内大庭町字屋敷山代町字小門、字岡所在遺跡-付古天神古墳	黒田館跡(エ28)
19	島根県教育委員会	1983	加茂・大谷城跡 島根県埋蔵文化財調査報告書X	岩倉大谷山城(タ3)
20	斐川町教育委員会	1983	大井城跡発掘調査報告書	大井城(ノ11)
21	鹿島町教育委員会	1983	島根原子力発電所2号機資材運搬道路新設に伴う氏穴遺跡発掘調査概報-池平城跡北1郭-	池平山城(サ8)
22	島根県教育委員会	1983	史跡富田城関連遺跡群発掘調査報告書	富田城(ウ4)(塩谷地区、新宮谷地区)(ウ6-ウ16)
23	島根県教育委員会	1983	富田川床遺跡発掘調査報告書-III-	富田川床遺跡、富田城下町(ウ4)
24	広瀬町教育委員会	1983	新宮谷遺跡-第2次発掘調査概要-	富田城下町(新宮谷地区)(ウ16)
25	三刀屋町教育委員会	1984	三刀屋城跡調査報告書-III-	じゃ山城(ツ10)、三刀屋城(ツ14)
26	松江市教育委員会	1984	黒田館跡	黒田館跡(エ28)
27	松江市教育委員会	1985	史跡松江城-昭和59年度保存修理事業報告書-	松江城(エ16)
28	島前教育委員会	1985	隠岐国因屋城	因屋城(ヤ1)

No.	著者名及び編者名	発行年	文 献 名 ( 出 版 元 )	主 な 掲 載 城 館
29	広瀬町教育委員会	1985	史跡富田城跡菅谷地区－第1次発掘調査概報－	富田城下町（菅谷地区）（ウ4）
30	松江市教育委員会	1986	史跡松江城－昭和60年度保存修理事業報告書－	松江城脇虎口（エ16）
31	三刀屋町教育委員会	1986	殿河内遺跡発掘調査報告書	御城山城（ツ21）
32	佐田町教育委員会	1987	佐田町の遺跡 東須佐地区	陣ヶ丸城（ヒ1）、石宇城（ヒ2）、尾崎山城（ヒ4）ほか
33	松江市教育委員会	1987	史跡松江城御殿跡発掘調査報告書	松江城上御殿（エ16）
34	大東町教育委員会	1988	丸子山城跡・福富城跡・佐世城跡	佐世城（ソ26）、福富城（ソ31）
35	加茂町教育委員会	1988	神原地区遺跡分布調査報告	高麻城（ソ12・タ8）ほか
36	佐田町教育委員会	1988	佐田町の遺跡 窪田地区	佐津目城（ヒ33）、伊秩城（ヒ14）、三ツ子山城（ヒ30）ほか
37	三刀屋町教育委員会	1989	要害の首塚・地王砦跡発掘調査報告書	地王城（ツ16）
38	三刀屋町教育委員会	1989	三刀屋町の遺跡Ⅱ 飯石・中野地区	粟谷城（ツ28）、多久和城（ツ30）、六重城（ツ35）ほか
39	大東町教育委員会	1989	大東町の遺跡Ⅰ－春殖・幡屋－	高麻城（ソ12）、丸倉山城（ソ45）、岩熊城（ソ17）ほか
40	頓原町教育委員会	1989	頓原町の遺跡 志々地区	森脇山城（ト12）ほか
41	佐田町教育委員会	1989	佐田町の遺跡 西須佐地区	高櫓城（ヒ5）、茶磨山城（ヒ8）、湯村城（ヒ7）ほか
42	鳥根県教育委員会	1990	風土記の丘地内発掘調査報告書Ⅶ－茶白山城跡・市場城跡・内堀石塔群－	茶白山城（エ25）
43	三刀屋町教育委員会	1990	平成元年度予防治山事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－三刀屋尾崎城跡－	三刀屋尾崎城大門口（ツ14）
44	三刀屋町教育委員会	1990	三刀屋町の遺跡Ⅲ 鍋山地区	御城山城（ツ21）ほか
45	加茂町教育委員会	1990	加茂町の遺跡－赤川以南－	高麻城（ソ12・タ8）、近松城（タ2）
46	大東町教育委員会	1990	大東町の遺跡Ⅱ－大東・海潮－	三笠城（ソ6）、高平城（ソ7）、諏訪城（ソ2）ほか
47	頓原町教育委員会	1990	頓原町の遺跡 頓原地区	由来城（ト3）、矢櫃城、（ト9）要害山城（ト1）ほか
48	加茂町教育委員会	1991	加茂町の遺跡－赤川以北－	猪尾城（タ6）、大谷山城（タ3）、城平山城（タ4・ノ5）ほか
49	安来市教育委員会	1991	安来市内遺跡分布調査報告書	十神山城（ア1）
50	三刀屋町教育委員会	1991	三刀屋町の遺跡Ⅳ 鍋山地区（禅定寺周辺）	御城山城（ツ21）、殿河内奥城（ツ22）ほか
51	大東町教育委員会	1991	大東町の遺跡Ⅲ－佐世・阿用－	阿用城（ソ32）、佐世城（ソ26）、松尾城（ソ35）ほか
52	伯太町教育委員会	1992	伯太町安田地内試掘調査報告書	鉢伏城（イ1）
53	大東町教育委員会	1992	大東町の遺跡Ⅳ－久野－	生山城（ソ42）、高丸城（ソ41）、殿居敷館（ソ40）
54	安田要害山城跡調査団	1992	「伯太町・安田要害山城跡調査報告」松江考古第8号（松江考古学談話会）	安田要害山城（イ18）
55	松江市教育委員会	1993	松江城発掘調査～二之丸番所跡～	松江城（エ16）
56	大東町教育委員会・加茂町教育委員会	1993	洞善寺遺跡・峯寺山要塞群・元極楽寺跡	峯寺山城砦跡群（ツ3）

No.	著者名及び編者名	発行年	文 献 名 ( 出 版 元 )	主 な 掲 載 城 館
57	大東町教育委員会	1993	大東町の遺跡Ⅴ ー篠淵・塩田ー	平家の城 (ソ15)
58	大東町教育委員会	1996	立山要塞・奥明砦	立山城(ソ24)、奥明城(ソ23)
59	掛合町教育委員会	1997	飯石地区農道 離着陸場整備事業に伴う 羽森城跡・羽森1号鉬跡発掘調査報告書	羽森城、堀田城 (テ4)
<総論・概論>				
60	井上宗和 編	1950	日本城郭全集 第5巻ー中国編ー (日本城郭協会出版部)	松江城 (エ16)
61	矢富巖夫ほか	1967	日本城郭全集 第11巻 鳥取・島根・山 口篇 (新人物往来社)	(省略)
62	藤崎定久	1971	日本の古城 2 中国・四国・九州編 (新人物往来社)	松江城 (エ16)
63	中国新聞社 編	1973 1974	古城の譜ー中国地方ー 上・下巻 (たくみ出版)	白鹿城(エ16)、富田城(ウ6)、松江城 (エ16)、真山城(エ5)、三刀屋城(ツ14)
64	矢富巖夫、祖田浩一 ほか	1978	探訪日本の城 七 ー山陰道ー (小学館)	松江城(エ16)、富田城(ウ6)、十神山城 (ア1)、荒隈城(エ15)、白鹿城(エ6)、真山 城(エ5)、三沢城(セ11)、三刀屋城(ツ14)
65	内藤正中	1983	山陰の城下町 (山陰中央新報社)	(省略)
66	村田修三編	1987	図説 中世城郭事典 第三巻 (新人物往来社)	富田城(ウ6)、勝山城(ウ1)、京羅木山城 (ア19・ウ28・オ4)、真山城(エ5)、白鹿城 (エ6)、三刀屋城(ツ14)、三沢城(セ11)
67	藤岡大拙ほか	1980	日本城郭大系 第14巻 鳥取・島根・山 口 (新人物往来社)	(省略)
68	島根県教育委員会	1997	島根県中近世城館跡分布調査報告書<第 1集>「石見の城館跡」	(省略)
<各論・調査研究論文ほか>				
69	日本城郭協会	1961	松江城とその周辺	松江城(エ16)、富田城(ウ6)
70	妹尾豊三郎	1965	月山史跡物語	富田城 (ウ6) ほか
71	妹尾豊三郎	1966	月山富田城考	富田城 (ウ6) ほか
72	河井忠親	1967	松江城 (今井書店)	松江城 (エ16)
73	妹尾豊三郎	1972	尼子とその城下町	富田城 (ウ6) ほか
74	妹尾豊三郎	1978	出雲富田城史	富田城 (ウ6) ほか
75	島田成炬	1975	「松江城の城郭について」島根県文化財 調査報告第10集	松江城 (エ16)
76	寺井 毅	1987	「出雲の石丸城の縄張り」『中世城郭研 究創刊号』(中世城郭研究会)	三刀屋じゃ山城 (ツ10)
77	寺井 毅	1988	「白鹿城塞群」『中世城郭研究第2号』 (中世城郭研究会)	白鹿城 (エ6)
78	山根正明	1991	『宍道町の山城』宍道町ふるさと文庫5 (宍道町教育委員会)	鳶ヶ巣城(ヌ2)、宍道要害 山城(ク5)、佐々布要害山 城(ク3)、金山要害山城 (ク2)、掛屋山城(ク6)
79	寺井 毅	1991	「石見福屋氏の桜尾城・松山城・波佐一 本松城の畝状堅堀群についての考察」 『島根考古学会誌』8集	伊秩城(ヒ14)、鳶ヶ巣城(ヌ2)、藤 ヶ瀬城(ス3)、多久和城(ツ30)、玉 造要害山城(キ3)、勝山城(ウ1)



No.	著者名及び編者名	発行年	文 献 名 ( 出 版 元 )	主 な 掲 載 城 館
80	山根正明	1991	「桧ヶ山城の縄張りについて」 『市民大学講座集録集 平成2年度』 (平田市教育委員会)	鷹ヶ巣城(ヌ2)、桧ヶ 仙城(ネ14)
81	勝部 衛	1992	「加茂町・猪尾城跡出土の備前壺」『松 江考古』第8号(松江考古学談話会)	猪尾城(タ6)
82	山根正明	1992	「宍道の中世城跡館について」 『尼子氏の総合的研究』	宍道要害山城(ク5)、佐々布要害 山城(ク3)、金山要害山城(ク2)、 掛屋山城(ク6)、城山城(ク4)
83	寺井 毅	1992	「毛利氏の城郭について—山陰の城郭遺 構を基に」『中世城郭研究』第6号(中世 城郭研究会)	夕景城(ス11)、藤ヶ瀬城(ス 3)、多久和城(ツ30)、高平城 (ソ7)、玉造要害山城(キ3)
84	鳥根県中近世城館 研究会	1995	出雲富田城踏査報告	富田城(ウ6)

<注意> 「主な掲載城館」の名称・番号は、本書の他章に準じた。したがって、各々の刊行物においては、別称が用いられている場合があることを承知願いたい。

島根県中近世城館跡分布調査報告書  
〈第2集〉 出雲、隠岐の城館跡

発行日 平成10(1988)年3月

編集 島根県教育委員会  
松江市殿町1番地

印刷 渡部印刷株式会社



0 100 m

許可なく無断転載禁。

出雲国	
<b>富田城縄張図</b>	作図責任：寺井 毅
島根県中近世城館研究会	1994. 11. 1~1995. 3. 30調査

平成10年3月 島根県教育委員会編『出雲・隠岐の城館跡』付図  
ウ4 富田城略測図 (島根県中近世城館研究会編『出雲国富田城踏査報告』(1955年)より転載。)

〔広瀬町文化財総合整備計画基本図3〕3. 4、1/1, 000図(昭和54年)をもとに作成した。